福岡市埋蔵文化財調査報告書第835集

今 山 遺 跡

第８次調査

～石斧製作址と縄文時代前期から平安時代までの遺構・遺物の調査～

２００５

福 岡 市 教 育 委 員 会

No.5116

福岡市埋蔵文化財調査報告書第835集『今山遺跡　第８次調査』
46-52頁「表２　古墳時代前期土器観察表」訂正表（１）

※訂正（修正・削除・追加）のある枠（セル）がある行部分のみ表示した。
下記の訂正枠部分の内容に差しかえて下さい。
（※１）訂正枠のうち、太字で示した部分が訂正箇所である。空欄セル部分は訂正なしである。
（※２）「外面・内面調整」の記述で、「○○＋△△」と「○○後△△」は同じ意味であるが、以下の訂正では前者に統一した。
（「○○後△△」だけであれば訂正していない。）
（※３）「外面・内面調整」の記述で、「○○・△△」は調整の前後関係が明確ではないか、部位を違えて並立的に施されているものである。
（※４）「胎土」の項目のうち、「金雲母」は鉱物名としては「黒雲母」であるが、ここでは訂正しない。
（※５）「胎土」の項目のうち、「白色粒子」「白色細砂」とあるのは花崗岩細粒ないし長石が主体だが、不明なものもあり訂正していない。
（※６）色調の記述は標準土色帖の色名を基本としている。
（※７）鉢・小型壺類の「胴」（胴部）は「体」（体部）とすべきだが訂正していない。

図	番号	系統	器形	口径	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	胎土	焼成	備考
17	2				タタキ＋ハケ						
17	5				タタキ＋ハケ						
17	11	B(A)									
17	13				口：ヨコナデ、胴：ハケ＋波状文（沈線）						
18	21					口：ヨコナデ、頸：指押さえ・ヨコミガキ					
18	22				坏上半：ハケ＋ナデ、坏下半：（ハケ＋）ミガキ						
18	26		小型器台								やや精製
18	31				ハケ？（不明瞭）						
18	33				不明（タタキ＋ナデ消し？）						
19	40			11.6							
19	41					頸：ナデ・オサエ、胴：板ナデ					
19	45					口：ヨコナデ、頸～胴：ケズリ＋ナデ					精製
19	46	IIB期									4世紀末～5世紀初頭、器高8.2cm、粗製
19	51	5c～									
19	52	B									
20	54					口：ヨコハケ＋ナデ、胴：ハケ（上部ナデ消し）					
20	56			9.2							
20	57					口：ハケ、胴：ナデ？					
20	59		小型丸底鉢								
20	62										焼成破裂痕あり、精製
20	65				ハケ＋ヨコナデ						
20	74		壺or甕		平行タタキ（タテ）＋回転ヨコナデ				微量の金雲母？・黒色砂粒　非常に精良　瓦質		楽浪系？（三韓系の可能性もある）
21	77		小型短頸壺								
21	82				坏上：ミガキ、坏下：ハケ、脚：ハケ						
21	83		壺		坏下：ハケ、脚柱：ナデ＋ミガキ、脚裾：ナデ？						
21	85		壺								
22	93					口：ナナメハケ、胴：板ナデ？、底：ハケ					
22	95					ケズリ					
22	96			14.2							
22	97			14.4							
22	99				口：ハケ＋ミガキ？、頸：ナデ・指押さえ	口：ハケ＋ミガキ、頸：ナデ・指押さえ、（下部）ハケ					
22	100					口：ヨコナデ、頸：指押さえ・ナデ、胴：板ナデ			4mm以下の石英・長石・赤色粒子・金雲母（多い）		
23	101				ハケ＋ナデ＋ミガキ？	口：ハケ＋ナデ、胴：ケズリ			白色細砂・微量の金雲母、精良（精製）		
23	104				口：ハケ＋ミガキ？、胴：ミガキ？						
23	105		小型鉢								
23	109					坏：不明、脚柱：シボリ					
23	110					坏：ハケ、脚柱：シボリ、脚裾：ナデ・指押さえ					
23	115				タタキ＋一部ナデ＋ヘラ描文様						外面に線刻文様（絵画？）、魚の尾状（顔面文身？絵画か）
24	116				口：ヨコナデ、胴：ハケ＋ナデ？						
24	124					ハケ＋指押さえ・ナデ					
24	127				口：ハケ＋ナデ、胴：タタキ						
24	129				口：ハケ＋ナデ、胴：タタキ＋ナデ						外面は赤いが赤色顔料ではない
24	130				口：タタキ＋ヨコナデ、胴：ハケ						
24	132				口：ハケ＋ナデ、頸：ハケ＋ナデ、胴：ハケ						
24	134					ハケ					
24	135				口：タタキ＋ヨコナデ、胴：タタキ						
24	136					口：ハケ＋ナデ、胴：指押さえ＋ケズリ					
24	138	D	壺								布留系壺（IIB期か）
24	140	C									（筑前）
25	146					胴上～中位：指押さえ・ナデ＋ハケ、胴下位：（ハケ＋）ケズリ					
25	148				口：ハケ＋ナデ、胴：ハケ						
25	152				ハケ＋ナデ						

福岡市埋蔵文化財調査報告書第835集『今山遺跡　第８次調査』
46-52頁「表２　古墳時代前期土器観察表」訂正表（２）

図	番号	系統	器形	口径	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	胎土	焼成	備考
25	153				口：ハケ+ナデ、胴：ハケ						
25	156		小型壺		胴：ハケ（+ナデ）、底：ケズリ+ハケ						粗製
25	160		鉢								
25	163		小型丸底鉢		口：ヨコナデ+ヨコミガキ、胴：ナデ+ミガキ、底：ケズリ	口：ヨコナデ、胴：ハケ+ナデ					精製
25	165			11.8							
26	167				タタキ？+ハケ+ミガキ						
26	168				脚柱：タタキ+ナデ、脚裾：（タタキ+）ハケ						
26	174				ハケ+ナデ+ミガキ（ヨコミガキ主）	坏口：ハケ+ヨコナデ、坏：（ハケ+）ナデ、坏底：ミガキ			2mm以下の石英・長石少量、やや精良		
26	175				坏：ナデ+タテミガキ、脚柱：ハケ+タテミガキ、脚裾：ハケ（+ミガキ？）	坏：ナデ、脚柱：ナデ、脚裾：ハケ					山陰系高坏（搬入か）
26	178										朝鮮？、鉄成破裂痕
26	181				頸：（タタキ+）ヨコナデ、胴：（平行）タタキ+ヨコナデ・ナデ（ナデ消し）	ヨコナデ+ナデ			微量の白色砂粒、緻密、陶質		韓半島系陶質土器か？
26	182				縄席文タタキ	不明（ナデ？）					韓半島系軟質土器
27	184				口：ハケ+ヨコナデ、胴：ハケ						
27	186				口：ハケ+ナデ、胴：タタキ	口：ハケ、胴：板ナデ+ナデ					
27	188				口：（タタキ+）指押さえ・ナデ、胴：タタキ						
27	189				口：タタキ+ハケ+ヨコナデ、胴：（粗い）タタキ+一部ハケ						
27	194					口：ヨコナデ、頸：指押さえ+ハケ、胴：ナデ					
27	196				口:ハケ+ヨコナデ、胴：タタキ	口：（ハケ+）ヨコナデ、胴：ナデ					
27	201				口：タタキ+ヨコナデ、胴：タタキ						
27	204				タタキ+ハケ						
27	205				タタキ+ハケ						
27	208				口：ヨコナデ、胴上位：タタキ、胴下位：タタキ+ハケ（板ナデ）						
27	209				口：ヨコナデ、胴：ハケ・板ナデ						搬入か（製作地不明）
28	210					口：ハケ+ヨコナデ、胴：ケズリ					
28	211				口：ヨコナデ、頸～胴上位（肩部）：ハケ+ヨコナデ、胴：ハケ						210より要Dにより近い
28	212				口：ヨコナデ、胴：ハケ+ヨコナデ	口：ハケ、胴：板ナデ（頸部下）+ケズリ					稚拙な布留系甕
28	214				口：板ナデ+ヨコナデ、胴：ハケ						
28	217					口：ハケ+ヨコナデ、胴：ケズリ					
28	227										外面赤いが顔料ではないと思われる
28	230		長頸壺		ナデ+ミガキか						精製
28	231		小型丸底鉢		口：ハケ+ヨコナデ、胴：ハケ+ナデ+ミガキ	口：ヨコナデ+ミガキ、胴：ケズリ+ミガキ					やや粗製
28	233					（ハケ？+）指押さえ・ナデ					
28	235				ナデ+ミガキ	ハケ+ミガキ					
28	236				ハケ（+ナデ+ミガキ？）	ハケ+ナデ？					表面風蝕調整不明
28	238				鉢底：（ハケ？+）ナデ、接合部～脚：ナデ+ミガキ	鉢：ナデ、脚：（裾部ハケ+）ナデ					
28	240				ハケ+一部ナデ	鉢：板ナデ（ハケ？）+ミガキ、脚：ナデ					
29	241				ハケ+ミガキ	ハケ？+ナデ？（風蝕不明）					
29	242				坏口：ハケ+ミガキ、坏：ナデ？+ミガキ？（不明）、坏底：ミガキ、脚柱：ナデ+タテミガキ、脚裾：ナデ+ミガキ？（不明）	坏：ナデ？、坏底：ミガキ、脚柱：シボリ+ナデ、脚裾：ハケ+ナデ					器高22.6cm、表面風蝕気味
29	243				ヨコナデ	板ナデ+ヨコナデ					
29	244				ハケ+ナデ						
29	245				坏：ハケ+ナデ+ミガキ、脚柱：ナデ+タテミガキ、脚裾：ナデ+ヨコミガキ	坏：板ナデ+ナデ+ミガキ、脚柱：シボリ+ナデ					
29	248	Ⅱ区150			ハケ+一部ヨコナデ+へら描き						
30	249				タタキ+ハケ+ナデ						
30	250				口：ハケ+ヨコナデ、胴：タテハケ+ヨコナデ	ハケ+ヨコナデ					
30	251				口：タタキ+ヨコナデ、胴：タタキ+ハケ						
30	252				口：ハケ+ヨコナデ、胴：ハケ						
30	253				ハケ+ハケ波状文						
30	256				タタキ+一部ハケ	ハケ+指押さえ・ナデ					
30	257				タタキ+指押さえ・ナデ	ハケ+ナデ					
30	260					ハケ+ヨコミガキ					
30	262				ナデ・ヨコハケ+櫛描波状文+竹管文						
30	263		壺		タテハケ+ミガキ+櫛描波状文						

No. 51166

福岡市埋蔵文化財調査報告書第835集『今山遺跡　第８次調査』
46-52頁「表２　古墳時代前期土器観察表」訂正表（３）

図	番号	系統	器形	口径	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	胎土	焼成	備考
30	264		小型長頸壺			頸下：シボリ+指押さえ、胴中位：ケズリ+ナデ、胴下位：ケズリ					やや精製
30	265		小型鉢（壺？）		口：ヨコナデ、胴：ケズリ+ハケ+ミガキ						
30	266				ハケ+ミガキ	口：ハケ+ヨコナデ、胴：（ハケ？+）ケズリ+ナデ					
30	267		小型壺			口：ハケ+ヨコナデ・ナデ、胴：ケズリ					やや精製
30	268				口：（ハケ？+）ヨコナデ、頸～胴：ハケ+ミガキ	口：ハケ+ヨコナデ、胴：ケズリ					やや粗製
30	269					受：ケズリ+ミガキ、脚：ケズリ					
30	273				ハケ+ナデ+ミガキ（？）						精製
30	274				坏底：ミガキ、脚：ハケ+ミガキ	坏：ハケ+ミガキ、脚柱：シボリ+ナデ、脚裾：ハケ+ナデ					
30	275				ナデ+ミガキ						
30	276					ハケ+ナデ					
30	277				口：ハケ+ヨコナデ、胴（頸）：ハケ+ナデ（ヨコナデ）	ハケ+ヨコナデ	明赤褐				表面赤い部分あるが顔料ではない

福岡市埋蔵文化財調査報告書第835集『今山遺跡　第８次調査』
本文　正誤表
※太字部分が訂正箇所である。

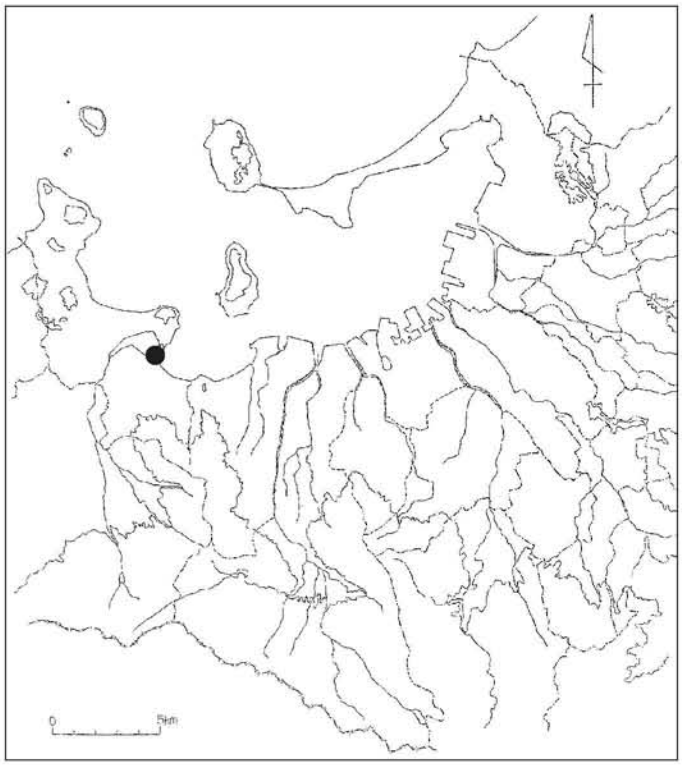
頁	行	誤	正
46	5	・・・より**精一**の庄内・・・	・・・より**精製**の庄内・・・
46	8	・・・ないしは格落ち品で・・・	・・・ないしは**技術的に**格落ち品で・・・
46	13	・・・筑前型庄内甕「大和」・・・	・・・筑前型庄内甕、「大和」・・・
46	13	・・・**「破裂」**は土器焼成の・・・	・・・**「焼成破裂痕」**は土器焼成の・・・
188	26	・・・Ｂ２式ように・・・	・・・Ｂ２式**の**ように・・・
188	38	・・・（55, 85, 86, 94, **100,** 112～114, ・・・	・・・（55, **76,** 85, 86, 94, 112～114, ・・・
188	40	・・・**100**はⅡ式（ⅡＡ期）（なお**100**は・・・	・・・**76**はⅡ式（ⅡＡ期）（なお**76**は・・・
192	6	・・・準ずる基準資料**の**・・	・・・準ずる基準資料**を**・・

福岡市埋蔵文化財調査報告書第835集

今 山 遺 跡

第 8 次調査

～石斧製作址と縄文時代前期から平安時代までの遺構・遺物の調査～



２００５

福 岡 市 教 育 委 員 会

Ⅰ区全景

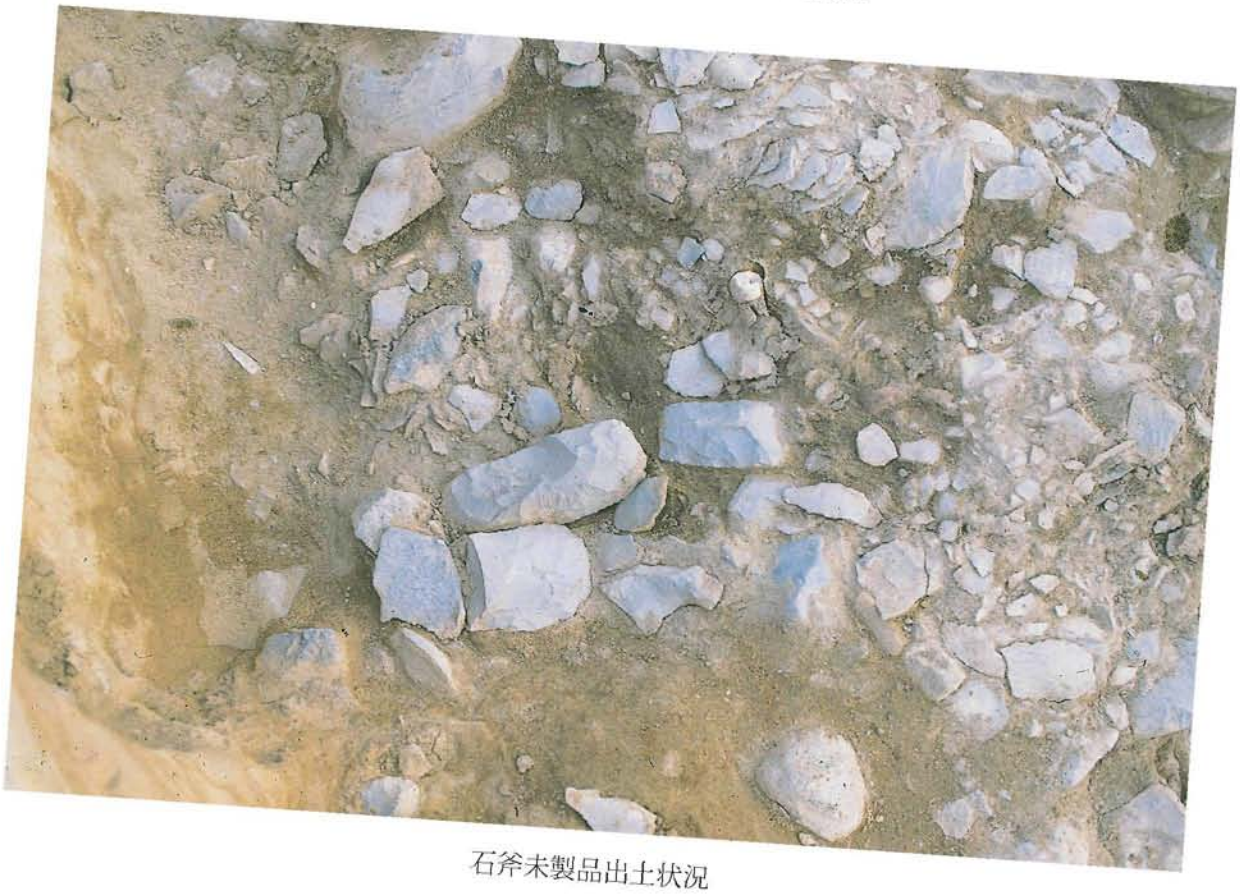
ＳＤ01コーナー

巻頭図版 2

製塩土器出土状況

製塩時の灰検出状況

石斧製作時の剥片・チップ出土状況



石斧未製品出土状況

巻頭図版 4

縄文土器出土状況

土層堆積状況

製塩土器

塩壺

巻頭図版 6

弥生土器

弥生時代石斧未製品

玄武岩原石

碇石・石錘

縄文土器

縄文時代石斧未製品

序

今山は博多湾西部に突き出た標高82mの独立した山で、花崗岩と玄武岩からできています。今山ではその玄武岩を利用した石斧を弥生時代に製作しており、弥生時代の石器製作を知る上で重要な遺跡として、平成5年に国の史跡に指定されました。今山産の石斧は北部九州一円に分布し、その規格性の高さと分布の広さから石斧製作専業集団の存在が指摘され、福岡市西部から糸島郡地域に勢力を張った伊都国の繁栄の一端を担っていたと考えられています。

今回の調査は主要地方道福岡志摩前原線の拡幅工事に伴うもので、拡幅幅5mという小さな調査ですが、本文中にあるように、従来から今山とその周辺で発見されている弥生時代の石斧製作跡や古墳時代初期の製塩関連遺物はもちろん、国内で唯一の古代ドックの跡や、縄文海進最盛期の頃の縄文時代の遺物群など、100㎡強の調査区から500箱近い遺物が出土するという、極めて重要な資料を提供してくれました。

調査中、地元の方々から多くの関連資料を提供して頂き、多くの先生方からもご教示をいただきました。また当市土木局は再三の調査期間の延長にも快く応じて頂いた上、調査面積に似つかわしいほどの報告書も認めて頂きました。感謝申し上げます。

本書が市民の埋蔵文化財への理解と認識を深め、また研究資料として利用されましたら幸いです。

平成17年3月31日
福岡市教育委員会
教育長　植木とみ子

例　　言

1　本書は福岡市土木局による主要地方道福岡志摩前原線の拡幅工事に伴い、福岡市西区横浜２丁目地内で、福岡市教育委員会が平成11年９月22日から平成12年３月９日まで行った、今山遺跡第８次調査（福岡市調査番号9951）の報告である。

2　本書に掲載した遺構の実測・写真撮影は調査者である米倉秀紀が行った。

3　本書に掲載した遺物の実測は下記のものが行った。

平安時代遺物　　米倉秀紀
古墳時代後期遺物　米倉秀紀
古墳時代土師器　　久住猛雄（福岡市教育委員会職員）、榊原俊行（福岡市教育委員会調査員）・渡辺孝志（同）
製塩土器　　岡田裕之（福岡市教育委員会調査員）
弥生土器　　米倉秀紀・井上賀代子（福岡市教育委員会調査員）
縄文土器　　米倉秀紀
石斧未製品　　米倉秀紀、大庭友子（福岡市教育委員会調査員）、大成エンジニアリング株式会社
小型剥片石器　　山口朱美（福岡市教育委員会調査員）
その他の礫石器　　米倉秀紀・大庭友子、大成エンジニアリング株式会社

4　本書に掲載した図の製図は下記の者が行った。

剥片石器　山口朱美　　古式土師器　成清直子
石斧未製品　名取さつき
その他　　米倉秀紀

5　本書に掲載した遺物の写真撮影は力武卓治・田上勇一郎（福岡市教育委員会）と米倉が行った。

6　発掘調査時に各種分析を株式会社古環境研究所に委託した。

7　出土鉄器と木簡片の保存処理と赤外線写真撮影は比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）が行った。

8　本書の遺物番号は時代及び種類毎（土器・石器など）に通し番号で示し、図と図版の番号を一致させた。

9　本書の編集は米倉が行った。

10　本書の執筆は、Ⅳ－１～５が株式会社古環境研究所、Ⅳ－１を磯望（西南学院大学）・下山正一（九州大学）、Ⅴ－４を久住猛雄、その他は米倉が行った。

11　本書に係わる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。

本文目次

Ⅰ　今山遺跡の立地と自然的・歴史的環境…… 1
1　立地と自然環境…… 1
2　歴史的環境…… 3
3　今山遺跡の既往の調査…… 5
Ⅱ　調査の経緯と経過…… 7
1　調査に至る経緯…… 7
2　調査の経過…… 7
3　調査組織…… 8
Ⅲ　調査の記録…… 9
1　調査の概要…… 9
2　層序…… 10
3　古代の遺構と遺物…… 14
4　古墳時代後期の遺構と遺物…… 20
5　古墳時代前期の遺構と遺物…… 23
6　弥生時代の遺構と遺物…… 53
7　縄文時代の包含層と遺物…… 124
Ⅳ　科学的分析…… 150
1　今山遺跡第８次調査の火山灰分析（株式会社古環境研究所）…… 150
2　今山遺跡第８次調査における放射性炭素年代測定（株式会社古環境研究所）…… 153
3　今山遺跡第８次調査における樹種同定（株式会社古環境研究所）…… 155
4　今山遺跡第８次調査における珪藻分析（株式会社古環境研究所）…… 161
5　今山遺跡第８次調査における植物珪酸体分析（株式会社古環境研究所）…… 167
6　今山遺跡第８次調査地点の地形について（西南学院大学磯望・九州大学下山正一）…… 173
Ⅴ　調査のまとめ…… 177
1　平安時代のドック状遺構について…… 177
2　弥生時代の石斧製作について…… 179
3　縄文時代遺物について…… 182
4　古式土師器について（福岡市教育委員会　久住猛雄）…… 185
おわりに…… 190

挿図目次

図１　今山遺跡位置図…… 1
図２　糸島半島周辺の地質図…… 2
図３　「筑前国続風土記」中の今山周辺 …… 3
図４　今山遺跡調査地点…… 4
図５　調査地点位置図…… 9
図６　調査区土層断面１…… 11
図７　調査区土層断面２…… 12
図８　最上面遺構配置図……折込
図９　ＳＤ01実測図……折込
図10　ＳＤ01土層断面図…… 15
図11　ＳＤ01及び包含層出土古代遺物実測図…… 18
図12　ＳＣ03及びＳＸ04実測図…… 20
図13　ＳＣ03及び包含層出土古墳時代後期遺物実測図…… 21
図14　調査区南端（ＳＸ02）上層遺物出土状況及び下層灰層検出状況…… 24
図15　北側拡張区古墳時代前期遺物出土状況…… 25
図16　Ｃ－11区蛸壷出土状況…… 26
図17　ＳＸ02出土古墳時代前期土器実測図１…… 28
図18　ＳＸ02出土古墳時代前期土器実測図２…… 29
図19　Ｉ区包含層出土古墳時代前期土器実測図…… 30
図20　Ｉ区北区ＳＸ01東岸出土古墳時代前期土器実測図…… 31
図21　Ｃ－10・11区土器群出土古墳時代前期土器実測図…… 32
図22　Ｂ・Ｃ－12区土器群出土古墳時代前期土器実測図１…… 33
図23　Ｂ・Ｃ－12区土器群出土古墳時代前期土器実測図２…… 34
図24　北側拡張区出土古墳時代前期土器実測図１…… 35
図25　北側拡張区出土古墳時代前期土器実測図２…… 36
図26　北側拡張区出土古墳時代前期土器実測図３…… 37
図27　Ⅱ区出土古墳時代前期土器実測図１…… 38
図28　Ⅱ区出土古墳時代前期土器実測図２…… 39
図29　Ⅱ区出土古墳時代前期土器実測図３…… 40
図30　その他の遺構・表土・撹乱出土古墳時代前期土器実測図…… 41
図31　出土蛸壷実測図１…… 42
図32　出土蛸壷実測図２…… 43
図33　出土製塩土器実測図…… 44
図34　出土土錘実測図…… 45
図35　Ｉ区弥生時代チップ等ユニット位置図…… 54

図36　ユニットＢ・Ｃ・Ｅ・Ｆ・Ｉ群実測図…… 55
図37　ユニット出土弥生土器実測図…… 56
図38　Ｉ区包含層出土弥生土器実測図…… 57
図39　Ｉ区礫層出土弥生土器実測図…… 58
図40　北側拡張区・Ⅱ区・その他の遺構等出土弥生土器実測図…… 59
図41　ユニット出土石斧未製品実測図１…… 61
図42　ユニット出土石斧未製品実測図２…… 63
図43　ユニット出土石斧未製品実測図３…… 64
図44　ユニット出土石斧未製品実測図４…… 65
図45　Ｉ区包含層出土石斧未製品実測図１…… 67
図46　Ｉ区礫層出土石斧未製品実測図１…… 68
図47　Ｉ区礫層出土石斧未製品実測図２…… 69
図48　１区礫層出土石斧未製品実測図３…… 70
図49　１区礫層出土石斧未製品実測図４…… 71
図50　１区礫層出土石斧未製品実測図５…… 72
図51　ＳＤ01下礫層出土石斧未製品実測図１…… 73
図52　ＳＤ01下礫層出土石斧未製品実測図２…… 74
図53　ＳＤ01下礫層出土石斧未製品実測図３…… 75
図54　ＳＤ01下礫層出土石斧未製品実測図４…… 76
図55　Ｉ区南区礫層出土石斧未製品実測図１…… 78
図56　Ｉ区南区礫層出土石斧未製品実測図２…… 79
図57　Ｉ区南区礫層出土石斧未製品実測図３…… 80
図58　Ｉ区南区礫層出土石斧未製品実測図４…… 81
図59　Ｉ区南区礫層出土石斧未製品実測図５…… 82
図60　Ｉ区南区礫層出土石斧未製品実測図６…… 83
図61　Ｉ区南区礫層出土石斧未製品実測図７…… 84
図62　Ｉ区南区礫層出土石斧未製品実測図８…… 85
図63　Ｉ区南区礫層出土石斧未製品実測図９…… 86
図64　Ｉ区南区礫層出土石斧未製品実測図10…… 87
図65　Ｉ区南区礫層出土石斧未製品実測図11…… 88
図66　Ｉ区北区ＳＤ01東岸出土石斧未製品実測図…… 90
図67　北側拡張区出土石斧未製品実測図…… 91
図68　Ⅱ区出土石斧未製品実測図１…… 92
図69　Ⅱ区出土石斧未製品実測図２…… 93
図70　ＳＤ01出土石斧未製品実測図１…… 94
図71　ＳＤ01出土石斧未製品実測図２…… 95
図72　ＳＤ01出土石斧未製品実測図３…… 96
図73　ＳＤ01出土石斧未製品実測図４…… 97

図74　その他の遺構・トレンチ・表土・撹乱出土石斧未製品実測図１ …… 98
図75　その他の遺構・トレンチ・表土・撹乱出土石斧未製品実測図２ …… 99
図76　その他の遺構・トレンチ・表土・撹乱出土石斧未製品実測図３ …… 100
図77　その他の遺構・トレンチ・表土・撹乱出土石斧未製品実測図４ …… 101
図78　石包丁・石鎌未製品実測図 …… 107
図79　碇石・碇石未製品実測図 …… 109
図80　石錘実測図１ …… 110
図81　石錘実測図２ …… 111
図82　石鏃・石剣・石鑿・剥片石器実測図 …… 112
図83　敲石・磨石実測図 …… 114
図84　石核実測図 …… 115
図85　玄武岩剥片実測図及び模式図 …… 117
図86　縄文時代調査区配置図及び遺物出土状況実測図 …… 125
図87　Ｂ・Ｃ２区出土縄文土器実測図１ …… 127
図88　Ｂ・Ｃ２区出土縄文土器実測図２ …… 128
図89　Ｂ・Ｃ３・４区出土縄文土器実測図 …… 130
図90　Ｂ・Ｃ５区出土縄文土器実測図 …… 132
図91　Ｂ・Ｃ６区出土縄文土器実測図１ …… 133
図92　Ｂ・Ｃ６区出土縄文土器実測図２ …… 134
図93　Ｂ・Ｃ７区出土縄文土器実測図 …… 135
図94　Ｂ・Ｃ８・９区及びその他の地点出土縄文土器実測図 …… 136
図95　縄文時代土製品実測図 …… 137
図96　縄文時代石斧未製品実測図１ …… 138
図97　縄文時代石斧未製品実測図２ …… 139
図98　縄文時代石斧未製品実測図３ …… 140
図99　縄文時代礫石器実測図 …… 142
図100　縄文時代石錘実測図 …… 144
図101　縄文時代石鏃実測図 …… 145
図102　縄文時代剥片石器実測図１ …… 146
図103　縄文時代剥片石器実測図２ …… 147

※Ⅳ・Ⅴ章については、図の通し番号は付さず、各節毎に番号をふった

図版目次

巻頭図版１　上：Ｉ区全景　下：ＳＤ01コーナー
巻頭図版２　上：製塩土器出土状況　下：製塩時の灰検出状況
巻頭図版３　上：石斧製作時の剥片・チップ出土状況　下：石斧未製品出土状況
巻頭図版４　上：縄文土器出土状況　下：土層堆積状況
巻頭図版５　上：製塩土器　下：蛸壺　巻頭図版６　上：弥生土器　下：弥生時代石斧未製品
巻頭図版７　上：玄武岩原石　下：碇石・石錘　巻頭図版８　上：縄文土器　下：縄文時代石斧未製品
図版１　上：今山遠景（西上空から）　下：今山近景（西から）　図版２　調査区Ｉ区全景（北から）
図版３　上：調査区南端全景　下：２区全景
図版４　上：Ｉ区Ｂ・Ｃ４区土層断面　下：地山掘り下げ状況
図版５　上：Ｉ区Ｂ・Ｃ４区土層断面上層部分　下：Ｉ区調査区西壁土層断面
図版６　上：ＳＤ01全景（南から）　下：ＳＤ01全景（北から）
図版７　上：ＳＤ01南側小口部分（北から）　下：ＳＤ01西壁石垣部分（東から）
図版８　上：ＳＤ01南側小口部分基礎石　下：ＳＤ01西壁石垣部分基礎石
図版９　上：南側土手（南段）杭跡（西から）　下：北側土手（北段）（東から）
図版10　上：北側拡張区ＳＤ01と古墳時代のタコ壷群　中：ＳＤ01出土木
　　下：ＳＤ01床面出土土器（図11－７の土器）
図版11　上：Ⅱ区杭出土状況１　中：Ⅱ区杭出土状況２　下：ＳＤ01溝堀方土層断面
図版12　上：ＳＤ01土層断面１　中：ＳＤ01土層断面２　下：ＳＤ01土層断面３
図版13　上：ＳＣ03（東から）　下：ＳＣ03（南から）
図版14　上：ＳＣ03竈（南東から）　中：竈土層断面　下：ＳＣ03遺物出土状況
図版15　上：調査区南端（ＳＸ02）製塩土器出土状況（北東から）
　　下：北側拡張区製塩土器出土状況（東から）
図版16　上：ＳＸ02下灰層検出時遺物出土状況　下：灰層（東から）
図版17　上：灰層（北東から）　下：灰層土層断面
図版18　上：灰層横礫層上遺物出土状況　下：灰層撤去後礫層検出状況（東から）
図版19　上：ＳＤ01小口基礎石下遺物出土状況　中：同上　下：ＳＸ02遺物出土状況
図版20　上：ＳＤ02東岸遺物出土状況　中：同上　下：Ｃ－11区遺物出土状況
図版21　上：北側拡張区タコ壷出土状況　中：Ｃ－10区遺物出土状況　下：北側拡張区遺物出土状況
図版22　上：Ａ群ユニット　下：Ｂ群ユニット
図版23　上：Ｃ群ユニット　下：Ｄ群ユニット
図版24　上：Ｄ群ユニット　下：Ｄ群ユニット石斧未製品出土状況
図版25　上：Ｅ群ユニット　下：Ｆ群ユニット
図版26　上：Ｇ群ユニット　下：Ｈ群ユニット
図版27　上：Ｉ区包含遺物出土状況　中：同上　下：同上
図版28　上：弥生礫層（南から）　下：同上（北から）

図版29　弥生礫層遺物出土状況
図版30　弥生礫層遺物出土状況
図版31　上：縄文時代基盤礫層検出状況（東から）　下：Ｂ・Ｃ４区縄文時代土層断面
図版32　縄文時代上層遺物出土状況
図版33　縄文時代下層遺物出土状況
図版34　縄文時代最下層遺物出土状況
図版35　古代・古墳時代後期遺物
図版36　古墳時代前期遺物１
図版37　古墳時代前期遺物２
図版38　古墳時代前期遺物３
図版39　弥生土器他
図版40　弥生時代土器・石斧未製品１
図版41　弥生時代石斧未製品２
図版42　弥生時代石斧未製品３
図版43　弥生時代石器１
図版44　弥生時代石器２
図版45　縄文時代遺物１
図版46　縄文時代遺物２
図版47　縄文時代遺物３

表・グラフ目次

表１　出土製塩土器底部個数……43
表２　古墳時代前期土器観察表1～6…46～52
表３　弥生時代石斧未製品計測表１～３……103～106
表３　弥生時代石器未製品計測表 ……107
表４　弥生時代石器計測表１ ……108
表５　弥生時代石器計測表２ ……113
表６　弥生時代石器計測表３ ……115
表７　縄文時代石斧未製品計測表 ……141
表８　縄文時代石器計測表１ ……143
表９　縄文時代石器計測表２ ……144
表10　縄文時代石器計測表３ ……148
グラフ１　弥生時代石斧未製品グラフ ……102
グラフ２　出土剥片・チップ計測グラフ……118～121

本文中写真目次

写真１　ＳＤ01（南から）……14
写真２　ＳＤ01南側小口部分……14
写真３　ＳＤ01南側段……16
写真４　ＳＤ01北側段……16
写真５　ＳＤ01底土器出土状況……17
写真６　Ⅱ区ＳＤ01横の杭出土状況……17
写真７　ＳＣ03・ＳＸ04……21
写真８　ＳＣ03竈……21
写真９　ＳＸ02……23
写真10　ＳＸ02下灰層……23
写真11　Ｃ－10区土師器出土状況……26
写真12　Ｃ－11区出土蛸壷出土状況……26
写真13　土層断面に見えるチップと礫層……53
写真14　弥生礫層……53
写真17　Ｄ群ユニット ……121
写真18　Ｅ群ユニット ……121
写真19　石器or偽石器 ……149

Ⅰ　今山遺跡の立地と自然的・歴史的環境

1　立地と自然環境

今山は博多湾西端の福岡市西区横浜２丁目にある、標高82mの独立した山である。第三紀の花崗岩及び玄武岩から成る。今山の南は砂嘴状に南から延びる砂丘によって結ばれている。また南西側は近世には塩田が広がっていたが、その後の干拓によって陸地化している。また山の北半は大きく造成されて宅地になっている。北西には今津湾が広がり、約400m隔てて中世の港として名高い今津の地がある。今津湾はいわゆる糸島水道の名残りと解されるが、現在では、縄文海進時の糸島水道は途中に陸地があり、東の博多湾と西の加布里湾はつながっていなかったと考えられている。いずれにしろ今津湾は入り口が狭隘なため穏やかな湾であり、中世今津の港が造られた理由の一つと考えられる。

今山は弥生時代の石斧製作遺跡として全山が国史跡に指定されているが、弥生時代は今津湾は南と西に深く入り込んでいたと考えられ、山の南東側に延びる砂丘でのみ陸地とつながっていた。この砂丘がいつできたのか分からないが、砂丘上には弥生時代中期の遺構群が存在する。それ以前の遺物は

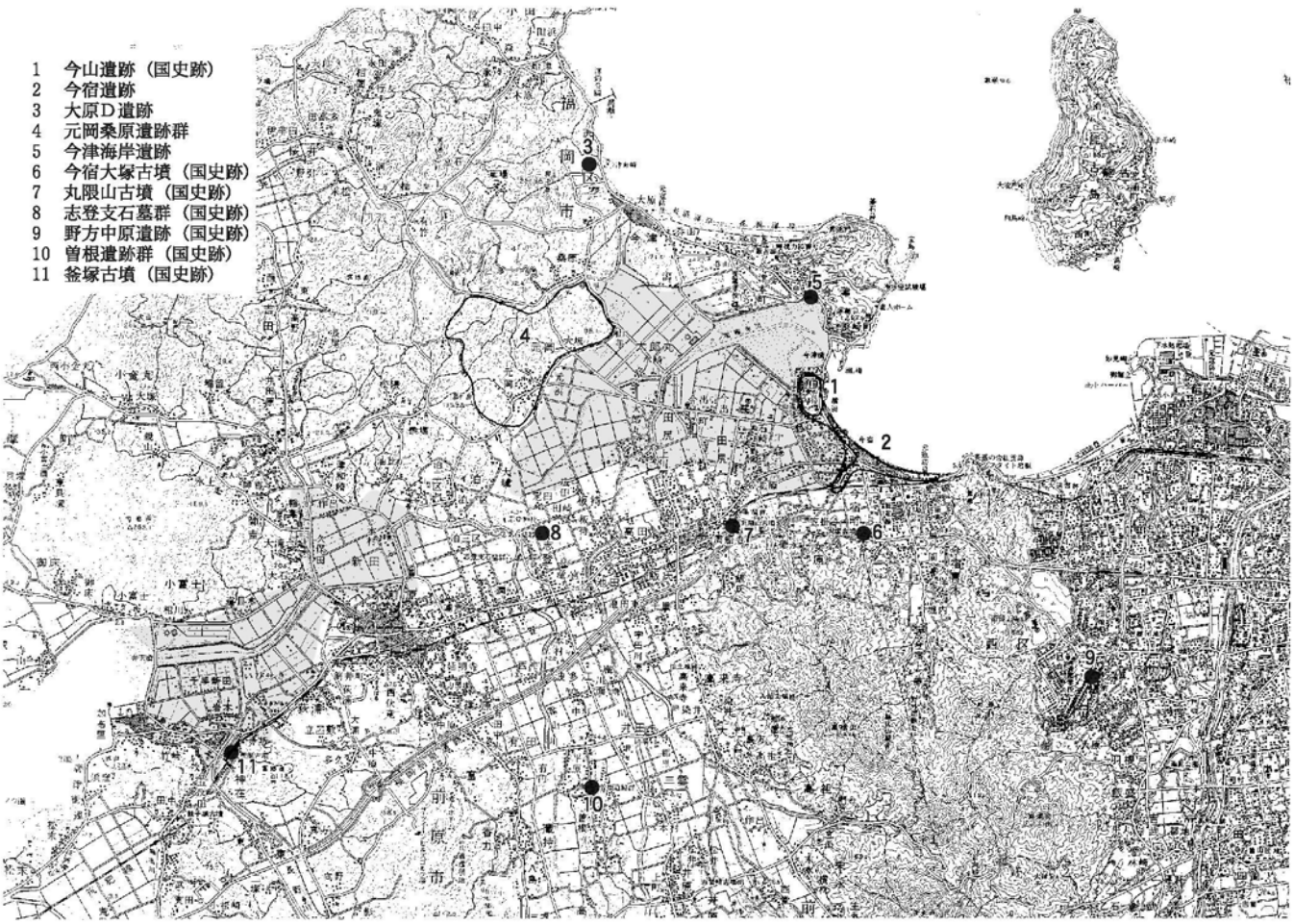


図１　今山遺跡位置図（１／100,000）

これまでは今山とつながる砂丘上からは見つかっていない。

当調査区から出土した遺構・遺物は、縄文時代前期から弥生・古墳・古代から中世前半の時期のもので、さらに今山西麓では旧石器時代の遺物も採集されている。当調査区は最大４ｍ近い厚い堆積土からなり、各種の堆積土からなり、そのうち地表下１ｍで縄文時代後期初頭の土器を包含する砂丘層を検出し、砂丘の時代にひとつの目安ができた。また今調査区の北側では中世以降に形成されてと考えられる砂丘層も確認されている。

今山の西山麓からは旧石器時代の三稜尖頭器が表採されている。この時代の海岸線は現在より100ｍ前後下にあったと考えられ、当然海岸線ははるか沖合にあり今山は当時の標高200ｍ弱で、周囲はすべて陸地であった。縄文海進期には、全面つながっていないとはいえ今津湾は深く入り込んでいた。今回の調査では砂丘層の下の標高50㎝前後で淡水の珪藻が確認され、また今宿遺跡第５次調査でも砂丘層の下で6000年前頃の淡水の珪藻が確認されている。「古代の博多」によれば、縄文海進入期の今山は周囲を海に囲まれた島になっている。

今回の調査区は今山と道路を挟んだすぐ東側の標高約４ｍの地点にある。調査区の東側約80ｍは博多湾である。江戸時代の絵図を参考にすると、調査区の北側（現在の雇用促進住宅があるあたりか）は海が湾入している。これは現在残る路地の形からも明瞭で、調査区の北約100ｍ付近で湾入していたと思われる。調査区の約50ｍ北からこの地点までは無遺物の風成砂層が厚く堆積している。調査区の状況等から考えて、中世以降この風成砂層が堆積したと思われ、絵図が正しければ江戸中期以降に堆積したものと思われる。

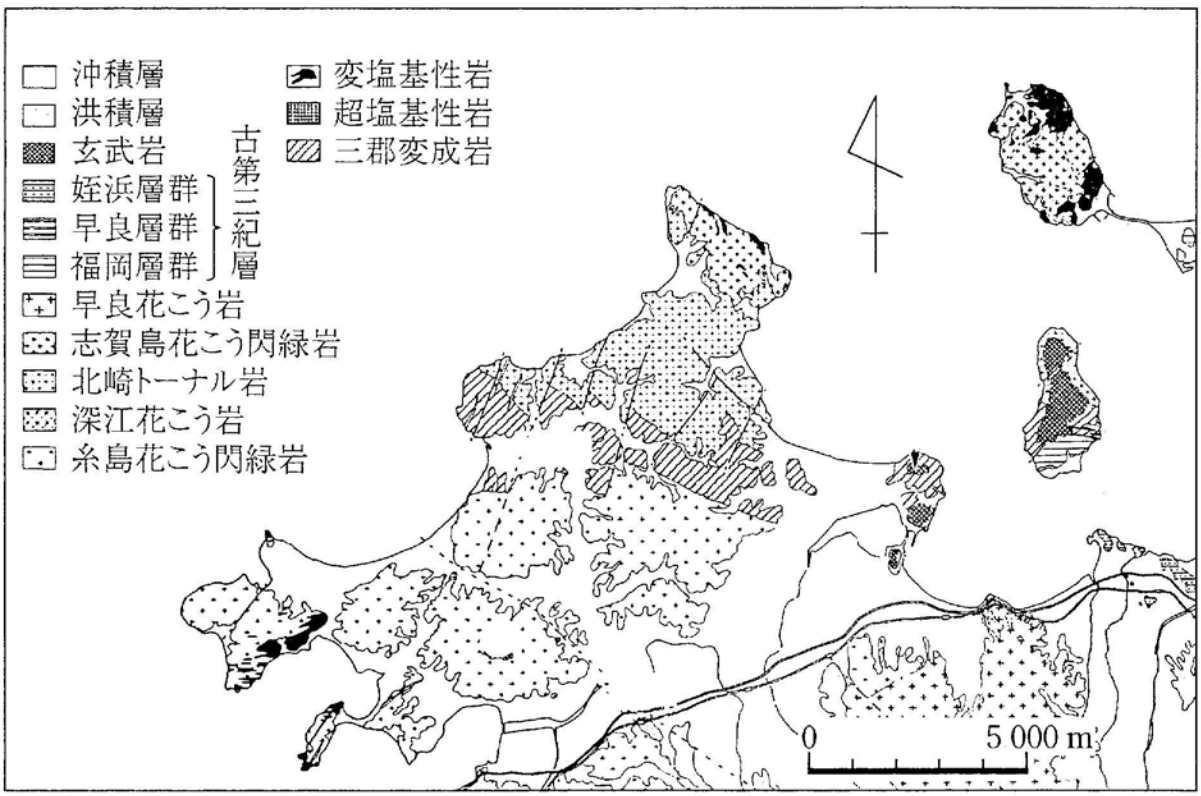


図２　糸島半島周辺の地質図（注①文献より）

調査区内の地山は北西から南東に大きく傾斜し、調査区最北部で標高３ｍ、最南部で標高0.5ｍを測り、40ｍの距離の間で２ｍの比高差がある。地山は赤褐色の粘質土で、調査中に現場視察に来ていただいた西南学院大学磯望先生と九州大学下山覚先生によれば、この地山は今山からの崩落土壌で、この土壌の中にはＡＴを含んでいることから、旧石器時代後半から縄文時代前期までの間に崩落したと考えられる。この崩落土壌は北西から南東に崩壊したため、地山面は大きく南東に向けて傾斜し、その比高差は28ｍで2.5ｍを測る。この層のさらに下は花崗岩の岩盤である。

2　歴史的環境

今山遺跡は弥生時代の石斧製作遺跡として名高いが、今回の調査と過去の調査で旧石器時代、縄文時代前期・中期・後期、弥生時代前期・中期、弥生時代末～古墳時代前期、古墳時代後期、平安時代、中世中頃の遺構・遺物が発見されており、平地のほとんどない今山周辺の立地を考えれば、異質である。

縄文時代・弥生時代は玄武岩製石斧の産地として利用された。縄文時代の玄武岩製石斧の詳細な分布は明らかではないが、前原市三雲遺跡・福岡市西区周船寺遺跡・同早良区四箇遺跡などで後期・晩期の玄武岩製打製石斧が出土している。弥生時代には太型蛤刃石斧の製作を前期後半から中期前半の間に行っており、その製品は北部九州一帯から出土し、伊都国発展の原動力となったと理解されている。この時期の甕棺墓群が今山遺跡のすぐ南の今宿遺跡砂丘上で発見されており、細形銅剣１本が副葬されていた。

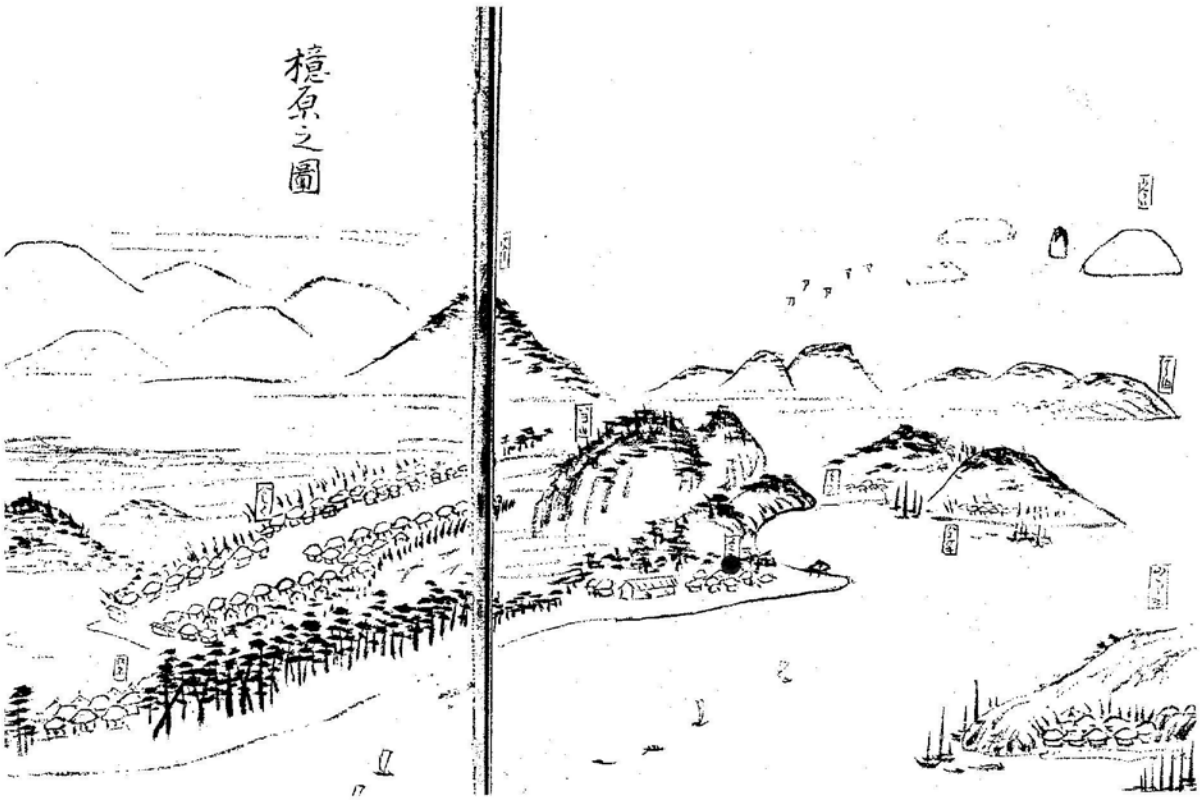


図３　「筑前国続風土記」中の今山周辺（●が調査地点）

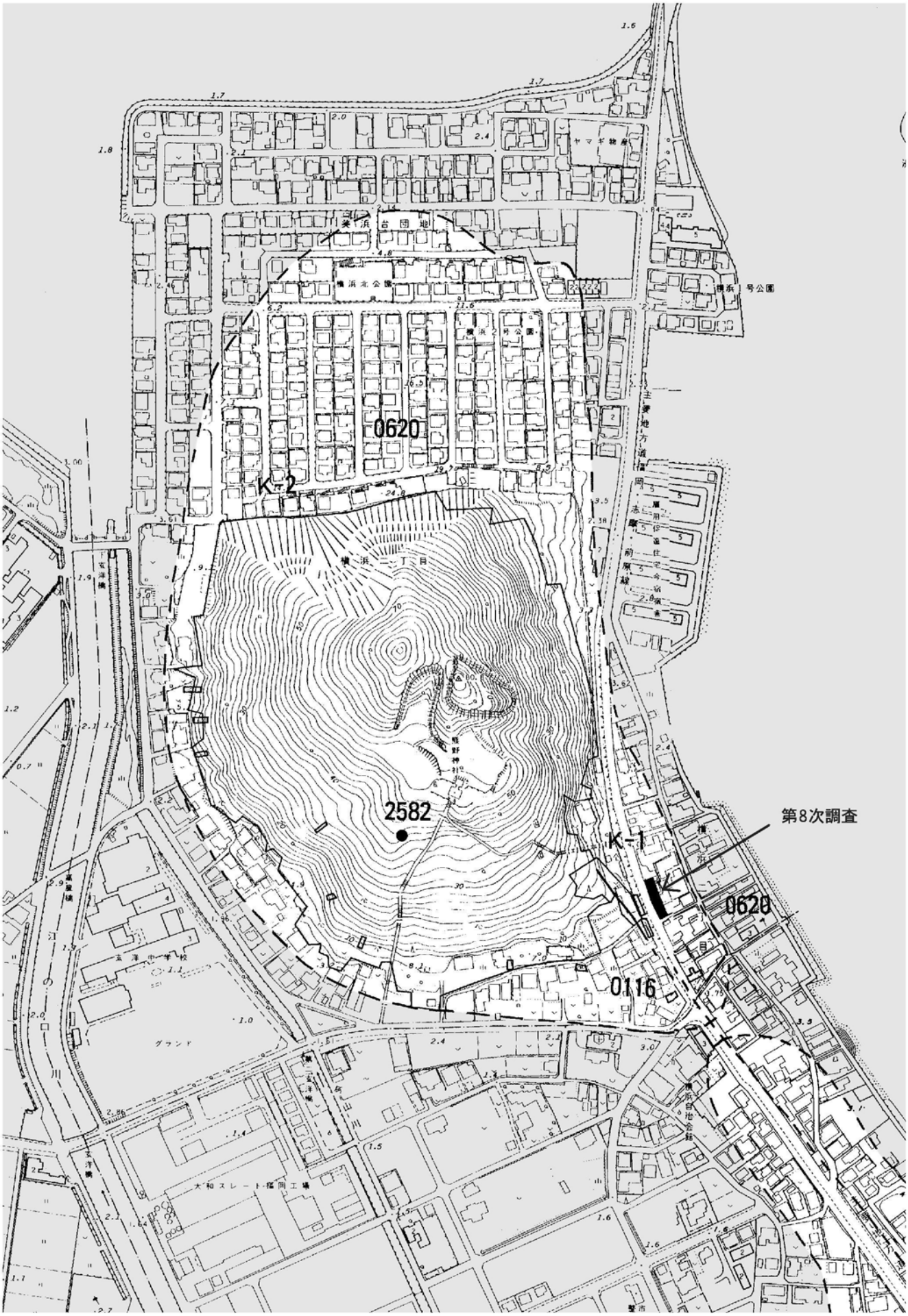


図4　今山遺跡調査地点

弥生時代末から古墳時代前期は製塩遺跡として利用される。博多湾岸の同期の製塩土器は福岡市東区海の中道遺跡や同西区今宿遺跡で発見されているが、製塩遺構そのものは未だに発見されていない。博多湾岸における該期の特徴のひとつは、大陸系を含めた外来系土器の多さである。早良区西新町遺跡・早良区原遺跡・博多区比恵遺跡などを始めとして多くの遺跡から外来系土器が出土している。当遺跡でも第4次調査で出土した瓦質土器のほか今回の調査でも外来系土器が出土している。

古墳時代後期には今山南麓に円墳が1基造られている。第6次調査では今山西麓で7世紀代の製鉄関連遺構・遺物が出土している。当遺跡の西約3.5kmにある元岡桑原遺跡群などでは7世紀末から8世紀代の大規模な製鉄遺構が発見され、律令期は糸島半島で大規模な鉄製産が行われていたことがわかってきた。

平安時代中頃には当遺跡でドックが築かれる。大宰府の外郭組織として周船司が置かれるが、これは現在の西区周船寺周辺にあったものと考えられている。周船寺遺跡では該期の遺構は発見されていないが、その南の丘陵部にある徳永遺跡では包含層中から多くの越州窯青磁や長沙窯陶器が出土し、周船司関連遺跡の可能性が考えられている。また今山の北約6kmにある唐泊は遣唐使船の出帆港として名高い。また元岡桑原遺跡では平安時代の瓦窯址も発見されており、今山から元岡に至る今津湾沿岸が古代の重要地点として考えられるようになった。

古代末から中世前半にかけては、糸島半島のほぼ全域が怡土荘に組み込まれる。同荘園は鳥羽天皇中宮の法金剛院領として出発し、最古の文献記事は大治5（1130）年である。怡土荘の中心は今山と湾を隔てた北側の今津であったと考えられている。鎌倉時代には栄西に創建された禅宗の古刹誓願寺や勝福寺があり、博多と並ぶ禅宗の一大根拠地であった。

江戸時代には慶長10（1605）年に怡土・志摩の年貢米を福岡の藩庫に船で送った記事があり、享保9（1724）年には前原宿茅野屋が横浜に大きな米倉を建て、怡土・志摩の年貢米数万俵を廻船で直接大坂に積み出しており、江戸期においても怡土・志摩の重要港の地位を保っていた。

3　今山遺跡の既往の調査

今山遺跡を世に知らしめたのは、九州帝国大学医学部教授中山平次郎である。中山教授は大正元年の元寇防塁の調査に際して横浜の民家で玄武岩製石斧未製品を採取して以来、再三今山を訪れ、大正12年になって、熊野神社裏側で多くの石斧未製品を確認した。昭和5年に今回の調査地付近で道路工事が行われ（現在の主要地方道福岡志摩前原線）、石斧未製品・弥生土器・須恵器などが出土したのを確認している。この時の採取資料を基に、中山教授は石斧の製作工程を粗割→打裂→敲打→琢磨の4工程としている（中山平次郎1931）。

中山先生に感化を受けた地元在住の諸氏は、地元選出の市議会議員板屋猛氏を中心にその後も勉強会を開き、遺物を採集するなど地道な活動を行い、現在でも地元の方が精力的に活動されている。

発掘調査は昭和43年の福岡市歴史資料館による調査を嚆矢として今までに7回行われている。

第1次調査（福岡市教委1973）は昭和43年（調査番号6802）、第2次調査（調査番号7301）は昭和48年（調査番号7301）に行われた短期の範囲確認調査であるが、弥生時代前期の土器と石斧未製品が出土し、以後の研究の端緒となった。

第3次調査（福岡市教委1981）は自転車道建設に伴い、当調査区の道を隔てた西側で行われた。100本以上の石斧未製品と石製漁具、古墳時代の土器・蛸壺・製塩土器が多く出土した。礫層が調査区全体に見られ、8次調査と同様な状況であったと考えられるが、弥生時代の遺物と古墳時代の遺物が混在していたようである。

第４次調査は短期の調査である。第５次調査は福岡考古談話会によって行われた。主要地方道横浜交差点の周囲２ヶ所を発掘したが、この時の調査の主目的は製塩遺構の検出にあった。調査では竪穴住居内から製塩土器・庄内式土器が出土し、製塩土器に時期的な目安を与えた。この調査でも礫層が検出されており、礫層がかなり広範囲に分布していることがわかる。

昭和59年には今山全山を宅地開発を行う計画が持ち上がった。それに対して当市教育委員会は様相が明らかではない今山西半を対象とし、国庫補助事業として重要遺跡確認調査を行った（第６次調査)。調査は頂上部や中腹、山裾で11ヵ所行われ、三稜尖頭器の採集や打製石斧の可能性のある未製品、７世紀代の製鉄関連遺構など新しい見識が得られ、石斧の生産も全山で行われたことがわかった。この調査を受けて、平成５年に国史跡に指定された。

第７次調査（福岡市教委1998）は今山南麓の下水道工事に伴って調査が行われ、石斧未製品の他、室町時代前半頃の製鉄関連遺物や陶磁器が出土した。

今山と砂丘続きの今宿遺跡では５次の調査が行われている。１次調査は水道管敷設に伴う調査で、弥生時代中期・後期後半、古墳時代前期土師器などともに玄武岩製石斧未製品が出土している。２次調査は今山にすぐ南隣する砂丘上で調査が行われ、弥生時代中期の遺構群が発見され、研ぎ直された細形銅剣が出土した。３次調査は民間住宅建設に伴って行われ、弥生時代末の甕棺墓、古墳時代初めの土坑、古代から中世の土坑や溝が検出された。４次調査は水道管敷設工事に伴う調査で、弥生時代前期後半の甕棺墓が１基発見された。５次調査はＪＲ筑肥線の複線化に伴う調査で、今宿遺跡の最東端で行われた。弥生時代前期から中期の甕棺墓・土壙墓・木棺墓、古墳時代初めの製塩関係遺物などが発見されている。

注

① 唐木田芳文監修、福岡県地学のガイド編集委員会編　2004『福岡県地学のガイド』 コロナ社

② 下山正一　1998 「福岡平野の縄文海進と第四紀層」『福岡平野の古環境と遺跡立地』 九州大学出版会

今山遺跡関連文献

中山平次郎　1931 「今山の石斧製造所址」『福岡県史跡名勝天然記念物調査報告６』 福岡県教育委員会

福岡市教育委員会　1973 『今山遺跡（１)』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第22集

浜田昌治　1980 『今山遺跡第５・６地点の調査を終えて』

福岡市教育委員会　1981 『今山・今宿遺跡』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集

福岡市教育委員会　1984 『今山遺跡現地説明会パンフレット』

福岡市教育委員会　1998 『今山遺跡　第７次調査の報告』

津田春雄　編 『筑前国横浜浦物語』(写し等の収集資料集)

今宿遺跡関連文献

福岡市教育委員会　1994 『今宿遺跡』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第389集

福岡市教育委員会　2000 『ＪＲ筑肥線複線化地内遺跡埋蔵文化財調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書　第654集

福岡市教育委員会　2003 『今宿遺跡２』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第738集

Ⅱ　調査の経緯と経過

1　調査に至る経緯

平成10年、国指定史跡今山遺跡の東を走る主要地方道福岡志摩前原線の海岸線側を約５ｍ拡幅する計画が、福岡市土木局から埋蔵文化財課に提出された（審査番号10－1－34)。翌平成11年度前半中に順次試掘を行った結果、今山遺跡第３次調査の道路を挟んだ東側で時期不明の石垣遺構と弥生時代中期頃の遺物包含層を検出した。この時点では石垣は江戸時代の可能性が高いと考えられ、弥生時代包含層の掘り下げと遺物採取及び石垣の時期確認を目的に、約120㎡を対象に２週間の調査期間で平成11年度中に行うことで合意した。

ただし結果的には試掘で遺跡なしとした今回の調査区の南側に遺跡が伸びることが明らかであるが、調査時にはすでに工事・舗装が終了しており調査することができなかった。遺物の一部は地元の方によって一部が採取されている。また今調査地点の北側はいずれの試掘溝も厚い風成砂層で、遺構・遺物は発見されなかった。

2　調査の経過

調査は当初２週間の予定で平成11年９月22日に重機による表土剥ぎから開始した。表土剥ぎの段階で石斧製作遺構が良好な状態で残っている可能性が高いこと、石垣も江戸時代以前の可能性が高いことが判明したため調査期間を２ヶ月に延長した。調査は石垣部分から開始した。石垣は地面を掘り込んだ溝もしくは人工的な崖面の壁に造られ、石垣の外（東側、結果的には溝の内部）の上部からは古代末から中世前半の遺物が出土することが明らかとなり、元寇防塁の可能性も含めて古代から中世前半期の遺構の可能性が高まった。

一方、石垣を掘り込んだ土自体は、製塩土器と石斧製作時のチップの捨て場になっていること、さらに古墳時代後期の住居もあることなどが次第に明らかになってきた。また石垣は元寇防塁ではなく、さらに古い時期の溝の護岸であることも判明し、調査期間を年内までの約３ヶ月とするべく、土木局等と交渉することとした。ところが交渉日の前日に、溝の最下部から縄文土器らしき破片が出土したため溝内にトレンチをいれたところ、溝の底から70㎝ほどの厚さの縄文時代包含層があることが判明したため、急遽調査期間を翌年３月までの６ヶ月間とした。

調査区が狭隘なためと、調査区を横切る生活道路を確保するため、調査区を分けて調査を行った。最初に調査した調査予定地区の南側半分部分をⅠ区とし、溝状遺構や包含層がさらに北側に延びるため拡張した（北側拡張区)。遺構はさらに北側へと延びるため、廃土を一度外に持ちだして、北側拡張区の北にある生活道路部分を調査した（北側拡張区Ｂ)。あわせて南端部分も生活道路ぎりぎりまで調査した（南側拡張区)。その後さらに反転して残りの北側部分を発掘した（Ⅱ区)。Ⅰ区はさらに全体を北区・中区・南区と３分割し、古墳時代・弥生時代包含層を掘り下げた。Ⅰ区縄文時代の包含層については２ｍメッシュのグリッドを組んだ。調査区が狭隘なため、遺物のドットはとらず、概ね10㎝掘り下げるたびにグリッド名とレベルを記入した。北側拡張区・Ⅱ区については表土下の古墳時代・弥生時代包含層の掘り下げについても同様にした。調査面積は調査区上面で115㎡である。

調査区は砂丘層と溝がほぼ無くなる北側地点まで行った。さらにその北側について人力で小トレンチを入れたが、上部の黒色の湿気を多く含む土混じり砂層に少量の土器を含んでいるものの、いずれも細片であった。さらに調査区の北10ｍ地点では中世以降にできたと考えられる無遺物の白砂層が厚

く堆積していた。調査は平成12年３月９日に終了した。

なお、古代ドック遺構と考えられるＳＤ01は全国的に見ても希有な遺構であることから、土木局・下水道局と数回にわたって保存についての協議を行ったが、すでに調査区の南側・北側隣接地まで下水道及び道路舗装が終了し当調査区のみが未施工で、特に下水道を迂回させることが困難であることから保存を断念せざるを得なかった。また調査区の東側隣接地にＳＤ01の東壁が延びることから、発掘調査を企画したが結果的には調査することができなかった。

3　調査組織

調査委託　福岡市土木局道路建設部道路建設西部２課
調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

試掘・発掘調査（平成11年度）
　埋蔵文化財課長　山崎純男
　調査第１係長　山口譲治
　試掘担当　事前審査係長田中寿夫、事前審査係中村啓太郎
　調査担当　米倉秀紀（調査第一係）
　調査庶務　文化財整備課管理係
　調査作業　中村文雄、西嶋利規、西畑盛行、宮原邦江、矢野和江

整理（平成12年度）
　埋蔵文化財課長　山崎純男
　調査第１係長　山口譲治
　庶務　文化財整備課管理係
　整理作業　柴田加津子、萩本恵子、日名子節子

整理・報告（平成16年度）
　埋蔵文化財課長　山口譲治
　調査第１係長　田中寿夫
　庶務　文化財整備課管理係
　報告補助　山口朱美・大庭友子・名取さつき（九州大学）
　整理作業　牛尾美保子、海内美也子、武田祐子

発掘調査及び整理・報告に際して下記の方々のご指導・ご協力を得ました。感謝いたします。
（敬称略）
磯望（西南学院大学）、下山覚（九州大学）、水ノ江和同（福岡県国立博物館対策室）、大内士郎（玄洋公民館）、津田春雄、上原勇夫

Ⅲ　調査の記録

1　調査の概要

発見した遺構・遺物は、時代の新しい方から順に（つまり上層から）並べると、①古代後半～中世前半、②古墳時代後期、③古墳時代前期、④弥生時代前期～中期、⑤縄文時代中期、⑥縄文時代前期の６時期に大別できる。このうち③～⑥は自然または廃棄による堆積による包含層状の様相で、廃棄以外の遺構はほとんど確認できない。ただし、③は製塩に伴うもので、大量の製塩土器の廃棄とともに製塩時の灰をまとめて廃棄した部分があった。また小さな焼土も確認できたが、製塩時のものかどうかは分からなかった。②は一部包含層状を呈するが、竪穴住居址１軒と小さな溝状遺構１条を検出した。①は大きな溝状遺構で、②～⑥の間に堆積した土層を掘り込んで作っている。溝は調査区内から始まり、北側にある前述の湾入部の奥に向かって伸びている。溝の南側のみは壁に護岸のための石積みを行っている。

②から⑥の包含層状の堆積は水平に堆積しているわけではない。次項の層序で詳細に述べるものの、基盤層が北西から南東に急激に下る崩落土壌であり、それ以降に堆積した砂や土も海岸部に向けて傾斜している。現標高は約４ｍであるが、地元の方の話では昭和５年前後の道路（現主要地方道福岡志摩前原線）建設時に１ｍ以上削平しており、そのため、表土剥ぎをした時点では平安期の溝以外に西端近くでは弥生時代のチップ群が、中央では古墳時代後期の住居址が、東側では無遺物の砂丘層（古墳前期以降）を検出した状態であった。これは斜めに堆積した砂丘層を水平にカットしたためである。

従って、調査は試掘トレンチを再発掘し、土層を把握することから始めた。その後平安時代の溝状

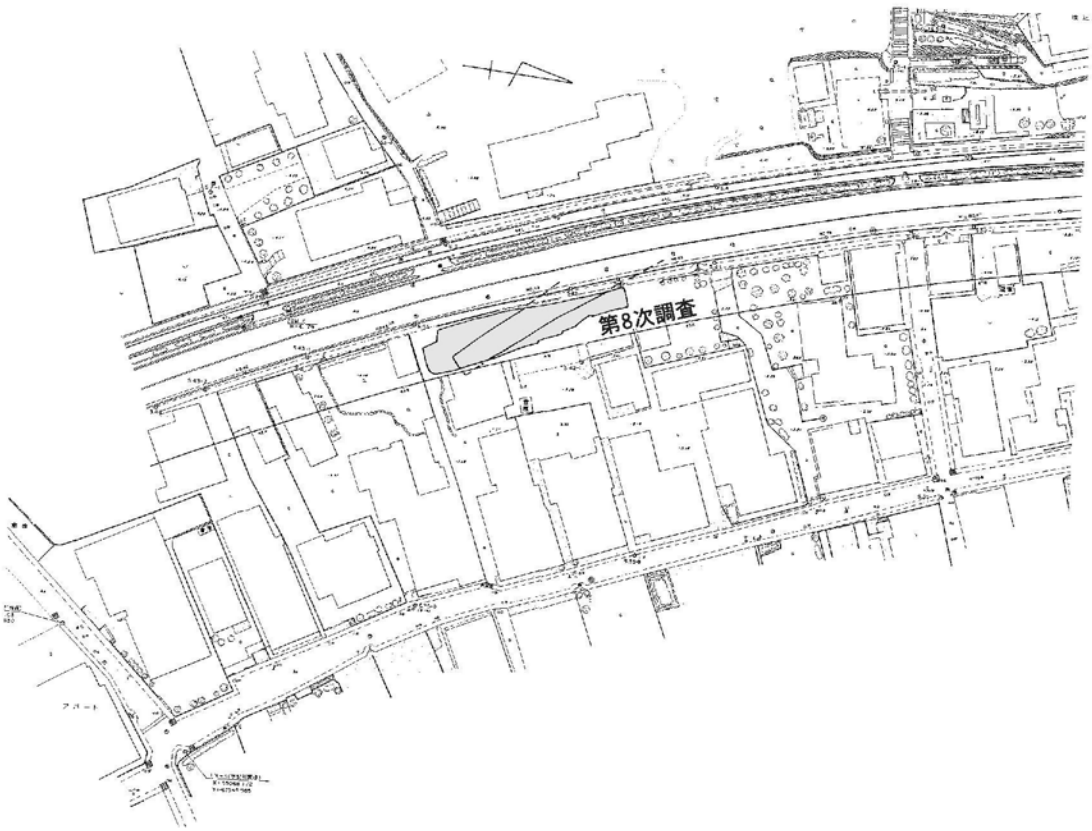


図５　調査地点位置図（１/2000）

遺構、古墳時代後期の住居址の調査を行った。更に調査区南側で製塩土器を大量に含む方形の掘り込み状の土層が見えたため、第４次調査と同様の古墳時代初期の住居と判断して掘削していったが、途中で斜めに堆積する包含層の一部であることが判明した。その後は全体にグリッドを設定し、古墳時代前期の製塩関連、弥生時代の石斧製作関連の包含層の順に調査を行った。

前述のとおり、調査途中で縄文時代の包含層を検出したが、包含層は最も厚い部分で1.8ｍと厚く、最深部の標高は0.5ｍでさらに南に下降する。安全のため調査区壁面に段をつけ、さらに斜めに掘削したため最下部の掘削幅は約２ｍ、最下部の掘削面積約20㎡と極めて狭くなった。調査は最後に調査区の北側に小トレンチを入れ、良好な包含層が続かないのを確認し、平成12年３月９日に終了した。

２　層序（図６～８）

基盤層が今山の崩落土壌からなる急斜面のため、その上にたまった各砂層・土層は場所によって大きく異なっている。最深部近くのＡ～Ｃ４区の中央に設定したベルト土層（図６上）で基本的な土層を説明する。

Ⅰ層　表土（10～30㎝）…現代の盛り土

Ⅱ層　黒灰色土混じり砂質土（０～50㎝）…製塩土器を含む古墳時代初頭の包含層

ただし土層実測図にはこの層はすでにない。

Ⅲ層（１・１’・９層等）　暗褐色～暗赤褐色砂混じり土（30～70㎝）

石斧未製品を含む弥生時代中期前半の包含層である。大きな土色の砂や土質の差はないが、この層の間に玄武岩チップの集積層（ユニット）を数カ所挟んでいる。チップ集積層以外の部分にも多くのチップや石斧未製品・弥生土器が含まれている。そのほとんどが自然に形成された層ではなく、人工的にチップとともに埋めていった層であると考えられる。

Ⅳ層（２層）　暗褐色砂混じり土、20から50㎝大の礫を大量に含む。土よりも礫の方が量が多い。

石斧未製品を含む弥生時代前期後半の包含層である。大量の礫は人工的に廃棄したものと思われる。石斧の生産を始めるにあたって、製作地で邪魔な石を捨てた可能性がある。

Ⅴ層（３～12層）　厚さ５㎝前後の細砂層数層から成る砂層で、全体で20㎝ほどの厚さを成す。下部には礫を若干含んでいる。上部には弥生時代前期の遺物を含んでいるが、下部11・12層には縄文時代後期遺物を含んでいる。

Ⅵ層（13層）　全体を１層としているが、３～５㎝の細かい黄白色砂と淡褐色砂の互層から成る風成砂層である。縄文時代後期初頭の包含層。

Ⅶ層（14～18層）　厚さ40㎝前後の浅黄色から褐色の細砂。炭化物・鉄分を含んでいる。 縄文時代中期の遺物包含層である。

Ⅷ層（20～23層）　厚さ20㎝前後の浅黄色から褐色の細砂層。

縄文時代前期～中期の遺物包含層

Ⅸ層（24～31層）　厚さ30㎝前後の黄色から明黄褐色の粗砂を主とする層。鉄分が多く、黒化・赤化している部分が多い。わずかに水が湧く。

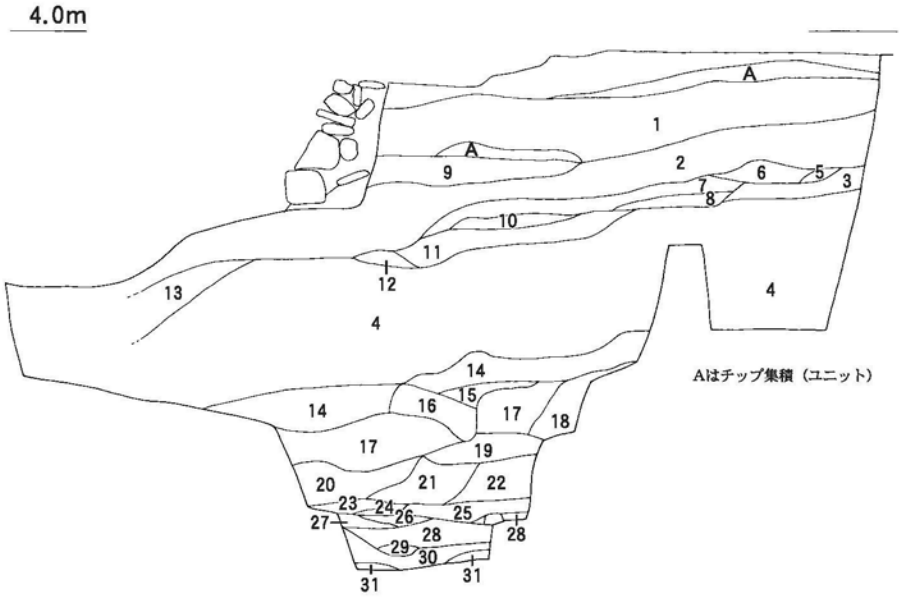
縄文時代前期の遺物包含層で、自然木が遺存している。

Ⅹ層　地山　赤褐色の粘質土に礫を多く含んでいる。

調査区西壁（図７上）は、風成砂層から上部はＡ～Ｃ４区土層と基本的に同じだが、下部が異なる。

Ⅰ層　表土（10～30㎝）…現代の盛り土

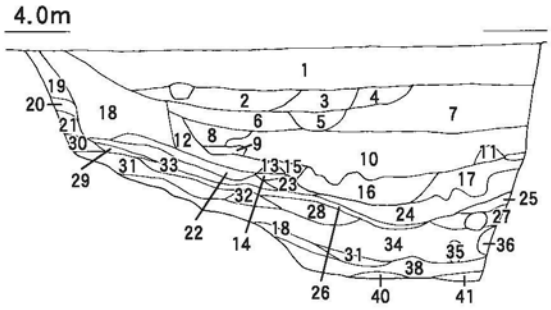
Ⅱ層　調査時以前に削平のためすでにない。



A～C－4区中央付近土層断面

1　褐色砂まじり土
2　暗褐色砂まじり土（大礫多量）
3　暗褐色砂まじり土
4　褐色細砂と灰白色細砂互層（風成砂層）
5　橙色粘土ブロックを少量含む褐色粗砂まじり細砂
6　褐色粗砂まじり細砂
7　淡黄色細砂ブロックを含む明褐色細砂（礫なし）
8　淡黄色細砂ブロックを含む褐色細砂（礫なし）
9　1に黒色ブロック含む
10　淡黄色細砂に明褐色細砂ブロック含む（礫なし）
11　7より淡黄色砂ブロック多い（10～20cm大の礫含む）
12　淡黄色粗砂を少量含む褐色細砂（5cm大の礫含む）
13　褐色細砂に浅黄色細砂がわずかに縞状に入る
14　褐色細砂に少量の浅黄色細砂が入る
15　14より浅黄色細砂多い
16　浅黄色細砂に明黄褐色粘土、褐色細砂を含む
17　浅黄色細砂ブロック＋褐色細砂ブロック、炭化物多い
18　17より浅黄色細砂少ない
19　17に黒色鉄分少量含む
20　17より浅黄色細砂少なく炭化物少ない
21　17とほぼ同じ
22　21より浅黄色細砂多い
23　20に橙色細砂・鉄分含む
24　明黄褐色粗砂まじり細砂、鉄分含む
25　20より明るい
26　黄橙色粗砂まじり細砂
27　黒色鉄分を含む明黄褐色粗砂まじり細砂
28　黒色鉄分・炭化物を含む浅黄色細砂まじり粗砂
29　浅黄色細砂まじり粗砂
30　黒色鉄分を含む浅黄色粗砂まじり細砂
31　黄色粗砂まじり細砂

1　黒褐色砂まじり粘質土（鉄分含む）
2　オリーブ黒色砂まじり粘質土（鉄分含む）
3　橙色～淡黄色砂をブロック状に含む灰色粘質土まじり粘質土
4　明黄褐色地山ブロックを少量含む黒褐色砂まじり粘質土
5　黒褐色砂まじり粘質土
6　橙色砂と淡黄色砂ブロックを含む暗褐色土まじり砂
7　黒褐色砂まじり土
8　7より淡い
9　にぶい黄褐色砂まじり粘質土
10　黒褐色砂まじり粘質土
11　黄橙色地山ブロック
12　暗灰黄色土まじり砂
13　にぶい黄色粘土まじり砂
14　灰色粘土
15　淡黄色粘土ブロック＋黒色粘土ブロック
16　淡黄色砂ブロックを含む灰白色粘土
17　灰白色粘土・淡黄色砂ブロックを含むオリーブ黄色細砂
18　暗灰黄色土まじり砂（12よりやや明るい）、縞状に鉄分含む
19　18よりやや明るい
20　明褐色土まじり砂（固い）
21　淡黄色砂を含む明赤褐色土まじり砂（固い）
22　淡黄色砂と明赤褐色砂・灰色砂の互層
23　灰白色粘土ブロックを含む灰黄褐色細砂
24　灰白色細砂と灰色細砂の互層（上部はマンガンにより明赤褐色）
25　暗オリーブ褐色細砂
26　オリーブ褐色粘土
27　にぶい黄色粘土＋黒褐色粒
28　淡黄色粗砂（上部に多い）＋暗灰色細砂（下部に多い）
29　オリーブ黄色細砂
30　赤色土まじり砂

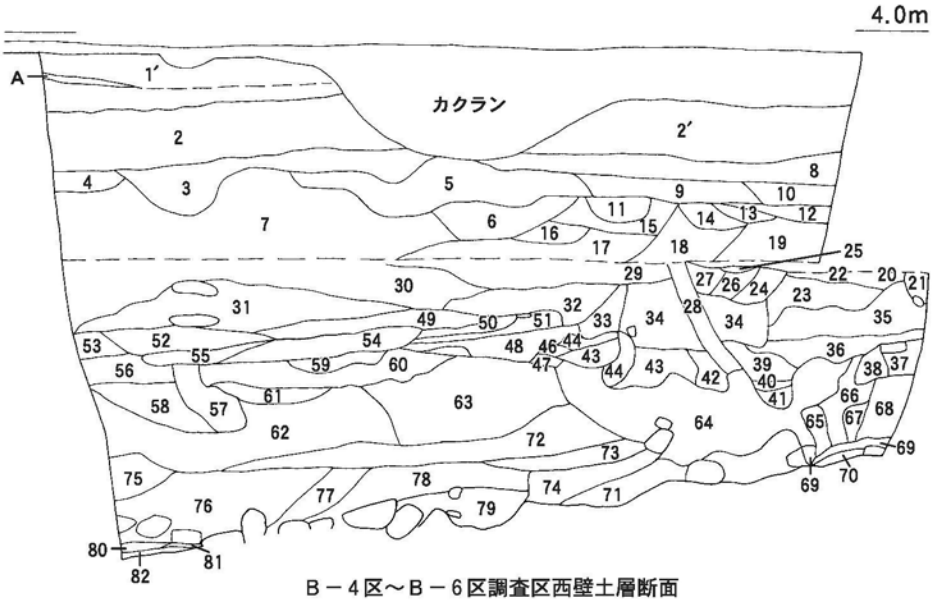


調査区南端東壁土層断面

31　明赤褐色砂まじりオリーブ細砂
32　淡黄色砂（多）＋暗灰色砂（少）（縞状）
33　暗灰色砂（多）＋淡黄色砂（少）（縞状）
34　32に近い（マンガン層が上部にあり）
35　暗緑灰色粘土
36　暗緑灰色粘土まじり砂
37　淡黄色砂
38　淡黄色砂＋灰白色砂＋橙色砂の互層
39　にぶい黄橙色粘土（多）＋黄橙色粘土＋淡黄色砂（少）
40　にぶい黄色粘土
41　灰黄色粘土に灰色砂少量含む

0　1m

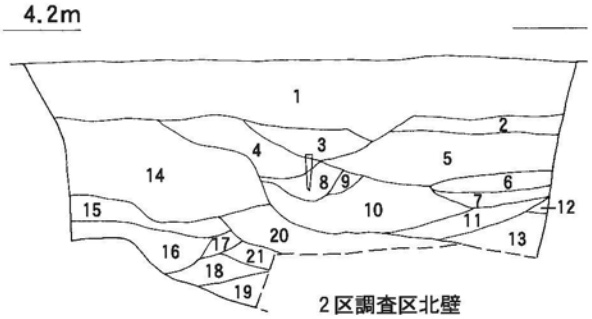
図6　調査区土層断面1（1/40）



B－4区～B－6区調査区西壁土層断面

1　褐色砂まじり土
1′　やや明るい
2　暗褐色砂まじり土
3　暗褐色砂まじり土
4　3に淡褐色砂まじる（全体に砂多く土少ない）
5　暗黄褐色砂に黒色砂、淡黄褐色砂まじる
以上弥生時代包含層
6　5に近いがわずかに明るい
（マンガン線が途中に2本あり）
7　褐色砂細砂と灰白色細砂の互層
以上縄文時代包含層
8　褐色土まじり砂（炭化物多し）
9　極暗褐色土まじり砂
10　暗褐色土まじり砂
以上須恵器を包含
11　極暗褐色土まじり砂
12　淡黄色砂・灰白色砂を含む暗赤褐色細砂
13　赤褐色土まじり砂
14　極暗褐色土まじり砂
15　赤褐色細砂
16　にぶい赤褐色砂
17　15よりやや明るい
18　淡黄色砂ブロックを含むにぶい赤褐色細砂、
湿気を多く含む（縄文土器多い）
19　淡黄色砂粒を含む暗褐色細砂、
湿気を多く含む（縄文土器多い）
20　黄褐色土まじり砂
21　オリーブ黄色土まじり砂
22　褐色土まじり細砂
23　黄褐色土まじり砂
24　赤褐色土まじり砂
25　にぶい赤褐色砂まじり土
26　淡黄橙色粘土ブロックを含む明褐色土まじり砂
27　褐色土まじり砂
28　黒色土粒（鉄分）を含む褐色土まじり砂
29　褐色細砂
30　7に同じ
31　褐色細砂
32　淡黄色細砂粒を含む褐色細砂
33　にぶい黄褐色細砂
34　暗褐色細砂
35　褐色土まじり砂
36　にぶい黄褐色砂
37　黄褐色土まじり細砂に赤褐色鉄分を多く含む
38　黒色鉄分ブロックを多く含むにぶい黄色細砂
39　36に灰色粘土粒を少量含む
40　39に黒色鉄分ブロック含む
41　明褐色土まじり砂
42　黒色鉄分粒を少量含む暗褐色粗砂まじり細砂
43　黄褐色細砂
44　43に黒色鉄分多く含む
45　44に淡黄色細砂粒含む
46　淡黄色粘土粒を含むにぶい黄色細砂
47　オリーブ褐色粗砂まじり細砂
48　黄褐色細砂
49　黄褐色細砂
50　褐色細砂
51　淡黄色粘土粒を含む黄褐色細砂
52　明黄褐色粗砂まじり細砂
53　明褐色細砂
54　褐色土まじり砂
55　黄褐色細砂
56　黄橙色砂ブロックを含む黄褐色土まじり砂
57　淡黄色細砂＋にぶい黄褐色細砂
58　57より淡黄色細砂少ない
59　淡黄色粘土を含むにぶい赤褐色土まじり砂
60　暗赤褐色土まじり砂
61　赤褐色粗砂まじり細砂
62　黒色粒（鉄分）を少量含む褐色粗砂まじり細砂
63　淡黄色細砂ブロックを多く含む明黄褐色細砂
64　黒色鉄分ブロックを多く含む明黄褐色細砂
65　赤褐色鉄分粒を多く含む明黄褐色細砂
66　赤褐色鉄分粒を少量含むにぶい黄橙色細砂
67　赤褐色鉄分粒を多く含むにぶい黄橙色細砂
68　66・67より鉄分多くやや暗い
69　黒色鉄分ブロック
70　灰黄褐色細砂
71　浅黄色細砂に黄橙色粘土ブロック・
黒色鉄分ブロック少量まじる
72　炭化物を多く含む褐色土まじり砂
73　炭化物・淡黄色細砂粒を少量含むにぶい黄褐色細砂
74　炭化物を多く含むにぶい黄橙色細砂
75　淡黄色細砂ブロックを含む褐色細砂
76　75に炭化物を多く含む
77　76より淡黄色細砂ブロック多く含む
78　77より淡黄色細砂ブロックさらに多く含む
79　鉄分ブロック＋淡黄色細砂＋明黄褐色細砂
80　黒色鉄分粒を含む褐色粗砂
81　黒色鉄分粒
82　浅黄色粗砂

Aはチップ集積層



2区調査区北壁

1　客土
2　暗赤褐色土まじり細砂
3　攪乱
4　黒褐色ブロックを含む暗赤褐色土まじり細砂
5　淡黄色細砂まじり明赤褐色細砂
6　淡黄色砂
7　明赤褐色細砂
8　暗赤褐色細砂
9　7より暗い
10　淡黄色細砂を含む明赤褐色細砂
11　明赤褐色細砂
12　淡黄色細砂
13　褐色細砂
14　暗褐色砂まじり土（製塩土器やや多い）
15　14よりやや灰色（製塩土器少量）
16　褐色土まじり砂（弥生土器やや多い）
17　暗褐色土まじり砂（弥生土器少量）
18　にぶい黄橙色土まじり砂（ほとんど遺物を含まない）
19　黄褐色土まじり砂（ほとんど遺物を含まない）
20　暗褐色土まじり砂に礫多く含む（製塩土器包含）
21　にぶい黄褐色細砂まじり粗砂に礫多く含む（弥生土器包含）

0　1m

図7　調査区土層断面2（1/40）

Ⅲ層（１層）　暗褐色～暗赤褐色砂混じり土（30～70㎝）
Ⅳ層（２層）　暗褐色砂混じり土。礫層。
Ⅴ層（３～５層）　厚さ５㎝前後の細砂層数層から成る砂層で、全体で20㎝ほどの厚さを成す。下部には礫を若干含んでいる。弥生時代の遺物を含んでいる。
Ⅵ層（６～60層）１～５㎝の細かい風成砂層。ただし北側は次第にやや汚れて乱れた砂層になっている。縄文時代後期初頭の包含層。37～47層はⅥ層と同様な砂層と思われるが、不規則な堆積をした砂層である。北側ほど乱れがひどく、鉄分を多く含んでいる。
Ⅶ層（62～68層）厚さ40㎝前後の黄褐色から褐色の細砂。炭化物・鉄分を含んでいる。縄文時代中期の遺物包含層である。　65～68層の北側の土層は、Ⅵ層と同様に乱れがひどい。
Ⅷ層（72～78層）厚さ40㎝前後の浅黄色から赤褐色の細砂層。若干土を含む。縄文時代前期～中期の遺物包含層。
Ⅸ層（69～71・79～82層）厚さ30㎝前後の黄褐色の粗砂を主とする層。鉄分が多く、黒化・赤化している部分が多い。Ａ～Ｃ４区土層より暗い層が多い。縄文時代前期の遺物包含層。
Ｘ層　地山　赤褐色の粘質土。

ＳＤ01の南側の調査区東壁南端部（図６下）は上部のみの土層断面である。一番下の層は古墳時代初期の製塩土器包含層である。１～10までは土を含んだ土層であるが、他はほぼすべて風成の砂層である。古墳時代土器などの細片以外は遺物を含んでいないため時期的には不明であるが、少なくとも古墳時代初期以降ＳＤ01築造以前である。

次にⅡ区の調査区北壁（図７下）を見る。

１層　表土　約30㎝
２～13層　淡黄色～赤褐色の砂層。ほとんど遺物を含まない。杭が４層から８層にかけて打ち込まれている。ＳＤ01築造以前に堆積したものと思われる。上部に古代の遺物を少量含む。
14層　暗褐色砂混じり土層。製塩土器を含んでいる。
15層　14に近い。製塩土器を少量含む。
20層　灰色気味の褐色土混じり砂層で、礫を多く含む。製塩土器を包含している。
15～17層　褐色の土混じり砂層。弥生土器を少量含んでいる。

16・17層は他の堆積と異なり、無遺物層である18・19層を切り込むように入っているが、遺構ではない。

21層　にぶい黄褐色細砂まじり粗砂層で、礫を含んでいる。弥生土器を少量包含している。

上の２層は弥生土器を少量含んでいるが、弥生時代の純包含層かどうかはわからない。

18・19層　黄褐色から黄橙色の少量の土を混じる砂層で、遺物を含まない。弥生時代（あるいは古墳時代も）の遺構面と考えられる。

地山は他の地点と同じ赤褐色粘質土であるが、このすぐ北側で大きく落ち込むのを試掘トレンチで確認している。その部分には黒っぽい土混じり砂層から少量の製塩土器などの遺物が出土するが、さらに先に行くと無遺物の風成砂層だけとなる。

地山である赤褐色粘質土は今山からの崩落土壌で、北西方向から南東方向へと崩落している。その下は２区を掘り下げた結果、地山の下１ｍ前後で花崗岩岩盤を確認した。

調査区の南北方向を通した土層断面をとれなかったため、風成砂層や縄文時代包含層などの北限を図示できなかったが、風成砂層は概ね６区まで、縄文時代包含層は９区までである。風成砂層が切れた７区から先の包含層は土と砂の混合土である。

3　古代の遺構と遺物

⑴　遺構と包含層

調査区内では古代・中世の時の表土面（遺構面）は、すでにほとんどを削平されていた。調査区北半と南東隅のごく一部で、古墳時代の包含層の上に堆積する砂層内にごく少量の該期の土器を含んでおり、この砂層が該期以前の近い時期にたまった砂層と考えられる。本来は前述のとおり、該期の表土面は検出面より高かったものと思われる。ただし調査区北端近くで見つかった木製杭が該期のものであれば、削平されているのは１m以下と考えられる。これについては後述する。 検出した遺構は、溝状遺構（ＳＤ01）１条である。

ＳＤ01（図９・10）

概要

溝は調査区南端近くから始まり、北西（Ｎ－38°－Ｗ）に向けて掘削されている。そのまま延長すると神社参道付近に延びる。溝の掘削面はおそらく古墳時代以降に溜まった砂丘面と思われる。検出部分の溝の長さは約21.2mである。溝の南側約８mには壁に石を積んで護岸としている。この石を積んだ護岸は、溝の基底面が砂層である部分に限られている。これは当遺跡の地山である今山の崩落土が北西から南東に傾斜しており、溝の南東側では地山が深く、その上に堆積している砂層までしか溝の基底面が及んでいないため、壁面の崩落を防ぐ手段として石を積んでいるわけであり、粘質土からなる地山面部分では崩落の危険がないため、石を積んでいないと考えられる。溝の底には２ヵ所の削り出しの土手状凸部（以下、「段」と称する）が存在する。段は溝の床面幅一杯に造られ、床面を削りだして造っていることから、築造当初から企画されているものである。なお南側の段の南側4.5m付近の溝中央部に径約1.5mの現代の井戸が１基ある。

南側の段

南側の段（以後「南段」）は溝の底南端部からの距離10.3mを測る位置に築かれている。段の南辺は削りすぎてしまったが、本来は直線である。北辺は中央部分が抉れている。これは大潮満潮時等に水が入ってきたためかと思われる。段の最大幅約1.1mを測る。段の北側と南側で段の高さ（溝の深さ）が異なり、段の北側の高さ65cm、南側の高さ45cmを測る。段の上には杭を打ち込んだと考えられる小ピットがあわせて10基認められる。小ピットの径は10～20cm、深さ10～25cmを測る。ピットに規則的な配列は認められない。

写真１　ＳＤ01（南から）

写真２　ＳＤ01南側小口部分

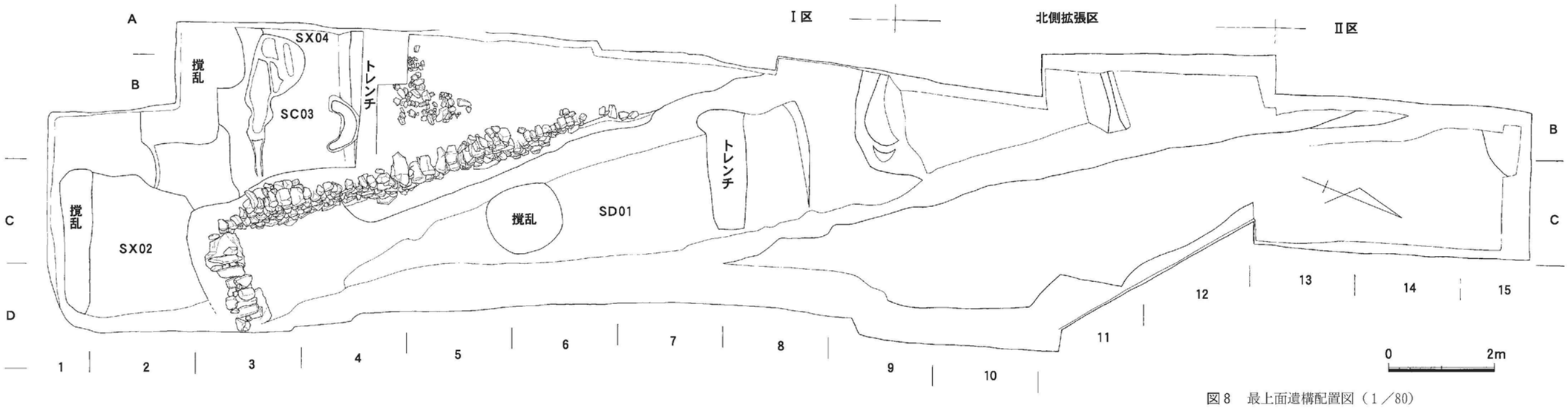


図8　最上面遺構配置図（1／80）

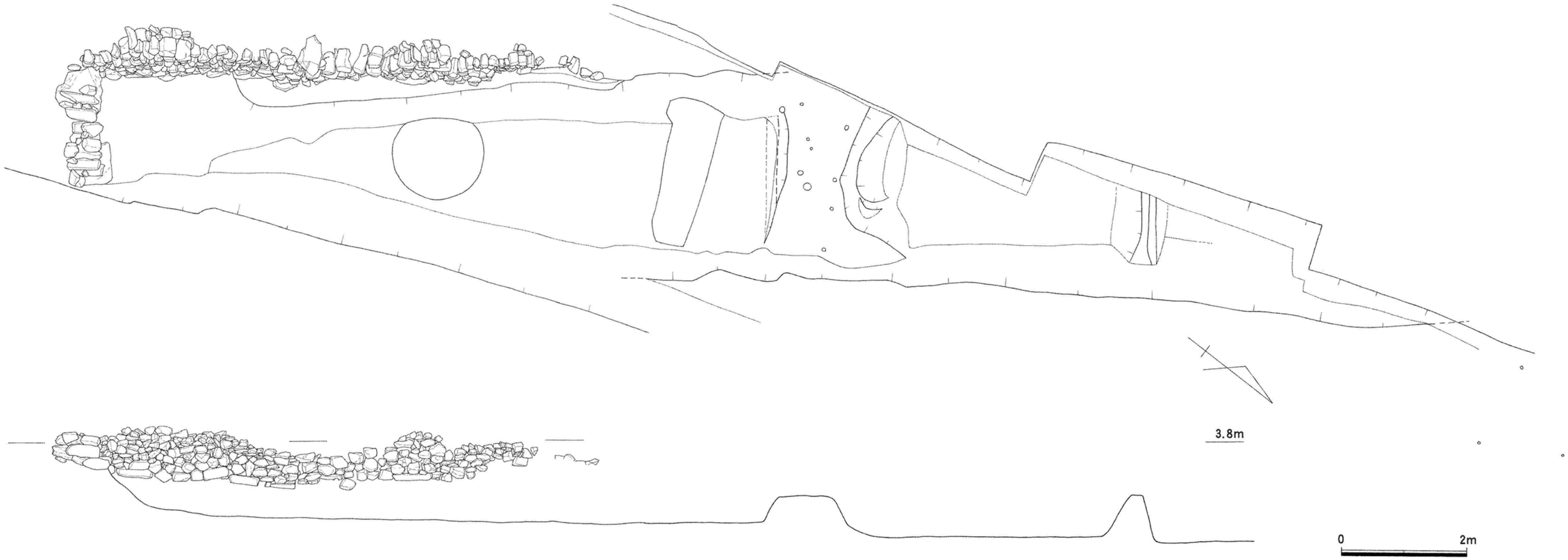
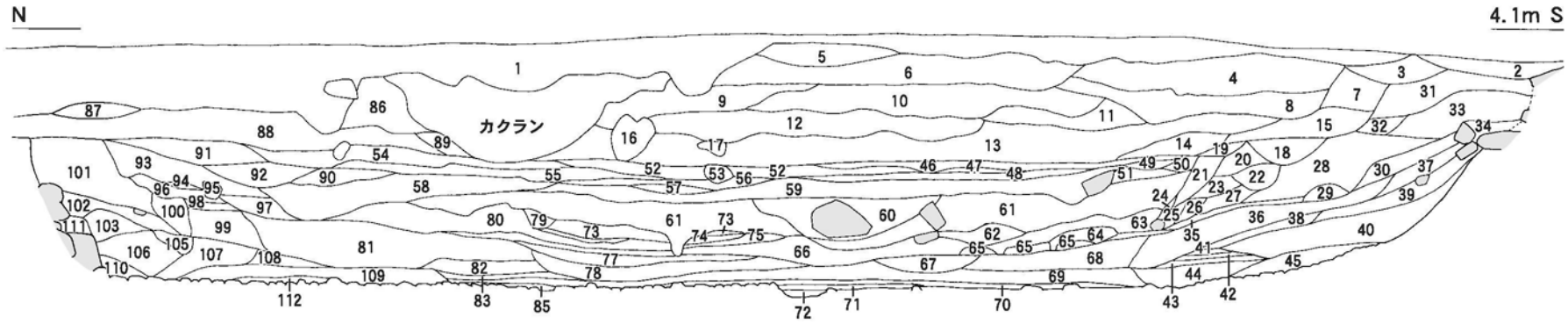
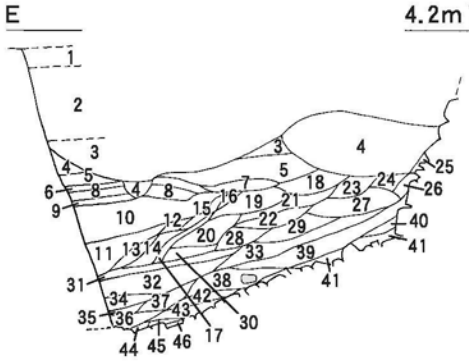


図9　ＳＤ01実測図（1／60）



調査区東壁

1 表土（カクラン土）
2 褐色土まじり砂
3 2に白砂ブロック含む
4 にぶい褐色土まじり砂
5 にぶい黄褐色土まじり砂
6 5に白砂ブロック含む
7 3より明るい
8 7より暗い
9 褐色土まじり砂　やや土が多い
10 黄褐色土まじり砂に白砂ブロック入る
11 10より暗い
12 10より暗く白砂ブロック多い
13 褐色土まじり砂白砂ブロック入る
14 13より白砂ブロック多い
15 暗褐色土まじり砂白砂ブロック多い
16 黄褐色土まじり砂に橙色ブロック入る
17 オリーブ灰土まじり砂に橙色が縞状に入る
18 褐色土まじり砂（白砂ほとんど含まない）
19 〃　（白砂粒少量含む）
20 18よりやや明るい
21 明褐色土まじり砂（マンガン多い）
22 赤褐色土まじり砂（マンガン多い）
23 暗赤褐色土まじり砂（マンガン多い）
24 明赤褐色土まじり砂（マンガン）
25 橙色土まじり砂（マンガン含む）
26 明褐色土まじり砂に黄白色砂粒（マンガン多い）
27 褐色土まじり砂＋黄白色砂（マンガン多い）
28 27より黄白砂少ない（マンガン多い）
29 浅黄橙色細砂
30 浅黄橙色細砂に明赤褐色砂含む（マンガン含む）
31 褐色細砂
32 赤褐色細砂
33 にぶい黄橙色細砂に褐色細砂含む
34 褐色土まじり砂
35 褐色粘質土
36 赤褐色まじり砂に淡黄色砂含む（マンガン多い）
37 黄37より淡黄色砂少ない（マンガン）
38 赤色まじり砂（マンガン）
39 38に黒色土まじり砂縞状に数多く含む
40 38に黒色土まじり砂ブロック含む
41 明褐色粗砂（マンガン）
42 淡黄色細砂
43 明褐色粗砂
44 褐色細砂
45 赤褐色細砂
46 橙色砂まじり土に灰オリーブ縞状にはいる（マンガン）
47 灰オリーブ砂まじり土
48 46より灰オリーブ多い（マンガン）
49 赤褐色砂まじり土（マンガン）
50 オリーブ褐色砂まじり土（マンガン）
51 49にオリーブ褐色土まじる
52 46より灰オリーブ少ない（マンガン）
53 灰オリーブ褐色砂まじり土に橙色ブロック入る
54 褐色砂まじり土（マンガン）
55 褐色砂まじり土に灰オリーブブロックまじる（マンガン）
56 橙色砂まじり土（マンガン）
57 灰色砂まじり土
58 灰色土まじり粘質土にマンガン粒少量含む
59 暗灰黄色砂まじり粘質土にマンガン粒含む
60 灰色粘質土にマンガン粒多く含む
61 オリーブ灰色砂まじり粘質土にマンガン粒多く含む
62 灰色粘質土にマンガン粒多く含む
63 暗オリーブ土まじり土
64 黄色土まじり砂に灰色粘土ブロック含む
65 灰色粘質土＋淡黄色粘質土
66 65＋黄色砂
67 灰白色細砂＋橙色細砂に少量の灰色粘質土含む
68 淡黄色細砂に橙色細砂　褐色細砂縞状に含む
69 淡黄色粗砂と橙色細砂　灰色細砂の互層
70 オリーブ黄色粘土
71 暗オリーブ細砂
72 灰オリーブ細砂
73 61よりマンガン粒多い
74 灰オリーブ粘土
75 73に灰オリーブ粘土ブロックまじる（マンガン）
76 灰オリーブ粘土
77 橙色細砂　黄色細砂　黄橙色細砂の互層
78 淡黄色粗砂に橙色細砂縞状に入る
79 灰オリーブ粘土＋灰オリーブ土まじり砂にマンガン粒
80 灰オリーブ砂まじり土に淡黄色粘土ブロック
81 灰白色細砂に橙色細灰　淡黄色細砂灰
82 淡黄色粗砂
83 灰白色細砂
84 灰白粘土
85 灰白色細砂
86 褐色土まじる
87 灰オリーブ砂まじり土
88 86より明るい
89 87に白色砂粒含む
90 88よりさらに明るい
91 褐色砂まじり土に橙色土ブロック含む
92 91に白色砂粒含む
93 明赤褐色土まじり砂に白色砂粒含む
94 極暗赤褐色粘土
95 褐色土まじり砂＋白色砂
96 93より白色砂多い
97 93に94含む
98 95＋橙色ブロック
99 橙色土まじり砂＋黄色細砂
100 99より黄色細砂多い
101 淡黄色土まじり砂に褐色土ブロック多く入る
102 褐色砂まじり土に淡黄色ブロック入る
103 褐色土まじり砂＋黄色細砂
104 オリーブ灰色細砂に褐色土少量入る
105 黄色細砂にマンガン多く入る
106 にぶい黄褐色細砂
107 明黄褐色細砂（マンガン）
108 101より明るい
109 淡黄色細砂
110 黄褐色細砂
111 褐色砂まじり土
112 粗砂



A～C4区中央ベルト

1 表土（客土）
2 日色細砂をブロック状に含む明赤褐色土まじり細砂
3 暗赤褐色土まじり土まじり細砂
4 各種混合土（カクラン）
5 褐色土まじり細砂
6 黄褐色土まじり細砂（マンガン）
7 黄灰色土まじり砂
8 明褐色土まじり砂（マンガン）とオリーブ褐色土まじり砂の互層
9 明褐色土まじり砂（マンガン）
10 黄灰色土まじり砂に明黄褐色土まじり砂が粒状に入る
11 10より明黄褐色まじり砂かなり多く黄白色砂が少量まじる
12 11より明黄褐色土まじり砂さらに多い
13 橙色土まじり細砂（マンガン）
14 11より黄白色砂が多く入る（黄灰色少ない）
15 黄灰色土まじり砂に少量の黄白色砂含む
16 黄灰色＋明黄褐色土まじり砂
17 明褐色土まじり砂（マンガン）
18 褐色土まじり砂に黄白色砂少量含む
19 18より黄白色砂多い
20 黄色細砂に明赤褐色土まじり細砂含む
21 19よりさらに黄白色砂多い
22 21より黄白色砂多い（黄白色砂の方が多い）
23 明赤褐色土まじり細砂
24 23と黄白色細砂含む
25 暗灰黄色土まじり細砂
26 黄褐色土まじり細砂
27 明赤褐色土まじり細砂＋黄白色細砂
28 明赤褐色土まじり細砂
29 27と28の中間
30 明黄褐色細砂
31 にぶい赤褐色粘質土（粘土）
32 明黄褐色やや粗砂（ヨコに縞状）
33 橙色土まじり細砂（　〃　）
34 黄白色細砂粒＋オリーブ褐色細砂粒
35 34よりオリーブ褐色多い
36 明黄褐色細砂と灰白色細砂の互層
37 にぶい黄橙色粗砂
38 37と灰白色細砂の互層
39 にぶい赤褐色土まじり細砂に黒色細砂ブロック入る
40 黒色土まじり細砂
41 明赤褐色土まじり細砂
42 緑灰色細砂
43 にぶい黄褐色細砂
44 極暗褐色細砂（マンガン）
45 灰色粘質土
46 暗褐色細砂

0　1m

図10　ＳＤ01土層断面図（1/40）

南段以南の床面

南段より南側の溝底面には玄武岩剥片や原石が敷かれたように広がっている。段の北側にはない。もともと弥生時代の石斧製作を始めた時に作られた礫層が溝の南端部分に広がっており、そのレベルが溝の底のレベルとほぼ重なっているため、この南端部分ではこの礫層をそのまま利用していると考えられるが、南端部を北側に行くと、溝底のレベルが礫層より低くなるにもかかわらず、量は少なくなるが溝底に礫片がある（ただし大部分は現代の井戸やトレンチのためなくなっている）ことから、意識的に溝底に玄武岩のチップや礫を敷いているものと考えられる。

北側の段

北側の段（以後「北段」）は南段の中央から約5.1mの位置に築かれている。北段は大半が調査区外にある。南側と構造が異なり、南段が上部を平坦に作っているのに対して、北段は断面が三角形に近く、高さが高い。段の基底面の幅約60cm、上部の幅10～35cm、段の南側の高さ45cm、北側の高さ53cmを測る。検出した範囲内ではピット等は検出されていない。

南段以南の堆積土壌

南段から溝南端部までの堆積土は溝底に玄武岩のチップや礫があり、その上に粘土や細砂層がほぼ水平堆積している。粗砂が部分的に認められる。これらの砂層は20～30cmの厚さがあり、古代中後期の遺物を包含する。それらの上に厚さ40cm前後のマンガンを多く含んだ灰色粘質土が堆積している。この灰色粘質土は南段の北側にも堆積が認められ、中世初期頃の遺物を包含している。すでに溝を廃棄した後の堆積土であろう。珪素分析の結果では南段以南には海水がほとんど入っていない。

南段以北の堆積土壌

南段以北は土層断面用のベルトが途中で崩壊したため、結果として土層断面図がとれなかった。南段以南にあった灰色粘質土の下には、厚さ20cm前後の青灰色の粘質土が溜まり、木葉や竹・木などが遺存している。溝放棄後早い時期にたまった層と考えられる。その下は厚さ20～30cmの砂層があり、木簡の削りくずなどの自然遺物が溜まっていた。溝の使用中にたまった層であろう。砂層は細砂と粗砂の両方があった。最下層には粘土と粗砂の薄い層がある。

南段以南に築かれた石積み

南段の南辺から南へ2.7mのところから南端までの西壁には石が葺かれている。石積みは溝南端から約6.5mの地点までは最下端の石（基礎石）のレベルを合わせているが、そこから北側へ徐々に基礎石のレベルをあげ、南段から2.7mの地点で石積みは無くなり素掘りの溝となる。次第にあがっている部分の基礎石は、前述の今山崩落土の上に乗るように置かれており、基礎石のレベルを合わせている部

写真３　ＳＤ01南側段

写真４　ＳＤ01北側段

分は今山崩落土の上にたまった縄文時代後期の砂丘層を掘りこんでいるため、溝の崩壊を防ぐ目的で石積みを施していることが解る。そのため基礎石のレベルを合わせている部分は、基礎石が大きく平たいものをしっかり据えているが、次第にあがっている部分は基礎石と上の石積みに大きな差はない。使用している石材は大部分が玄武岩であるが、特に基礎石の一部に堆積岩を使っている。

基礎石の下の大部分は弥生時代前期の礫層で、故意か偶然か礫層をうまく利用している。石積みは溝の堀方に合わせて壁に貼り付けるように積んでいる。溝東壁の南側は隣地に入っているため調査できなかったが、ピンポールでつついた限りでは、表土直下で石にあたり、西壁と同様に石積みを施しているものと考えられる。

溝の復元規模

溝の現況の幅は、南側段付近で上幅が約3.3m、底幅が2.1mを測り、上部が削平されていることから、本来の上幅は４mを超えるであろう。溝の東壁は直線ではなく、北段のやや南あたりから緩やかに外に広がっている。溝の深さは溝南端部で1.4m、南段北側で約1.65m、北段北側で約1.7mを測る。１m近くは削られている可能性があり、南段の南側で2.5m以上の深さになるだろうか。

この溝の機能について、Ｉで述べたように江戸時代までは調査区北側には湾があり、この湾は絵図を見る限り調査区よりだいぶ北になるが、平安時代にこの湾がまだ広かったとしたら、この溝はその湾奥部に向かっていることになる。また溝の底に凸部（段）が２ヵ所あり、段の北に行くほど溝が深くなり、南段の南側、つまり溝の奥までは海水がほとんど入っていない。南段にある杭状のピットは、板状の水門を留めるための杭であるならば、北からの海水の流入を防いでいたためとも考えられる。これらのことからこの溝はドックであると判断できる。このドックに入ることのできる船の大きさは、長さ10m以下で、幅と高さは溝が削平されているため、推定であるが、幅５m以下、甲板までの高さ３m以下である。

出土した遺物は溝に伴うものが、陶磁器・土師器・須恵器・瓦・木簡の削り片・自然遺物で、自然遺物を除くと小コンテナ１箱程度ある。その他に、古墳時代の製塩土器・土師器・須恵器、弥生時代の土器・石斧未製品・玄武岩チップなどが大量に出土した。このうち溝の開削時に近い遺物は図11－７の黒色土器である。この土器は上下逆さにして底に埋まり込むような状態で出土した。底部に孔があり祭祀的な可能性も考えられるが、孔は自然にあいたもので、完形ではないことから溝の使用初期に落ちたものであろう。また瓦が10点ほど出土しており、ドックの設営者を考える上で重要である。溝の上部では12世紀前後の陶磁器の細片が、また木簡が出土する砂層の上の青灰色粘土からは糸切り底の須恵器が出土しており、それ以前には溝の機能が停止していると考えられる。

写真５　ＳＤ01底土器出土状況

写真６　Ⅱ区ＳＤ01横の杭出土状況

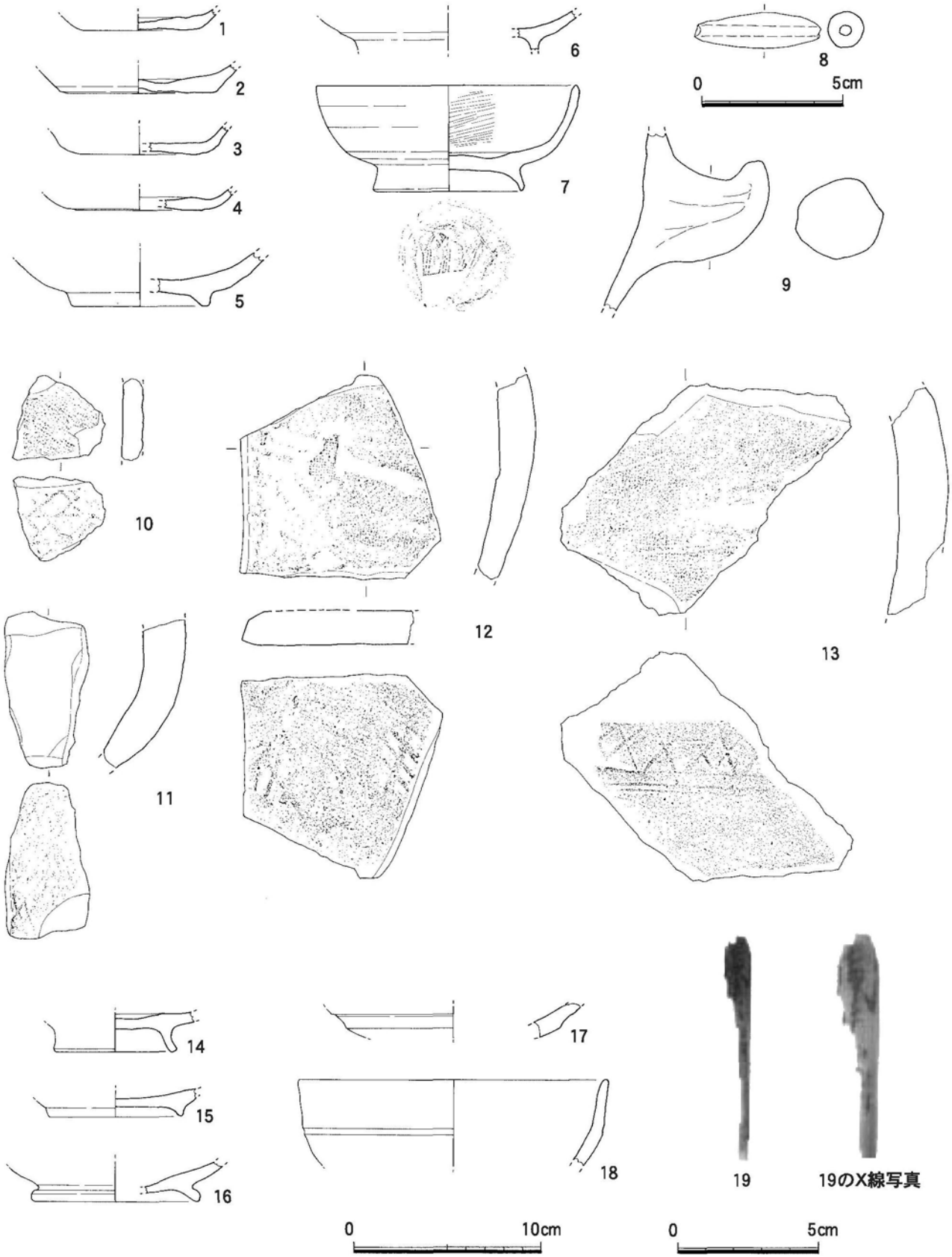


図11　ＳＤ01及び包含層出土古代遺物実測図（½、⅓）

⑵　ＳＤ01及び包含層出土古代遺物（図11）

溝の使用時の土器とそれ以降の時代の遺物及び溝以外から出土した該期の遺物を取り上げ、溝から出土した遺物の内、該期以前の時代の混入遺物についてはそれぞれの時代の項でまとめて記述する。

ＳＤ01から出土した古代・中世の遺物は総量で浅いコンテナ１箱である。多くは下層から出土したが、中層からは中世初期の陶磁器の細片が少量出土した。中世遺物は細片のため実測できなかったが、糸切り土師器皿や中世前半頃の青磁等が出土している。

１～４は無高台の土師器坏で、いずれも底部ヘラ切りである。１は下層出土で、復元底径約６㎝を測る。底部に板目痕が残る。体部外面はナデ、内面は指による荒いナデ調整である。２は下層出土で、復元底径約8.4㎝を測る。体部と底部の境は明瞭で、内面も丁寧な回転ヨコナデを施している。３は最下層出土で、復元底径約８㎝を測る。体部は両面ともヨコナデであるが、底部との境は荒いナデ調整で、底部との境は不明瞭である。４は下層出土で、復元底径約7.7㎝を測る。体部は両面ともヨコナデで仕上げている。５は高台坏で、最下層出土。復元高台径約７㎝を測る。全面ナデ仕上げである。

６・７はＡ類黒色土器である。黒色土器は土師器に比べて少なく、すべて高台坏と思われる。６は復元高台径約10㎝を測る。７は溝の底から出土した。溝底に径約20㎝のピットがあり、その中に上下を逆さまにした状態で入っていた。ただし完形品ではなく、全体の１／３程度を欠失している。体部は全体的に丸みを帯びているものの、上部はほぼ直線的である。口縁部は外反していない。高台はやや内よりに付き、高さ1.3㎝を測る。口径14㎝、器高5.7㎝、復元高台径約８㎝を測る。底部には２本ずつの短沈線３組からなるヘラ記号がある。８は土錘で長さ4.4㎝、最大径1.3㎝を測る。９は土師器の把手である。

10～13は瓦である。瓦は全部で10点出土した。１点が中層で出土した以外はすべて下層・最下層の出土である。10は平瓦片で、凸面は約１㎝幅の格子目叩き、凹面は布跡。11は丸瓦片で幅５～６㎜の菱形の格子目叩きで、凹面に布痕跡はない。12は平瓦片で、幅0.5～１㎝の菱形の格子目叩きをナデ消している。凹面はケズリが残っている。13は平瓦片で凸面には幅の大きな格子目叩きは一部にしかない。凹面にはケズリが残っている。胎土には２～４㎜大の石英粒・白色粒を少量含み、金雲母を含んでいるものもある。焼成は全般的にあまりよくない。

14～19は溝以外の北側拡張区とⅡ区包含層最上部白砂層から出土した遺物である。14～16は土師器の高台坏で、いずれも北側拡張区の製塩土器包含層の上にのっている白砂層から出土した。14は復元高台径約6.5㎝を測る。高台の高さは1.3㎝である。高台・体部ともにヨコナデで丁寧に作っている。高台端部は面を成している。15は復元高台径約７㎝を測る。高台端部は丸みを帯びている。16は復元高台径約９㎝を測る。高台は外側に飛び出し、端部は丸みを帯びている。17は黒色土器Ａ類の坏である。18は須恵器碗で、復元口径16.5㎝を測る。

木簡削り片と思われる物が数点出土した。19は唯一字が認められるものである。墨らしきものが確認できるのはもう１点あるが、字かどうかもわからない。19は削り片のため極めて薄く、取り上げと同時に反ってしまった。取り上げ後速やかに埋蔵文化財センターで赤外線写真を撮影したが、取り上げ時に判読した「南」以外の時は読めなかった。その後、調査者の管理の不適切さのためか次第に崩壊し、真空乾燥時には周囲が分離してしまった。また木簡に使われそうな板材も数点あるが、いずれも墨痕は認められない。

杭は３本出土し、いずれも杭の先端が白砂中にとどまっており、製塩土器の時期より新しいのは明白である。また溝の中からも杭が１本出土しており、前者はコナラ属アカガシ亜属、後者はツブラジイである。杭は径５㎝前後で、最長のもので長さ25㎝が遺存している。

4　古墳時代後期の遺構と遺物

(1)　遺構と包含層

該期の時期の遺構は調査区南西側で竪穴住居１軒（ＳＣ03）を検出したのみである。また住居竈の南側に不定形の溝状遺構（ＳＸ04）を検出し、古墳時代後期の遺物が出土したが、覆土から見て新しい時期のものと考えられ、出土遺物はＳＣ03に伴う可能性が高い。

該期の遺物包含層は、Ｉ区の北区ＳＤ01東岸周辺から北側拡張区に遺存する。これは何度も述べたように、東側が西側より低いために残存したものである。包含層は黒褐色砂混じり土で、表土・攪乱土の下にあり、厚さ５～10㎝前後であるが、古墳時代前期の包含層とは明確には分離できない。遺物量はさほど多くなく、須恵器・土師器などコンテナ１箱程度である。Ⅱ区でも須恵器は出土するが、量はかなり少ない。調査区内でもっとも低い地点である調査区南東端部分は、古墳時代前期の厚い包含層の上に白砂層が存在するが、同後期の遺物はごく少量しか出土しない。ただし、調査区南西端では表土及び表土直下の褐色砂まじり土層から該期の須恵器が比較的多く出土している。ここはＳＣ03の南側にあたっており、ＳＣ03の残りもしくは別の住居の可能性も考えられる。

竪穴住居ＳＣ03（図12）

調査区南側の西半、表土（攪乱土）直下層で検出した。東側をＳＤ01に切られ、西壁は調査区外にある。南壁は防空壕等に切られ、明確に検出できたのは北壁と竈である。柱穴も明確ではない。検出した北壁長は約2.6ｍで、壁高15㎝前後が遺存している。竈は明赤褐色粘土で築かれ、高さ約30㎝の本体と支脚と考えられる石が１点が遺存している。竈は壁の外に張り出るように築かれている。竈中央には焼土があり、その上と周りに炭化物が厚さ７㎝程堆積している。竈南側を中心に須恵器坏や甕の破片が出土した。

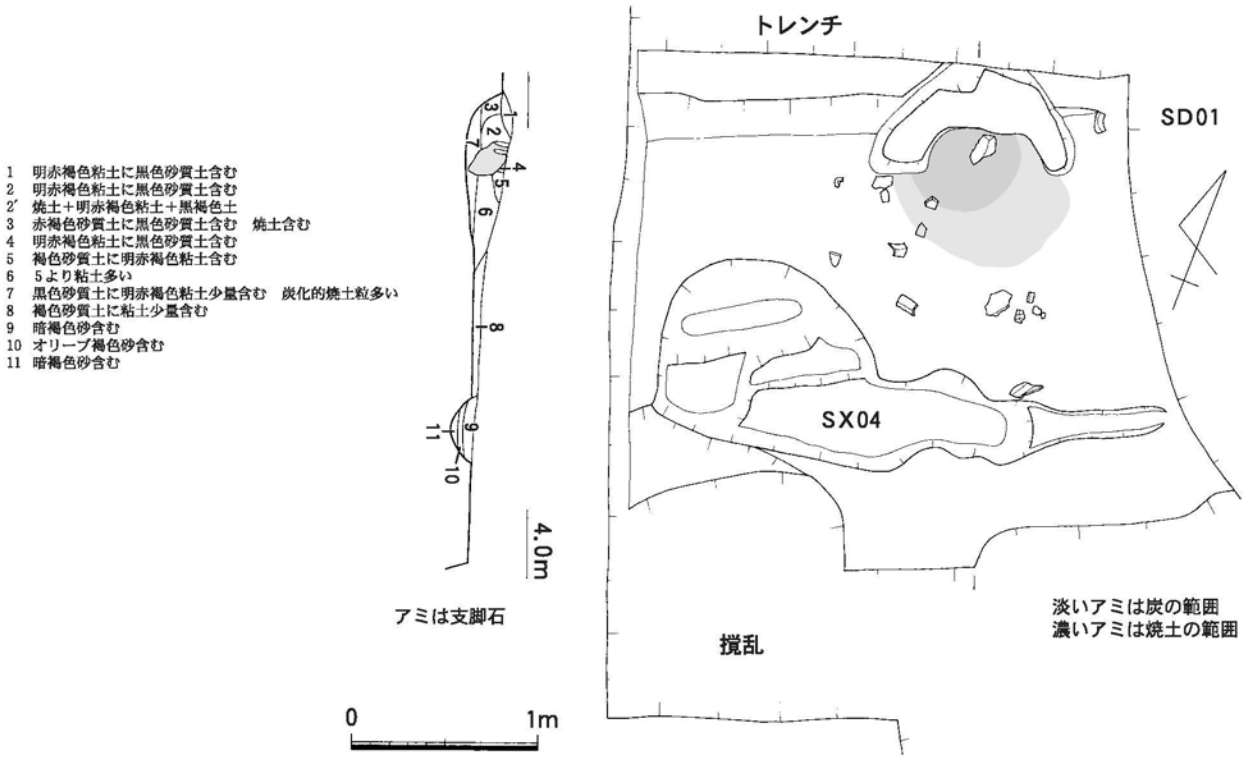


図12　ＳＣ03及びＳＸ04実測図（１／40）

写真７　ＳＣ03・ＳＸ04

写真８　ＳＣ03竈

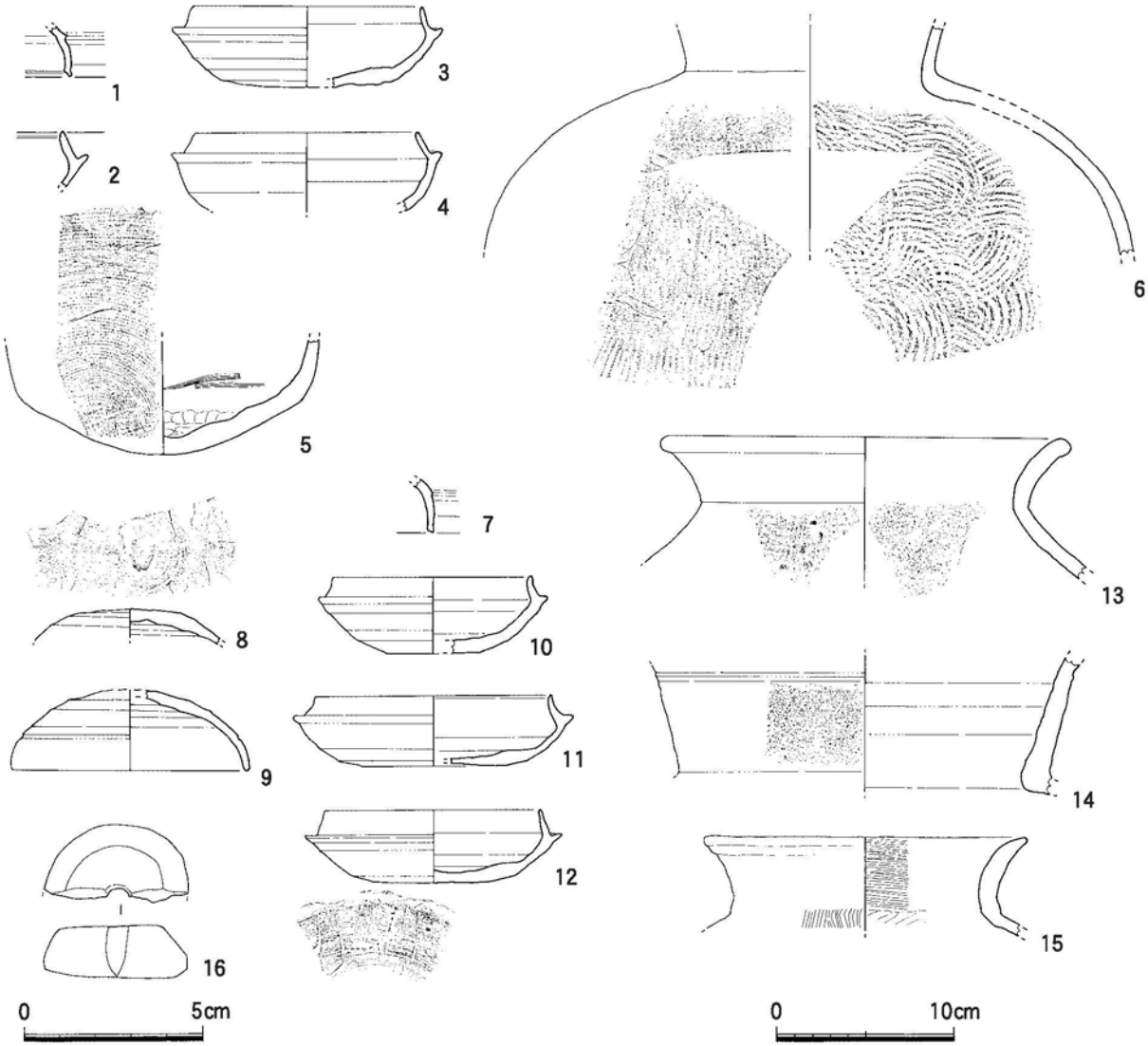


図13　ＳＣ03及び包含層出土古墳時代後期遺物実測図（¼、½）

⑵　出土遺物

出土遺物の総量は浅いコンテナ１箱半である。なお土師器の一部は次章に含めている。

ＳＣ03出土遺物（図13）

竈周辺から須恵器などが出土した。１は須恵器坏蓋の口縁部片で、口唇部は沈線上に面取りし、体部との境の段は明瞭である。２～４は須恵器坏身である。２は口唇部に沈線状に面取りする。３は復元口径12.8㎝を測るが、かなり歪んでいる。口唇部は丸みを帯びる。体部外面は回転ヘラ削り、内面下半は回転指ナデ、上半は回転ヨコナデである。４は復元口径12.5㎝を測る。口唇部は丸みを帯びる。体部は全体的に丸みを帯び、外面はヘラ削り、内面はヨコナデである。５は壷の底部か。外面はカキメ、内面は底部が指おさえ、胴部はヨコナデである。一見ハケ目状の痕跡が一部にあるが、ヨコナデの際の指の跡と思われる。６はＩ区表土出土であるが、出土日付からＳＣ03に伴う可能性が高いと思われる。外面に自然釉がかかっている。破片が小さいため図の傾きは不確かである。復元頸部径14㎝前後を測る。胴部内面は同心円当て具、外面は平行タタキの後一部をナデ消している。15は土師器の甕で、大きく外反する口縁部片である。復元口径約18㎝を測る。口縁部外面は横方向のハケメ、内面はヨコナデ、胴部は外面が縦方向のハケメ、内面はヘラケズリである。

包含層出土遺物（図13）

７は須恵器坏蓋でＩ区南側出土。体部と口縁部の境に段があり、口唇部沈線状を呈する。全面回転ヨコナデ調整。８も須恵器坏蓋。外面はヘラ削り、内面は指ナデである。１本線のヘラ記号がある。北側拡張区出土。９も須恵器坏蓋で、復元口径13.4㎝、器高約6.7㎝を測る。体部と口縁部の境に段はなく、口唇部は丸みを帯びる。表土出土。10～12は須恵器坏身で、10は北側拡張区出土。口唇部は丸みを帯び、器壁が厚い。底部外面は回転ヘラケズリ、体部外面は回転指ナデ。口縁部は回転ヨコナデ、体部内面は指ナデである。復元口径11.1㎝、器高4.3㎝を測る。11は南側拡張区出土である。受け部から下の外面はほぼ全面回転ヘラケズリで、内面も回転ヘラケズリの後なでている。復元口径12.2㎝、器高4.1㎝である。12はＩ区２層褐色土出土で、復元口径13.3㎝、器高3.95㎝を測る。体部は両面ともほぼ全面回転ヘラケズリである。体部に縦方向に７本の沈線を施している。13はＩ区２層褐色土出土の甕で、胴部外面と口縁部内面には自然釉が厚く付着する。胴部は格子目タタキ、内面胴部は同心当て具の後、上部はナデ消している。口縁部両面から胴部内面上部は回転ヨコナデ。復元口径23㎝を測る。14も甕で、外面はヨコナデ後ナデ調整で、上部に櫛状施文具による羽状文を施している。内面には自然釉が厚く付着している。ナデで仕上げる。推定の口径は15㎝前後を測る。16は滑石製紡錘車。径４㎝、孔径0.6㎝を測る。

5　古墳時代前期の遺構と遺物

(1)　遺構と包含層

廃棄を除くこの時期の明確な遺構は調査区南西隅近くで検出した焼土のみである。遺物は製塩土器を中心に大量に出土したが、いずれも廃棄された遺物である。廃棄された遺物は、土器の他にも食料残滓や製塩時の灰なども含まれている。該期の遺物はすでに削平されていた調査区南西隅（ＳＣ03南側）を除いてほぼ調査区全域から出土したが、出土地点によって若干の遺物の相違がある。以下、地点毎に述べる。

①Ｉ区南東端（ＳＤ01南側）

この地区は調査区内で最も低いため、調査区南東隅近くで厚さ約60㎝の厚い包含層が残っている。該期の基盤面は、東側の低い部分については南東に傾斜する弥生時代の礫層で、西側の高い方は弥生時代の包含層である。礫層の標高はもっとも低い調査区東側で2.8ｍを測る。他の地点では弥生時代礫層の上に弥生時代包含層があるが、この地点のみは礫層に直接古墳時代包含層が接している。もともと弥生時代包含層がなかったのか、古墳時代に除去したのかはわからない。この礫層の上、調査区南東隅に長さ約３ｍ、最大幅約1.1ｍ、高さ50㎝の灰の高まりがあった。灰の高まりは厚さ５～10㎝の灰層の互層になっており、純灰層・混土（砂）灰層、混炭灰層、混灰土（砂）層などからなるが、高まり中心部の大半は純灰層と混炭灰層で次々と廃棄していった灰が拡散し、周囲に灰混じり土（砂）が堆積している状況を示している（図14下）。

灰の底面の周囲には製塩土器が比較的少なく、高坏などの土師器が数点散乱する。製塩土器は灰の底面が少し埋もれ始めたあたりから出土し、灰の上面には黒褐色砂混じり土の中に粉々に割れた細片が大量に出土する。従って、まず製塩の時に大量に出る灰を捨てて、その後に塩を取り出して粉々に割れた製塩土器を捨てているものと思われる。製塩土器はこの地点からコンテナ15箱、完存の底部だけで58点、総個体数で概ね150点前後の個体が出土している。大量の製塩土器破片の中には古式土師器片や食料残滓である獣骨片なども入っている。製塩土器群の発見当初は、分布範囲が方形を呈していたため、住居内に廃棄したものと考えて掘り下げていたが（当初ＳＣ02、後にＳＸ02の名称を付した）、東側はその後に堆積した白砂層が上に堆積し、方形に見えただけであることが判明した。製塩土器群は灰の固まりを東限に分布している。

写真９　ＳＸ02

写真10　ＳＸ02下灰層

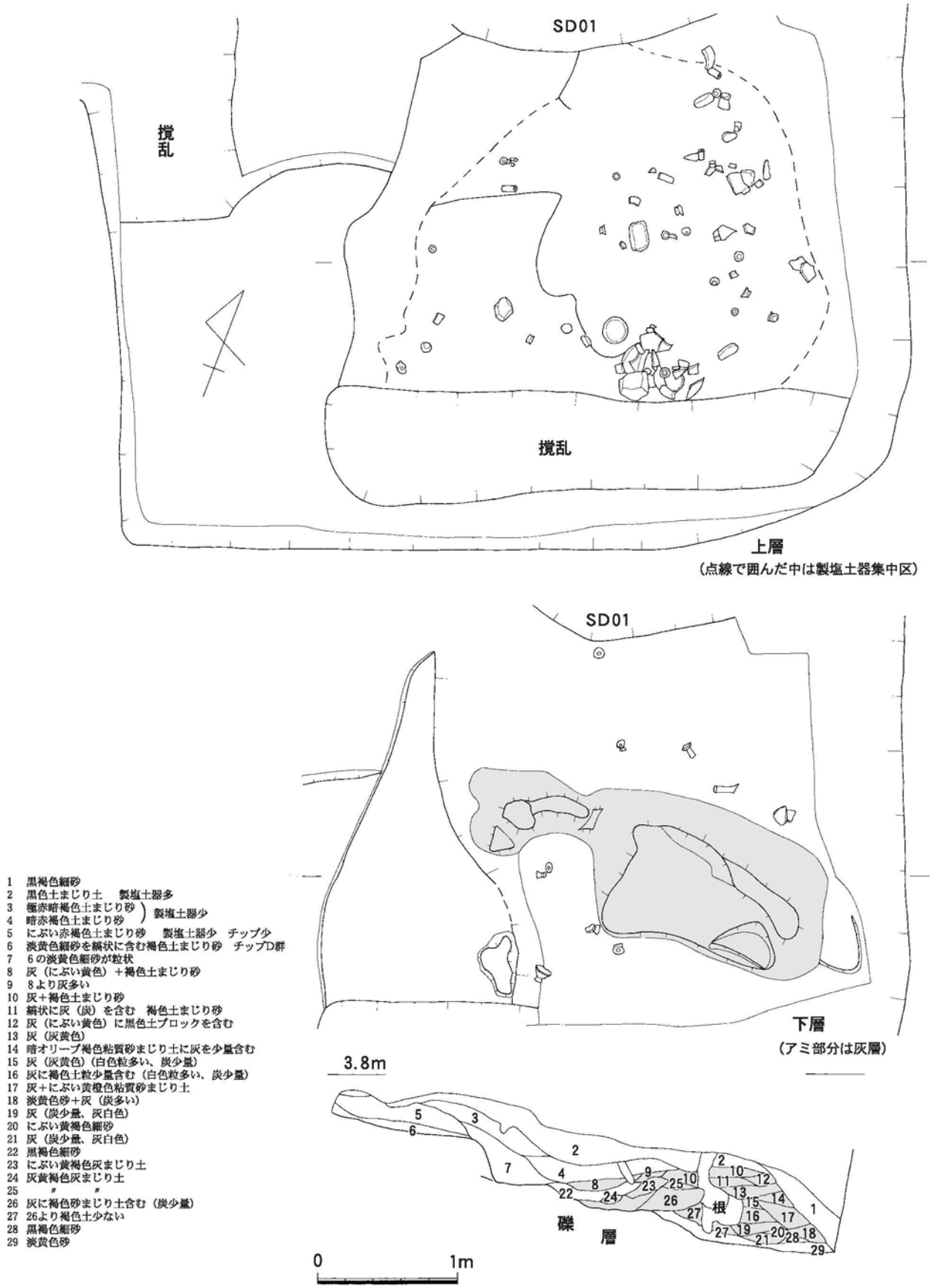


図14　調査区南端（ＳＸ02）上層遺物出土状況及び下層灰層検出状況（１／40）

図15　北側拡張区古墳時代前期遺物出土状況（1／30）

灰の山の西側は弥生時代のチップをわずかに混じえる砂層がこの時期の基盤となり、その基盤面が幅約20㎝、長さ約1.9ｍに渡って赤化している。赤化している部分の厚さは数㎝程度である。被熱した部分と考えられ、製塩との関係が考えられるが、西側が防空壕と考えられる大型攪乱によって破壊されているため、詳細は不明であった。

②Ⅰ区ＳＤ01東岸

Ⅰ区北区から北側拡張区にかけてのＳＤ01東岸側である。ここでは薄い後期の層のすぐ下に大量の細片の製塩土器と古墳時代前期の遺物を含む層があった。製塩土器と土師器の遺物量は比較的多かったが、あまり大きな破片は含んでおらず、小片・細片が多かった。また古墳時代前期の遺物は礫層にまで入っているが、礫層は他地点とは異なり、小型の礫が土まじりの砂の中にはいっている状況である。礫まじり土層と呼んだ方が正しい。

③Ⅰ区北側拡張区・Ⅱ区

北側拡張区では表土の下は古代遺物を少量含む白砂層で、その下は南側（１区側）の一部に古墳時代後期と該期の遺物を多く含む遺物包含層があった。該期包含層の厚さは約20㎝で、包含層の下は調査区西側では礫を含む今山崩落土である。崩落土は東に向かって傾斜しているため、東半分では崩落土と包含層の間に白砂層があったが、遺物は入っていなかった。

包含層は製塩土器の細片群を主体とするが、その合間に古式土師器のいくつかの群がある。まずＤ－11区に蛸壺の固まりがある。蛸壺は一部破損しているものもあるが、完形品がほとんどで、概ね80×80㎝の範囲内に上面に23個あり、それらは同じレベルで揃っている。さらにその下深さ30㎝の間に点々と８つの蛸壺が入っている。砂地で遺物が沈んだり移動することも考えられるので、上下計31個

写真11　Ｃ－10区土師器出土状況

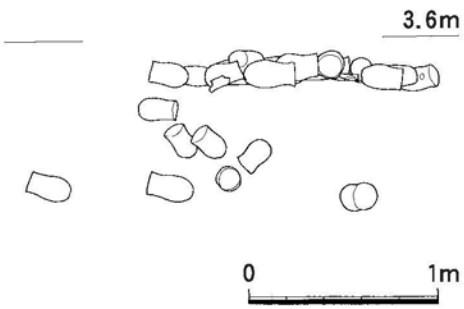


図16　Ｃ－11区蛸壺出土状況（１／40）

写真12　Ｃ－11区出土蛸壺出土状況

のうちの大半が蛸壺が結んだ状態であったと思われる。

蛸壺の南側のＣ－11区から10区にかけて、土師器小型丸底壷の完形品や高坏・甕などの大型の破片が点々と見られる（Ｃ10・11区土器群）。小型の壷は完形品であるが、他は損壊部分が多い。Ｂ－12区からＣ－12区にかけて、製塩土器の多くの破片の上部から高坏や甕などがまとまって出土した（Ｂ・Ｃ12区土器群）。この中には製塩土器に似た土器の完形品がある。ただし全体が通常の製塩土器に比べ寸詰まりのような形態で、細片になった製塩土器のような２次焼成は受けていない。この群には甕や壷が多く含まれ、絵画土器も１点出土した。この他にも群はなさないものの、多くの土師器が出土している。

製塩土器は調査区中央から西側に分布するが、特にＣ11区の土師器群の下は混土土器層のような状況を呈している。調査区東側の斜面にはほとんど認められない。

Ⅱ区でも該期の製塩土器・土師器は数多く出土する。その多くは南側半分での出土で、大型の破片も多い。また弥生時代後期後半の袋状口縁土器に近いものがⅡ区のみで出土しているが、破片は小さい。Ⅱ区北半は、少数の大型破片を除くと小さな破片ばかりで出土量も少ない。製塩土器細片群は南半では北側拡張区と同様に固まりに近い状態で出土するが、調査区北端近くでは土師器なども含めて遺物量が大幅に減少する。

⑵　出土遺物

総量で30箱近い量が出土した。土師器・渡来系土器、蛸壺、製塩土器、土製品に大別し、土師器・渡来系土器については地点毎に説明する。また土師器・渡来系土器については観察表をつけ、各地点の状況説明と主な遺物の説明を行い、個別の詳細な説明は割愛する。なおここでは古墳時代前期の遺物として項を立てているが、弥生時代後期後半及び古墳時代中期の遺物も含んでいる。

①ＳＸ02出土土器（図17・18）

灰層最下層の横の礫層上から見つかったもの、灰層の上の製塩土器集積層の中に入った土器、製塩土器集積層の上にたまった砂層から出土したものがある。一部に大きな破片があるが、相対的に小片・細片が多い。灰層横から出土したのは２と20だが、２は製塩土器集積層から出土したものと接合し、１・２・４～６はほぼ同一の色調、同一の調整でいくつかの個体にまとまる可能性がある。そのうち礫層から出土したのはごく一部の破片のみで、破片の落ち込みを考えた方がいいかもしれない。１は口縁部が外反する甕で、外面の調整は口縁部が縦方向のハケ目、胴部は斜方向のタタキ、内面は口縁部が横方向のハケ目、頸部は指とハケ目工具を用いたと思われるナデ、胴部はナデである。口唇部は沈線状に整形している。口径21㎝を測る。上部砂層から出土したのは14・21・32・33である。14は布留系の口縁部で、先端部を摘み出している。21は二重口縁壷で、内外面にミガキを施している。口縁部内面はヨコナデだが、ミガキによって波状文を描いている。32はＳＣ03と接合しているので本来はＳＣ03で報告するべきだが、この土器の破片の一部がＳＸ02を覆っている砂に含まれていることから、砂の時期を示す遺物としてここに掲載した。６世紀の土師器であろう。33は６世紀の土師器で、内面は当て具痕が確認できるが、外面は摩滅のため不明である。その他の土器は製塩土器集積層内から出土した。13は布留式土器で、口縁端はわずかに拡張して胴部に波状文を線刻している。21～23は大型壷胴部の突帯部で、16は鋸歯文に近い沈線を突帯に施している。23～25も突帯に刻みを施す。

②Ⅰ区包含層出土土器（図19）

ほとんどが弥生時代の層に混じって出土したものである。木の根や小さな撹乱などで本来の位置より下に潜ったものと思われるもので、従って小片が多い。ただし、南区出土のものの一部は本来の包

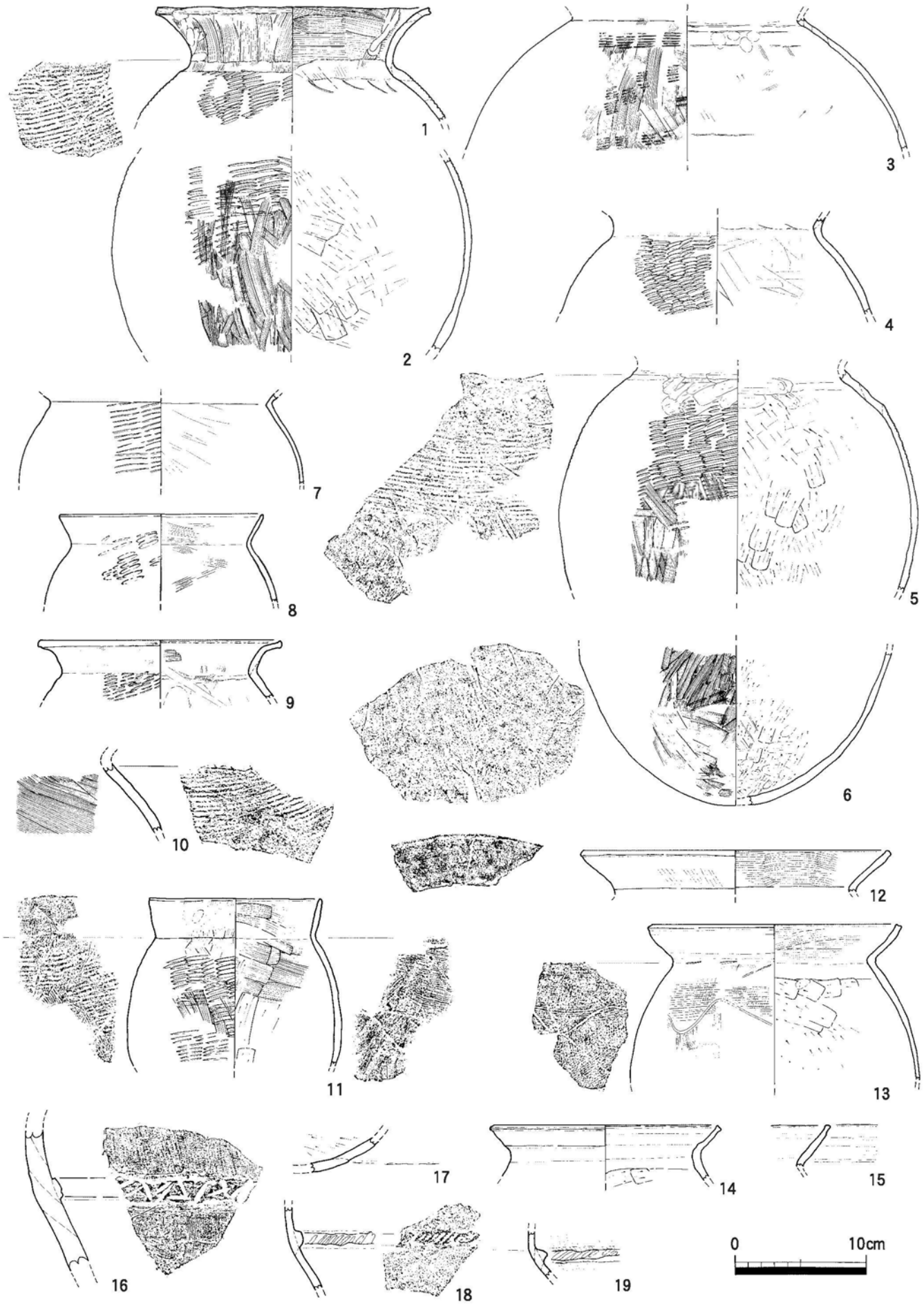


図17　ＳＸ02出土古墳時代前期土器実測図１（¼）

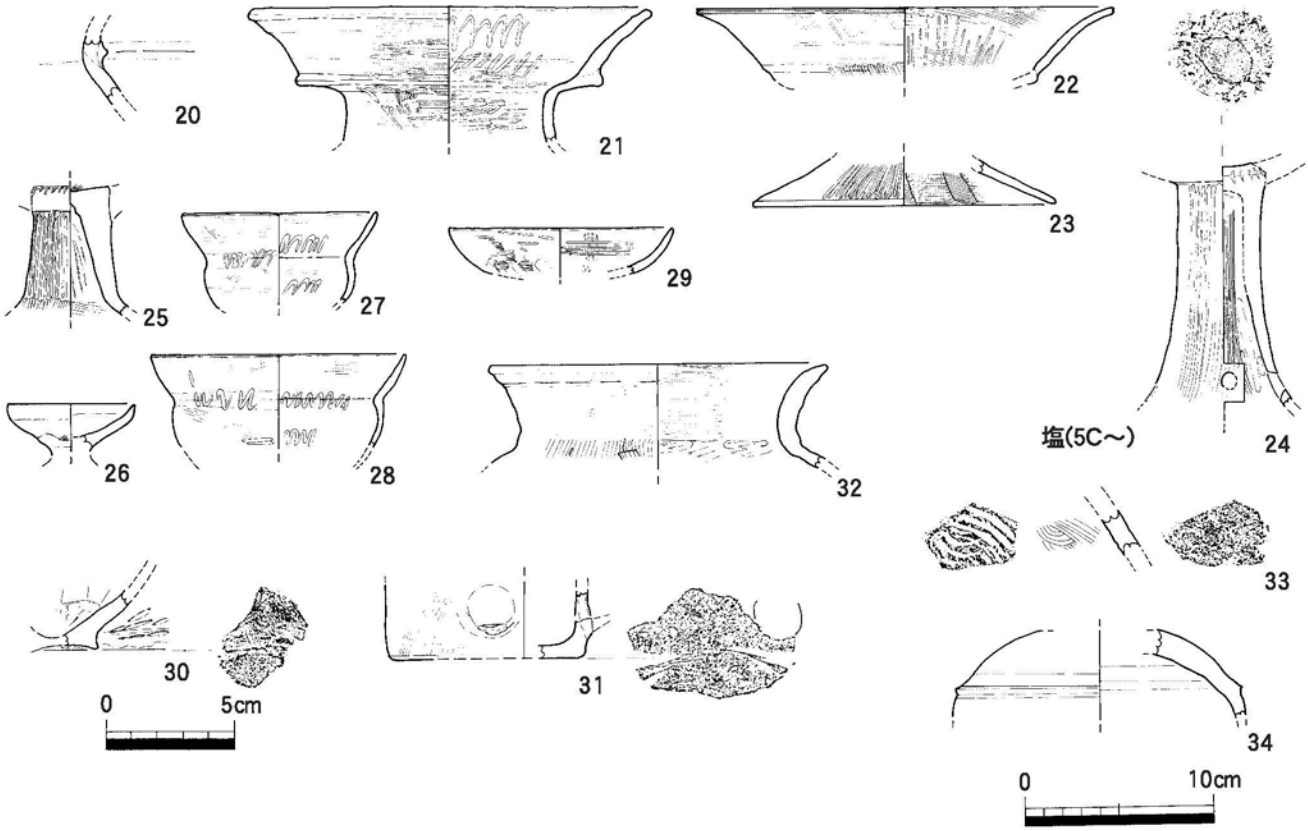


図18　ＳＸ02出土古墳時代前期土器実測図２（¼、30・31は⅓）

含層に伴っていた可能性がある。35～38は甕で、35は伝統的Ｖ様式系（以下、「Ｂ系統」とする）、36～38は布留式系統である。39から41は壷で、40・41の外面は磨いている。51の甕は５世紀頃の甕であろうか。49は外面に縄文を施し、ボタン状の円形突部を貼付けている。関東地方南部の土器であろうか。50は半島系の軟質土器である。外面に格子目叩きを施している。

③　Ｉ区北区ＳＤ01東岸出土土器（図20）

北区ＳＤ01東岸は前述のように弥生時代包含層がなく、土器の破片も小さなものが多い。53～55は甕で、布留系・Ｂ系統の両者がある。小型の鉢が58・60～62と４点出土している。67は５世紀前後の甕か。71は大型壷の突帯部で、突帯に連続する×文を施している。72～74は半島系軟質土器である。73・74は外面が格子目叩きで内面はナデ調整であり、72はラセン沈線がある。74は摩滅がひどいが、外面は格子目叩きと思われる。

④　北側拡張区Ｃ－10・11区土器群出土土器（図21）

白砂層の中に混土製塩土器層のような部分があり、その上面からやや散漫と広がった状態で出土した土師器の一群である。量は少ないが、完形品と大型破片がある。77・78は口縁部が直立する大小の壷。79は平底を成す鉢で、口縁部が波打っている。外面の一部に赤色顔料が付着している。80の高坏は坏部両面にハケ目調整後暗文風のミガキを施している。82の高坏は坏部と脚の１／３を欠いている。透かしは４ヶ所で、口径23cm、器高16.4cm、脚径16cmを測る。坏部は稜から下がやや長く、脚部

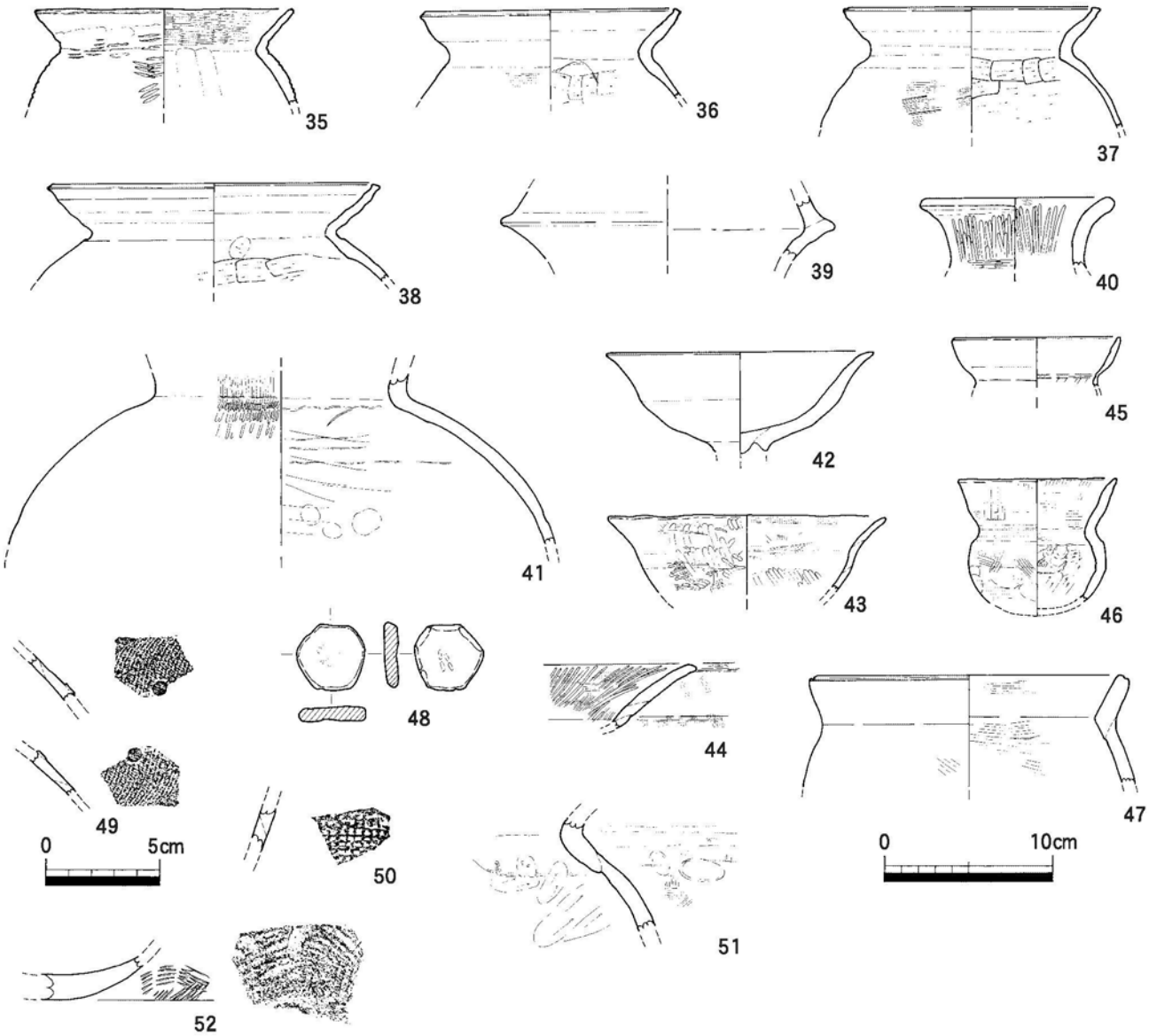


図19　Ⅰ区包含層出土古墳時代前期土器実測図（¼、49・50・52は⅓）

と筒部の境は甘いくびれとなる。83も高坏で脚部の１／２を欠いている。口縁部の歪みがひどい。筒部の調整は指ナデの後横方向のミガキに近いナデを施している。透かしは３カ所で、口径20.5cm、器高12.8cm、脚径11.2cmを測る。背が低く脚部と筒部の境に明瞭な綾はつかない。87は鼓形器台の小片である。

⑤　北側拡張区Ｂ・Ｃ12区土器群出土土器（図22・23）

北側拡張区の北端でまとまって出土した土師器の一群である。量が多く大型の破片が多いが、完形品はない。製塩土器に似た台付鉢の完形品が１点出土したが、製塩土器の項で報告する。また絵画土器が１点出土している。図22・23の遺物の他にも、図23～25のうちＢ12区・Ｃ12区から出土したものの中に、この群に入れるべきものもある可能性がある。88～96は甕である。88はやや平底ぎみ丸底、91は平底、93は尖底ぎみである。口縁部は89は直線的に外傾し波打っている。92はやや外反、93は直立ぎみ、94・96は端部が拡張されている。97～101は壷で、97・98は同一個体で、口径15.4cm、器高は35～40cmを測る。口縁端を指で押さえ気味にヨコナデしている以外は、ほぼ全面２種類のハケ目で調整している。99は二重口縁壷で、内外面とも接合部の痕跡が明瞭に残っている。103は鉢で外面は磨いている。104は小型の甕または鉢に分類すべきか。小さな凸底で、外面はミガキに近いナデ、胴部内

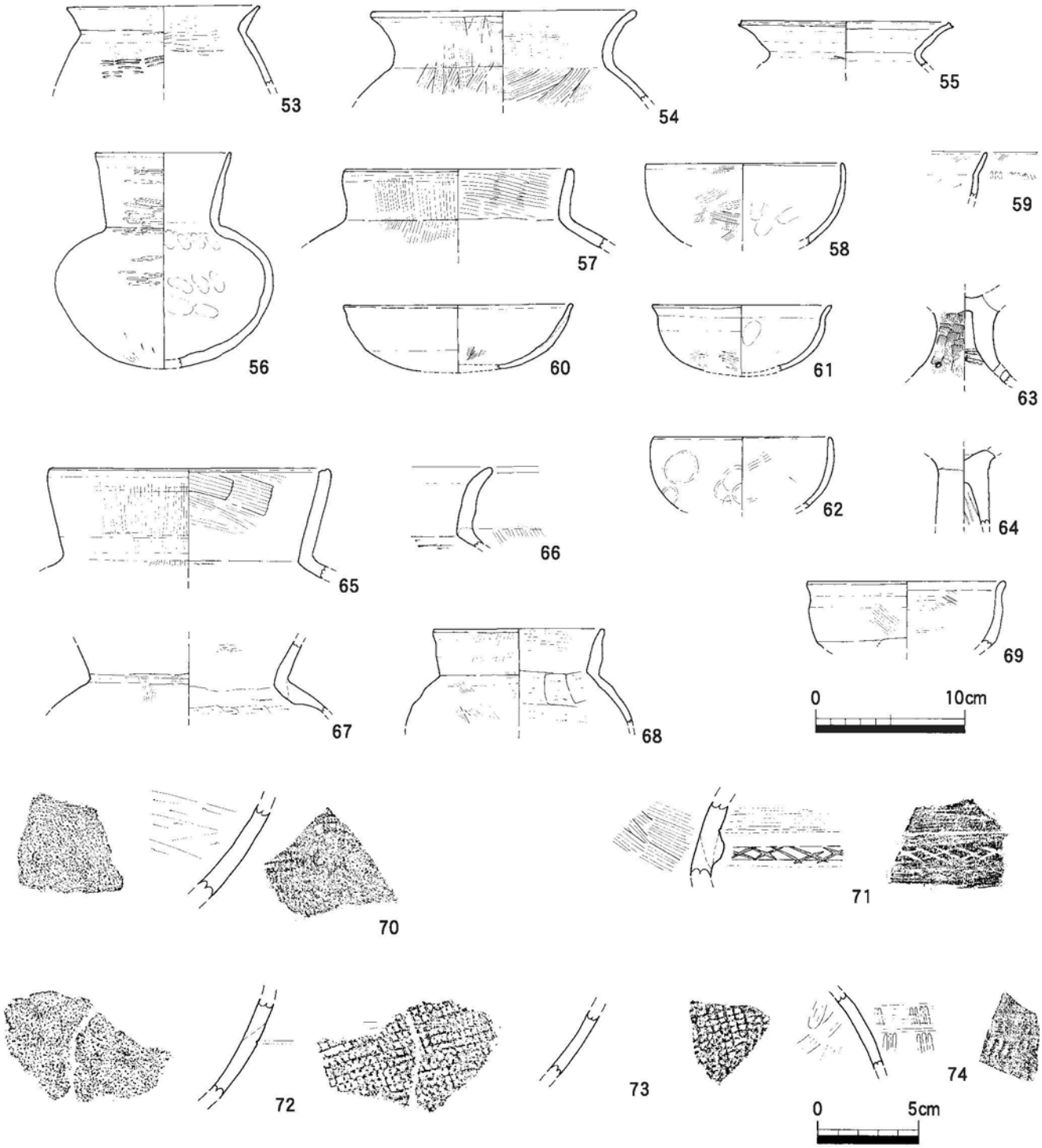


図20　Ⅰ区北区ＳＤ01東岸出土古墳時代前期土器実測図（¼、⅓）

面は粗いハケ目か。102は幅広の鉢か。両面ともハケ目を施す。105は小型の鉢で口径7.2cmを測る。109は高坏で、短い筒部にはミガキを施している。透かしの数は不明。110の高坏の透かしは４カ所である。外面はナデとミガキ（？）を、坏部の内面底にはハケ目が施されている。115はＢ系統甕の胴部片と思われるが、線刻の絵画が施されている。絵画はタタキとナデ調整の後に、鋭い工具で線刻されている。絵画の全形が不明であるが、魚の尾のようにも見える。

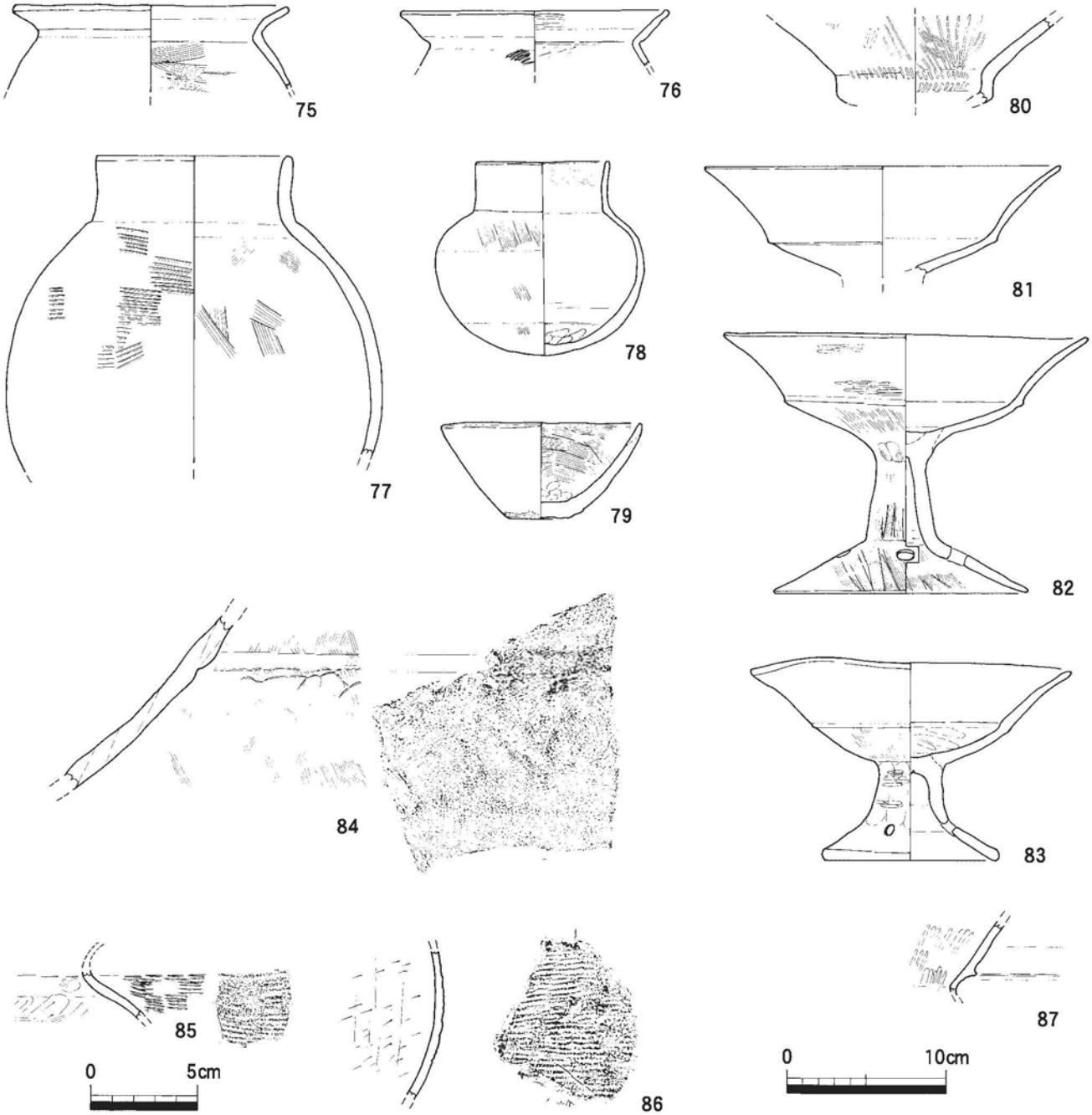


図21　C－10・11区土器群出土古墳時代前期土器実測図（¼、⅓）

⑥北側拡張区出土土器（図24～26）

C－10・11区土器群及びB・C－12区土器群出土土器以外の北側拡張区から出土した土器をまとめた。中には前2者に伴っているものも含んでいる可能性もある。もっとも多くの土師器が出土した。製塩土器の量も最も多く、土器群も含めてミニチュア土器・多くの高坏や絵画土器の出土など祭祀的な遺物を含んでいる。

116～140は甕で、各種の甕が出土している。119は口径10.8cm、器高16cm前後を測る細長の器形である。上から見るとやや楕円気味である。外面はタタキの後になでている。120は弥生時代後期後半の平底である。147・148は5世紀前後の甕であろう。141～145は山陰系複合口縁壷ないし甕である。149～

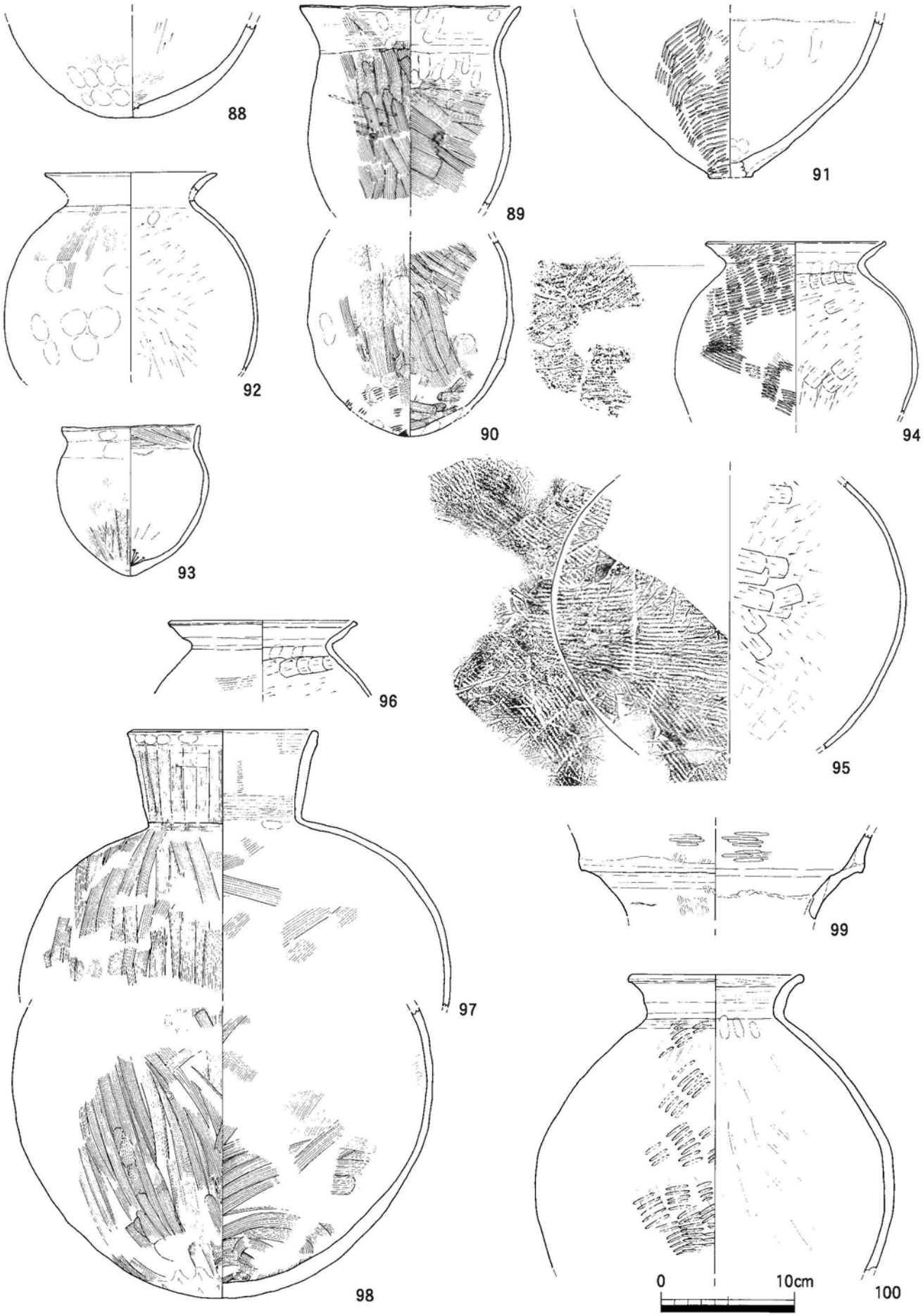


図22　B・C－12区土器群出土古墳時代前期土器実測図１（¼）

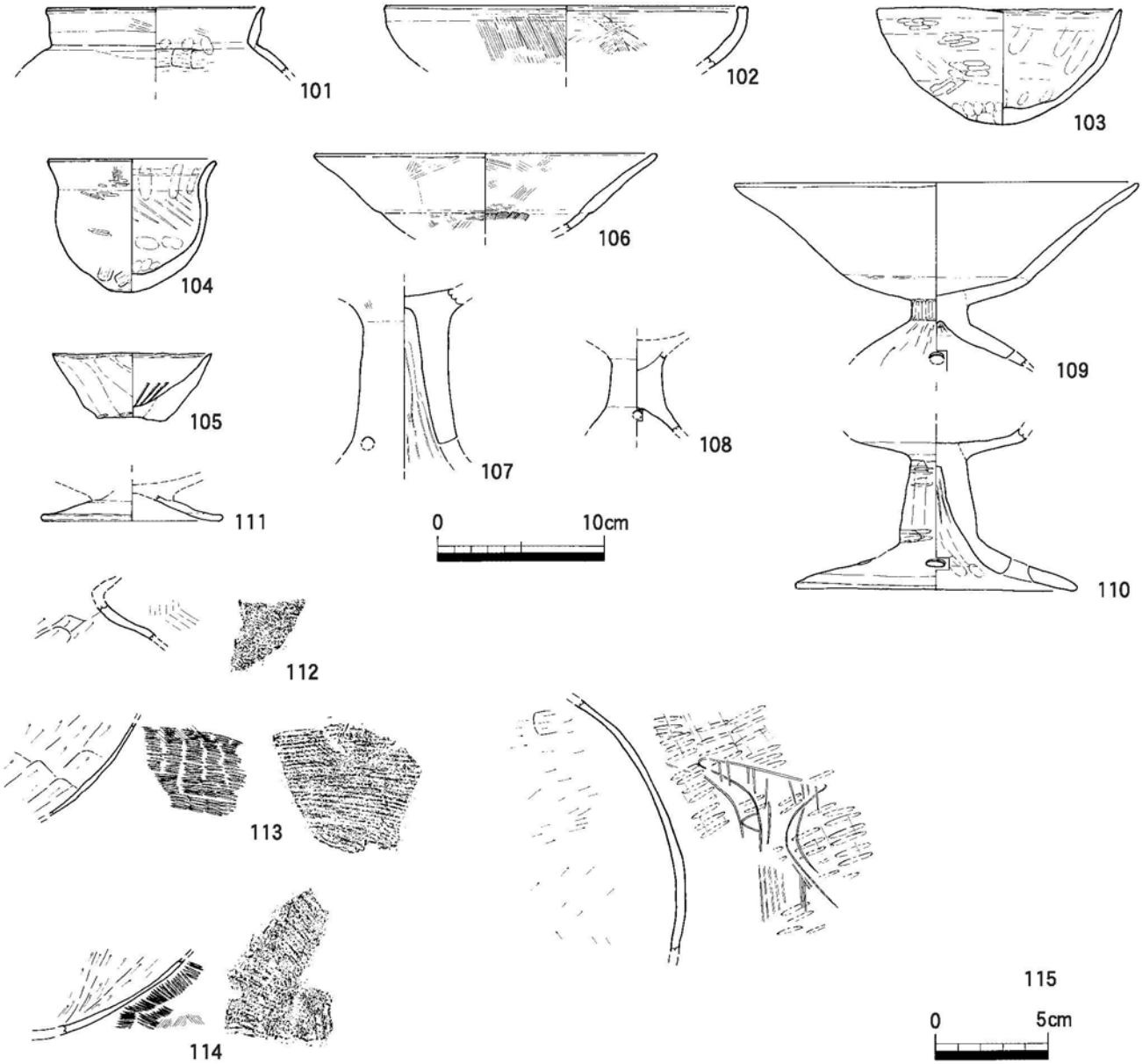


図23　B・C－12区土器群出土古墳時代前期土器実測図２（¼、⅓）

151は大型壷。149は目の細かいハケ目をていねいに施している。153・154は同一個体の壷で、口径約10cm、推定器高30cm強を測る。上部は細かいハケ目、底部近くは粗いハケ目を施してい。158～161は鉢で、158・159の器壁は厚い。164・165は台付鉢。165は外面にタタキの痕跡が残る。口径11.8cm、器高13.65cmを測り、細長い器形を成している。166～176は高坏である。高坏も各種のものが出土している。171・172は筒部が中空になっていない。174はハケのあとミガキをかけている。175は３カ所の透かしを有する。外面全面にハケ目を施す。口径は20cm前後、器高15cm近くになると推定される。山陰系か。179・180はミニチュア土器で、178には焼成剥離が認められる。182の外面には縄目叩きが施されている。181は半島系軟質（瓦質）土器か。

Ⅱ区出土土器（図27～29）

Ⅱ区も多くの土器が出土しているが、Ⅱ区中央から南半から出土したものが多く、破片も大きい。

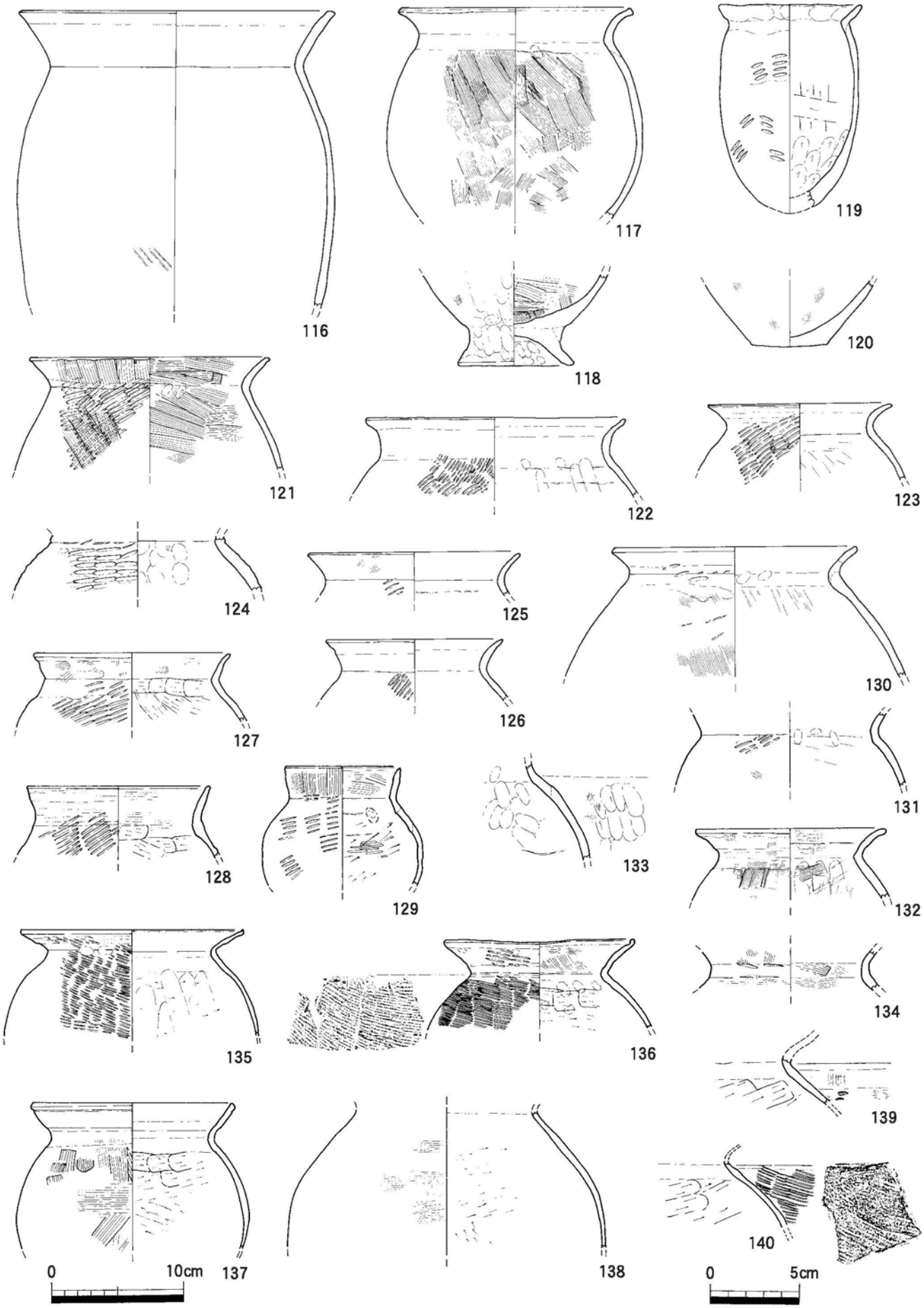


図24　北側拡張区出土古墳時代前期土器実測図１（¼、⅓）

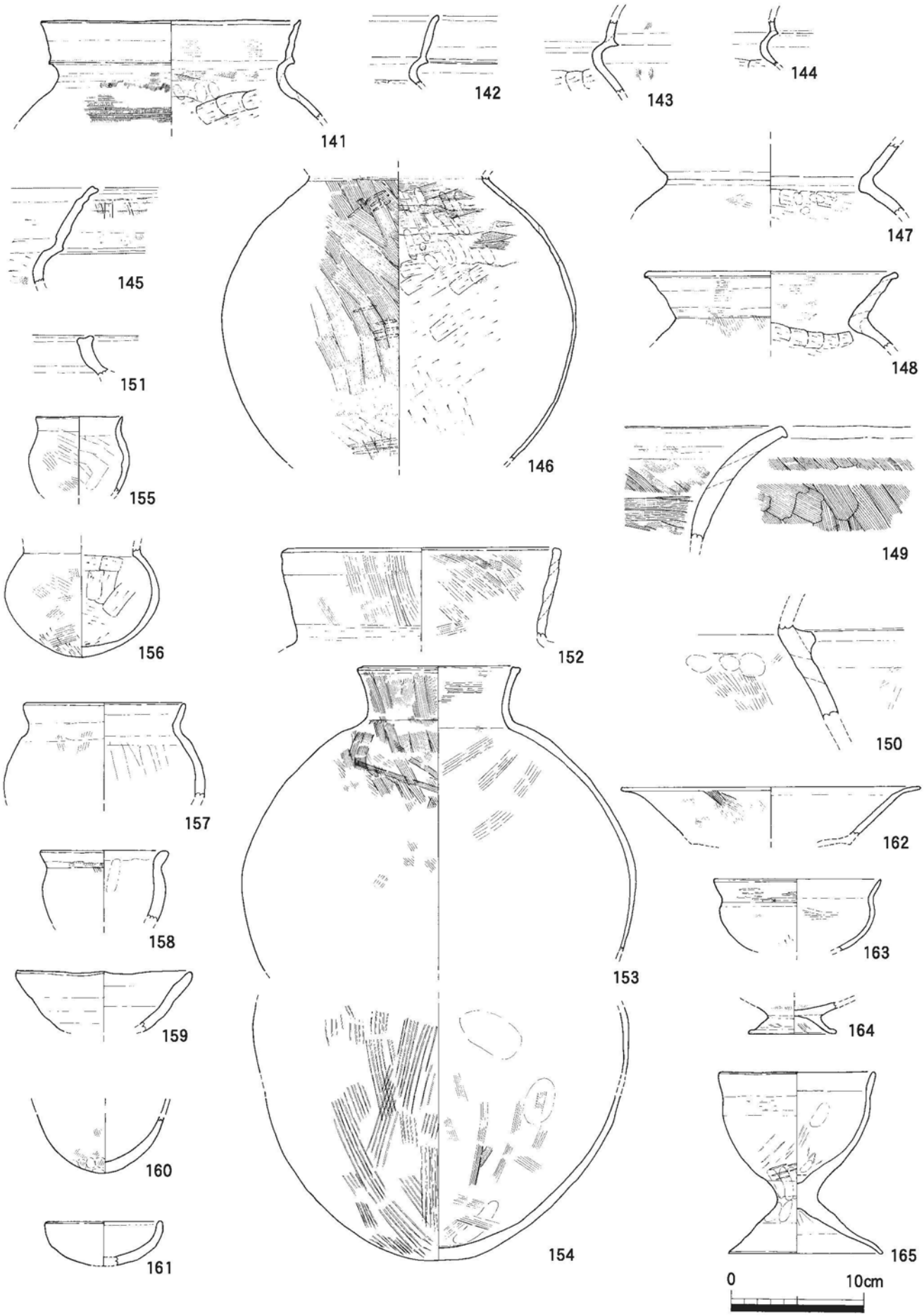


図25　北側拡張区出土古墳時代前期土器実測図２（¼）

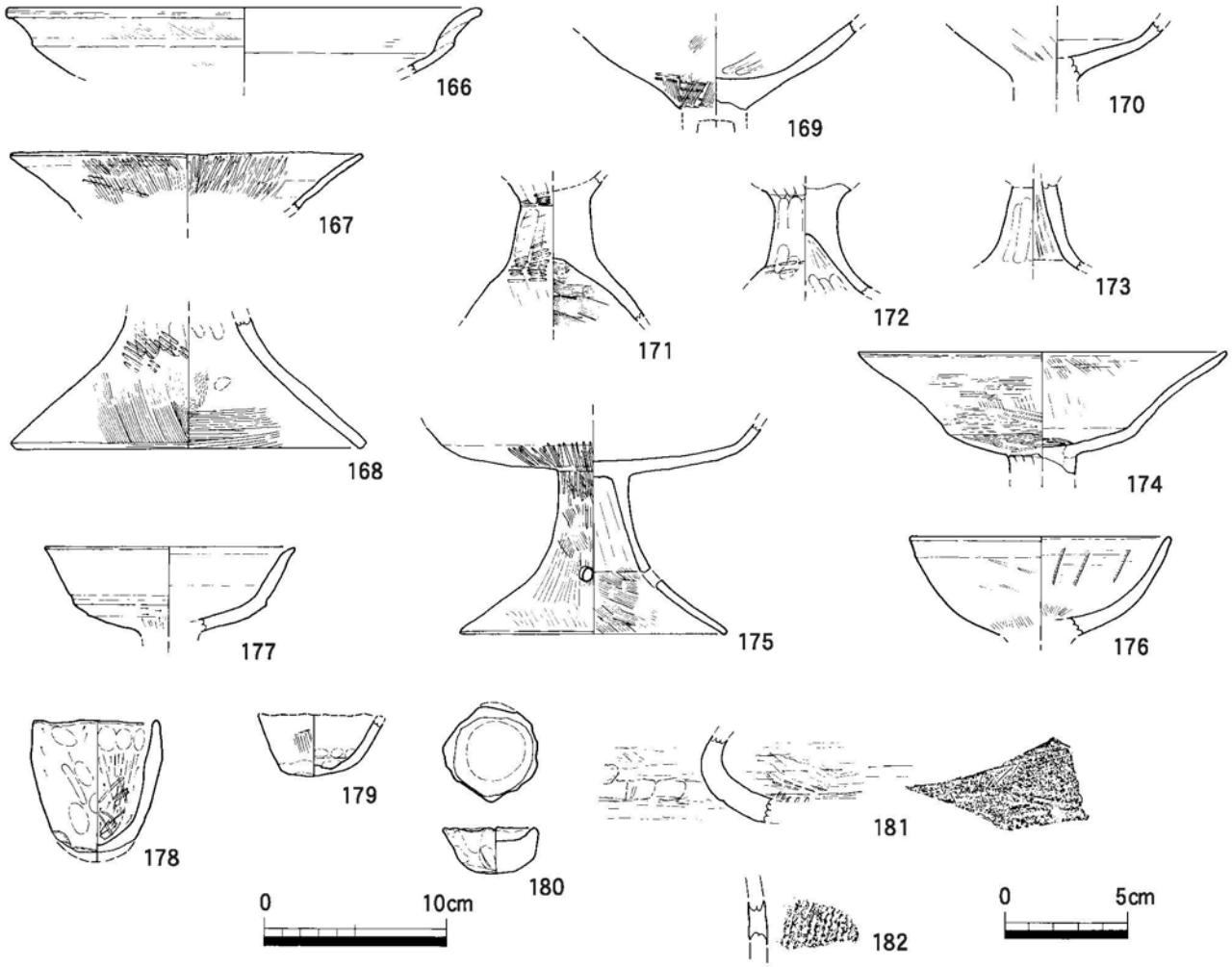


図26　北側拡張区出土古墳時代前期土器実測図３（¼、⅓）

183～214は甕である。198～200の底部はわずかに平底気味であるが直立は不可能である。203はやや上げ底を成している。207はほぼ完形で、口径15.8cm、器高25cm前後を測る。口縁部はナデもしくはヨコナデ、胴部は外面にタタキ後縦ハケ、内面にケズリを施している。口縁部は波打っている。210・211は小型の甕である。217～219は５世紀初め前後の甕である。215・216は山陰系複合口縁甕。220は二重口縁壷だが、時期的に下りそうである。221～225は弥生時代後期後半頃の複合口縁壷である。222～229は大型壷か甕の突帯部分。230は長頸壷の体部で、外面調整は不明である。232は手づくねのミニチュア土器である。235～237・241～248は高坏である。241は口径33cmを測る大型品である。242は口径22.6cmを測る。深い坏部の器形である。

その他の遺構・撹乱・表土等出土土器（図30）

ＳＤ01などの別時期の遺構や表土・撹乱などから出土した土器である。249～253はＳＤ01出土の甕。253は布留系で外面に横方向に回転台を使ってハケ工具をあてたと考えられる調整が施されている。一部波状になっている。254・255は４世紀末の甕口縁部であろう。256はＳＤ01出土の甕底部で、底部をタタキによってつぶして小さな平底を作っている。259はＩ区表土出土で、外面に格子目タタキを施した半島系土器である。258は大壷の突帯部で、細かいハケ目を突体部にも施している。262はＩ区撹乱出土の壷で、口縁部に櫛描きによる文様を施している。安国寺式あるいは西部瀬戸内系統の土

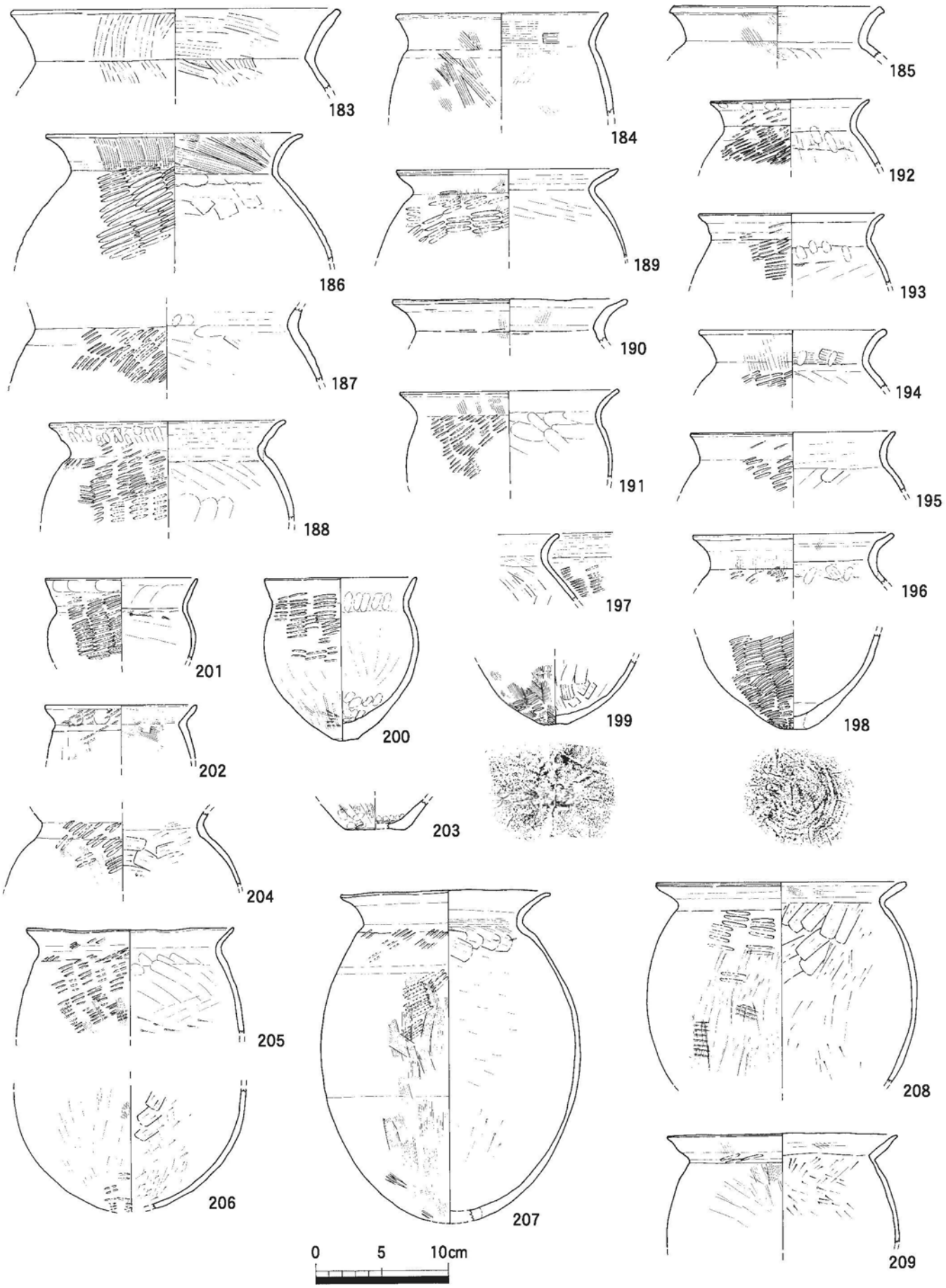


図27　Ⅱ区出土古墳時代前期土器実測図２（¼）

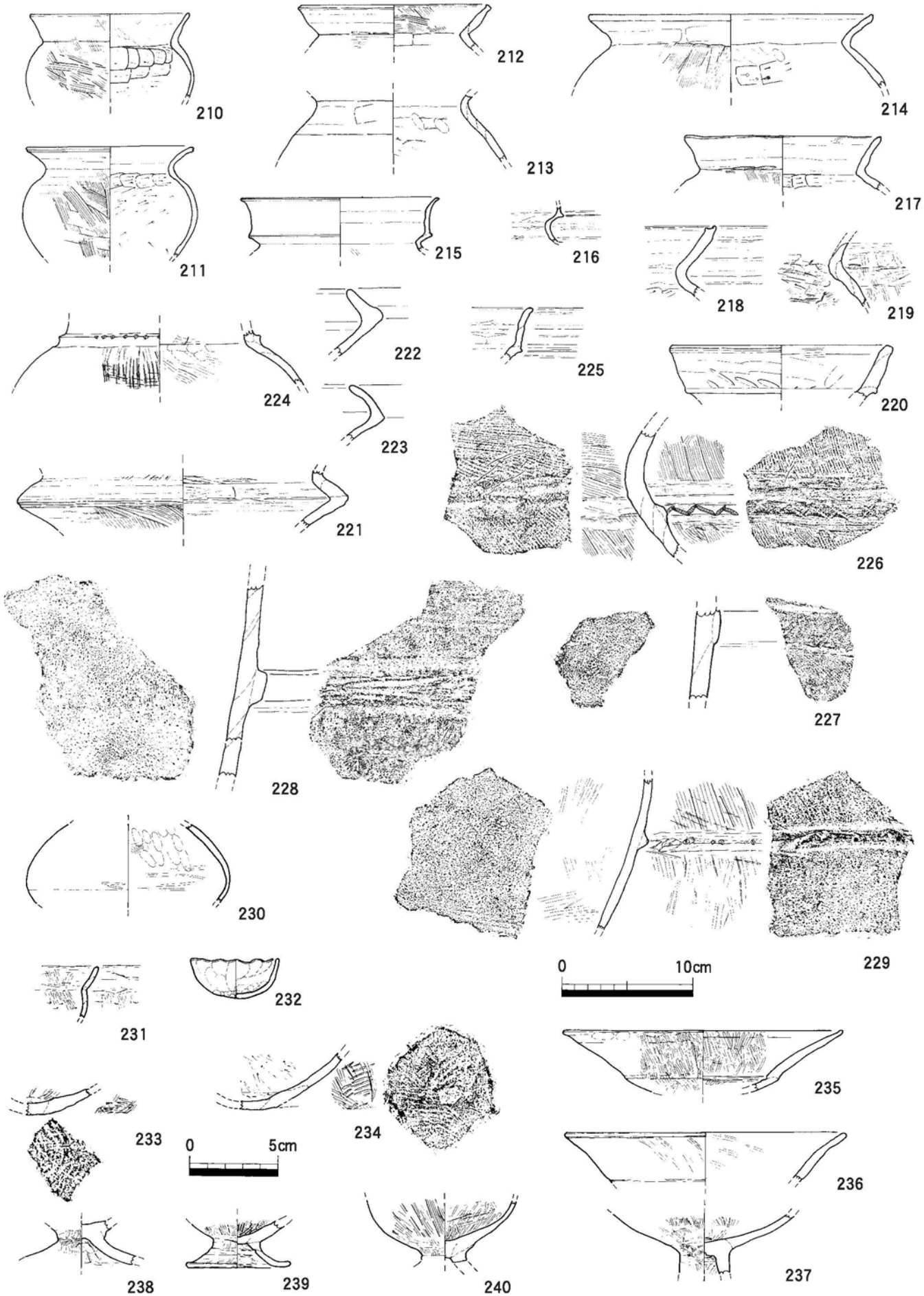


図28　Ⅱ区出土古墳時代前期土器実測図１（¼）

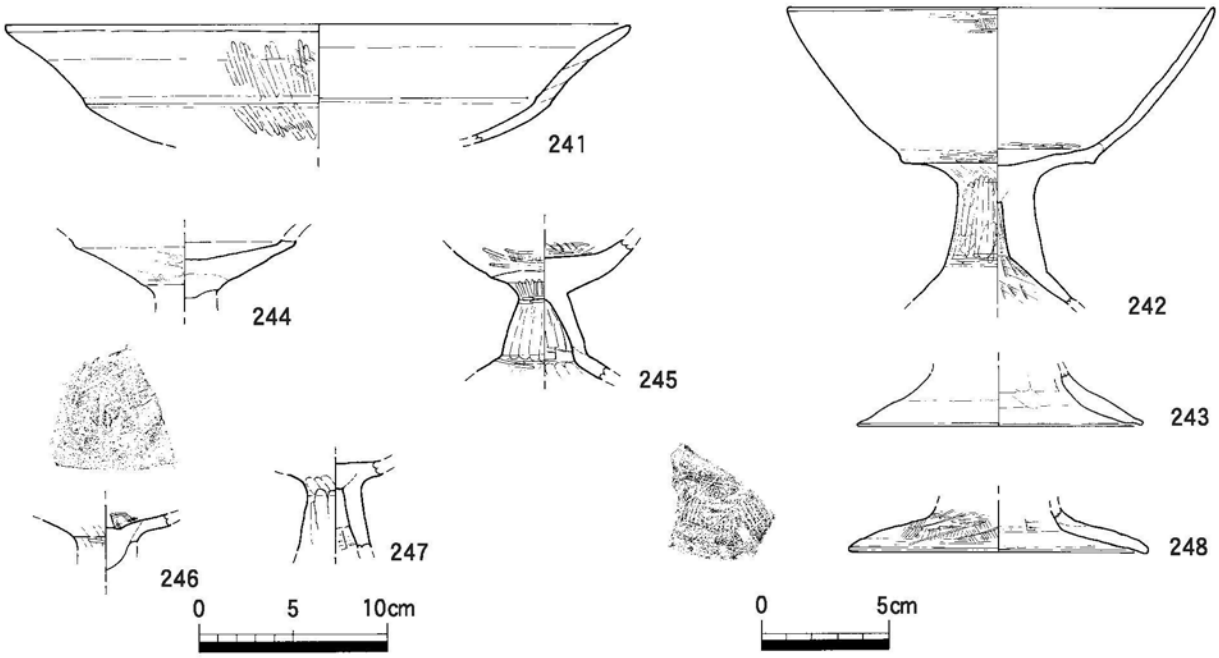


図29　Ⅱ区出土古墳時代前期土器実測図３（⅓、¼）

器か。263は外面に櫛描きによる波状文を施している。276・277は４世紀末～５世紀の土師器である。

以上の土器群は大きくⅠ区出土土器とⅠ区北側拡張区・Ⅱ区出土土器に分けられ、若干の構成差が認められる。詳細はまとめで久住猛雄が詳述するが、１・２点だけ述べると、格子目タタキを施す朝鮮半島系土器はⅠ区に限られる。またⅠ区では大きな土器片が少なく、製塩土器の破片に混じって出土している。一方後者では製塩土器の破片群の上部にまとまって遺棄されているものが多く、完形品や大型の破片が多い。また高坏やミニチュア土器・絵画土器などの祭祀用土器が多く、製塩土器に似た完形品も出土している。国内外の外来系土器の出土は全般的に多く、当遺跡での古墳時代初頭土器群の特徴とも言える。

蛸壺（図31・32）

破片も含めて60個体前後の蛸壺が出土したが、形態の異なる302・310・317以外は概ね共通の形態と規模を有している。口縁部はやや外傾し、頸部が若干すぼまる。体部はやや丸みを帯びて丸底を呈するが、やや平底ぎみなものや（308など）尖底気味なもの（305など）がある。調整は、指によるナデ状の削り取りで、外面にハケ目があるものが多いことから、ハケ目の後にナデ消しているものと思われる。器形が特殊な上記３点を除いた分の器高10.5～12.6㎝、口径5.2～7.0㎝を測り、浅黄橙色から橙色を呈したものが多い。黒斑が全体の１／３ほどに広くついているものもあれば、まったくついていないものもある。穿孔は焼成前に１カ所あけられ、底部にある１点以外は頸にあたる以下、特徴的な個体について述べる。

278～303までは北側拡張区Ｄ－11区でまとまって出土した一群である。278の底部外面には成型時に絞ったような痕跡がついている。289・291は頸部がほとんどすぼまらず、内傾気味の口縁部である。300は胴部の張りが強い。307は底部に穿孔が施されている。308・309は胴部の張り・頸部のすぼまりがほとんどなく、直線的な体部を成している。308の外面下半にはヘラによるものと思われる調整痕が残っている。302・310はまったく形態が異なっている。体部はほぼ直線的で、底部は平底で孔がない。

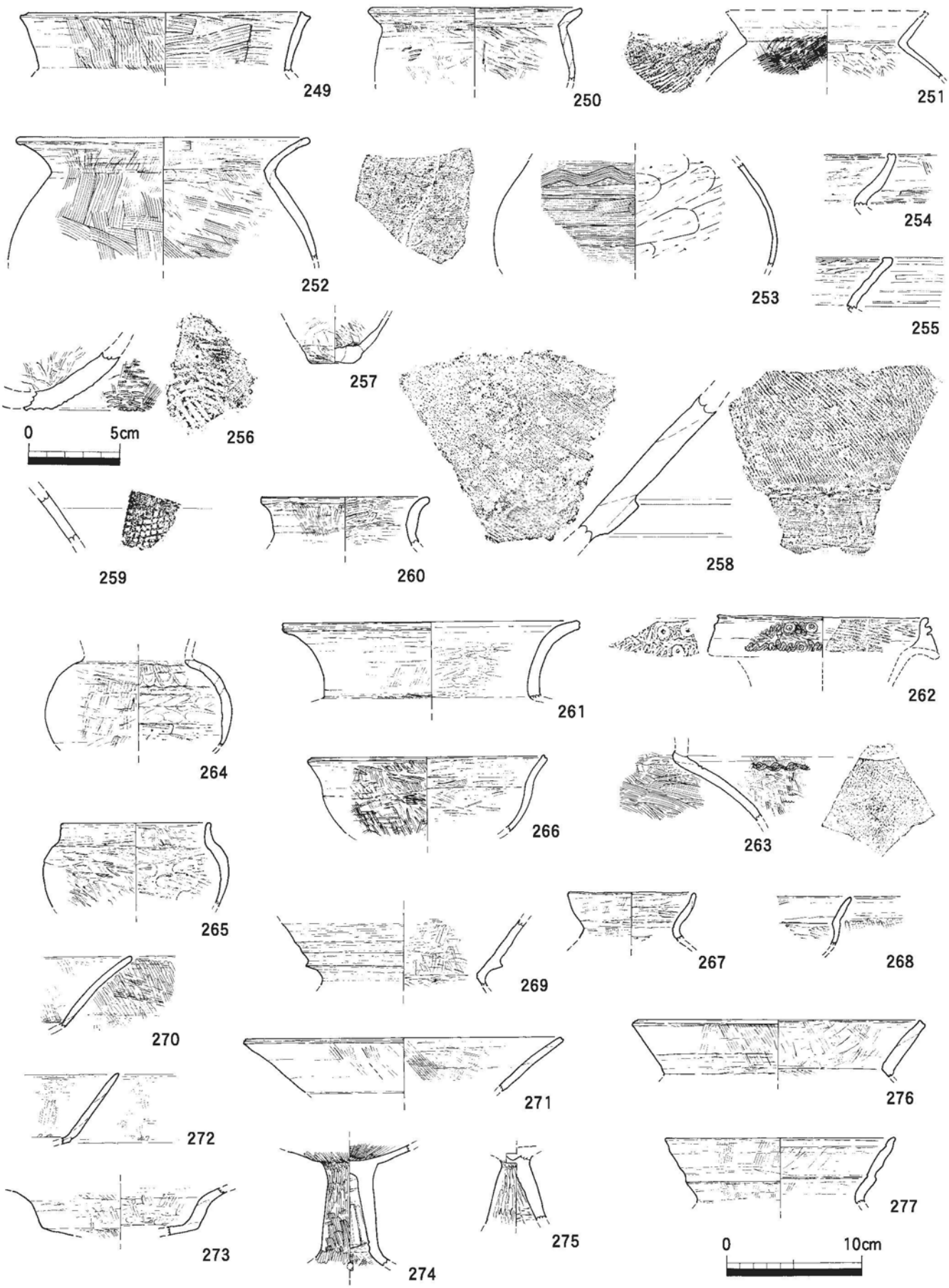


図30　その他の遺構・表土・撹乱出土古墳時代前期土器実測図（¼）

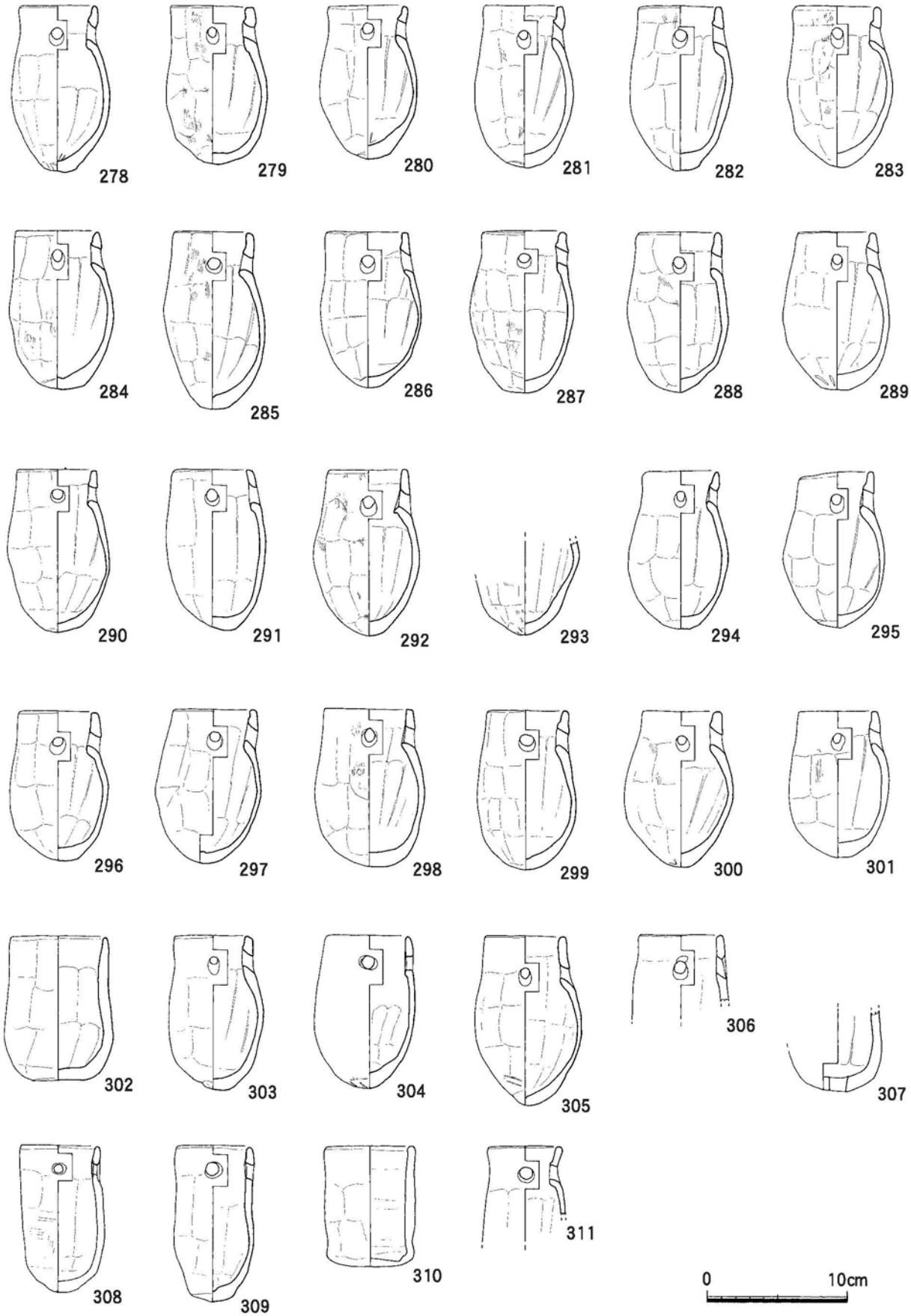


図31　出土蛸壺実測図１（¼）

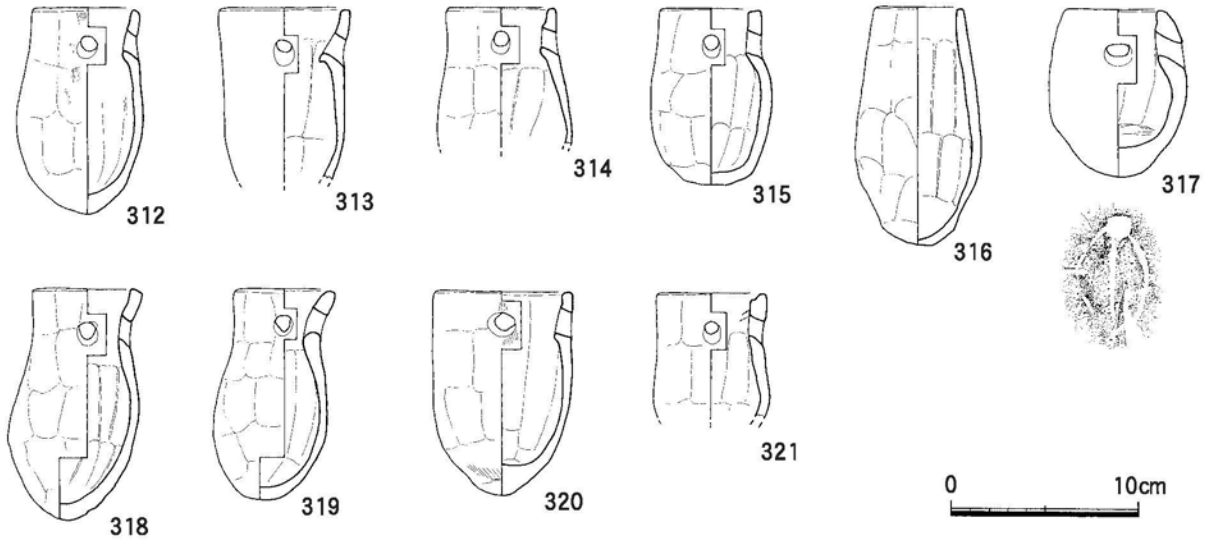


図32　出土蛸壺実測図２（¼）

蛸壺で可能性がない考えられるが、整形の方法は蛸壺とほぼ同じで、302はＤ－11区の蛸壺のまとまり内から出土している。316も図面上孔がないが、これは完形品ではないためである。317は特殊な蛸壺である。器高が低く、頸のすぼまりもなく、器壁が厚い。外面はきれいになでている。孔から下に図のような線刻が施され、女性器をかたどっているものと考えられる。

製塩土器（図33）

製塩土器はほぼ全域から出土したが、特にＳＤ01小口南側にあるＳＸ02、北区ＳＤ01東岸の一部、北側拡張区のＣ－11区などで混土製塩土器層と呼んでいいほどまとまって出土した。また２区の特に南半分でもまとまって出土した。製塩土器はほぼ完全に粉々状態であり、ＳＸ02の一部について接合を試みたが、底部と口縁部のごく少量が接合したにとどまる。出土した製塩土器の個数は底部からある程度わかる。その数は表１のとおりである。他の遺構などに少量まじったものなどの若干の漏れがあると思うが、総点数は完形品が709点、半分以上ある個体が244点、半分以下の個体が1047点で、総個体数は2000点近くになるであろう。

製塩土器の基本的形態は今宿第５次出土の製塩土器群とほぼ同じであるが、出土製塩土器の底部を見ると大きく２つに分けられる。１つは底部の地面との接着面が５～７㎜前後の平坦部を成しているもの（333など）で、もうひとつは底部先端が尖り気味で地面と一点で接着するもの（336など）である。胴部はそのほとんどに明瞭なタタキを有するが、タタキをナデ消しているものが少数ある。口径が復元できた破片はないが、底部を見ると大型のもの（328など）や小型のもの（347など）がある。口縁部はほぼ直立する。かなりの２次焼成を受けているため、器面の保持は悪いが、中にはかなり焼

表１　出土製塩土器底部個数

	SX02	Ⅰ区包含層	北拡包含層	Ⅱ区包含層	SD01	撹乱等	合計
完存	58	32	304	279	36	0	709
1/2以上	24	22	92	78	26	2	244
1/2以下	176	173	404	196	90	8	1047

注　Ⅰ区包含層にはSD01以外の遺構出土分も含む

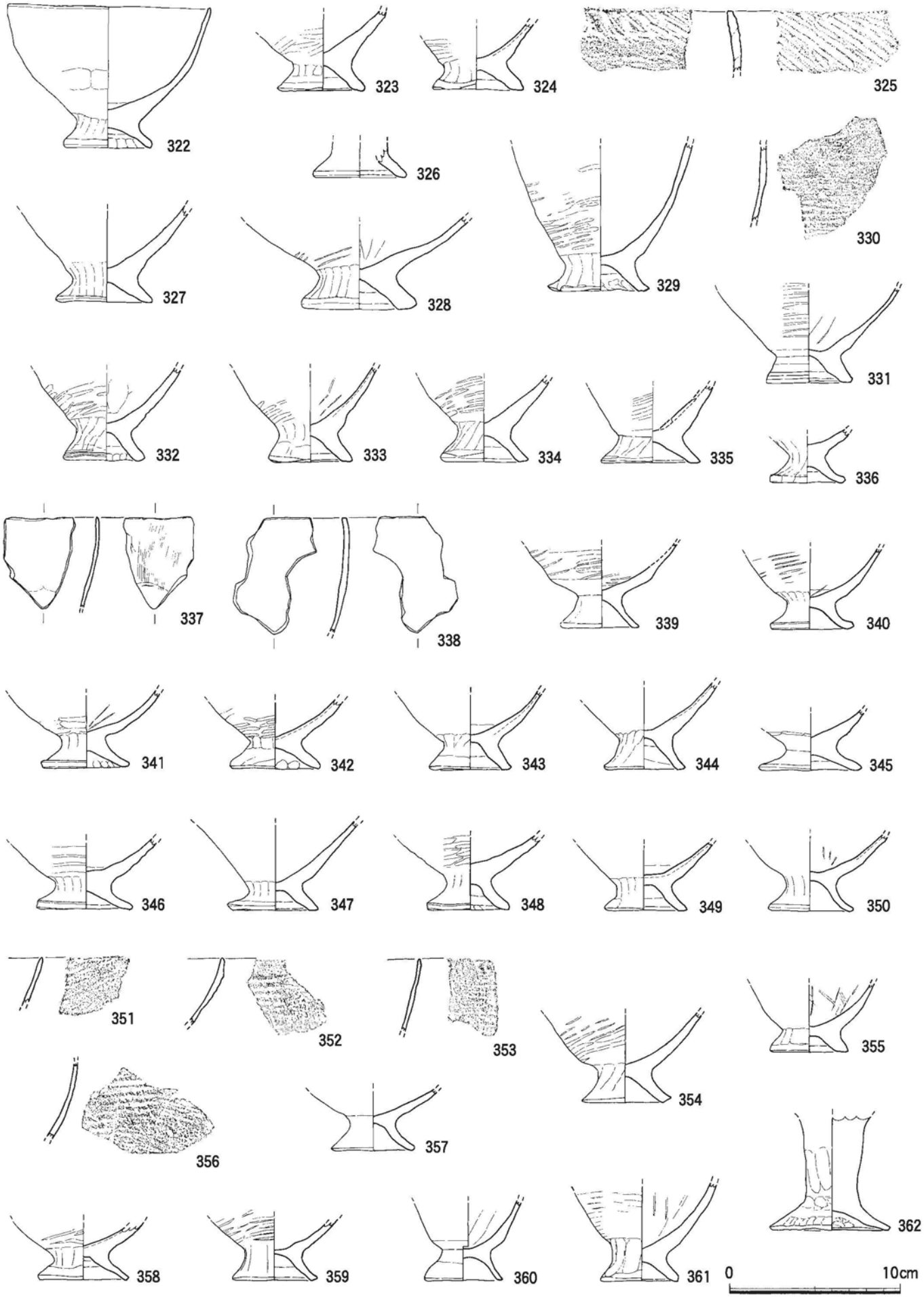


図33　出土製塩土器実測図（1/3）

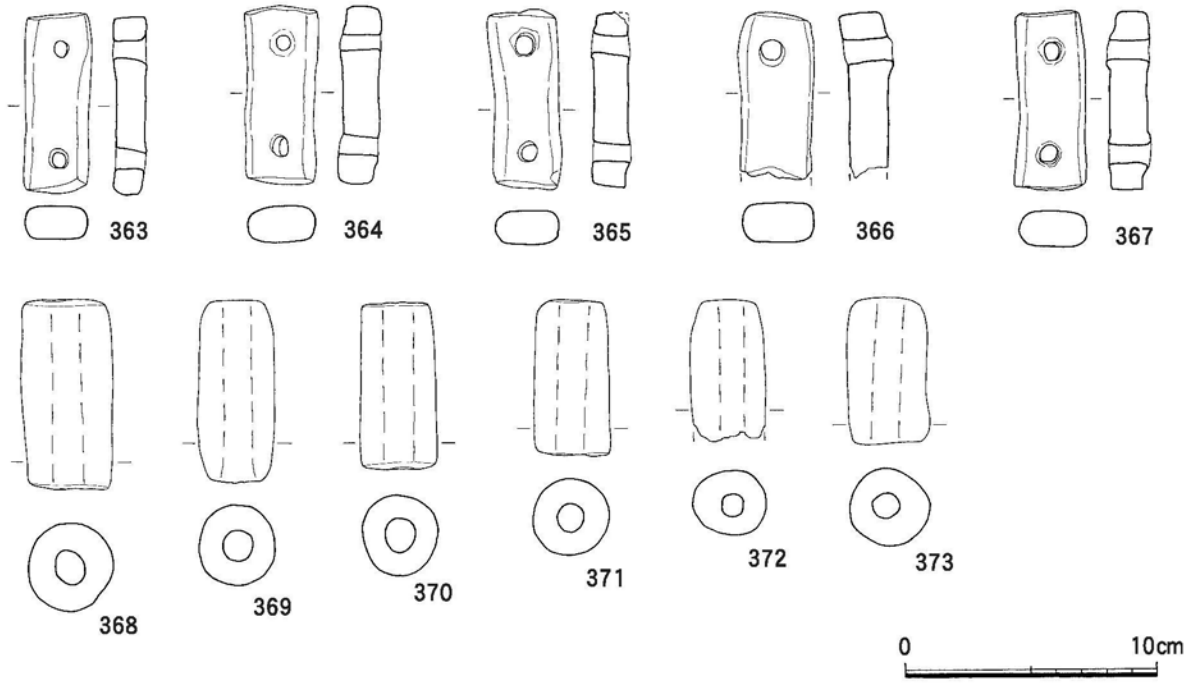


図34　出土土錘実測図（⅓）

成の良いもの（325など）もある。

322は製塩土器に似た形状の土器の完形品で、ＢＣ12区土器群Ａから出土した。器高が低く、タタキが明瞭に観察できない点が製塩土器と異なっている。しかし底部の整形は同じで、胴部にタタキの痕跡も数カ所であり、全体をナデ消してタタキを消している。ＢＣ12区土器群Ａは製塩土器の破片が密集している部分の上部から土師器が多数出土し、絵画土器も出土したこと等から、322の土器は製塩土器をまねた祭祀用の土器とも考えられる。355は唯一出土した古墳時代後期の製塩土器である。脚長のいわゆる天草式製塩土器に似た土器である。ＳＸ02の上部から出土した。

土錘（図34）

２種類の土錘が出土した。１つは全体を平坦な直方体に作り、両サイドに孔を穿つもので、もう一つは太めの管状土錘である。前者は福岡市内ではあまり類例を聞かない。長さ6.8～7.1㎝、幅2.6～３㎝、厚さ1.3～1.6㎝を測る。ただし先端部の割れている366は現状で6.6㎝あり、孔の位置から考えて、８㎝以上になると考えられ、この個体のみが１㎝以上長くなる。破片も入れて６点出土したが、すべて北側拡張区・Ⅱ区出土で、製塩土器・土師器などとともに出土した。後者は長さ5.5～7.6㎝、径３～3.6㎝を測る。ほぼ直線的な形態を成しており、細めで両端が細くなる古代の土錘とは形態が異なっている。６点出土したが、すべてＳＸ02の製塩土器層から出土した。両者の出土位置が異なることが、時期的な差なのか、用途の差なのか判然としない。

表２「系統」中の記号は、以下のようになっている。

「A」「B」「C」「D」は弥生時代終末期から古墳時代前期の土器の「系統」（製作技法体系）を示す。久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」（『庄内式土器研究』X1X）による。「A」は、北部九州の在来系（在地系）である。「B」は、近畿地方由来の伝統的Ｖ様式系土器群を示すが、在地において変容したものを含んでいる。「C」は畿内地方の庄内式系であるが、伝統的Ｖ様式ではないより精一の庄内甕を伴う土器群である。なお「Cs」は、Ｃ系統から派生する精製器種群を指し、次山淳1993「布留式土器における精製器種の製作技術」（『考古学研究』40－２）における「精製器種Ｂ群」であり、精良な水濾胎土の使用と精巧な製作技術、特に多くの場合細密ヘラミガキ（横ミガキが多い）で仕上げるものである。例えば器形は小型精製器種でも、これら特徴の無いものは模倣品ないしは格落ち品である。「D」は布留式系で、布留系甕とその出現後に出現展開する器種群である。また山陰系を「E」とした。さらに韓式系軟質土器を「K」としている。なお、例えばＡ（D）はＡ系統技法でＤ系統器種を模倣したもの、Ｂ（Cs）はＢ系統技法で精製器種Ｂ群土器を模倣したものを指す。またＡ－ＢはＡ・Ｂ両系統の折衷品であることを示す。他の注記では、「搬」は北部九州外からの搬入とみられるもの、「似非須恵」は土師器質の土器だが須恵器を模倣したもの、「筑前」は筑前型庄内甕「大和」は大和型庄内甕、「爐型」は韓国南部系の爐型土器（模倣品）、「破裂」は土器焼成の際の器面破裂剥離痕跡が顕著なものを指す。久住1999におけるIB期～IIC期に属する土器については「まとめ」の中て触れるが、これ以外は記入している。「ⅠＡ期」「ⅢＡ期」「ⅢＢ期」は久住1999によるが、「後期後半」は弥生時代後期後半（下大隈式）、またⅢＢ期以降は５ｃ以降とした。（久住猛雄）

表２　古墳時代前期土器観察表

図	番号	出土位置	系統	器形	口径	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	胎土	焼成	備考
17	1	SX02-R105他	B	甕	21.0	口:ハケ、胴:タタキ	口:ハケ、頸:ナデ、胴:板ヨコナデ	橙	黄褐	白色細砂多い	良好	
17	2	SX02-R105他	B	甕		タタキ	ケズリ	橙	黄褐	白色細砂多い	良好	
17	3	SX02	B	甕		タタキ後ハケ	頸:指押さえ、胴:ハケ後ナデ	にぶい橙	にぶい橙	白色細砂・赤色粒子	良好	
17	4	SX02-R105他	B	甕		タタキ	板ナデ	橙	橙	白色細砂多い	良好	
17	5	SX02-R105他	B	甕		タタキ	ケズリ	黄褐	橙	白色細砂多い	良好	
17	6	SX02-R106他	B	甕		タタキ後ハケ	ケズリ	黄灰	褐	白色細砂多い	良好	
17	7	SX02	B	甕		タタキ	ナデ	明赤褐	にぶい黄褐（黒変）	1㎜以下の石英・長石・金雲母少量	良好	
17	8	SX02	B	甕	15.6	タタキ	ハケ	明赤褐	明赤褐	1.6㎜以下の石英・長石・金雲母少量	良好	
17	9	SX02	B	甕	18.5	口:ハケ＋ナデ、頸:タタキ後ハケ、胴:タタキ	口:ハケ後ヨコナデ、頸:ハケ後ナデ、胴:ケズリ後ナデ	橙	明赤褐	白色細砂・微量の金雲母	良好	
17	10	SX02	B	壺		タタキ、一部後に板ナデ	ハケ	灰黄褐	にぶい黄橙	白色細砂	良好	
17	11	SX02-3・7区	B	甕	13.2	口:ハケ後ヨコナデ、胴:タタキ後ハケ	口:ヨコナデ、胴上:ハケ、胴下:ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	2㎜以下の石英・長石等少量	良好	
17	12	SX02-1・7区	A(D)	甕	23.6	ハケ後ヨコナデ	ハケ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の石英・長石・金雲母	良好	
17	13	SX02R10.16	D	甕	19.4	口:ハケ後ナデ、胴:ハケ・波状沈線	口:ヨコナデ、胴:ケズリ	橙	橙	石英・長石・赤色粒子・金雲母	良好	
17	14	SX02	D	甕	19.8	ヨコナデ	口:ヨコナデ、胴:ケズリ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	白色細砂・金雲母・黒雲母	良好	
17	15	SX02	D	甕		回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白	灰白	石英・金雲母・白色細砂	良好	
17	16	SX02	A	壺		ハケ後ナデ・板ナデ	ハケ後ナデ？	橙	にぶい橙	石英・長石粒・白色細砂金雲母	良好	内面:黒斑有り
17	17	SX02	A	底部		ナデ(オサエ？)	ケズリ	赤橙	赤橙	石英・長石・金雲母	良好	
17	18	SX02	A	壺		不明	不明	浅黄橙	浅黄橙	石英長石粒・金雲母微量の金雲母	良好	
17	19	SX02	A	壺		ハケ	不明	橙	橙	石英・長石粒	良好	
18	20	SX02礫層	A	壺？		ヨコナデ	ナデ？	橙	橙	石英　長石粒	良好	
18	21	SX02東砂層	B	壺	21.4	口縁端:ヨコナデ、他:ヨコミガキ	口:ヨコナデ、頸:指押さえ、胴:ヨコミガキ	明黄褐	明黄褐	細砂ごく少量	良好	
18	22	SX02	A	高坏	22.0	ハケ後ナデ、ミガキ	ハケ、ハケ後ミガキ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	1㎜以下の石英・長石・・赤色粒子・金雲母少量	良好	
18	23	SX02-7区他	A	高坏脚	(15.9)	ハケ後ミガキ	ハケ	にぶい褐～橙	にぶい褐～橙	微細金雲母・赤色粒等ごく少量	良好	
18	24	SX02-R105他	A	高坏		ミガキ	シボリ＋指押さえ	にぶい橙	にぶい橙	白色粒子・金雲母	良好	
18	25	SX02R31	B	高坏		タテミガキ	シボリ＋ナデ	橙	にぶい赤褐	1㎜以下の石英・長石・金雲母ごく少量	良好	
18	26	SX02	B(Cs)	器台	6.6	ヨコナデ	ミガキ	明赤褐	明赤褐	石英粒・白色細砂	良好	

図	番号	出土位置	系統	器形	口径	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	胎土	焼成	備考
18	27	SX02	B(Cs)	小型丸底壺	10.4	口:ハケ後ナデ、頸:ハケ後ヨコナデ+ミガキ、胴:ハケ後ナデ	口:ハケ後ヨコナデ+ミガキ、頸:ハケ後ナデ、胴:ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	白色細砂	良好	
18	28	SX02 R26	B(Cs)	小型丸底壺	13.4	口:ハケ後ヨコナデ、頸:ハケ後ヨコナデ+ミガキ、胴:ハケ後ナデ	口:ハケ後ナデ、頸:ミガキ、胴:ナデ後ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	白色細砂	良好	
18	29	SX02	B(Cs)	坏		ナデ・ケズリ後ミガキ	回転ヘラミガキ	橙	橙	微量の金雲母　緻密	良好	
18	30	SX02	B	甕		底上:ナデ、底下:タタキ後ナデ	板ナデ	橙	灰褐	白色細砂・金雲母	良好	
18	31	SX02	不明(K ?)	鉢		ハケ	ヨコナデ	橙	にぶい黄橙	白色細砂・金雲母	良好	
18	32	SX02東他	5c～	甕	18.0	口:ハケ+ヨコナデ、胴:ハケ	口:ハケ+ヨコナデ、胴:ケズリ	浅黄橙	浅黄橙	白色細砂・0.9㎜程の石英粒	良好	5・6世紀
18	33	SX02	5c～	破片		不明	当て具	灰白	にぶい黄橙	微量の石英粒	良好	
18	34	SX02	5c～	坏蓋		体部:回転ヘラケズリ、口:ナデ	ナデ	橙	橙	1.5㎜以下の石英・長石金雲母	良好	5世紀以降模倣須恵器
19	35	Ⅰ区北区	B	甕	15.4	口:ヨコナデ、胴:タタキ後ナデ	口:ハケ、胴ナデ上げ	にぶい橙	にぶい橙	3㎜以下の褐色細砂	良好	
19	36	Ⅰ区2層・表土	D	甕	15.6	ヨコナデ	口:ヨコナデ、胴:ケズリ	橙	橙	白色粒子・赤色粒子・黒雲母・金雲母	良好	37と同一個体の可能性
19	37	Ⅰ区2層	D	甕	15.6	ヨコナデ	口:ヨコナデ、胴:ケズリ	橙	橙	白色粒子・赤色粒子・金雲母(外面:黒色塗装か)	良好	
19	38	Ⅰ区南区5	D	甕	19.8	口:ヨコナデ、胴:ハケ目後ヨコナデ	口:ヨコナデ、胴:ケズリ	橙	橙	白色細砂	良好	
19	39	Ⅰ区南拡	A	壺	20.0	不明	不明	橙	橙	白色粒子・微量の金雲母	良好	口径は張出部
19	40	Ⅰ区中区南	B	壺		口端:ヨコナデ、口:ミガキ	ヨコナデ、ハケ後ミガキ	灰黄褐	にぶい橙	2㎜以下の石英・長石。金雲母・赤色粒子微量やや粗い。	良好	
19	41	Ⅰ区南区3層	B	壺		頸:ハケ、頸下:ミガキ、胴:ヨコナデ	頸:ナデ・オサエ、胴:板ナデ	赤褐	褐	石英・白色粒子・金雲母少量	良好	
19	42	Ⅰ区北区	B	高坏	16.0	不明	不明	橙	橙	2㎜以下の石英・長石やや多い、赤色粒子・金雲母少量	良好	口縁先端:明赤褐
19	43	南区2層	B	高坏	16.6	ハケ後ミガキ	口:ハケ、胴:ミガキ	橙	橙	白色細砂・金雲母　緻密	良好	
19	44	中区2層	A	高坏		ハケ後ナデ	ハケ後ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	石英・長石・金雲母・赤色粒子微量	良好	
19	45	南区表土	Cs	小型丸底壺	10.0	ヨコナデ	口:ヨコナデ、頸:ケズリ	橙	橙	白色細砂・赤色粒子	良好	
19	46	Ⅰ区中区	ⅢB	小型丸底壺	9.4	ハケ後ヨコナデ	口:ハケ後ヨコナデ、胴:ケズリ	にぶい褐	にぶい褐	白色粒子・石英・長石	良好	4世紀末、器高約8.2㎝
19	47	Ⅰ区B~2群	A	甕	19.0	口:ヨコナデ、胴:ハケ	口:ハケ後ヨコナデ、胴:ハケ	橙	にぶい黄橙	1㎜以下の石英・長石・赤色粒子	良好	5世紀か
19	48	2層	土製品	土製品		径3.9～4.2	厚さ7～9㎜	褐灰	にぶい黄橙	白色細砂・金雲母	良好	端部面取り
19	49	Ⅰ区南区2層	南関東	壺破片		縄文・円形浮文	ナデ	橙	にぶい橙	白色細砂	良好	南関東系か
19	50	Ⅰ区2層	K	破片		格子目叩き	ナデ	にぶい橙	浅黄橙	白色細砂・金雲母・やや精良	良好	
19	51	北区東岸	B	甕?		ハケ(後ナデ?)	頸:ナデ、胴:ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・白色細砂・赤色粒子	良好	5世紀以降か
19	52	B群2層	5c～	甕		タタキ	不明	橙	褐灰	石英・長石粒・小礫	良好	
20	53	北区東岸礫層	B	甕	13.0	口:ヨコナデ、胴:タタキ後ハケ	口:ハケ後ヨコナデ、胴:ハケ	橙	橙	2㎜以下の石英・長石・金雲母少量	良好	
20	54	北区東岸礫層	B	甕	17.9	口:ハケ後ヨコナデ、胴:ハケ	口:ハケ後ナデ、胴:ハケ(上部ナデ消し)	橙	橙	白色細砂・黒色細砂	良好	
20	55	北区東岸礫層	C(筑前)	甕	14.5	口:ヨコナデ、頸:タタキ	口:ヨコナデ、他は不明	にぶい橙	にぶい橙	白色細砂・微量の金雲母	良好	口唇部は沈線状
20	56	北区東岸礫層他	A	長頸壺		口:ヨコナデ・ナデ、胴:ミガキ	口:ヨコナデ?、胴:指ナデ、底:押さえ	橙	橙	2㎜以下の砂粒僅か。やや精良	良好	
20	57	北区東岸礫層	A	壺	15.4	口端:ヨコナデ、口:ハケ、胴:ハケ	口:ハケ、胴:不明	浅黄橙	浅黄橙	3㎜以下の石英・長石が主。微量の金雲母	良好	
20	58	北区東岸礫層	A	鉢	13.2	ハケ	ナデ	橙	橙	1㎜以下の石英・長石・赤色粒子少量、	良好	
20	59	北区東岸	A	小型丸底壺		口:ハケ、頸:ミガキ、他は不明	口:ハケ、胴:ケズリ	浅黄橙	浅黄橙	石英・白色細砂・金雲母・赤色粒子	良好	
20	60	北区東岸礫層	Cs	鉢	15.0	ヨコナデ	体部:ヨコナデ、底:ハケ後ナデ	橙	橙	白色粒子	良好	
20	61	北区東岸包含層	B(Cs)	鉢	12.0	口:ハケ後ヨコナデ、胴:ハケ	ハケ後ヨコナデ	橙	橙	白色粒子・石英・長石	良好	器高約4.8㎝、破裂
20	62	北区東岸	Cs ?	鉢	12.0	不明	口:ヨコナデ、他は不明	橙	橙	石英・多量の赤色粒子	良好	
20	63	北区東岸礫層	B	高坏		ハケ後ナデ	ケズリ	橙	橙	1㎜以下の石英・長石・金雲母・赤色粒子	良好	透かし3カ所
20	64	北区東岸土器群A	A	高坏		不明	シボリ	橙	橙	1.5㎜以下の石英・長石・金雲母・赤色粒子	良好	
20	65	北区東岸土器群A	5c～	壺	19.0	ハケ	ハケ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の石英・長石・赤色粒子微量	良好	5世紀か
20	66	北区東岸	5c～	壺		口:ヨコナデ、頸:ハケ	口:ヨコナデ、頸:ハケ、ケズリ?	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の石英・長石・微量の金雲母の細粒	良好	
20	67	北区東岸土器群A	5c～	壺?		ハケ後ヨコナデ	口:ヨコナデ、頸:押さえ、胴:ケズリ	にぶい黄橙	明赤褐	石英・長石・　白色細砂雲母	良好	5世紀か
20	68	北区東岸包含層	5c～	壺	11.6	ハケ後ヨコナデ、一部削るようにハケ	口:ハケ後ナデ、頸:ナデ、胴:ハケ+ケズリ	橙	灰白	白色細砂・金雲母	良好	4世紀末
20	69	北区東岸包含層	5c～	鉢		ハケ後ヨコナデ	ハケ後ヨコナデ	橙	橙	石英粒・白色細砂多量	良好	5世紀、黒色顔料付着?
20	70	北区東岸包含層	5c～	破片		タタキ後ハケ	ケズリ	橙	橙	石英粒・白色細砂・赤色粒子・金雲母	良好	5世紀

図	番号	出土位置	系統	器形	口径	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	胎土	焼成	備考
20	71	北区東岸礫層	A	壺破片		ナデ	ハケ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白色細砂・石英粒・金雲母	良好	一部黒斑有り
20	72	北区東岸礫層	K	破片		格子目叩き	ナデ	橙	橙	白色細砂・石英粒	良好	
20	73	北区東岸礫層	K	破片		格子目叩き	ナデ	橙	にぶい橙	砂粒・白色細砂・金雲母	良好	
20	74	北区東岸	瓦質	?		格子目?タタキ後回転ヨコナデ	ナデ	灰白	灰白	微量の金雲母・黒色細砂非常に精良　陶質	良好	楽浪系?
21	75	C11区A	B	甕	17.4	不明	口:ヨコナデ?、胴:ハケ	にぶい黄橙	灰黄褐	2㎜以下の石英・長石等少量	やや不良	
21	76	北拡C10・11区　165	C	甕	17.0	口:ヨコナデ、胴:タタキ	口:ハケ後ヨコナデ、胴:ケズリ	浅黄橙	にぶい赤橙	白色細砂・黒色細砂・金雲母	良好	内面剥離面:赤(筑前)
21	77	C10・11区	A	壺	12.6	口:不明、胴:タタキ	口:不明、胴:ハケ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の細砂粒が僅か	良好	
21	78	C10・11区い群	?	壺	8.6	斜めハケ	口:ハケ・ヨコナデ、底:指ナデ	橙	橙	径 1㎜以下の微細粒子少量、精良	良好	器高12.3cm
21	79	C10区R 2	B	鉢	12.4	?、赤色顔料	ハケ、底:指ナデ	橙	橙	5㎜以下の白色砂	良好	器高12.4cm
21	80	E群　R001	C	高坏		ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	白色細砂・赤色粒子・金雲母を微量	良好	
21	81	C10・11区う群	B	高坏	22.4	不明	不明	橙	橙	3㎜以下の石英・長石・・赤色粒子・金雲母少量	良好	口縁部黒斑
21	82	C10・11区	B(C)	高坏	23.0	ヨコナデ、ハケ	ナデ?	にぶい橙	にぶい橙	3㎜以下の石英・長石・花崗岩少量	良好	
21	83	C11区A−1	A(D)	高坏	20.2	坏下:ハケ、筒:ナデ、他は不明	坏:ナデ、他は不明	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の石英・長石等少量	良好	器高12.8cm
21	84	北拡C10区R01	A	甕		ハケ	不明	橙	橙	石英・長石粒・赤色粒子・金雲母・黒色粒子多量	良好	
21	85	北拡C11A	C	鼓形器台		タタキ	ハケ後指押さえ・ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・金雲母・白色細砂	良好	(筑前)
21	86	北拡C10 175	C	甕		坏上:ミガキ、坏下:ハケ、脚:ハケ	ケズリ後ナデ	褐灰	にぶい黄橙	白色細砂	良好	(筑前)
21	87	D−2群	E(鼓)	鼓形器台		ヨコナデ	口:ミガキ後ヨコナデ、頸下:ケズリ	橙	橙	石英・白色細砂・金雲母	良好	
22	88	北拡C12区A群	A	甕		底:タタキ、胴:ハケ	底:ハケ、胴:ケズリ?	褐灰	赤橙	石英・長石を多量	良好	わずかに平底気味の丸底
22	89	BC12区	A−B	甕	16.8	口:ナデ気味押さえ、胴ハケ	口:なで上げ、胴上:ハケ+オサエ、胴下:ハケ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・微量の金雲母	良好	
22	90	BC12区	A−B	甕		タタキ後ハケ	ハケ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・微量の金雲母	良好	
22	91	北拡BC12区	B	甕	(3.0)	タタキ	指押さえ	橙	橙	白色粒子・赤色粒子・石英	良好	
22	92	北拡BC12区	B(D)	甕	13.0	口:ヨコナデ、胴:ハケ	口:ヨコナデ、胴:ケズリ	灰白	灰白	白色細砂、石英、金雲母	良好	
22	93	BC12区A−3土器B	B	甕	10.3	口:タタキ後ヨコナデ、胴:縦ハケ	口:斜めハケ、胴:板ナデ?	橙	橙	3㎜以下の石英・長石等	良好	底部は尖底ぎみ,器高11.4cm
22	94	北拡BC12区	C	甕	13.6	タタキ	口:ヨコナデ、頸:指押さえ、胴:ケズリ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	白色細砂多量	良好	(筑前)
22	95	BC12区	C	甕		タタキ	ケズリ後ナデ	橙	橙	白色細砂		大和・搬?
22	96	北拡BC12区	D	甕	13.4	ハケ後ナデ	口:ハケ後ナデ、胴:ケズリ	灰	灰	白色細砂・微量の金雲母	良好	
22	97	BC12区A	A	壺	15.4	口端:ヨコナデ、他はハケ	口:ハケ、頸:指おさえ、胴:ハケ	橙	明黄褐	2㎜以下の石英・長石・赤色粒子・金雲母等少量	良好	器高約31.5cm
22	98	BC12区A	B	壺		胴:ハケ、底:ハケ後ナデ	ハケ	橙	明黄褐	2㎜以下の石英・長石・赤色粒子・金雲母等少量	良好	
22	99	北拡BC12区A8	B	壺	21.6	口:ハケ後ヨコナデ、頸:ナデ+指押さえ	口:ヨコナデ、頸:ナデ、指押さえ、下部ハケ	橙	橙	石英・長石粒・微量の金雲母	良好	
22	100	BC12区	B	壺	13.1	口:ヨコナデ、胴:タタキ後ナデ	口:ヨコナデ、頸:指押さえ、胴:ナデ	橙	浅黄橙	4㎜以下の石英・長石・赤色粒子・金雲母	良好	
23	101	北拡BC12区他	Cs	甕	13.2	ハケ後ナデ	口:ハケ後ナデ、胴:ケズリ	浅黄橙	浅黄橙	白色細砂・微量の金雲母	良好	爐型模倣?
23	102	北拡C12区B群	A	鉢	22.0	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	橙	橙	白色粒子・多量の金雲母	良好	
23	103	BC12区A−5	A	鉢	14.7	ヨコナデ後ミガキ	ナデ	赤褐	黄橙	石英・長石含み、細砂多い	良好	器高7.8cm
23	104	BC12区A−6	B	甕	10.2	ミガキ?	口:ハケ?後ナデ、胴:ハケ?、底:指おさえ	明褐	橙	3㎜以下の石英・長石・赤色粒子等やや多い	良好	器高8.05cm
23	105	BC12区−B	B	ミニチュア	7.2	ナデ	ハケ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細白色粒子	良好	
23	106	北拡C12区175	A	高坏	20.8	ハケ後ナデ	ハケ	橙	橙	長石・金雲母・赤色粒子　緻密	良好	
23	107	BC12区A7	A	高坏		坏下:ハケ、筒:不明	シボリ	橙	明赤褐	3.5㎜以下の石英・長石多く金雲母少量	良好	
23	108	BC12区	B	高坏		不明	シボリ	淡橙	淡橙	1㎜以下の石英・長石・・赤色粒子・金雲母ごく少量	良好	
23	109	北拡BC12区他	B(C)	高坏	24.3	口:不明、筒:ミガキ、脚:ミガキ	不明	橙	橙	3㎜以下の石英・長石・赤色粒子少量、金雲母微量	良好	
23	110	BC12区A−4・8他	C	高坏	(17.1)	筒:ナデ後ミガキ	筒:しぼり、脚:ナデ・指おさえ	橙	橙	4㎜以下の砂粒少量含む	良好	
23	111	北拡C12区	Cs	脚付き小型鉢	(11.0)	ナデ	ナデ	橙	灰白	石英・長石・赤色粒子・金雲母	良好	
23	112	北拡BC12区A5	C	甕		タタキ	ケズリ	灰白	黄灰	石英・黄細・　金雲母	良好	(筑前)
23	113	北拡BC12区A5	C	甕		タタキ後ハケ	ケズリ	灰白	黄灰	石英・黄細・　金雲母	良好	(筑前)
23	114	北拡BC12区A5	C	甕		タタキ	ケズリ	灰白	黄灰	石英・黄細・　金雲母	良好	(筑前)

図	番号	出土位置	系統	器形	口径	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	胎土	焼成	備考
23	115	北拡BC12区Ⅱ区140	B	壺？片		タタキ後ナデ	ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白色細砂、石英	良好	外面に線刻文様(絵画？)、魚の尾状
24	116	北拡C10区162,175	A	甕	24.1	口:ヨコナデ、胴:ハケ	口:ヨコナデ、胴:ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	4㎜以下の石英・長石・赤色粒子・輝石等少量	良好	
24	117	北拡礫層	A	甕	17.9	口:ヨコナデ、胴:ハケ	口:ヨコナデ、頸:指おさえ、胴:ハケ	灰黄褐	灰黄褐	2㎜以下の石英・長石・金雲母・角閃石等少量	良好	
24	118	北拡C10 175	A	台付鉢	(8.9)	ハケ後ナデ	胴:ハケ、脚:ハケ後ナデ	橙	橙	2㎜以下の石英・長石・白色粒子	良好	
24	119	SD01北拡C12区165	A	甕	11.0	口:ヨコナデ、胴:タタキ後ナデ	口:指押さえ、胴上:ナデ、底:ナデ上げ	赤顔料付着	赤顔料付着	白色細砂、石英	良好	胴部黒斑有り
24	120	北拡レキ層	A	甕？	(5.6)	ハケ	ハケ	橙	明赤褐	白色細砂・微量の金雲母	良好	弥生後期後半
24	121	南攪乱北拡包他SD01	B	甕	18.3	口:ハケ＋ナデ、胴:タタキ＋ハケ	口:ハケ、頸:指おさえ、胴:ハケ	橙	橙	2㎜以下の石英・長石等少量	良好	
24	122	北拡C12区165	B	甕	19.8	口:ヨコナデ:胴:タタキ	口:ハケ、胴:ナデ	橙	浅黄	白色細砂、石英、赤色粒子	良好	
24	123	北拡C10区175	B	甕	14.0	口:ヨコナデ、胴:タタキ＋指押さえ	口:ヨコナデ、胴:板ナデ	明赤褐	明赤褐	1.5㎜以下の石英・長石少量、金雲母・赤色粒子微量	良好	
24	124	北拡レキ層	B	甕		タタキ	ハケ後指押さえ＋ナデ	浅黄橙	浅黄橙	3㎜以下の砂粒が少量。	良好	搬入品？
24	125	北拡C10区175	B	甕	16.2	タタキ	不明	にぶい橙	赤	石英・白色粒子・赤色粒子	良好	
24	126	北拡C10区175	B	甕	13.6	タタキ	不明	橙	橙	白色粒子	良好	
24	127	北拡C10区175	B	甕	15.0	タタキ	口:ハケ、胴:ケズリ	黒褐	黒褐	白色細砂、石英、赤色粒子	良好	
24	128	北拡包	B	甕	14.0	口:ヨコナデ、胴:タタキ	口:ハケ、胴:ケズリ	橙	橙	1㎜以下の石英・長石少量、金雲母微量、5㎜大有	良好	
24	129	北拡礫層	B	甕	8.8	タタキ後ナデ、赤色顔料	口:横ハケ、胴、ケズリ・ナデ	にぶい赤褐	橙	7㎜以下の白色粒	良好	
24	130	北拡C11区165 SD01	B	甕	18.7	口:ヨコナデ、胴:ハケ	口:ヨコナデ？、頸:指おさえ、胴:ハケ	橙	褐灰	2㎜以下の石英・長石等多量	良好	
24	131	北拡C11.12区150	B	甕		タタキ	ナデ	赤	赤	3㎜以下の石英・長石少量、金雲母微量	良好	
24	132	北拡C11.12区	B	甕	14.6	口:ハケ、頸:ハケ後ナデ、胴:ハケ	口:ハケ後ヨコナデ、胴:ハケ＋ナデ	橙	橙	柵色細砂・微量の金雲母	良好	
24	133	北拡礫層横砂層	B？	壺		頸:ヨコナデ、胴:ハケ後ナデ	頸:ヨコナデ・押さえ、胴:ナデ	橙	橙	石英・白色粒子・金雲母少量	良好	
24	134	北拡礫層上	B	壺		上部:ハケ後ヨコナデ、下部:ヨコハケ	不明	橙	橙	1㎜以下の石英多い	良好	
24	135	北拡C10区レキ層165	C	甕	17.0	タタキ	胴:ケズリ	灰	灰	白色細砂・微量の金雲母	良好	(筑前)
24	136	北拡礫層C10区175	C	甕	14.6	口:タタキ後ナデ、胴:タタキ	口:ハケ後ナデ、胴:ケズリ＋指おさえ	橙	にぶい黄橙	白色細砂を含む	良好	(筑前)
24	137	北拡C10区175	D	甕	15.8	口:ヨコナデ、胴:ハケ	口:ヨコナデ、胴・ケズリ	橙	橙	白色細砂	良好	
24	138	北拡包140	C	壺		ハケ	ケズリ	橙	橙	3㎜以下の石英・長石・赤色粒子、金雲母微量	良好	(筑前)
24	139	北拡レキ層	D	甕		頸:ヨコナデ、胴:ハケ後ヨコナデ	頸:ヨコナデ、胴:ケズリ	褐灰	灰黄褐	白色細砂・金雲母・黒雲母	良好	
24	140	北拡包 トレンチ	D	甕		タタキ	頸:ナデ、胴:ケズリ	褐灰	褐灰	白色細砂・金雲母	良好	
25	141	北拡C12.13区レキ層	E	甕	19.6	口:ヨコナデ、胴:ハケ沈線状ミガキ	口:ハケ後ナデ、胴:ケズリ	浅黄橙	浅黄橙	灰色細砂・赤色粒子・多量の金雲母	良好	搬入品
25	142	北拡C10 175	E	甕(壺？)		ヨコナデ？不明	ハケ後ナデ	灰白	浅黄橙	白色細砂・金雲母等	良好	
25	143	北拡C11.12区 150	E	甕		ハケ＋ヨコナデ？不明	口:不明、胴:ケズリ	灰白	灰白	細砂・石英粒	良好	搬入品
25	144	北拡C11区175	E	壺		ヨコナデ	頸:ヨコナデ、胴:ケズリ	灰白	灰白	石英・赤色粒子 微量の2㎜以下の砂粒	良好	
25	145	北拡包140	E	壺		口:ハケ＋ヨコナデ、頸:ヨコナデ	口・頸:ヨコナデ、胴:ハケ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1.5㎜以下の石英・長石、微量のキ石・金雲母少量	良好	
25	146	北拡C11 165	B	甕		胴上:ハケ、胴下:ハケ後ナデ	胴上:ハケ、胴中:押さえ、胴中～下:ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白色粒子・赤色粒子・石英	良好	
25	147	北拡C 9 区175	5c～	壺		上部:ヨコナデ、下部:ハケ	口:ヨコナデ、頸:指押さえ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・白色粒子・金雲母多量	良好	5世紀か
25	148	北拡C12区165	5c～	甕	19.0	口:ハケ後ナデ、胴:ハケ	口:ハケ後ナデ、頸:ケズリ	橙	橙	石英・長石・微量の金雲母	良好	5世紀か
25	149	北拡C 4 ピット	A	広口壺		ハケ後ナデ	ハケ後ヨコナデ	橙	橙	白色細砂・金雲母・赤色粒子	良好	
25	150	北拡C 9 区175	A	甕		ハケ	頸:指押さえ、胴:ハケ	橙	橙	石英・長石・赤色粒子・金雲母	良好	
25	151	北拡包南トレ	A	壺		ヨコナデ	ヨコナデ	橙	橙	1.5㎜以下の石英・長石・金雲母少量	良好	
25	152	北拡C10区175	A	壺	21.0	ハケ	ハケ	橙	橙	白色粒子・赤色粒子・金雲母	良好	
25	153	北拡レキ層178	A	壺	12.2	口:ハケ後ナデ、胴:ハケ	口:ハケ後ナデ？、胴:ハケ	橙	橙	白色粒子・石英・長石	良好	黒斑有り
25	154	北拡レキ層178	A	壺		ハケ	ハケ	橙	橙	白色粒子・石英・長石	良好	黒斑有り
25	155	北拡C11区165	B	鉢(甕)	6.5	口:ヨコナデ、胴:ハケ	口:ナデ、胴:板ナデ？	にぶい黄橙～橙	にぶい黄橙	2㎜以下の石英・長石等少量	良好	
25	156	北拡BC10区165	B	小型丸底壺		ハケ(底:ケズリ後ハケ)	ケズリ	橙	明赤褐	4㎜以下の石英・長石・金雲母・赤色粒子等少量	良好	
25	157	北拡包南トレ	A	甕	12.2	口:ヨコナデ、胴:ハケ？	口:ヨコナデ、胴:ナデ	橙	橙	石英粒・微量の金雲母	良好	
25	158	北拡包	A	鉢	9.7	ハケ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の石英・長石・金雲母少量	良好	

図	番号	出土位置	系統	器形	口径	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	胎土	焼成	備考
25	159	北拡礫層	A	鉢	13.2	不明	不明	灰白	灰白	1～2㎜大砂粒含む	良好	
25	160	北拡C10区 165,175	A	小型丸底壺		指押さえ＋ハケ	不明	明赤褐	明赤褐	白色粒子・石英・微量の黒雲母	良好	
25	161	北拡C11区 175	A	鉢	8.8	不明	不明	橙	橙	3㎜以下の石英・長石等少量	良好	器高3.3cm
25	162	北拡C９区 175	C	壺？	22.4	ハケ	不明	浅黄橙	橙	2㎜以下の石英・長石・・赤色粒子・金雲母少量	良好	二重口縁壺
25	163	北拡C12区 165	Cs	鉢	12.6	ミガキ(底:ケズリ)	ハケないしヨコナデ	橙	橙	砂粒極少、精良	良好	
25	164	北拡BC10区 165	Cs	台付鉢	(6.4)	ハケ？（不明）	ハケ？（不明）	橙	橙	石英・微量の金雲母	良好	
25	165	北拡C10区 175	B	脚付鉢		口・胴:ナデ、脚:指ナデ	口:ヨコナデ、胴:指ナデ・板ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1㎜以下の細砂粒が僅か	良好	
26	166	北拡C９区 レキ層弥生	A	高坏	26.2	ハケ	ハケ？	橙	橙	石英粒・長石粒	良好	弥生後期後半
26	167	北拡140他	A	高坏	19.4	タタキ後ハケ後ミガキ	ナデ後ミガキ	赤褐	赤褐	白色粒子	良好	
26	168	北拡Ⅱ区北 162	A	高坏	(19.6)	上部:タタキ、下部ハケ	上部:ハケ後押さえ・ナデ、下部:ハケ	橙	橙	1.5㎜以下の石英・長石・赤色粒子・金雲母	良好	
26	169	北拡C11区 A168 SD01	B	高坏		タタキ後ハケ	ナデ	明赤褐	褐	2㎜以下の石英・長石等少量、4㎜大も含む	やや不良	
26	170	北拡C10区 175	B	高坏		ナデ？	不明	橙	にぶい黄橙	5㎜大の石英少量、2㎜以下の石英・長石やや多量	良好	
26	171	北拡C12区 175	B	台付鉢		タタキ後ナデ	ハケ	明赤褐	明赤褐	1㎜以下の石英・長石・金雲母ごく少量	良好	
26	172	北拡C９区	B	高坏？		タタキ後ナデ	筒:ナデ	橙	橙	3㎜以下の石英・長石・金雲母等少量	良好	
26	173	北拡包	B	高坏		ナデ	シボリ	橙	橙	1㎜以下の石英・長石・・赤色粒子・金雲母ごく少量	良好	
26	174	北拡C10区 175 SD01	Cs	高坏	20.1	ミガキ	口:ハケ後ヨコナデ、他は不明	橙	橙		良好	
26	175	北拡包	E	高坏	(14.8)	坏:タテハケ、筒:タテハケ	坏:ナデ、脚:ナデ	橙	橙	2㎜以下の石英・長石等ごく少量、精良	良好	
26	176	北拡C10区 礫層175	B	高坏	14.4	口:ヨコナデ、坏下:ハケ	板ナデ？（ハケ状工具痕）	浅黄橙	浅黄橙	2㎜以下の石英・長石・金雲母少量	良好	
26	177	北拡BC10区 165	5c～	高坏	13.8	ヨコナデ、ケズリ	ナデ	橙	橙	1.5㎜以下の石英・長石多く赤色粒子・金雲母少量	良好	5・6世紀
26	178	北区	蛸壺？	蛸壺？	7.0	ケズリ後ナデ	ケズリ	橙	橙	白色細砂・金雲母・赤色粒子	良好	蛸壺？
26	179	北拡包	手捏ね	ミニチュア	5.2	ハケ	ナデ	明赤褐	褐	白色粒子・少量の雲母	良好	
26	180	北拡C10区 175	手捏ね	ミニチュア	5.1	指押さえ	ナデ	橙	橙	微量の白色細砂・赤色粒子・金雲母少量	良好	器高2.5cm
26	181	北拡140	K	壺？		頸:タタキ後ナデ、胴:タタキ後ナデ	胴:ナデ、他は不明	灰白	灰白	微量の白色細砂　緻密　須恵質	良好	半島系？
26	182	北拡横砂	K	？		縄席文	不明	浅黄橙	浅黄橙	石英・赤色砂礫	良好	半島系？
27	183	Ⅱ区包140. 150	A	甕	24.7	口:ハケ後ヨコナデ、胴:ハケ	ハケ	黄橙	黄橙	3㎜以下の石英・長石・輝石・金雲母少量	良好	
27	184	Ⅱ区北162	A	甕	16.0	口:ヨコナデ、胴:ハケ	ハケ後ナデ	灰褐	橙	白色粒子・雲母・金雲母	良好	
27	185	Ⅱ区北端トレ下	A	甕	16.0	口:ヨコナデ、胴:ハケ	口:ハケ後ヨコナデ、頸:ナデ、胴:ハケ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1.5㎜以下の石英・長石・金雲母少量	良好	
27	186	Ⅱ区130・140・北175	B	甕	19.2	口:ハケ後ナデ、胴:タタキ	口:ハケ、胴:板ナデ	明赤褐	明赤褐	密1.5㎜以下の細かい粒子石英・長石　微量の金雲母	良好	
27	187	Ⅱ区北150	B	甕		頸:ナデ、胴タタキ	頸:指押さえ、胴:ケズリ？	橙	橙	2㎜以下の石英・長石・赤色粒子	良好	
27	188	Ⅱ区145	B	甕	17.8	口:指押さえ・ヨコナデ、胴:タタキ	口:ヨコナデ、胴:板ナデ	橙	橙	石英・長石	良好	
27	189	Ⅱ区140他	B	甕	16.7	口:タタキ後ハケ・ナデ、胴:太いタタキ	口:ヨコナデ、胴:ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	3㎜以下の石英・長石・赤色粒子・輝石等少量	良好	
27	190	Ⅱ区150	B	甕	17.6	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	橙	橙	石英・長石・多量の赤色粒子	良好	
27	191	Ⅱ区北150	B	甕	16.4	口:ハケ後ヨコナデ、胴:タタキ	口:ヨコナデ、頸:指押さえ、胴:ナデ	浅黄橙	浅黄橙	白色細砂、石英、金雲母、赤色粒子・黒色粒子	良好	
27	192	Ⅱ区150 南175	B	甕	12.0	口:タタキ後ヨコナデ、胴:タタキ	口:ヨコナデ、胴:ナデ	橙	橙	白色細砂、石英、金雲母、赤色粒子多量	良好	
27	193	Ⅱ区145・162	B	甕	14.0	口:タタキ後ヨコナデ、胴:タタキ	口:ヨコナデ、頸:指押さえ、胴:ナデ	橙	橙	白色細砂、石英	良好	
27	194	Ⅱ区北150	B	甕	14.0	口:ハケ後ヨコナデ、胴:タタキ	口:ヨコナデ、頸:指押さえ、胴:不明	浅黄橙	灰白	2㎜以下の石英・長石少量金雲母微量	良好	
27	195	Ⅱ区150	B	甕	15.4	口:タタキ後ヨコナデ、胴:タタキ	口:ヨコナデ、胴:ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の石英・長石少量角閃石微量	良好	
27	196	Ⅱ区150	B	甕	15.2	ハケ後ヨコナデ	口:ハケ後ヨコナデ、頸:ハケ	橙	橙	石英・長石・白色粒子・黒雲母	良好	
27	197	Ⅱ区140	B	甕		口:ヨコナデ、胴:タタキ	板ナデ	にぶい黄橙	褐灰	石英・長石	良好	
27	198	Ⅱ区150	B	甕		胴:タタキ	不明	黒褐（スス）	にぶい黄橙	2㎜以下の石英・長石・金雲母少量、4㎜大少量	良好	
27	199	Ⅱ区南162他	B	甕		タタキ後ハケ	板ナデ	にぶい黄橙	褐灰	白色細砂・灰色細砂	良好	
27	200	Ⅱ区南140他	B	甕	11.5	口:タタキ後ヨコナデ、胴:タタキ、底:板ナデ？	口:指押さえ後ヨコナデ、胴:ナデ、底:指押さえ	橙	橙	4㎜以下の石英・長石・赤色粒子・金雲母・輝石	良好	器高12.2cm
27	201	Ⅱ区南175	B	甕	11.4	口:ヨコナデ、胴:タタキ	口:ヨコナデ、胴:ケズリ	橙	橙	2㎜以下の石英・長石・金雲母・輝石等少量	良好	
27	202	Ⅱ区130	B	甕	11.5	タタキ後ナデ	ハケ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白色細砂、石英、金雲母、赤色粒子多量	良好	

図	番号	出土位置	系統	器形	口径	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	胎土	焼成	備考
27	203	Ⅱ区140	B？		(4.5)	タタキ後ナデ・ハケ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	白色細砂	良好	
27	204	Ⅱ区北拡162	B	甕		タタキ・ハケ	ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の石英・長石等少量	良好	
27	205	Ⅱ区北162・175	B	甕	15.6	タタキ後ハケ？	口:ヨコナデ、胴:ケズリ・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白色粒子・黒色粒子・石英・長石・赤色粒子	良好	
27	206	Ⅱ区包	B	甕		タタキ後ナデ・板ナデ	ケズリ後ナデ	橙	にぶい黄橙	白色粒子・黒色粒子・石英・長石・赤色粒子	良好	
27	207	Ⅱ区南162北156他	B(A)	甕	15.8	口:ナデ、胴:タタキ後ハケ	口:ヨコナデ？胴:ケズリ(下部ハケ残る)	浅黄橙	浅黄橙	1.5㎜以下の石英・長石・赤色粒子少量、5㎜大あり	良好	器高25cm
27	208	Ⅱ区130他	B？(搬)	甕	18.9	口:ヨコナデ、胴上:タタキ、胴下:ハケ	口:ハケ後ヨコナデ、胴:ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の石英・長石、3㎜大微量	良好	西瀬戸内？(搬)
27	209	Ⅱ区北140、175他	B？(搬)	甕	17.6	口:ヨコナデ、胴:不明	口:ハケ後ヨコナデ、胴:ケズリ	浅黄橙	浅黄橙	3㎜以下の石英・長石等大量	良好	
28	210	Ⅱ区北拡140他	B	甕	12.4	口:ヨコナデ、頸:ハケ＋ヨコナデ、胴:ハケ	口:ハケ、胴:ケズリ	浅黄橙	浅黄橙	3㎜以下の石英・長石・少量、金雲母微量	良好	
28	211	Ⅱ区南150・162	B(D)	甕	12.9	口:ヨコナデ、頸:ハケ後ヨコナデ、胴:ハケ目	口:ヨコナデ、胴:ケズリ	灰白	灰白	2㎜以下の石英・長石・赤色粒子・金雲母等少量	良好	
28	212	Ⅱ区横砂	D	甕	15.0	口:ヨコナデ？、胴:ハケ	口:ハケ、胴:ケズリ	明赤褐	明赤褐	白色細砂	良好	
28	213	Ⅱ区包	D	甕		不明	ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	2㎜以下の石英・長石・輝石・金雲母少量	やや不良	
28	214	Ⅱ区130	A(D)	甕	22.0	口:ヨコナデ、胴:ハケ	口:ハケ後ナデ、頸:ナデ、胴:ケズリ	橙	橙	白色細砂・0.5㎜程の石英粒・微量の金雲母	良好	
28	215	Ⅱ区包117	E(搬)	甕	15.4	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	1㎜以下の石英・長石・キ石・金雲母等微量	良好	
28	216	Ⅱ区南162	E(搬)	甕		口:ヨコナデ	口:ヨコナデ、胴:ケズリ	浅黄橙～赤橙	浅黄橙～赤橙	石英・長石	良好	二次焼成を受ける
28	217	Ⅱ区150	5c～	甕	15.2	ハケ後ナデ	ハケ後ヨコナデ	橙	橙	白色細砂・石英長石粒	良好	5世紀
28	218	Ⅱ区横砂	D	甕か壺		ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1.5㎜以下の　石英・長石・金雲母細粒子	良好	(ⅢB期)
28	219	Ⅱ区北162	5c～	胴部破片		ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	にぶい黄橙	灰黄橙	石英長石粒・金雲母	良好	5世紀
28	220	Ⅱ区北150	5c～	壺	17.2	口:ヨコナデ、頸:ヨコナデ、ハケ工具による刻みあり	ハケ後ヨコナデ	橙	橙	3.5㎜以下の石英・長石金雲母多い	良好	
28	221	Ⅱ区140	A	壺		ハケ後ヨコナデ	ハケ後ナデ	橙	にぶい黄橙	白色粒子・石英・長石・雲母	良好	
28	222	Ⅱ区150	A	壺		ナデ	ナデ	橙	橙	3㎜以下の石英・白色粒子少量	良好	弥生後期後半～ⅠA期
28	223	Ⅱ区北150	A	壺		ナデ	ナデ	橙	橙	2㎜以下の石英・白色粒子少量	良好	
28	224	2区130	A	壺		タタキ後ハケ	ハケ	褐灰	にぶい橙	白色粒子・石英・雲母・金雲母	良好	
28	225	Ⅱ区150	E	甕か壺		ヨコナデ	ヨコナデ	橙	橙	白色細砂・0.5㎜程の石英粒・微量の金雲母	良好	
28	226	Ⅱ区北150	A	壺？		頸:ハケ、胴:ハケ	ハケ(突帯の裏はナデ)	橙	橙	石英・長石・　白色細砂赤色粒子	良好	突体に板材刺突十字文
28	227	Ⅱ区150	A	甕？		ハケ、突帯:ハケ工具先端の刺突	ハケ	明赤褐	明赤褐	石英・長石	良好	外面:赤色顔料？
28	228	Ⅱ区南175	A	甕？		上部:平行タタキ、下部ハケ	ハケ	浅黄橙	明黄褐	石英・長石・金雲母・雲母	良好	
28	229	Ⅱ区南162	A	壺		タタキ後ハケ	ハケ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・長石多量	良好	
28	230	Ⅱ区北162	Cs	壺		不明	頸:指押さえ後ハケ、胴:ハケ	橙	橙	1.5㎜以下の石英・長石・赤色粒子ごく少量、精良	良好	
28	231	Ⅱ区北162	B(Cs)	小・壺		ハケ後ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英粒・白色細砂・赤色粒子・金雲母	良好	
28	232	Ⅱ区北162	手捏ね	ミニチュア	6.7	ナデ・指押さえ	ナデ・指押さえ	浅黄	浅黄	白色粒子・少量の雲母	良好	
28	233	Ⅱ区包	B	甕底部		タタキ後ハケ	ハケ＋指押さえ	灰黄褐	黄灰	白色細砂・石英・赤色粒子	良好	
28	234	Ⅱ区レキ層	B	甕底部		タタキ後ハケ	ケズリ後ナデ	黒褐	灰褐	石英・長石	良好	
28	235	Ⅱ区レキ層	A	高坏	21.6	ナデ	ハケ後ナデ？	橙	橙	石英・長石・金雲母・赤色粒子	良好	
28	236	Ⅱ区140・162	A	高坏	21.8	ハケ後ミガキ	ハケ	橙	橙	1.5㎜以下の石英・長石・金雲母少量	良好	
28	237	Ⅱ区横砂	A	高坏		坏:ハケ後ナデ、筒:ハケ後ミガキ	坏:ハケ後ナデ、筒:ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1㎜以下の石英・長石・・赤色粒子・金雲母少量、5㎜大粒子少量	良好	
28	238	Ⅱ区150	B	台付鉢		ナデ後ミガキ	坏:ナデ、筒:不明	橙	橙	1.5㎜以下の石英・長石多く赤色粒子・金雲母少量	良好	
28	239	Ⅱ区	B	台付鉢	(8.1)	ハケ後ナデ	ハケ	浅黄橙	浅黄橙	白色粒子	良好	
28	240	Ⅱ区北150	B	台付鉢		ハケ、ヨコナデ	板ナデ	浅黄橙	浅黄橙	5㎜大の石英少量、白色粒子	良好	
29	241	Ⅱ区北端トレ下	A	高坏	33.0	ハケ	ハケ	橙	橙	石英・長石・金雲母	良好	ⅠA期
29	242	Ⅱ区130・南端151他	B(C)	高坏		坏上:ハケ後ミガキ、坏下:ミガキ？、筒:ナデ後ミガキ	坏下:ナデ、筒上:シボリ＋ナデ、筒下:ハケ	黄橙	橙	2㎜以下の石英・長石・赤色粒子・金雲母等少量	良好	器高22.6cm
29	243	Ⅱ区150	D？	高坏	15.2	ナデ	ナデ	橙	橙	金雲母微量、精良	良好	
29	244	Ⅱ区包最北部東壁	B	高坏？		ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙	淡橙	3.5㎜以下の石英・長石・金雲母	良好	
29	245	Ⅱ区横砂	B(D)	高坏		坏:ハケ後ミガキ、筒:ナデ	坏:板ナデ後指ナデ、筒:シボリ・ナデ	橙	橙	白色細砂・金雲母・赤色粒子	良好	
29	246	Ⅱ区横砂	B	高坏		ナデ後ミガキ	坏:ハケ	橙	にぶい褐	1.5㎜以下の石英・長石多く赤色粒子・金雲母少量	良好	

図	番号	出土位置	系統	器形	口径	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	胎土	焼成	備考
29	247	Ⅱ区150	B	高坏		ナデ	ケズリ	浅黄橙	浅黄橙	3㎜以下の石英・長石・赤色粒子等少量	良好	
29	248	Ⅱ区	B(D)	高坏	(15.8)	ハケ後ヘラ描き	脚上:ケズリ、脚下:ヨコナデ					
30	249	中区SD01	A	甕	21.4	ハケ	ハケ	にぶい黄橙	橙	1.5㎜以下の石英・長石が少量	良好	
30	250	北拡SD01	B	甕	16.0	口:ヨコハケ後ヨコナデ、胴:タテハケ後ヨコナデ	タテハケ後ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・長石	良好	
30	251	北拡SD01	C(筑前)	甕	15.0	タタキ+ハケ	口:ナデ、胴:ケズリ	灰白	灰白	白色・黒色細砂・金雲母	良好	
30	252	SD01	B	甕	21.8	口:ヨコナデ、胴:ハケ	ハケ後ナデ	にぶい橙	にぶい橙	白色細砂	良好	
30	253	SD01	D	甕		ハケ	ケズリ	灰黄	灰黄	白色細砂	良好	
30	254	表土	D	甕		ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	2㎜以下の石英・長石・金雲母	良好	ⅢA期
30	255	SD01 北区	D	壺か甕		ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙	橙	1.5㎜以下の石英・長石・キ石・金雲母少量	良好	ⅢB期
30	256	北拡SD01	B	甕		タタキ(一部にハケ残存)	指押さえ	橙	褐灰	石英粒・黒色の小礫	良好	
30	257	北拡SD01	B	甕	(3.5)	タタキ後指押さえ	ハケ	にぶい黄橙	灰白	白色細砂・石英粒	良好	
30	258	南拡	A	甕?		ハケ(細)	ハケ(細、部分的に太)	にぶい橙	橙	石英・長石金雲母	良好	
30	259	表土	K	破片		格子目叩き	ナデ	にぶい黄橙	褐灰	白色細砂・金雲母	良好	
30	260	中区SD01	B	壺	12.6	ヨコナデ後ミガキ	ハケ後ミガキ	にぶい橙～浅黄橙	にぶい橙～浅黄橙	2㎜以下の石英・長石が主。微量の金雲母	良好	
30	261	SD01	C?	壺	21.9	ハケ後ヨコナデ	ヨコナデ・ミガキ	浅黄橙	にぶい黄橙	3㎜以下の石英・長石・赤色粒子、金雲母微量	良好	内面:上部黒変
30	262	攪乱	B(西郷戸内?)	壺	15.6	ナデ	ハケ後ナデ	淡赤橙	灰	白色細砂、金雲母	良好	口縁部にヘラ描き・竹管文様あり
30	263	中区SD01底	C	甕		ハケ後ナデ、櫛描波状あり	ハケ	橙	橙	金雲母・赤色粒子・白色細砂	良好	
30	264	攪乱	B(Cs)	小型丸底壺		ハケ後ナデ	頸:指押さえ、胴:ケズリ	橙	橙	白色細砂	良好	
30	265	南区攪乱	B	壺	11.2	ハケ後ナデ	口:ハケ後ナデ、胴:ケズリ	赤褐	明赤褐	白色細砂	良好	
30	266	南区SD01	B	鉢	17.8	ハケ	ハケ後ナデ	橙～明赤褐	橙	金雲母・赤色粒・ 白色細砂 緻密	良好	
30	267	SD01 3層	B(Cs)	小型丸底壺	9.6	ハケ後ヨコナデ	ハケ後ヨコナデ	橙	橙	石英・赤色粒子・白色粒子・・金雲母	良好	
30	268	南SD01	B(Cs)	小型丸底壺		頸:ミガキ・ハケ、他は不明	口:ハケ、胴:ケズリ	浅黄橙	浅黄橙	白色細砂・金雲母・赤色粒子	良好	
30	269	南区SD01	E(鼓)	鼓形器台		ヨコナデ	ハケ後ミガキ	浅黄橙	浅黄橙	石英・黄細砂	良好	
30	270	レキ層中	A	高坏		口:ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ?	浅黄橙	にぶい橙	長石・金雲母 緻密	良好	外面:口縁端付近に黒斑
30	271	SD01	A	高坏	23.8	ハケ後ナデ	ハケ	橙	橙	2㎜以下の石英・金雲母少量	良好	
30	272	石垣外	D	高坏		ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ	橙	橙	微量の白色細砂・金雲母	良好	ⅢA期
30	273	北拡SD01	Cs	高坏		ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ	橙	橙	1㎜以下の石英・長石・金雲母	良好	
30	274	南SD01	B	高坏		坏下:ミガキ、筒:ハケ+ミガキ	坏:ハケ後ミガキ、筒:指ナデ	橙	橙	石英・金雲母ごく少量	良好	
30	275	南拡攪乱	B	高杯		ケズリ	シボリ、下部は後にケズリ	橙	橙	1㎜以下の石英・長石・金雲母・赤色粒子	良好	
30	276	SD01 北区	5c～	甕	21.6	ハケ後ヨコナデ	不明	にぶい褐	にぶい橙	1㎜以下の石英・長石・赤色粒子微量	良好	
30	277	表土	5c～	壺	17.2	口:ハケ+ナデ、胴:ナデ	ハケ+ナデ	丹塗りか	明赤褐	白色細砂	良好	

6　弥生時代の遺構と遺物

(1)　遺構と包含層

弥生時代の遺物は石斧製作に関する廃棄遺物と生活道具の廃棄遺物である。遺物自体はほぼ調査区全域から出土するが、石斧製作時に出たチップ・フレイク等をまとめて捨てたのは、Ⅰ区ＳＤ01西岸に限られる。北側拡張区やⅡ区でも遺物は出土するが、その量はかなり少なく、かつ古墳時代遺物と混在している。以下Ⅰ区の状況について述べる。

弥生時代と考えられる石斧未製品は、縄文時代に堆積した風成砂の最上部からも数点出土するが、これは自重で沈んだものと考えられる。該期の包含層は風成砂層の上に堆積する暗褐色砂まじり土より上で、この層の上部には大小の礫を大量に含んだ層があり、量的には土よりも多く礫層といっても良い層である。礫は拳大から30㎝以上まで様々な大きさのものでほぼ全面に認められる。礫層は最も厚い部分で35㎝を測る。礫の合間に石斧の未製品・フレイクやチップ・弥生土器片などが多く出土する。この層の形成原因はよく分からないが、少なくとも海岸べたの礫ではなく、上方から土石流のように流れてきたものでもない。人為的に廃棄した、もしくは集積した礫ではないかとも考えられるが、明瞭ではない。礫の間にある遺物は特にまとまっておらず、礫と一緒に捨てたという描写があっている状況である。

礫層の上には厚さ50㎝前後の褐色から暗褐色の砂まじり土層があり、その層の中にコンテナ200箱以上の石斧製作時のフレイクやチップ、弥生土器の破片や石器などの遺物が出土する。フレイクやチップはこの層の全体には散漫に分布するが、層の随所に土をほとんど含まずに円形や不定形にフレイクやチップのみが集中する部分がある。この集中部分をユニットと呼ぶ。各ユニットは部分的に重なっているため明瞭に分けづらいものもあるが、集中の度合いや上下のレベル差によってＡ１群からM群まで17のユニットに分けた。ユニットはさらに細分できそうなものや、あるいは逆に統合すべきユニットもあるかと思われる。ユニットの中には遺物を取り上げるために便宜的に名前を付けたものもあるため、すべてがチップ・フレイクの集中部分というわけではない。

ユニットは撹乱やＳＤ01などで破壊された部分を除きⅠ区の中程から南側（中区から南区北半）に分布している。レベル的には、全体が南東に傾斜しているためすべての上下関係がわかるわけではないが、Ｄ１・Ｄ２・Ｌ・Ｂ２・Ｍ・ＫのＳＤ01西岸近くのユニットは標高3.1m前後のユニットと標高3.4m前後のユニットの大きく２つに分けられる。その他のユニットも若干のレベル差を持った部分がある。各ユニットの構成遺物は異なり、小さなチップのみのユニットや、大型のフレイクのユニット、

写真13　土層断面に見えるチップと礫層

写真14　弥生礫層

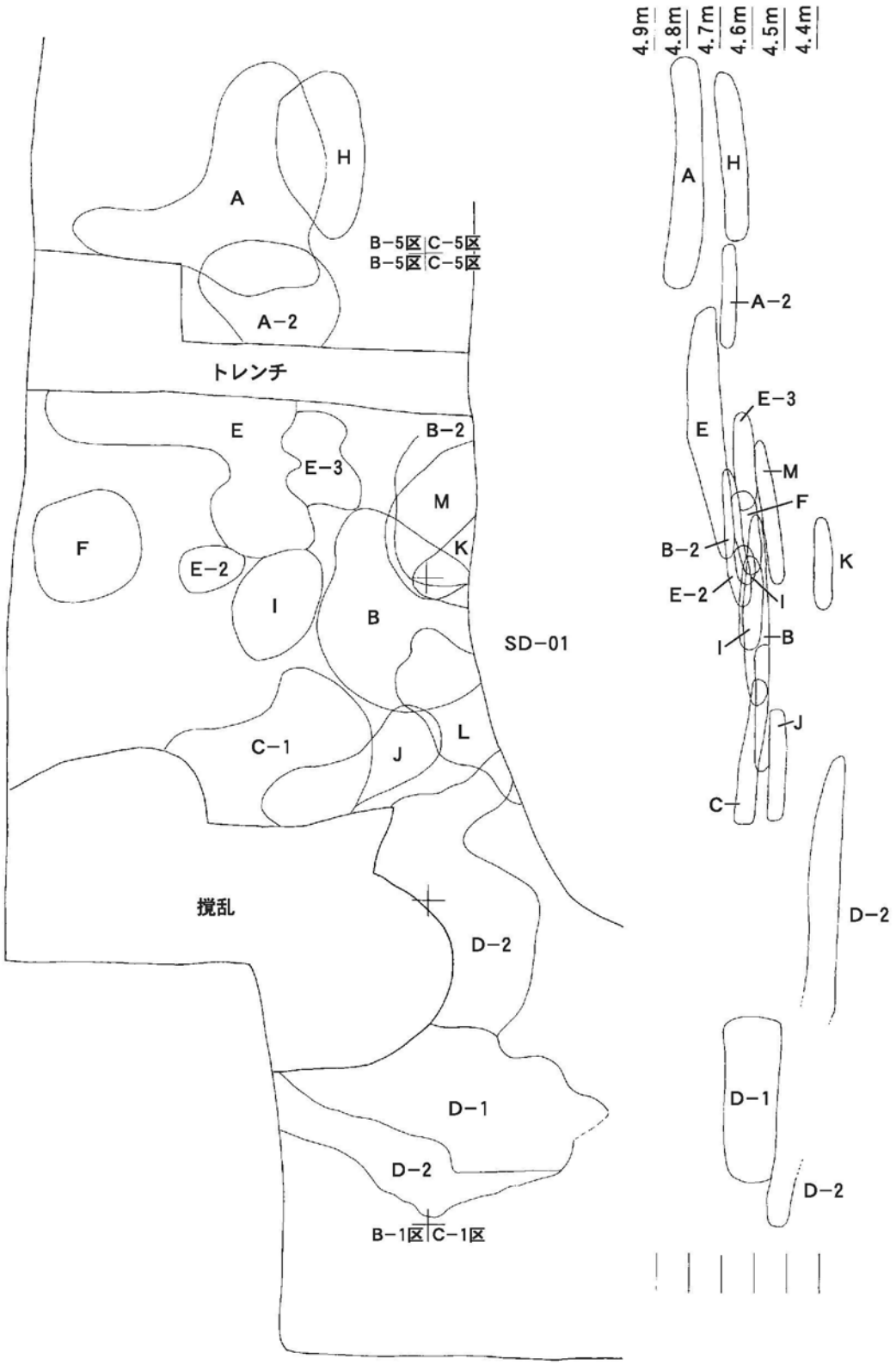


図35　Ⅰ区弥生時代チップ等ユニット位置図（平面図１／40・立面図１／20）

あるいは土器や未製品を多く含むものなど様々である。ユニットを含む土層は全体として一つの層として分類しているが、実際は場所によって微妙に色調などが異なっており、さらに細分が可能と思われるが、分層しきれなかった。各ユニットの詳細については出土遺物の項でまとめて述べる。

⑵　出土遺物

出土遺物は、弥生土器・土製品・石器・石器未製品・石器製作具に大別し、さらに各ユニット出土遺物・ユニット外の包含層（礫層より上部）出土遺物・礫層及び礫層直下砂層出土遺物・ＳＤ01等その他の地点の出土遺物に分けて説明する。

①　弥生土器

ユニット出土土器（図37）

１・２はＡ群出土。１はやや上げ底の底部で、底径７㎝を測る。３はＡ－２群と南区礫層の接合資料。全面ナデかヨコナデで復元口径26.8㎝を測る。４・５・９～11はＢ群出土。いずれも鋤先口縁の甕であるが、それぞれ口縁の傾き差が大きい。５は口縁下に三角突帯１条を巡らし、口縁内面は外反する。９は復元口径23.3㎝を測る。胴部外面はハケ目、内面はナデで仕上げる。胎土は粗い。10は復元口径26.4㎝を測る。胴部外面は間隔のあいたハケ目、内面は指おさえ＋ナデ調整である。11は全体に口縁部が内傾する甕で、外面はハケ目、内面はナデ調整である。６・７はＣ群出土の甕口縁部片。８はＤ－１群出土の鉢で、復元口径10.4㎝、器高9.1㎝を測る。外面上部はハケ目、下部は指おさえ＋ナデ、

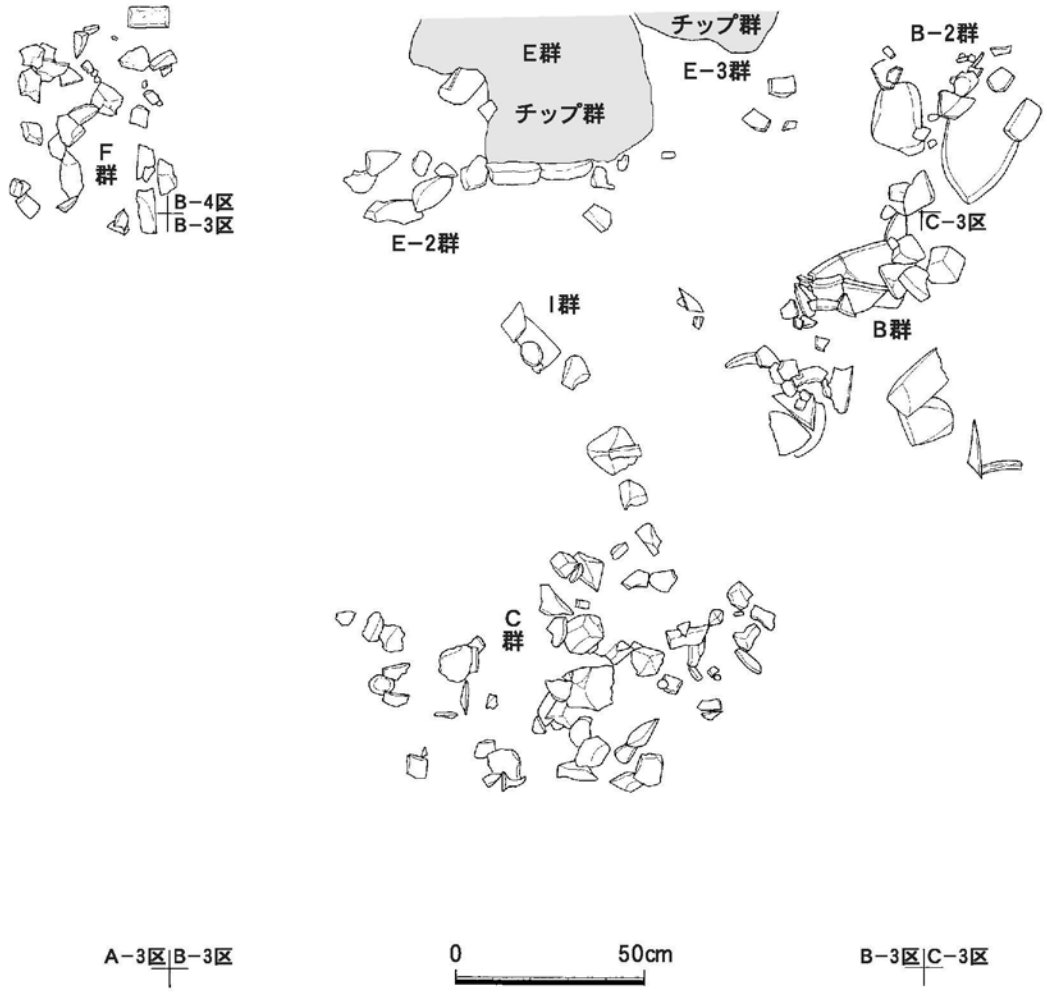


図36　ユニットＢ・Ｃ・Ｅ・Ｆ・Ｉ群実測図（１／20）

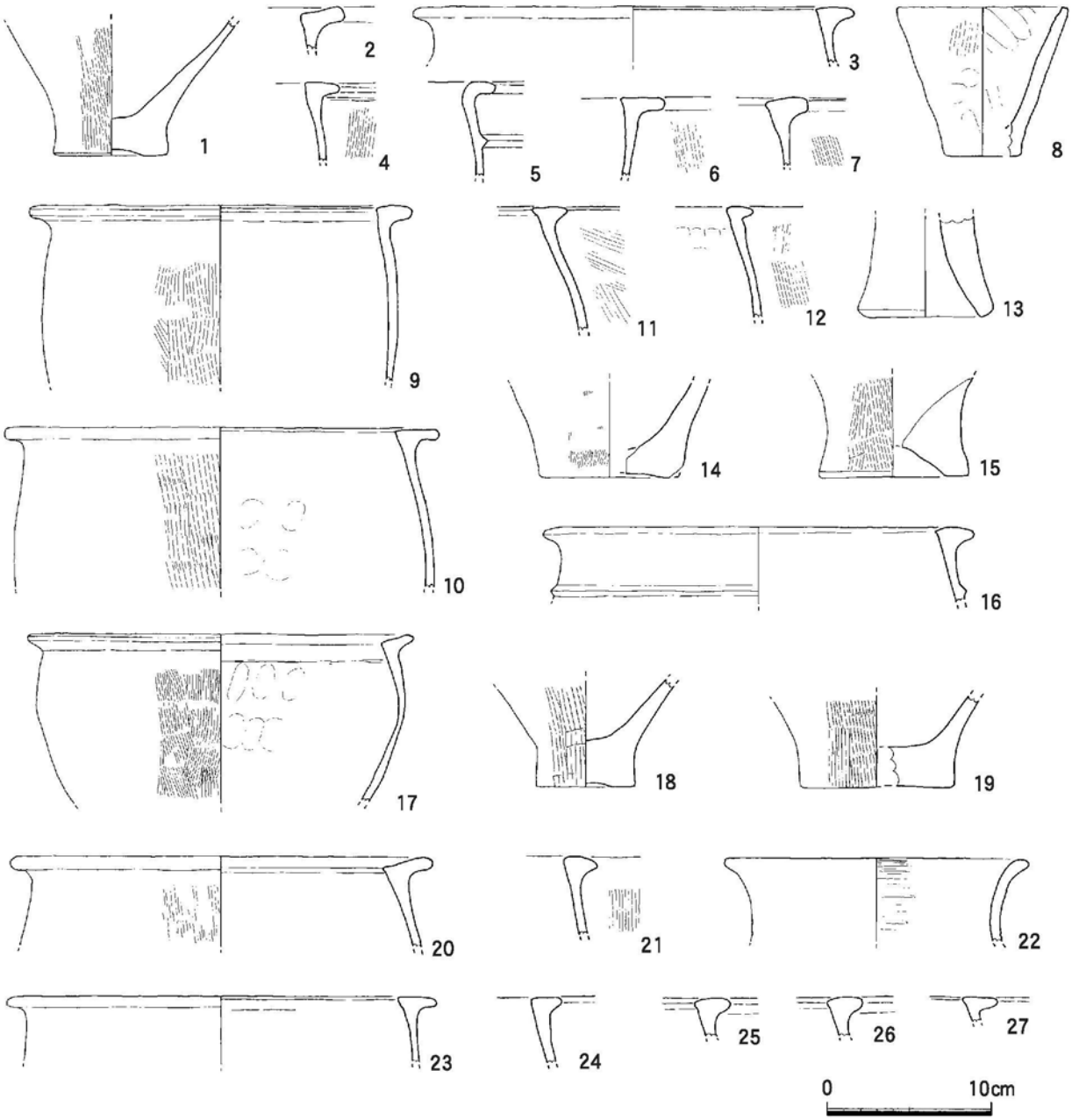


図37　ユニット出土弥生土器実測図（¼）

口縁部内面はケズリ気味の指おさえ、下部はナデである。全体的に歪んでいる。12から16はD群出土。12は全体的に内傾する甕の口縁部片で、外面ハケ目、内面は指おさえ＋ナデ調整である。13は器台で復元脚部径8.2cmを測る。両面とも丁寧なナデ調整を施している。14・15は甕の底部片である。16は口縁下に三角突帯１条を巡らす甕である。全面ヨコナデで仕上げている。17・18はE群出土。17は復元口径23.4cmを測る。胴部外面はハケ目、内面は指おさえ＋ナデ調整を施す。18は甕の底部片で、底径６cmを測る。ハケの目は１mm以上あり太い。19はF群出土の甕底部片。底径9.2cmを測る。20・21はH群出土の甕口縁部片である。20は復元口径24.6cmで外面にハケ目を施す。21は復元口径26.1cmを測り、外面はナデで仕上げている。23は短い鋤先口縁部片で、外面ハケ目、内面ナデ調整である。22はJ群

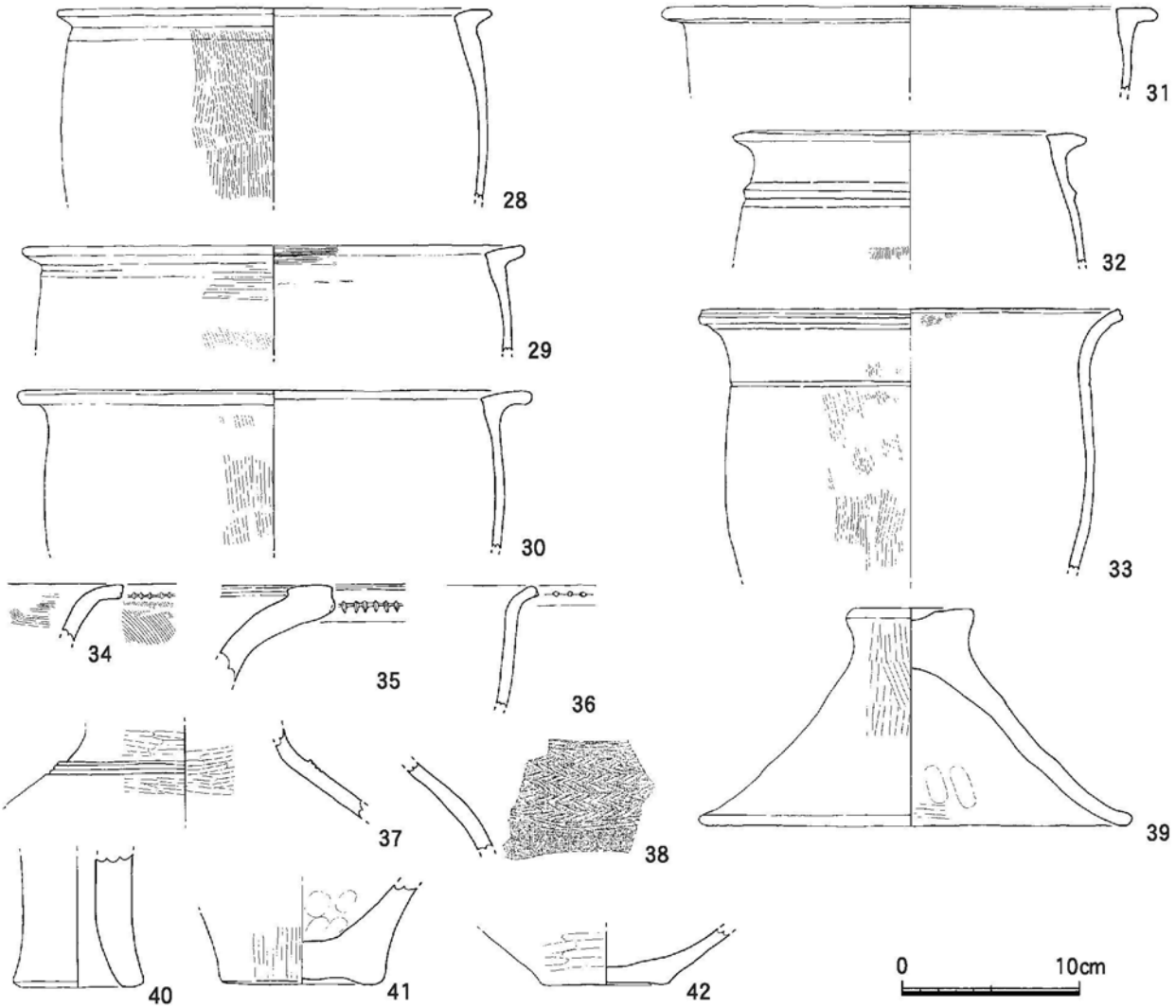


図38　Ⅰ区包含層出土弥生土器実測図（¼）

出土の壷で、復元口径18.4cmを測る。外面ヨコナデ、内面はヘラナデである。24はＬ群出土の甕口縁部片で、全面ナデで仕上げる。25～27はＭ群出土。いずれも短い鋤先口縁の破片である。

Ⅰ区包含層出土土器（図38）

Ⅰ区（北区・中区・南区）の礫層より上の層で、ユニット以外から出土した弥生土器である。28は南区上層から出土した甕で、復元口径24.5cmを測る。外面には丁寧な縦方向のハケ目、内面はナデ調整を施している。南区中層出土の甕で、胴部外面は縦方向のハケ目の後ナデ、内面はナデ調整である。口縁部付近は均等なヨコナデを施しており、回転台を使用していると思われる。復元口径24.2cmを測る。30は南区から出土した甕で、復元口径29cmを測る。32は中区中層出土の甕で、復元口径20cmを測る。口縁部下に三角突帯１条を巡らせる。33はⅠ区中央に入れたトレンチ下層出土の甕で、口唇部と頸部に沈線を１本づつ施している。外面はハケ目、内面は口縁部がハケ目で、他はナデ調整である。復元口径23.8cmを測る。34は南区下層出土で口唇部に刻目を施している。35は中区南側中層出土の大型甕で、同じく刻目を施している。36は中区北側２層褐色土出土で、刻目を施している。調整は摩滅のため不明。39はＢ－７区西壁出土の蓋である。口径24.4cm、器高12.3cmを測る。口縁部外面から内面

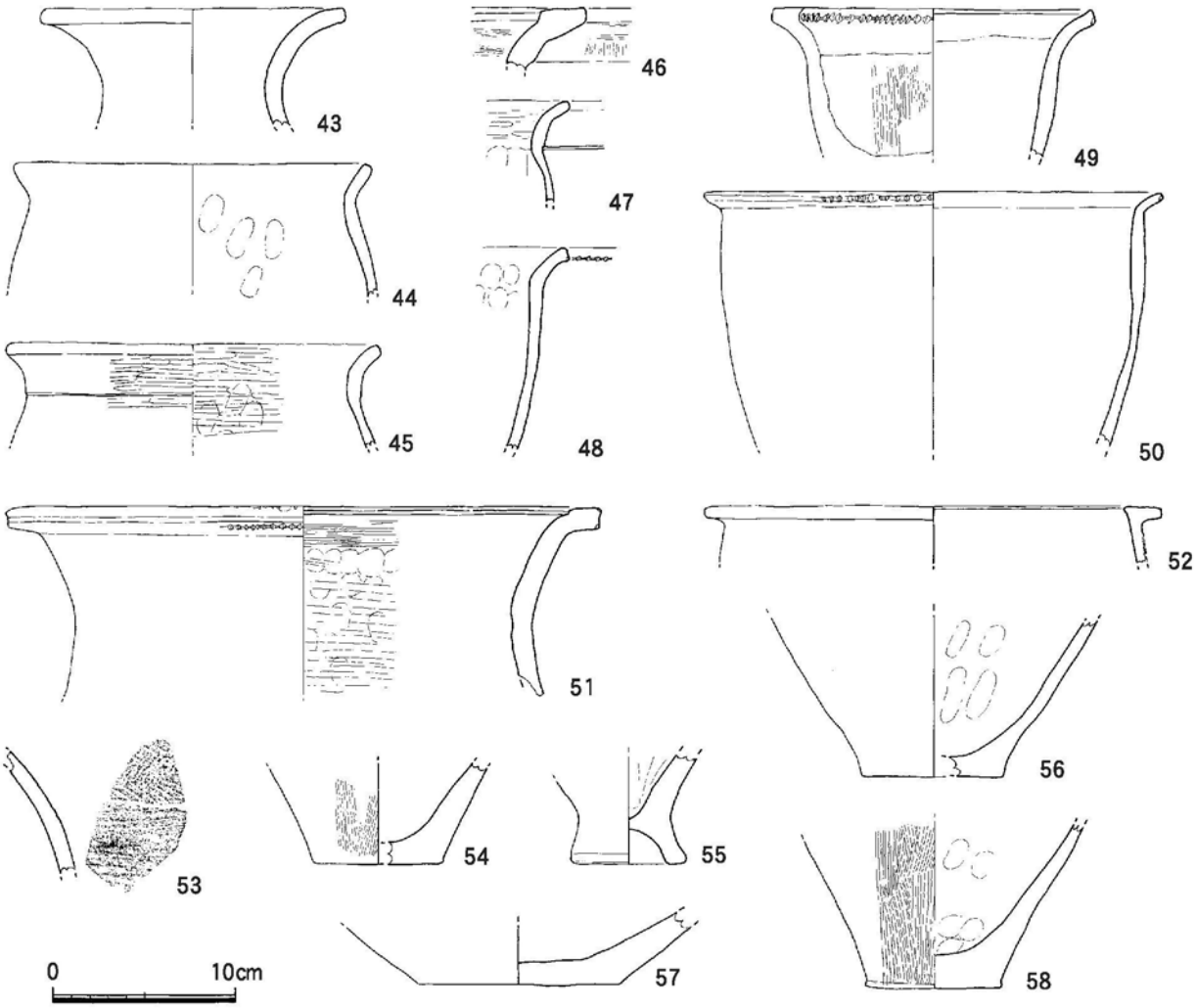


図39　Ⅰ区礫層出土弥生土器実測図（¼）

は指おさえ＋ナデ、他は目の粗いハケ目である。37は南区下層出土の壷で、頸部に３段の沈線が走るが、あたかも突帯状の段のようになっている。調整は沈線周辺が両面ともヘラミガキ、胴部は内面がナデ、外面はヘラ磨きの後になでているようである。38は中区下層出土での壷で、上下３本ずつの沈線の間に貝殻腹縁による４重の無軸羽状文を施している。調整は内面はナデ調整、外面はミガキである。41は中区２層出土の甕の底部片で、底部径8.8cmを測る。42は39と同一場所から出土した壷底部片で、底部径7.2cmを測る。外面は磨いている。40は中区中層出土の器台で、底部径7.4cmを測る。

Ⅰ区礫層出土土器（図39）

Ⅰ区礫層の内、南区礫層については前述のようにその最上面に古式土師器までを含んでいるため、本来は別項を立てるべきであるが、量的に少ないため、ここで触れる。また礫層の直上の層と直下から出土した土器も含めた。

43はＢ－６区出土の壷口縁部片で、復元口径16.6cmを測る。壷形の器形であるが、外面に煤が付着している。調整は全面ナデである。44は中区北半出土の甕で、口唇部に刻目を施す。復元口径19.6cmを測る。調整は外面口縁部がヨコナデ、他はナデ、内面は指おさえ＋ナデである。45はＡ－５区出土の壷で、口縁部は比厚し、頸部との間に段が付く。復元口径約20cmを測る。内面口縁部はヘラミガキ、

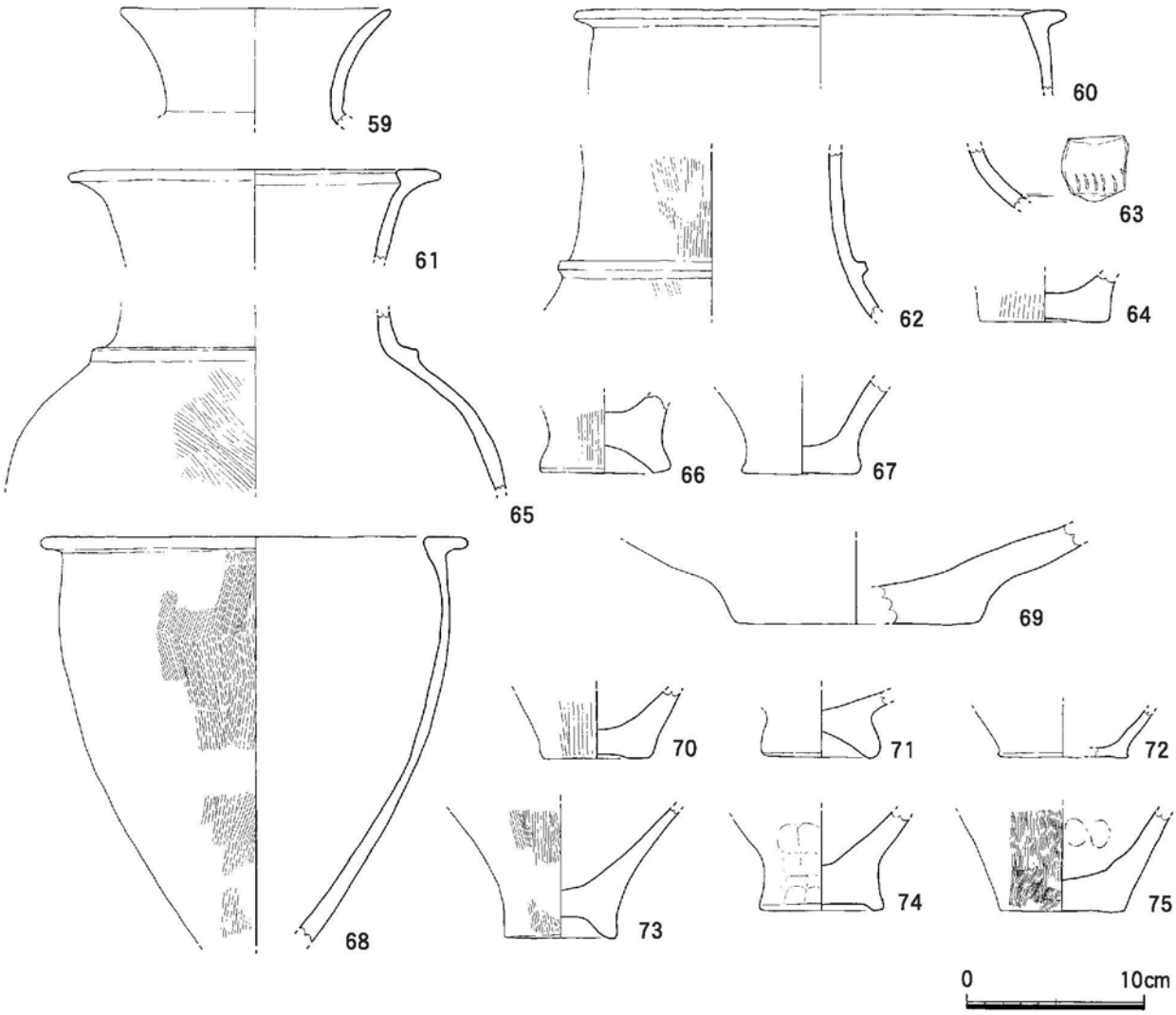


図40　北側拡張区・Ⅱ区・その他の遺構等出土弥生土器実測図（¼）

頸部から下は指おさえ＋ナデ、外面は摩滅のため不明である。46は中区出土。47はＡ－５区出土で、形態は45に似るが、頸部直下が丸みを帯びている。調整は外面口縁部がヨコナデ、胴部はナデ、内面は口縁部がヘラミガキ、胴部が縦方向の指ナデ＋ナデである。48は中区礫層直下の砂層から出土。口唇部に刻目を施している。49はＢ－６区で出土した甕で、復元口径17.6cmを測る。口唇部に大きめの刻目を施す。調整は口縁部がヨコナデ、外面胴部ががハケ目、内面がナデである。50は中区出土の甕で、復元口径24.8cmを測る。口唇部に刻目を施す。調整は口縁部が両面ともヨコナデで、他はナデ調整である。51はトレンチ下層の礫層直上層から出土した壷である。口縁端部は歯ブラシ状に肥厚し、口唇部に沈線が走る。また口唇部上端と下端には刻目を施している。外面はヨコナデ、内面は口縁部が横方向のハケ目、口縁直下から下は指おさえの後横方向のヘラナデである。52は南区礫層出土。断面Ｌ字形の甕口縁部片である。53は中区ＳＸ01下の礫層出土。貝殻腹縁押圧による２重の無軸羽状文と３本の沈線が施されている。54は礫層下の砂層出土の甕底部片で、底部径6.9cmを測る。55は南区礫層出土の甕底部で、上げ底である。底部径6.8cmを測る。56はＡ－５区出土で、底部径7.6cmを測る。調整は全面指おさえ＋ナデである。57は底部径11cmを測る。58はＢ－３区出土で、底部径7.4cmを測る。外面は

1㎝に6本の目がある細かいハケ目、内面は指おさえ＋ナデである。

その他の地点の出土土器（図40）

ＳＤ01やＳＣ03などの遺構や、Ｉ区北区ＳＤ01東岸（東岸）・北側拡張区（北拡）・２区・表土・撹乱等他時期の遺物と混在していたものである。

59は北拡出土の壷口縁部片で、復元口径10.5㎝を測る。頸部に沈線を１本施している。60は北拡出土。調整は摩滅のため不明だが、ナデのようである。復元口径20.6㎝を測る。61は東岸出土の壷で、復元口径15.6㎝を測る。62は北拡出土の壷で、頸部に断面台形の突帯１条を施している。外面はハケ目、内面はナデである。63は北拡出土で、爪形の刺突文を施している。両面丁寧なナデ調整である。65は北拡出土の壷で、頸部に断面三角形の突帯１条を施している。胴部外面はハケ目、頸部内面は指おさえ、他は摩滅しているが、ナデのようである。66・67は北拡出土の甕底部で、66は上げ底である。66の外面がハケ目調整以外はナデである。68～72はＳＤ01出土である。68は甕の大型破片で、復元口径約18㎝を測る。鋤先口縁で外面にハケ目、内面は指押さえ・ナデを施している。70～72は底部で、71は上げ底。73～75は底部で、73・74は表土、75は撹乱出土である。

②　石器・石器未製品

出土した石器は石斧・碇石・石錘・敲石・磨石・砥石・石包丁・石剣・石鏃・ＵＦがあり、未製品は石斧・石錘（碇石）・石包丁・石鎌・不明品がある。ここでは今山遺跡を代表する玄武岩製石斧及び同未製品をまず取り上げ、次に石包丁・石鎌及び同未製品を取り上げる。以下碇石・石錘及び同未製品、石鏃・石剣・石鑿、敲石・磨石他の石器加工具等の順に記述する。最後に大量に出土した玄武岩剥片・チップの順に記述する。

玄武岩製石斧及び未製品

玄武岩製石斧の未製品であるが、正確には失敗品と呼ぶべきものが殆どである。ほとんど全域から出土したが、弥生時代の層から出土したのは、Ｉ区のユニットと南区を除く上部包含層・礫層及びその上下の薄い層で、その他は古墳時代遺物などとともに出土したり、別の時期の遺構から出土したものである。玄武岩製石斧未製品は約250点出土した。また磨製石斧の製品も２点出土した。割れた未製品についてはそれぞれ接合を試みたが、ほとんど接合しなかった。

未製品の工程分類については、従来中山平次郎博士の分類を元に第Ｉ工程（粗割）第Ⅱ工程（打裂）第Ⅲ工程（敲打）第Ⅳ工程（研磨）の４工程が示されている。今山遺跡第３次調査報告書では、素材の形態によって第Ｉ工程と第Ⅱ工程の分類不可が指摘されているが、詳細はまとめで触れるが、本調査地点でも同様の状況を示している。もともと第Ｉ工程と第Ⅱ工程の差が微妙なものがあるが、４工程分類で当調査区の出土未製品を工程別に点数を示すと、第Ｉ工程22点、第Ⅱ工程105点、第Ⅲ工程61点、第Ⅳ工程６点である。もともと石斧に近い自然礫を縁辺調整のみ施しているものは第Ⅱ工程にいれた。また第Ⅳ工程の６点のうち１点は明らかに使用している。以下、出土地点・層位毎に記述するが、法量等の情報は表３に記載している。なお図の左面をＡ面、右面をＢ面として説明する。

ユニット出土玄武岩製石斧未製品（図41～44）

Ｉ区の礫層より上にある弥生時代包含層上層のＡ～Ｋユニットから出土した未製品である。各ユニット毎に説明する。なおユニットの詳細については、弥生時代出土遺物の最後の項である「ユニット出土剥片・チップ」で説明する。

１・２・４～９はＡ群である。１・２は第１工程の未製品。１はＡ面に自然面をほとんど残しており、元は角が丸みを帯びた長めの角礫であったと思われる。加工しているＢ面は大きく両側から剥離を施した後、側縁部のやや細かな調整を施しているが、交互剥離までは至っていない。２も自然面を

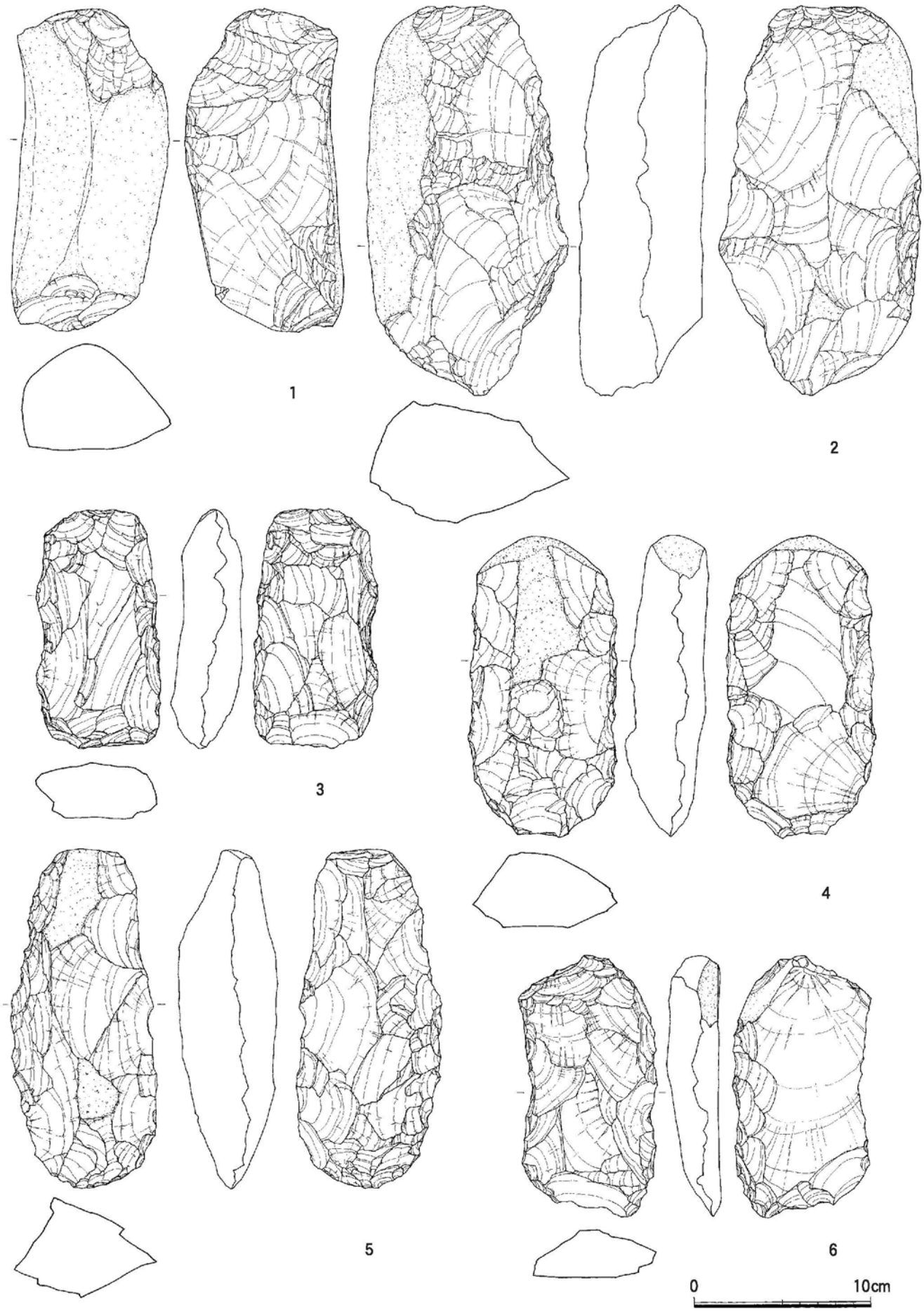


図41　ユニット出土石斧未製品実測図１（⅓）

残し、石斧の形態まではたどり着いていない。4～6は第Ⅱ工程の未製品で、いずれも自然面が残っている。またいずれも折損していない。4は中央に穴状の剥離があり、あるいはここを取りすぎたものか。5は通常両側縁が直線的な太形蛤刃が目的だと頭部直下を取りすぎているものと思われる。6は薄手の剥片素材を使っており、スクレーパーの可能性も考えられるが、刃部の形態と片面を頭部調整状に剥離していることから石斧と考えられる。厚みからは太形蛤刃にはならない。7から9は敲打段階の未製品である。いずれも折損している。3はA2群である。折損がなく、小型の石斧の未製品であろう。刃部形成がうまくいっていないものと思われる。10はC群である。第Ⅱ工程の破片で、刃部の形成はほとんど終わっているが、B面に自然面を残している。11はD－1群の下層出土。A面がやや膨らんでいる他はほぼ整形は終わっているが、自然面を一部残している。12～14・17はD－2群。いずれも第Ⅱ工程である。13は切損がなく、大きな剥離による取りすぎもない。B面中央もやや取りすぎて窪んでいるが、その後も剥離を続けていることから、廃棄の原因とは考えがたい。強いて言えば側縁の一部をわずかに取りすぎているが、廃棄するほどまではないような印象を受ける。ただし太形蛤刃が目的ならば、取りすぎているであろう。15・16はD－3群である。15は折損部がなく、小型の未製品である。小さな角礫の縁辺部を調整しているだけで、両面中央部に自然面が大きく残っている。第Ⅰ工程が欠如している。太形蛤刃にはならない。16は頭部・刃部ともに折れている。厚みは比較的あるが、この段階で最大幅が6.5cmというのは小さい。太形蛤刃にならないであろう。18～20・22はE群出土である。18～20が第Ⅱ工程、22が第Ⅲ工程である。20は幅が狭く、また21・22はともにほぼ全面敲打を行っているが、頭部はまったく行っていない。21・23・24はF群出土。23・24はともに第Ⅱ工程である。21は厚みが薄く、太形蛤刃でない可能性がある。全面敲打を施している。25はⅠ群、26はK群出土である。

以上ユニット出土品を見ると、量的に多いのはA群・D群（特にD－2群）である。D群は大量のチップがあるが、A群はチップ類は少なく、石斧未製品・自然礫が主体である。また第Ⅰ工程があるのはA群に限られている。

Ⅰ区包含層出土玄武岩製石斧未製品（図45）

ユニット以外で、礫層より上位のⅠ区包含層から出土した未製品である。27・28は北区出土で、ともに第Ⅱ工程である。27は頭部の可能性もある。28はB面に大きく自然面を残している。29は中区出土。29は剥片素材を利用したもので石斧ではない可能性もあるが、側縁と刃部は大きく交互剥離を行っており、さらに細かな調整を施せば打製石斧になるものと考えてここに入れた。31～34は南区出土。南区南半は古墳時代前期の包含層が礫層まで及んでいるため、弥生時代の包含層は存在しないが、ここで掲載したのは、それは含んでいない。いずれも折損品である。31は片面に大きく自然面を残しているが、反対の面は細かい縁辺調整まで行っており、28などとともに素材の形が求める石斧の形態に近ければ、あえて剥離を行わないものと考えられる。32は頭部の可能性がある。33は片側側面の全面に敲打を施している。AB両面は自然面が多いが、自然面に敲打を行っている可能性があるが、明確ではない。34は大きさ・厚さから太形蛤刃にはならない。

礫層出土玄武岩製石斧未製品（図46～50）

弥生時代礫層及びその上下の薄い層から出土したもので、弥生時代前期の土器を伴うものである。ただし南区礫層の南半の出土品については古墳時代前期の土器が礫層直上まで出土しているため、南区礫層出土のものは別に記載した。

35～38・48は第Ⅰ工程に分類できるものである。35は石斧に比較的近い素材を選び、四方から大きな剥離を加えている。片側の側縁は細かな調整まで加えつつある。頭部と刃部の区別はつかない。端

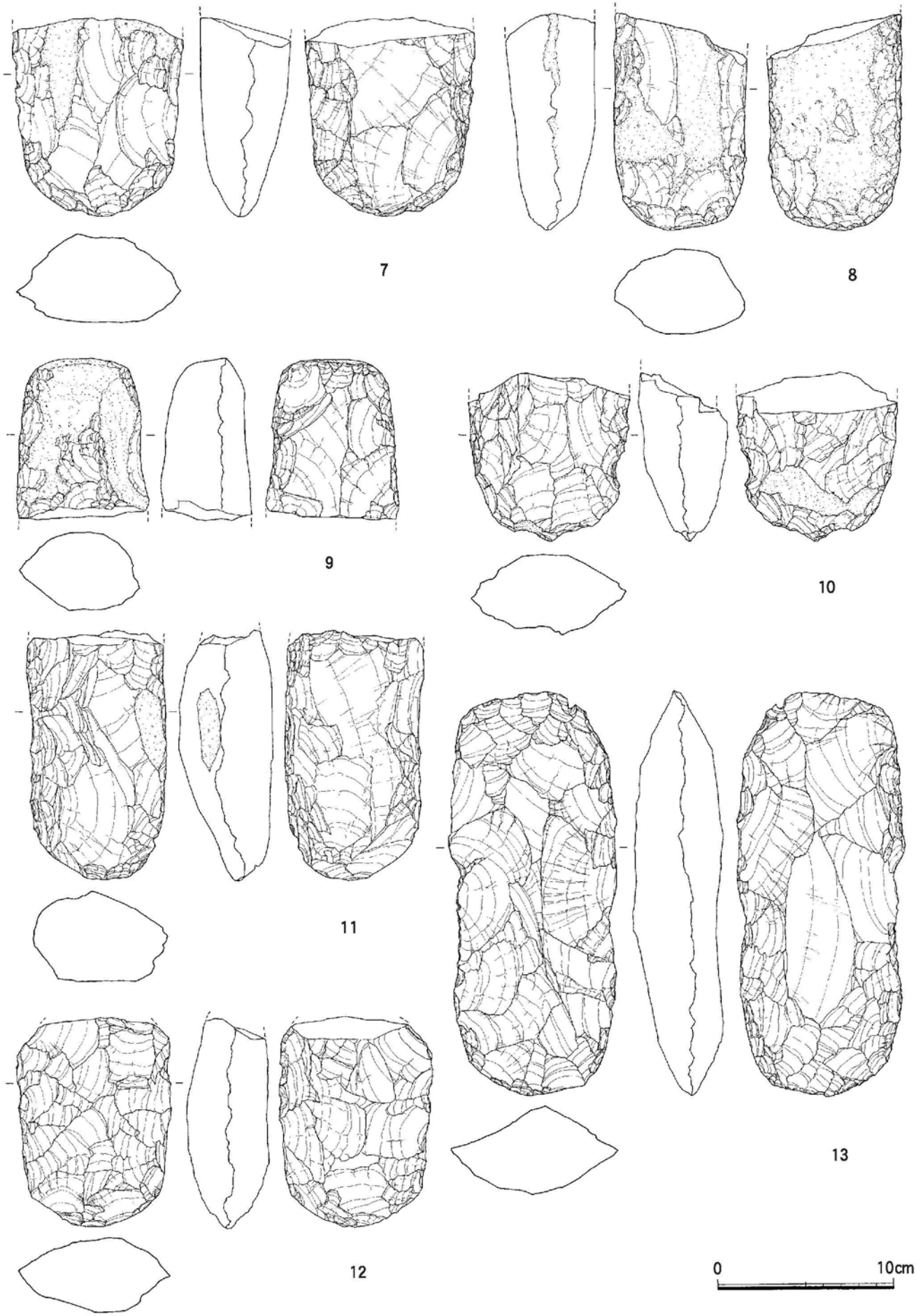


図42　ユニット出土石斧未製品実測図２（⅓）

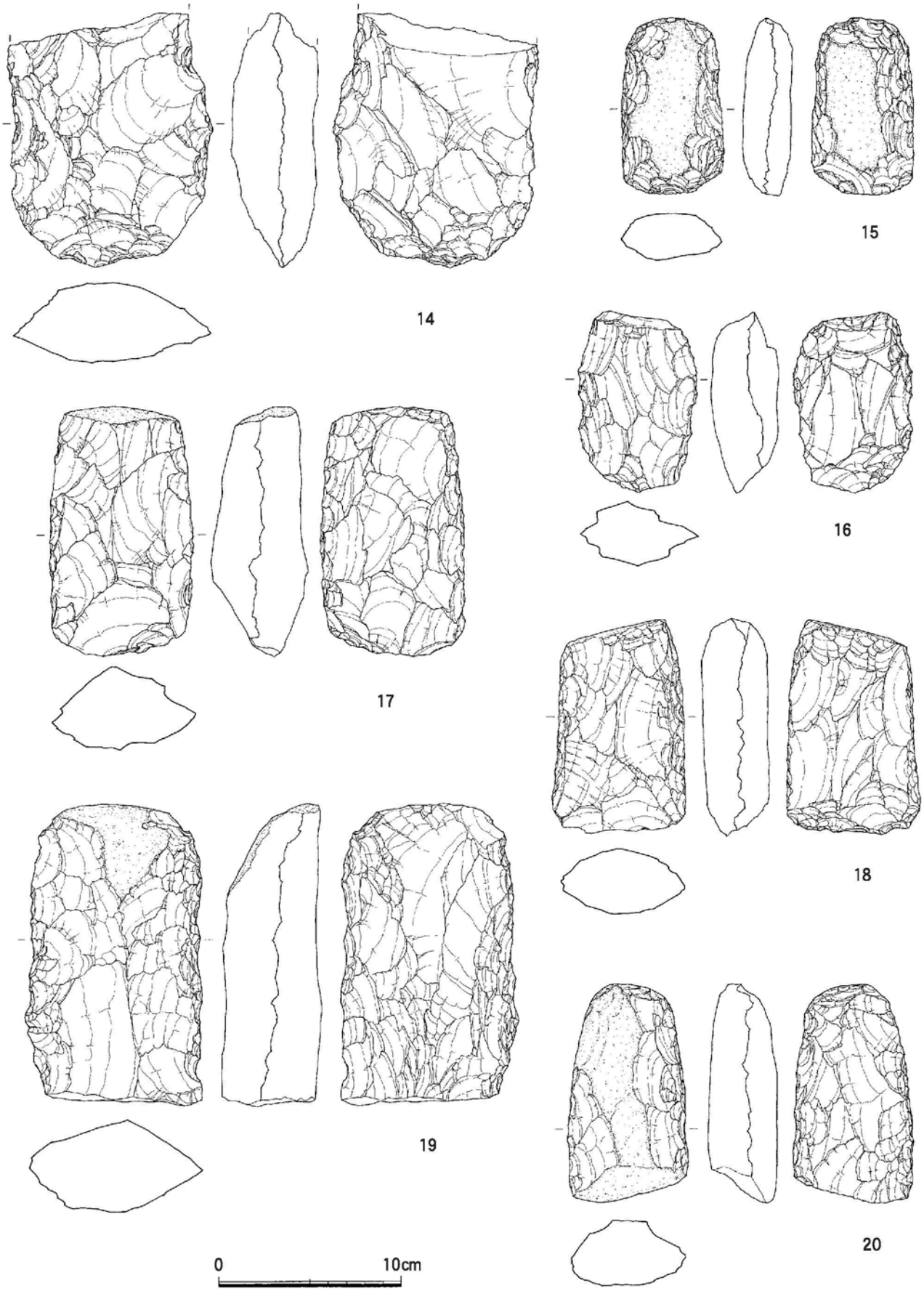


図43　ユニット出土石斧未製品実測図３（⅓）

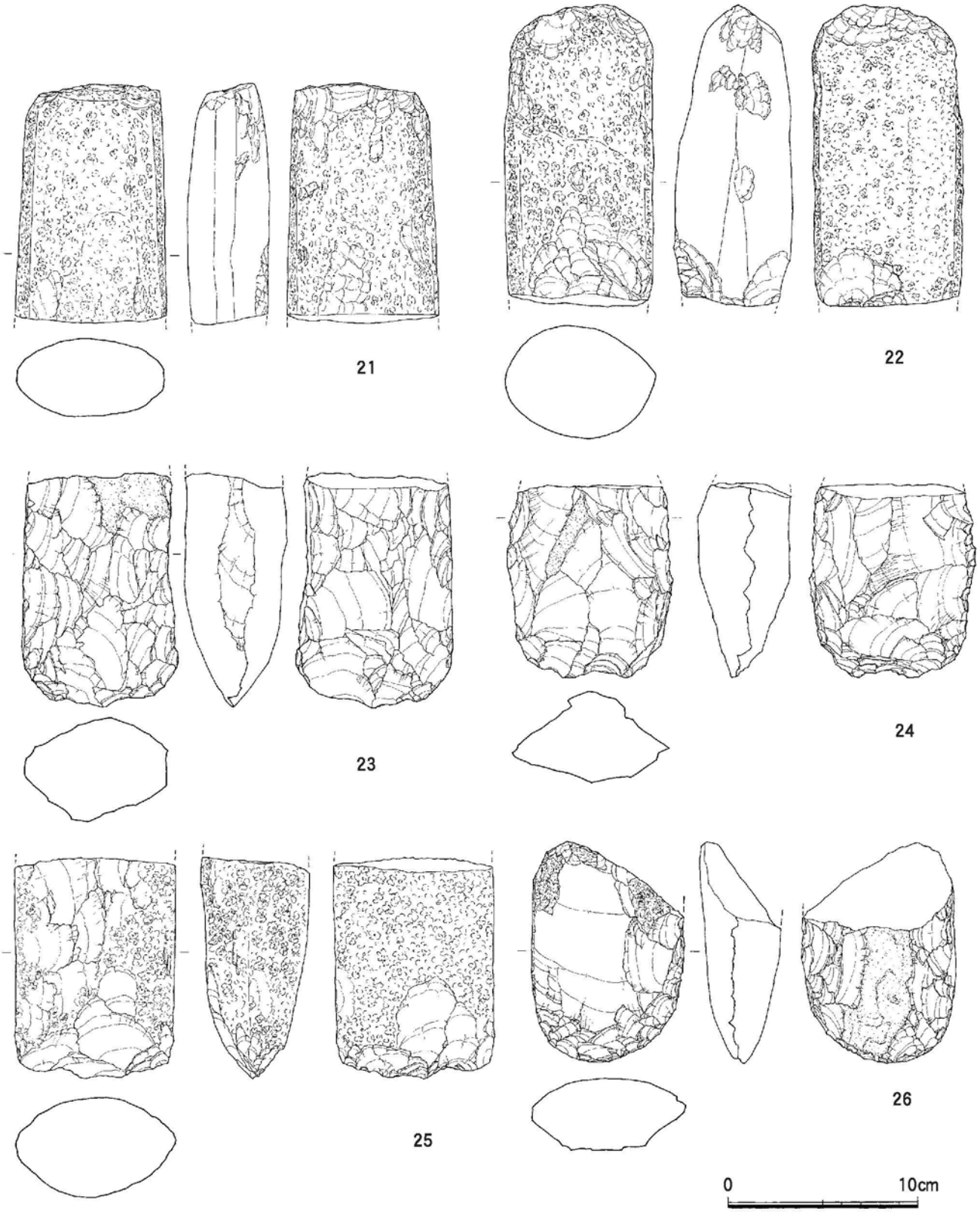


図44　ユニット出土石斧未製品実測図４（⅓）

部の一部を取りすぎたため放棄したものか。36は折損品である。A面は平らな自然面を殆ど残しており、比較的扁平な角礫を素材にしているものと思われる。37はやや長めの円礫を素材にしている。刃部両側に大きな剥離を施し、側縁の一辺に剥離を加えようとして、結局大きな剥離を施しきれず、叩いた状態で終了している。剥片剥離に失敗しあきらめたものと思われる。38は折損品である。大きな剥離を施し、細かな剥離を施すまで至っていない。48はA面に大きく自然面を残している。湾曲した大型の円礫を利用している。折損品である。

39は第Ⅱ工程初期に分類できるだろうか。A面の一部とB面中央部は自然面である。大きな原石から剥出した厚い大型の剥片を素材にしている。側縁の交互剥離、刃部と頭部の大まかな調整まで行われている。A面の一部を大きく取りすぎたためか、左側縁の自然面を取りきれなかった為に遺棄したものか。

40～43・45～47・49～52は第Ⅱ工程の未製品である。40は両面に自然面を残し、扁平な素材を利用している。片面に縦方向の擦痕が無数に付いている。他の未製品にはこのような痕跡はほとんど認められず、また同一方向であることから自然についたものとは考えがたい。擦痕がついている部分が高くなっているため、擦って高さを減じようとした可能性がある。41は側面の敲打状の痕跡は自然面で、柱状節理で剥がれ落ちた原石によく認められ、石斧の形態に極めて近い原石のうち見極めが難しいものが存在するが、これはその後に剥離を施したぶぶんよりパティナが明らかに古い。調整は片側側縁・頭部・刃部に大きな調整を施している。折損品ではなく、寸足らずの石斧になりそうである。42は折損品。43は左側縁の上部を大きく取りすぎて遺棄したものであろう。45の側縁に敲打状の痕跡があるが、自然についたものと思われる。47は平たい自然面の周縁に調整を施しているだけである。断面形などから見て打製石斧の未製品であろうか。頭部横を取りすぎたものか。49～51は自然面を大きく残した折損品である。49は刃部形態は大体できあがり、側縁も細かな調整に入っている。50は第Ⅰ工程に入れるべきかもしれない。51も細かな側縁調整に入っている。52は断面が円形を呈しており、太形蛤刃にはならない。53は両面に自然面を多く残している。第Ⅰ工程に入れるべきかもしれない。ただし、当初から側縁の調整は大きなものを施さず、細かい剥離で交互剥離を作り出そうとしており、原石の形態を生かしている。中央にある敲打痕は色から見て古い時期に自然についてものと思われる。

54以降は第Ⅲ工程以降の未製品である。54は折損品で、両側縁のほぼ全面と両面のごく一部に敲打痕が認められる。55はA面の刃部から上に大きく自然面を残しているが、この部分の傾斜角は石斧のものに近いことから、自然面をそのまま生かそうとしている。自然面は白色に近い色を呈している。56もB面に大きく自然面を残している。自然面は54と同様に石斧と近い形態のためであろう。自然面は灰色に近い。両側縁に多くと両面にわずかに敲打痕が認められる。57～60は折損品。58は片側側縁がほぼ平らな自然面である。59は片面の多くが濃い灰色を呈する自然面であるが、その周辺の剥離も表皮1枚を剥いだ程度の剥離で、自然面の形状が石斧の形状に近い。片側側縁のほぼ全面のほか、表裏面の一部と刃部の一部にも敲打が及んでいる。60はほぼ全面敲打が施され、頭部のみが剥離面のままである。62は刃先と頭部を除いてほぼ全面敲打を施している。B面が大きく剥離し遺棄しているが、全面の敲打段階でこのような欠損をするのは珍しく、あるいは敲打中に落として別の石と接触し割ったものか。

44・61・63は研磨を施した未製品である。44のB面は研磨痕がかなりついている。いずれも高い部分であるが、敲打の痕跡は研磨を施した面しかなく、部分的に高い部分のみを磨り落としたという状況ではなく、工程は両面の調整→片面の敲打→片面の研磨→反対面の敲打→反対面の研磨となる可能

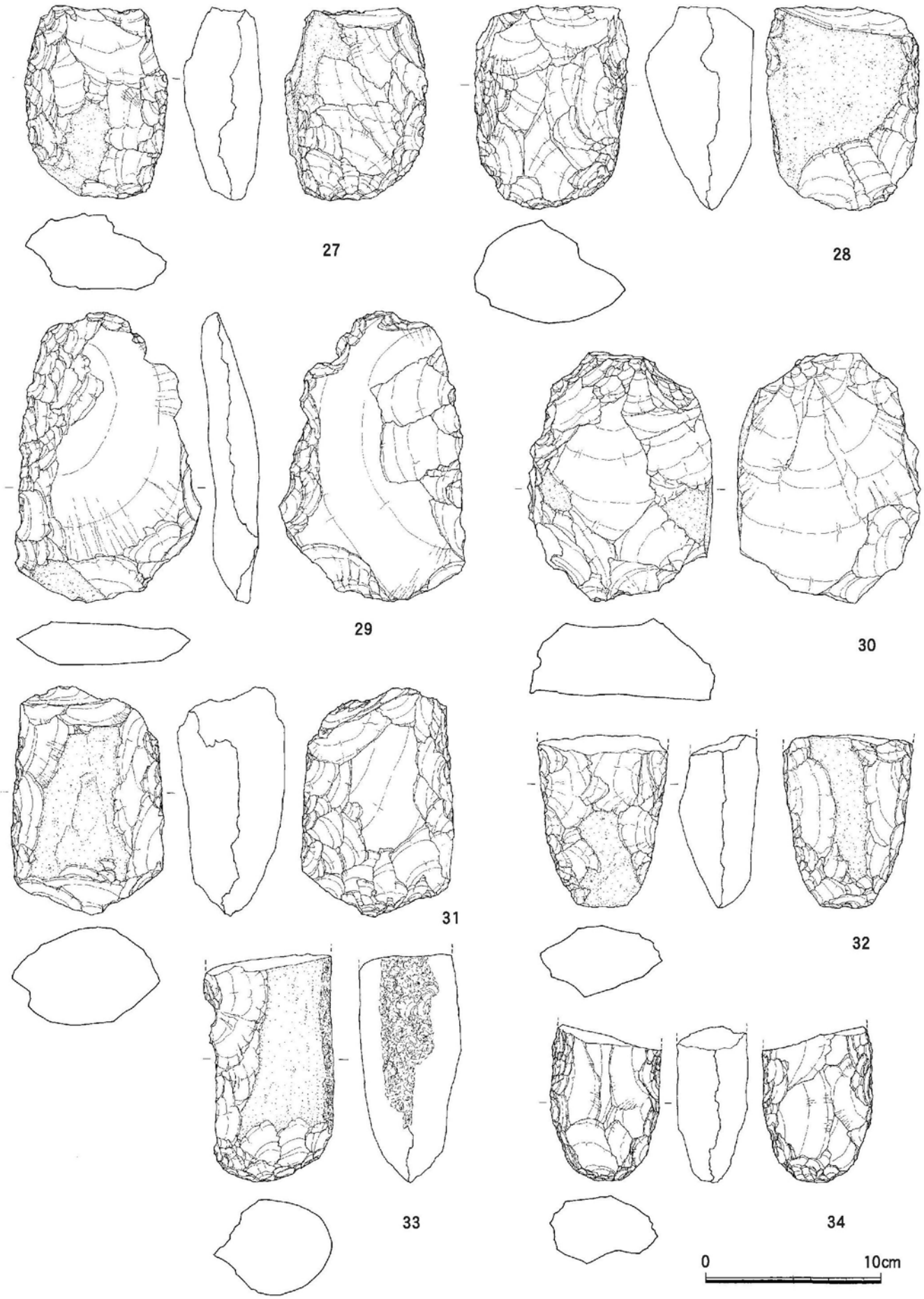


図45　Ⅰ区包含層出土石斧未製品実測図１（⅓）

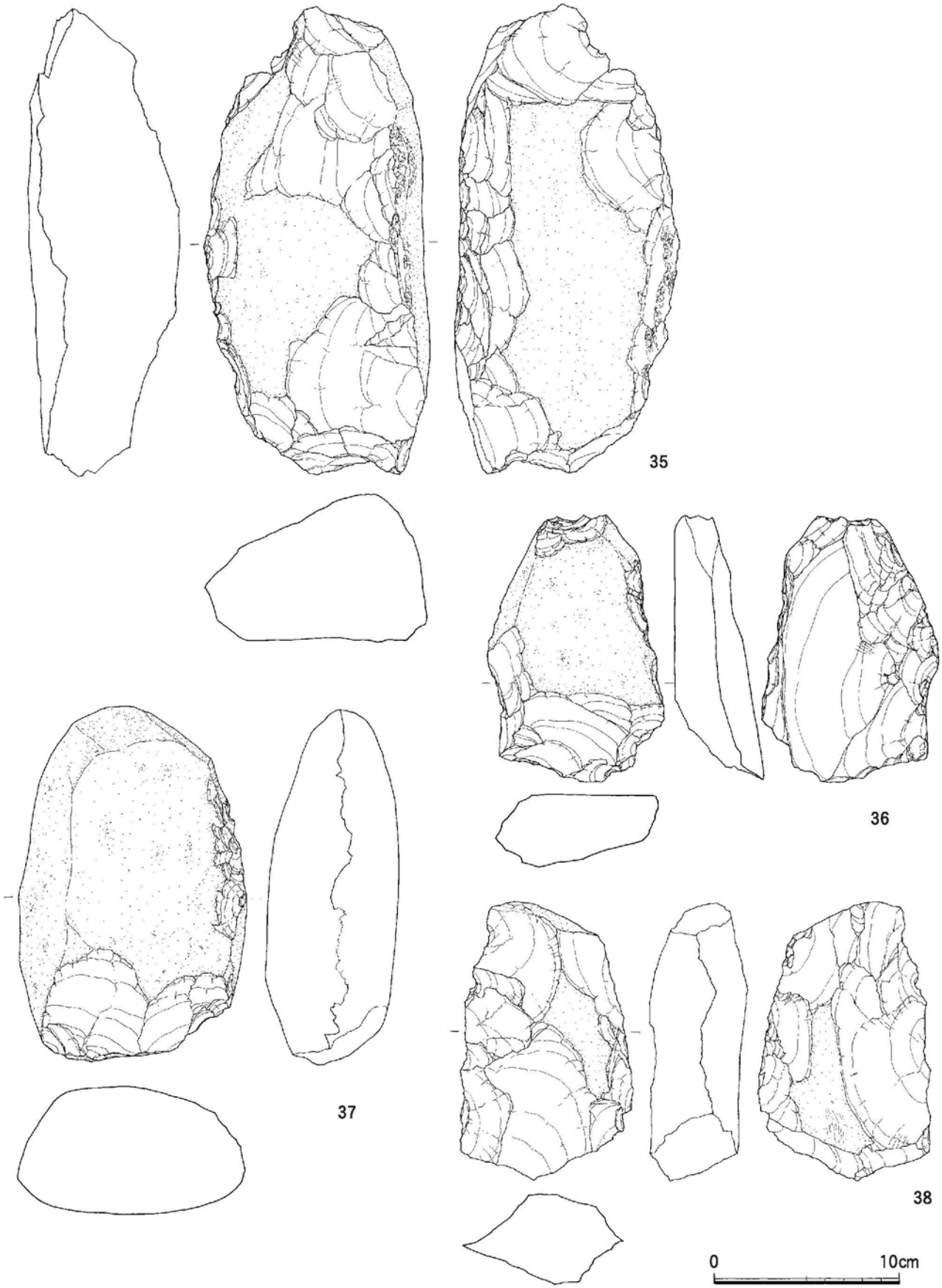


図46　Ⅰ区礫層出土石斧未製品実測図１（⅓）

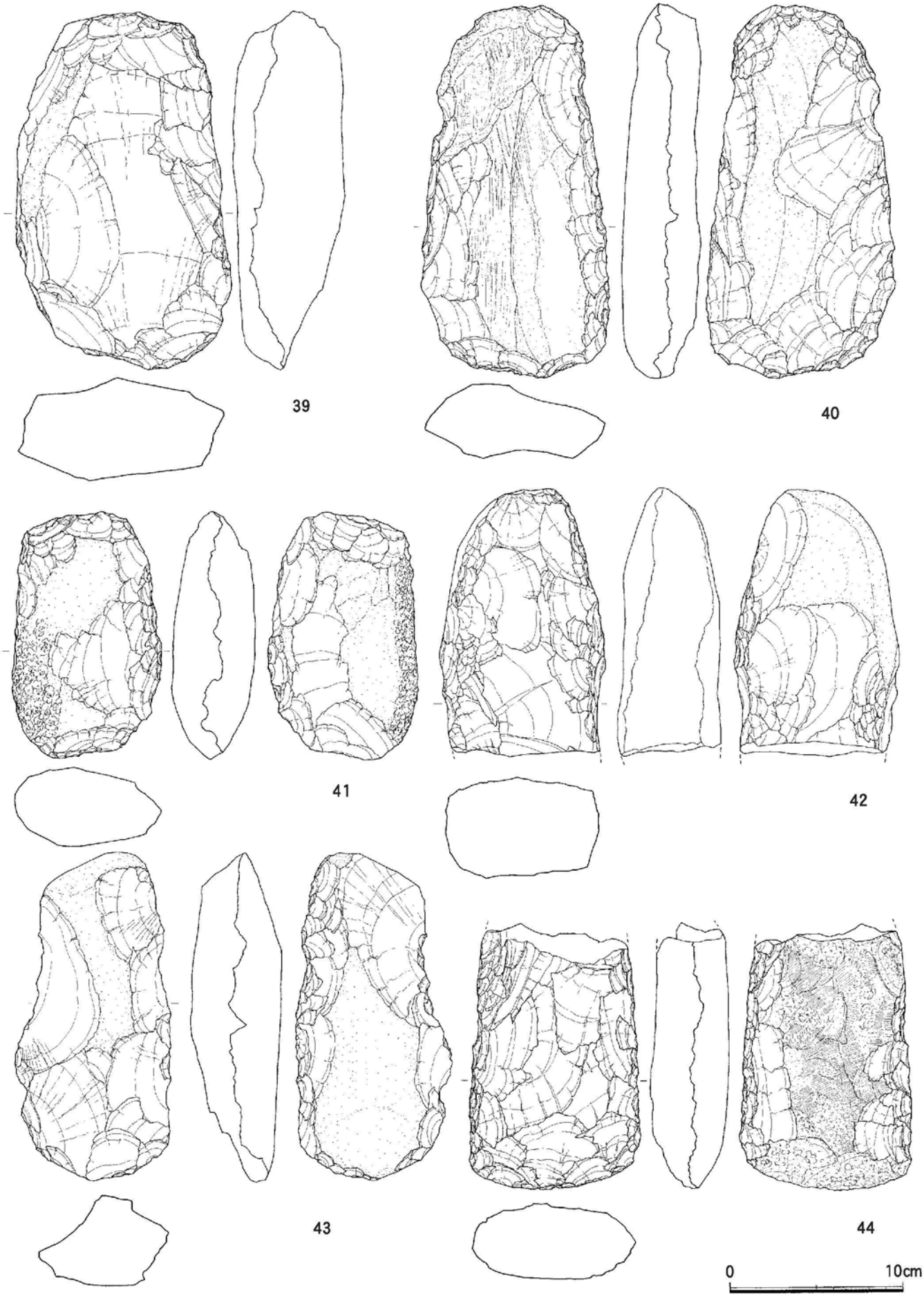


図47　Ⅰ区礫層出土石斧未製品実測図２（⅓）

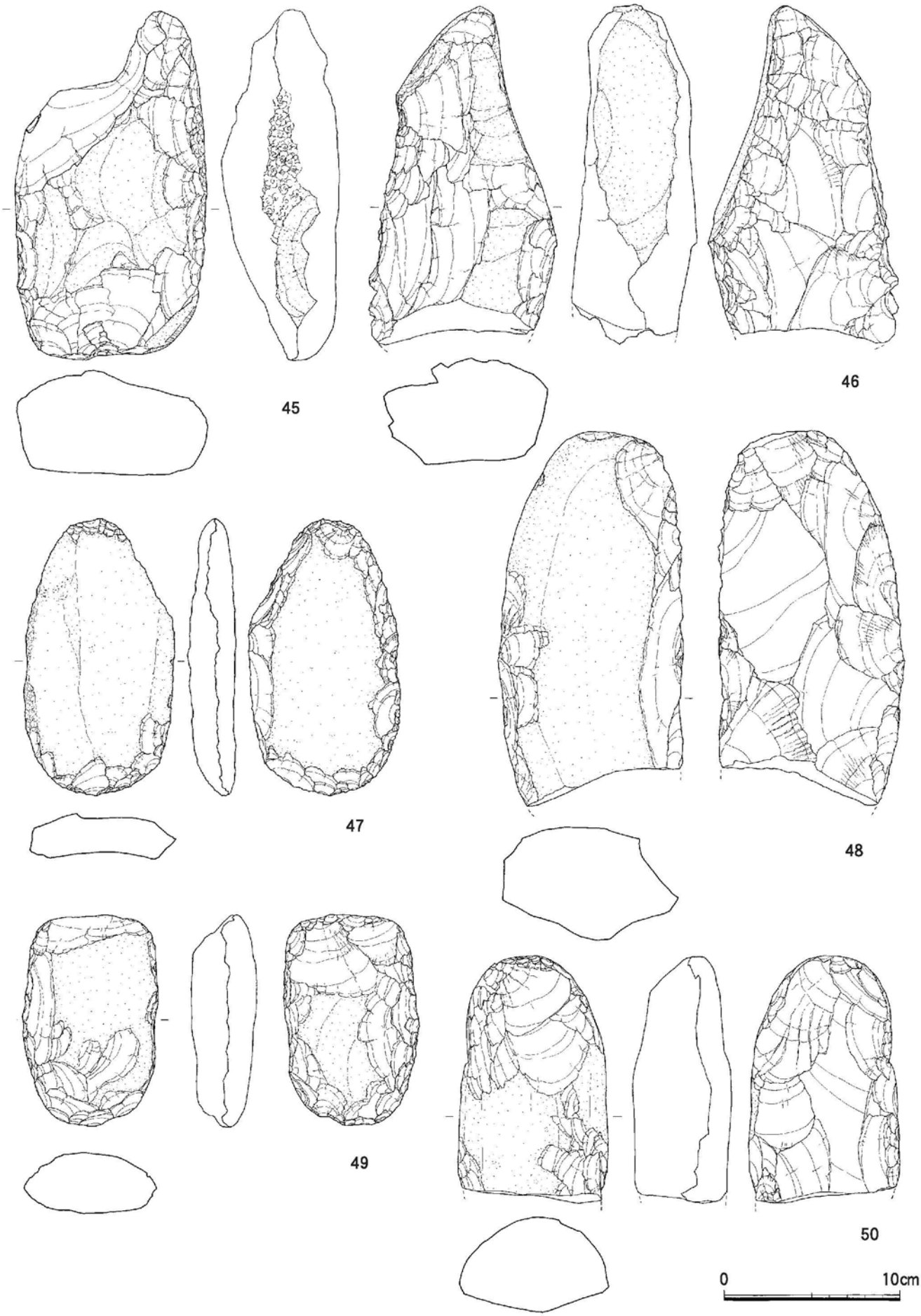


図48　Ⅰ区礫層出土石斧未製品実測図３（⅓）

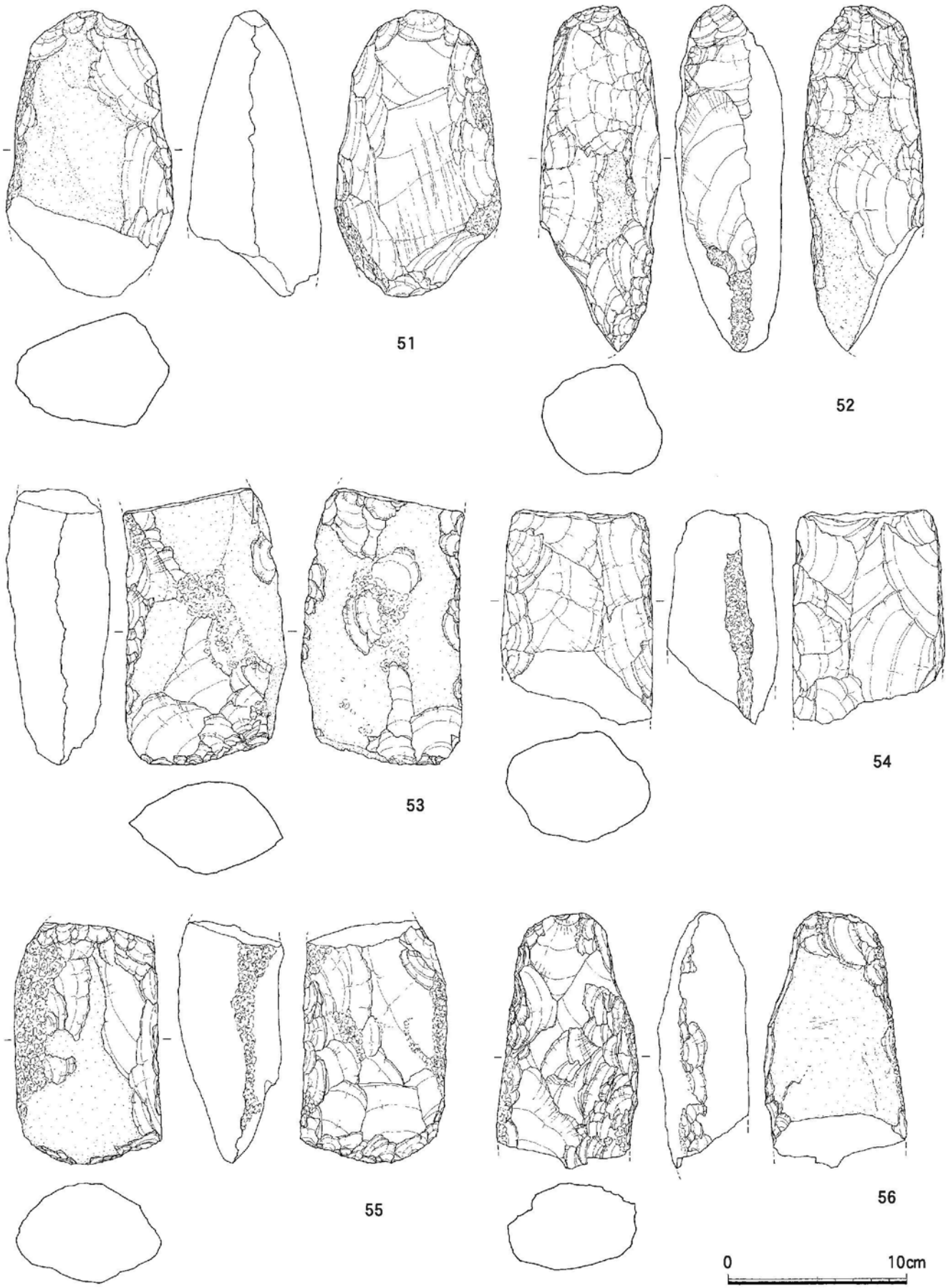


図49　Ⅰ区礫層出土石斧未製品実測図４（⅓）

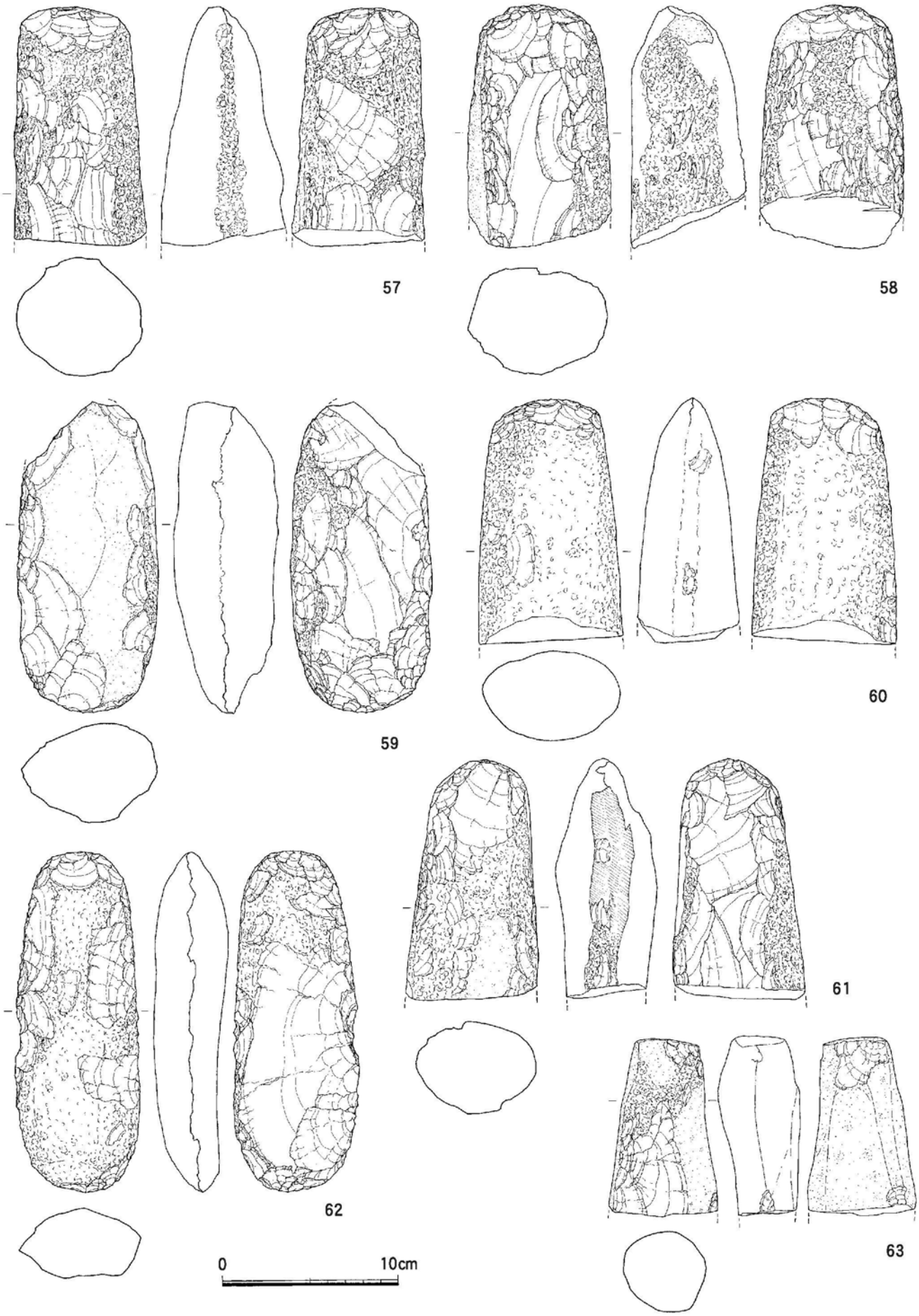


図50　Ⅰ区礫層出土石斧未製品実測図５（⅓）

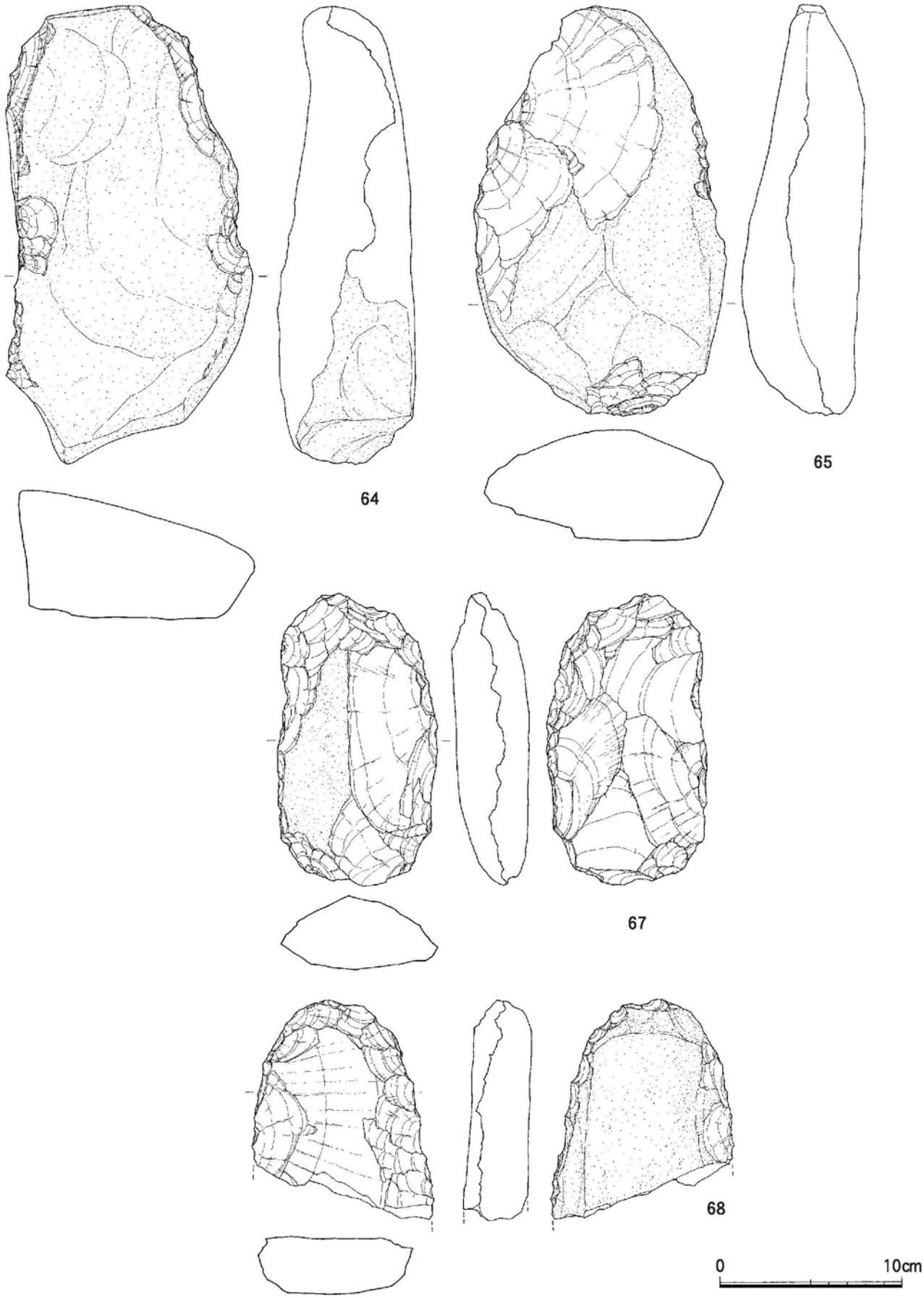


図51　ＳＤ01下礫層出土石斧未製品実測図１（⅓、66は欠）

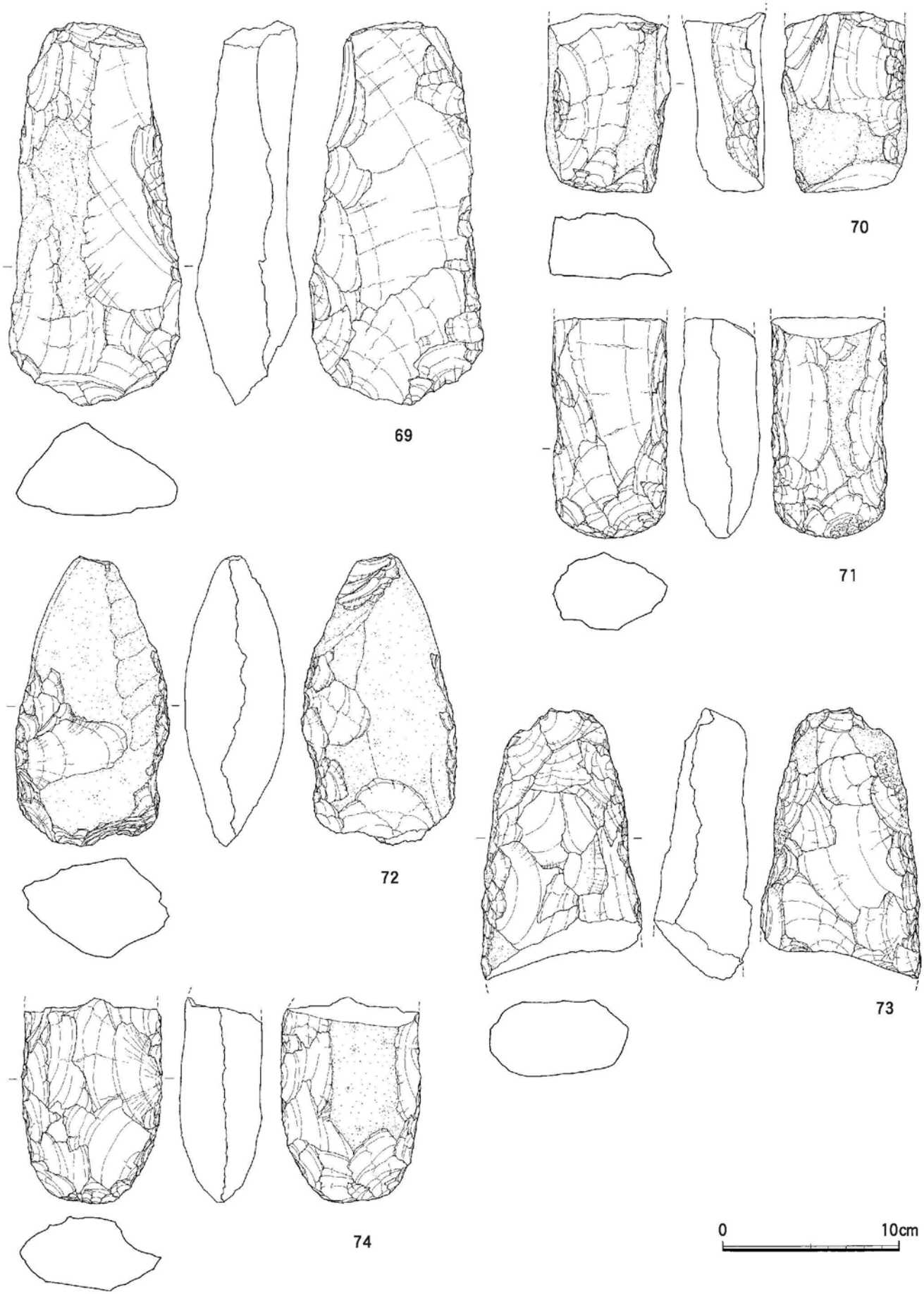


図52　ＳＤ01下礫層出土石斧未製品実測図２（⅓）

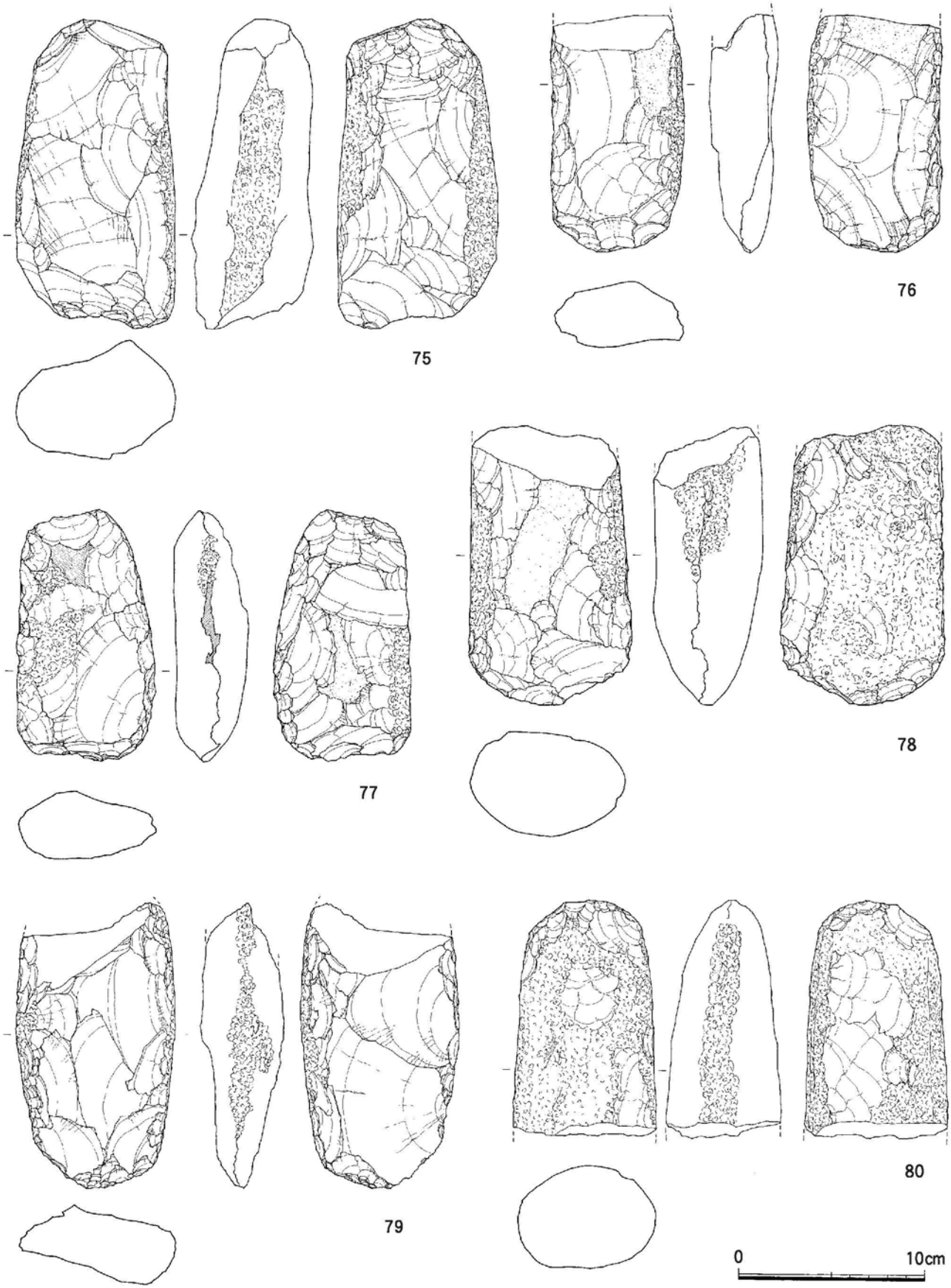


図53　ＳＤ01下礫層出土石斧未製品実測図３（⅓）

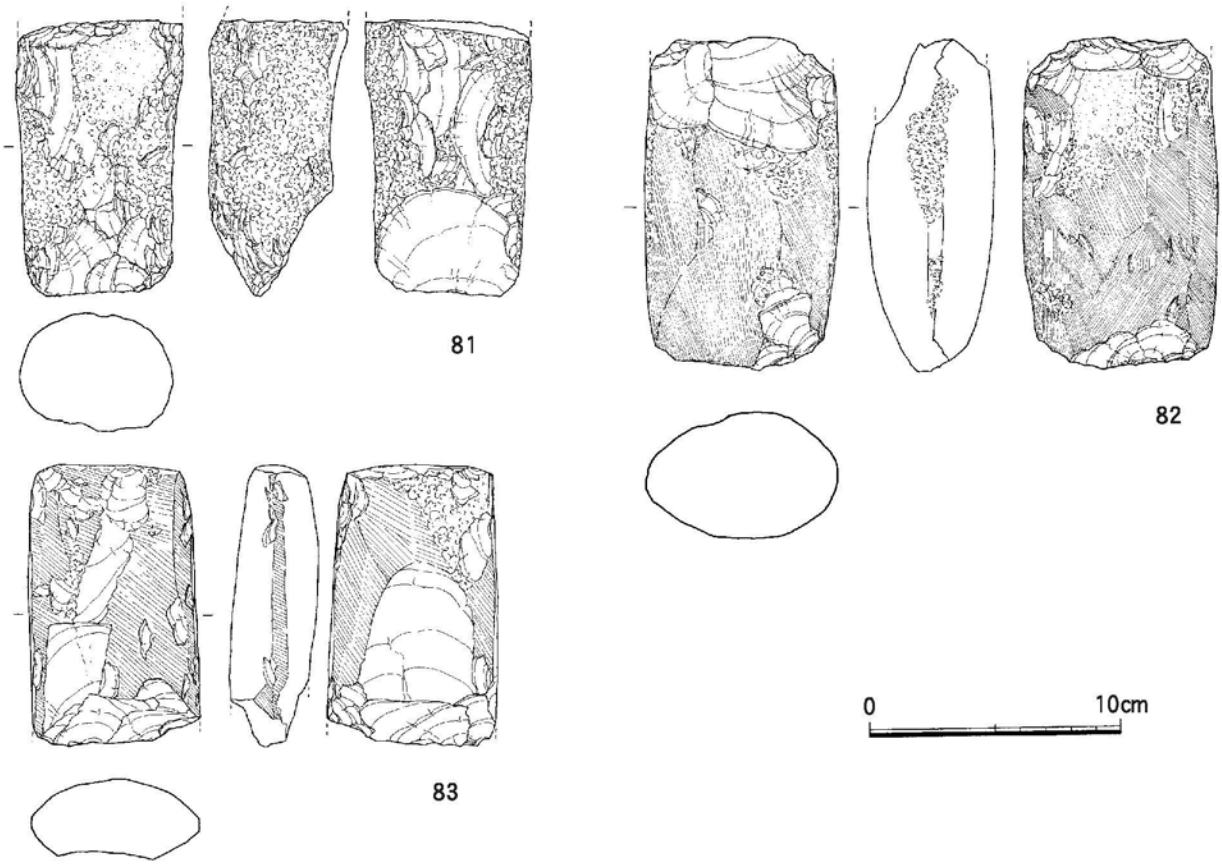


図54　ＳＤ01下礫層出土石斧未製品実測図４（⅓）

性がある。必ずしも同一工程はとらないことがわかる。61は自然面を一部に残し、両側縁と自然面のある面に敲打を施しているが、片側の側縁のかなりの部分を研磨している。研磨面の色調は新しく、研磨方向が側縁の方向とはすべて斜めについているため、明らかに人為的に研磨を施している。63は小型の未製品である。両面に自然面を残す。また頭部は平坦な自然面をそのまま利用しようとしている。Ａ面の頭部の下に敲打を施しているが、Ｂ面にごく一部に研磨を施している。やや高い自然面を減じようとしているものと思われる。従来研磨は消費地で行うというのが定説であったが、必ずしもそうではないことが明らかになった。まとめで再度触れる。

ＳＤ01下礫層出土玄武岩製石斧及び同未製品（図51～54）

64～83はＳＤ01内の壁に施された石積み下の礫層とＳＤ01底にある礫層から出土したものである。ともに本来の弥生礫層とほぼ一致した堆積であることから、そのほとんどが弥生時代前期に属するものと思われるが、一部にはＳＤ01掘削時・使用時に紛れたものが存在する可能性が考えられるので、別項をたてた。

64・65は第Ⅰ工程の未製品である。64は片側の側縁に大きな交互剥離を施し、刃部と頭部横及び反対側側縁の一部に剥離を施した段階で遺棄している。交互剥離を施していない側の側縁が平坦面を成し、剥離しきれなかったものか。自然面は濃い灰色を呈している。65はＡ面左上部を大きく取りすぎている。自然面の一部は白色を呈している。

67～72は第Ⅱ段階の未製品である。67は折損品ではなく、太形蛤刃以外の未製品と思われる。68は片側のほとんどが黄白色の自然面である。反対面が淡い灰色の主要剥離面で、剥片素材を使用している。打製石斧の未製品か。69は自然面を残す大型剥片を利用している。刃部は厚みがあるが、頭部付

近はやや細く薄いため、通常の太形蛤刃石斧にはならない。71は折損品で敲打に移る直前のものであろう。72は自然面をかなり多く残し第Ⅰ工程に入れるべきかもしれないが、原石が石斧に近い形態で、片側縁と刃部の整形が進んでいることから第Ⅱ工程とした。

73～81は第Ⅲ工程の未製品である。73は折損品で両側縁に敲打が施されている。74はB面中央に自然面を残し、両側縁を中心に敲打が施されている。75は大型の未製品で、両側縁はほぼ敲打が終了している。76は両面とも大きく剥離しすぎているが、片側側縁のほぼ全面と反対の側縁の一部に敲打が施されている。敲打時に両側を大きく取りすぎるとは考えられず、敲打後にさらに剥離を施したか、当初予定の太形蛤刃を剥離に失敗後に変更して薄手のものに使用としたかどちらかであろう。77も側縁に敲打痕が認められるが、この敲打痕は自然によるものである可能性も考えられる。78はA面の一部に自然面を残す。両側縁とB面のほぼ全面に敲打が施されている。79は薄手の未製品である。A面を大きく取りすぎているが、そこには敲打が及んでおらず、敲打後にさらに整形した可能性もある。80はほぼ全面に敲打を施されている。81はほぼ全面に敲打が施されている折損品である。

82・83は研磨が施された製品である。82は刃先が数カ所で欠損しており、使用していたものと思われる。83は頭部の破片であるため、使用されたか否か不明であるが、表面の残り具合は極めて良好で研磨痕跡も明瞭に認められる。

南区礫層出土玄武岩製石斧及び同未製品（図55～65）

Ⅰ区の南側1／3である南区の礫層は、その半分程度が、製塩土器層が礫層直上まで達していたため、出土品の一部に弥生時代中期のものを含んでいる可能性があるため、礫層とは別項とした。

84～95は第Ⅰ工程の未製品である。第Ⅰ工程のものは上下がわからないものが多い。84のB面は自然面を全面取っている。自然が大きく残っている面の一部の剥離が大きく取りすぎて遺棄していると思われる。86は第Ⅱ工程初期に入れるべきものか。B面は完全に原石の面を何度も剥離を施して取っている。A面は大きく自然面を残し、石斧の形態までまったく至っていないため、第Ⅰ工程に入れたが、片面はすでに細かい調整までいっている。87は上下逆か。両面とも大きな剥離を施している。下側を細くしたため遺棄したものであろうか。88は石斧の未製品かどうかわからないが、大きな原石から大きな剥片を剥出しているものである。剥片素材の石斧未製品や石包丁未製品があることからそれらを取り出した石核の可能性もあるが、片側の側縁が交互剥離に成っていることから、石斧未製品と考えたが、これから石斧にするためには幅を半分にまで減らさなくてはならない。89は剥片素材を利用している。A面は自然面を一部に残し、大きな剥離で形を整えているが、B面は側縁の一部を除き、主要剥離面のままである。90は扁平な素材を利用しており、打製石斧の未製品か。剥離を1枚大きく取りすぎている。91は頭部・刃部ともに折損している。92は刃部側から大きな剥離を施しているのが特徴的である。片側縁は交互剥離を成している。全面濃い灰色を呈している。93の頭部が自然により表面が1枚めくれている。長さが短くて薄く、打製石斧の未製品か。94はやや弓形に曲がった断面三角形に近い素材を利用している。B面の端部とA面の中央付近に剥離を施し、後者を取りすぎたため遺棄したものであろう。95は厚さ2.6cmと薄い扁平な素材を利用している。打製石斧未製品の可能性があるが、よくわからない。片側側縁の両側面にあまり大きくない調整を施している。96は断面三角形の素材を使用している。剥離痕が全面シャープさがなく、なまくらな感じになっている。

97～103・105～115・117～121・128・129は第Ⅱ工程の未製品である。97は小型で扁平な未製品である。95と同様剥離面のシャープさがない。薄手の磨製石斧か。やや黒色を呈している。98も扁平な未製品である。これも剥離面のシャープさがなく、やや黒みを帯びている。両面とも中央に大きく自然面を残しているがほぼ石斧の形態を作り出している。薄手の磨製石斧であろう。99は第Ⅰ工程に入

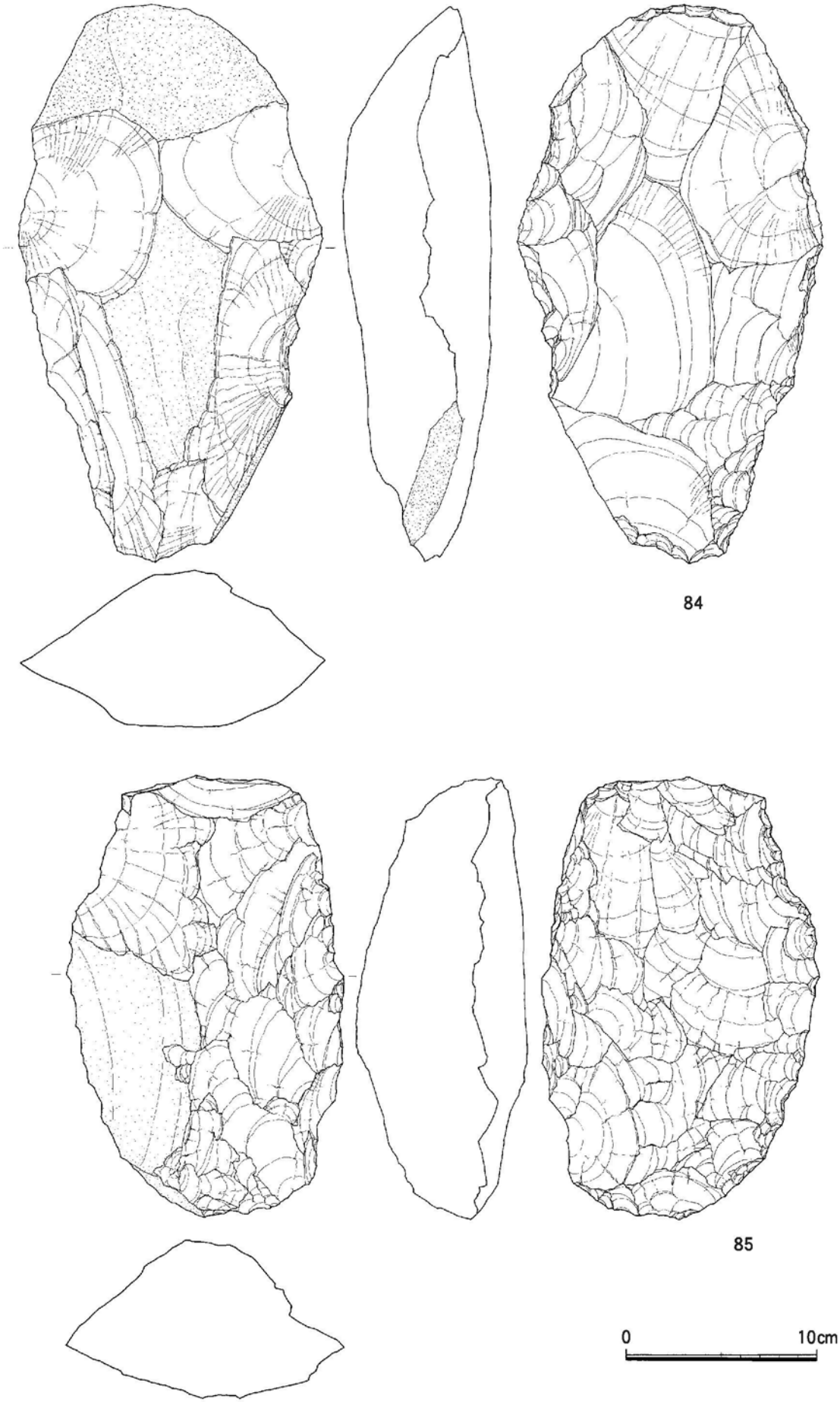


図55　Ⅰ区南区礫層出土石斧未製品実測図１（⅓）

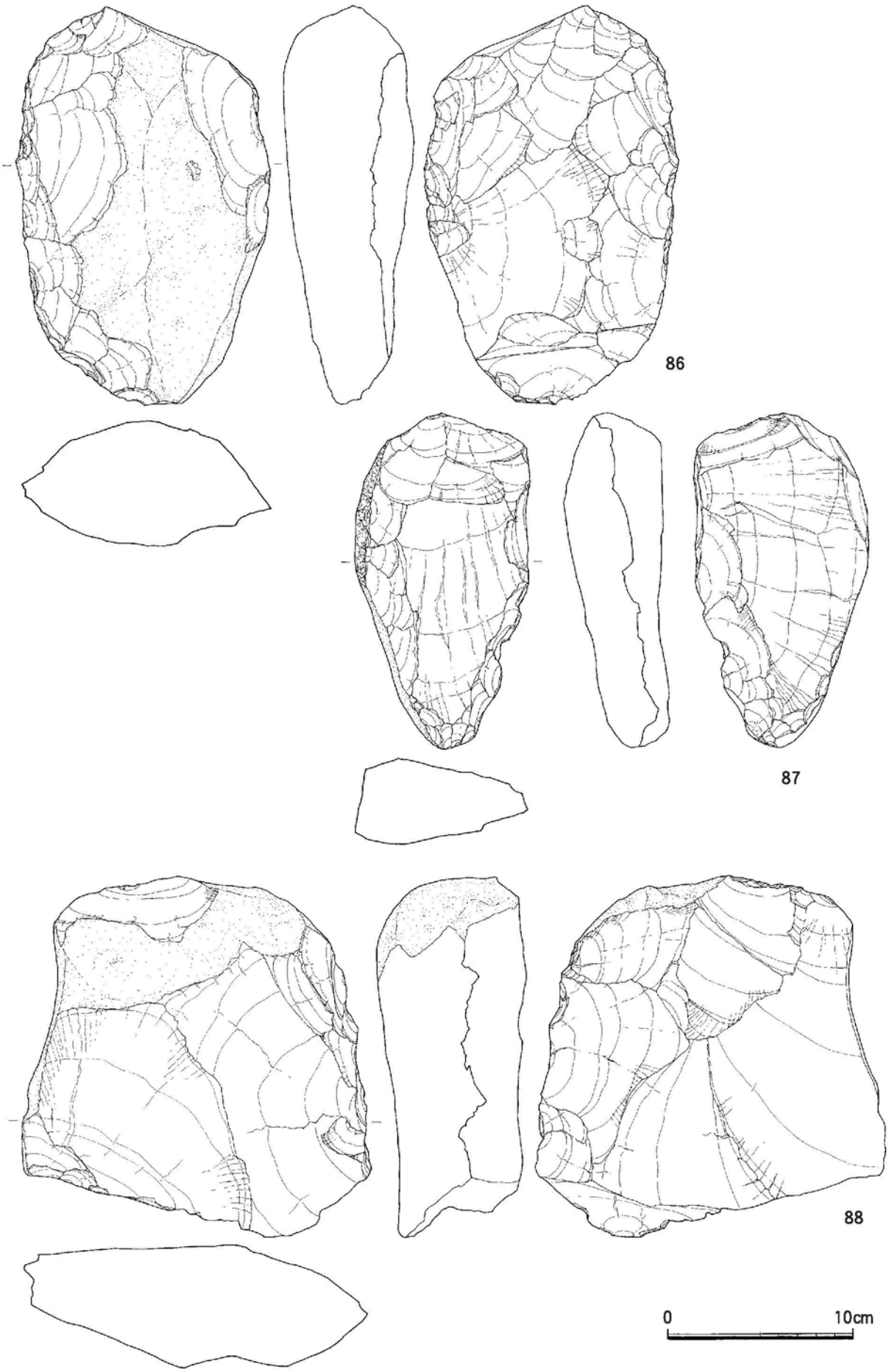


図56　Ⅰ区南区礫層出土石斧未製品実測図２（⅓）

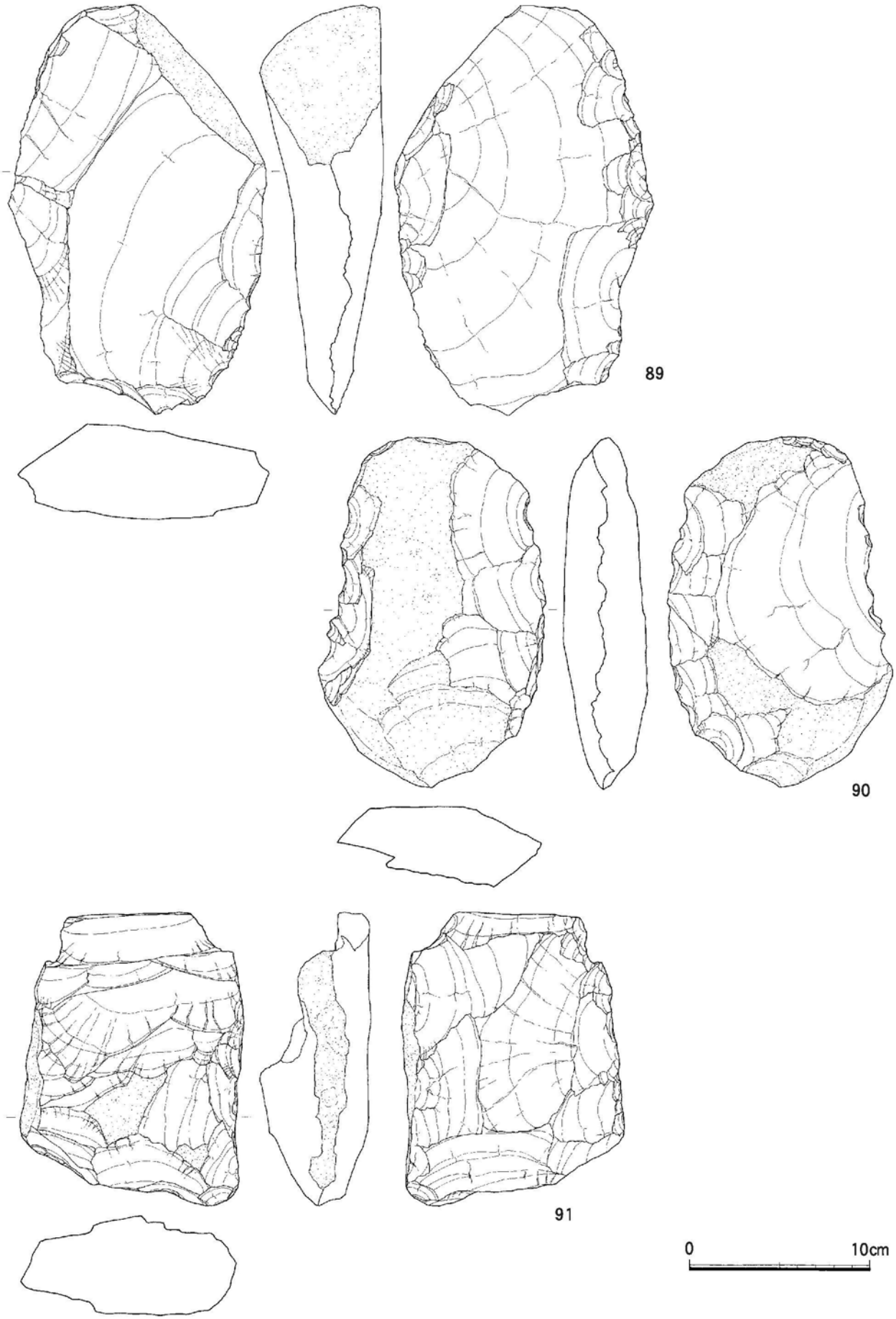


図57　Ⅰ区南区礫層出土石斧未製品実測図３（⅓）

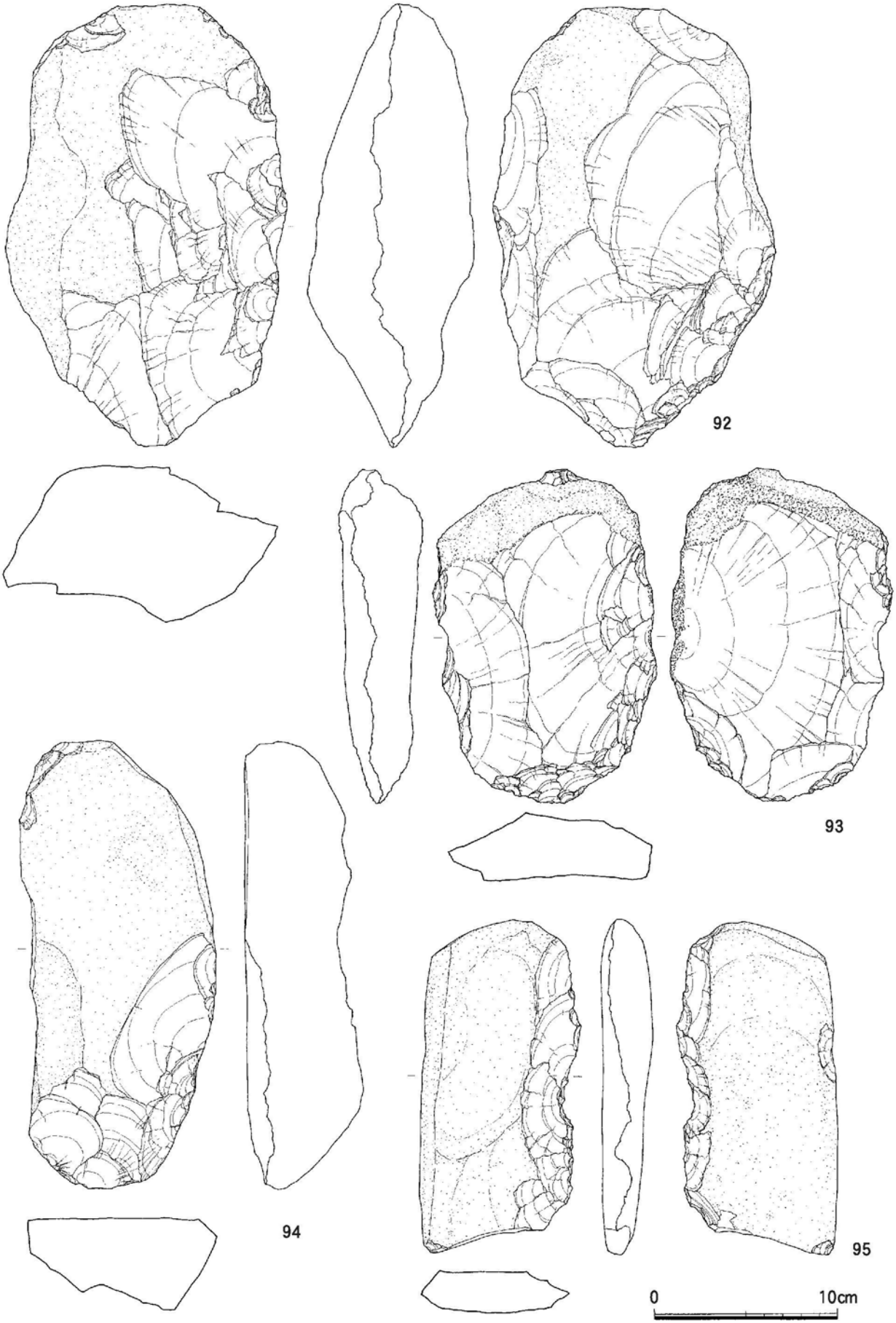


図58　Ⅰ区南区礫層出土石斧未製品実測図４（⅓）

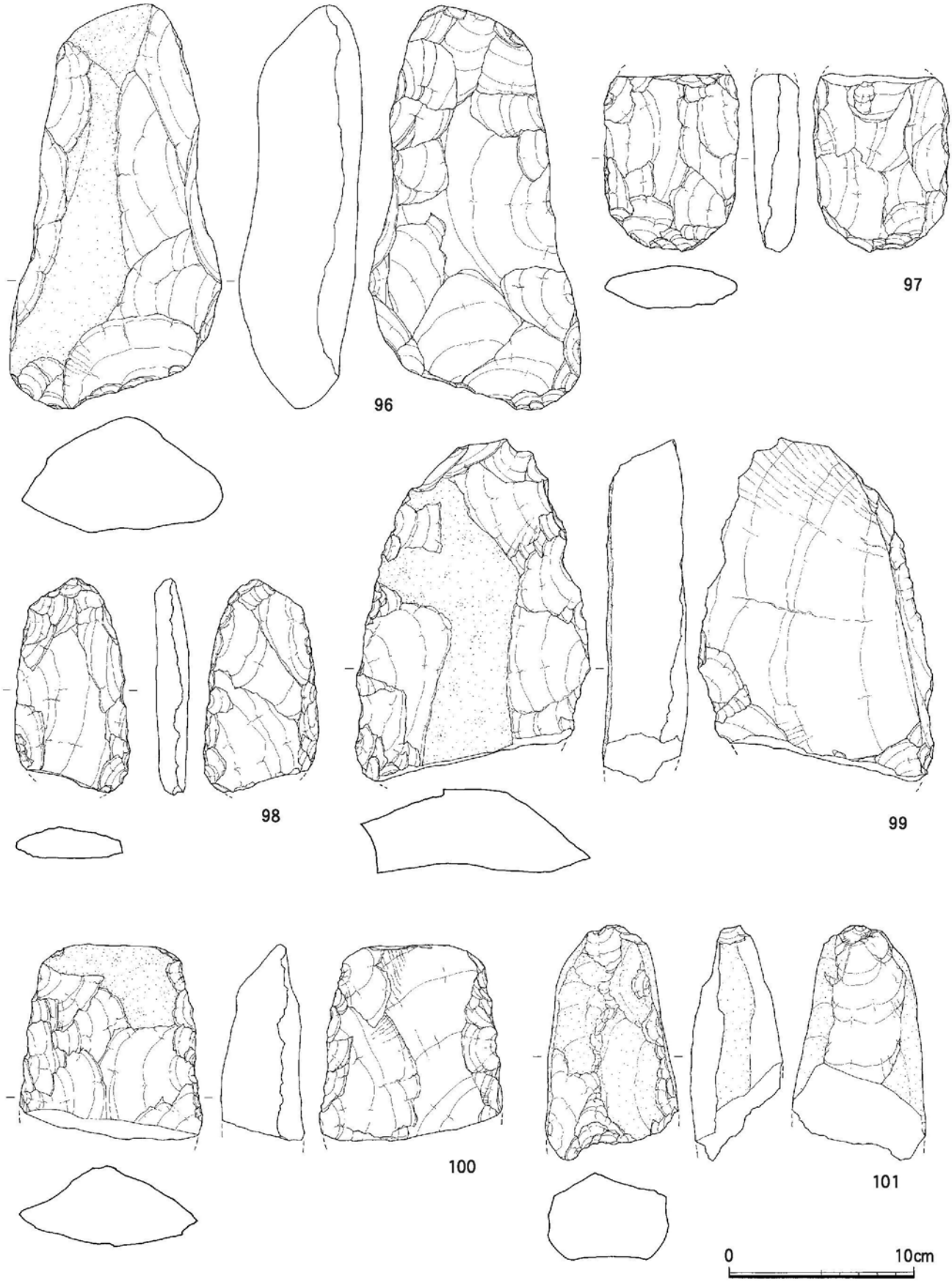


図59　Ⅰ区南区礫層出土石斧未製品実測図５（⅓）

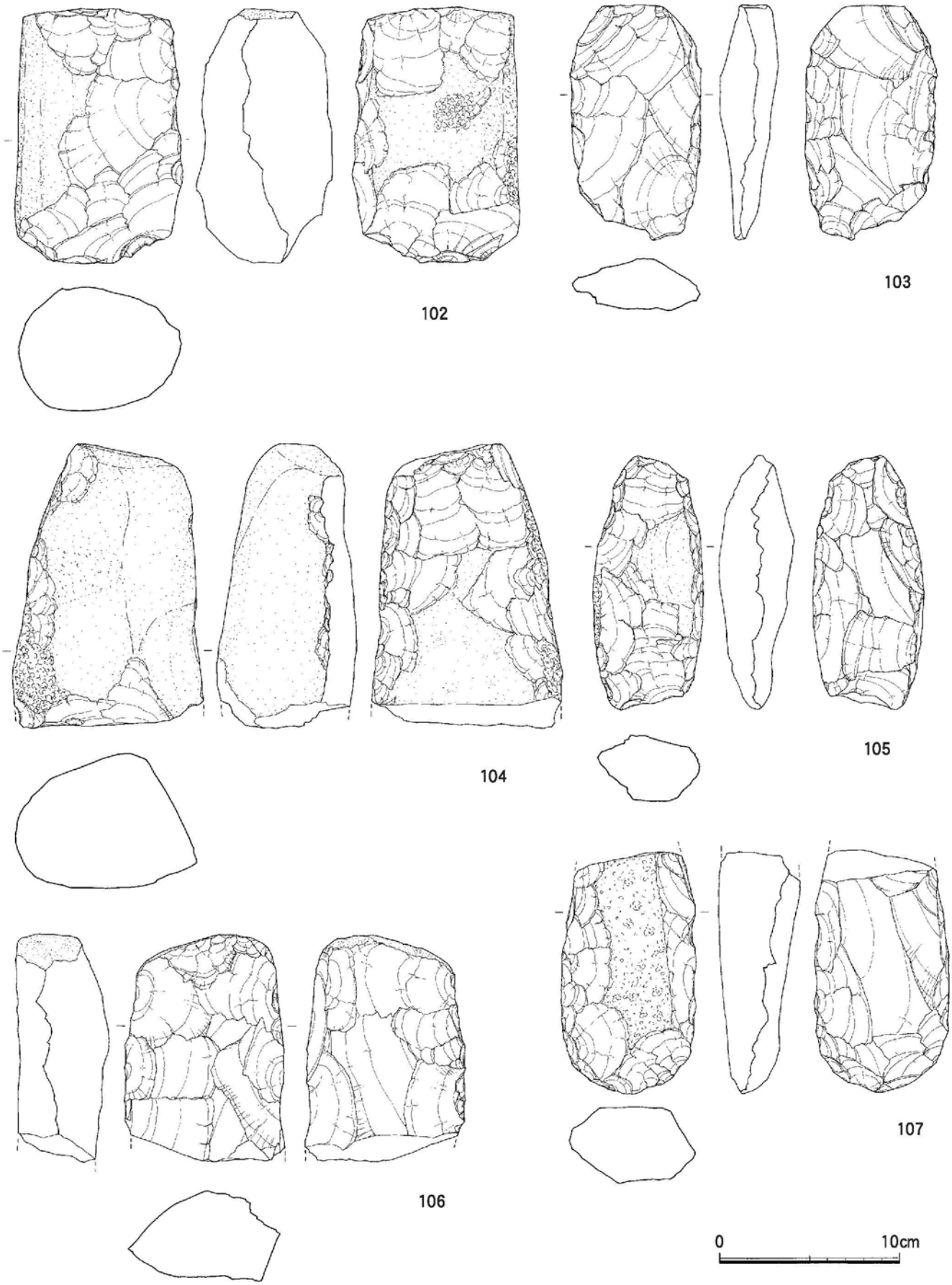


図60　Ⅰ区南区礫層出土石斧未製品実測図６（⅓）

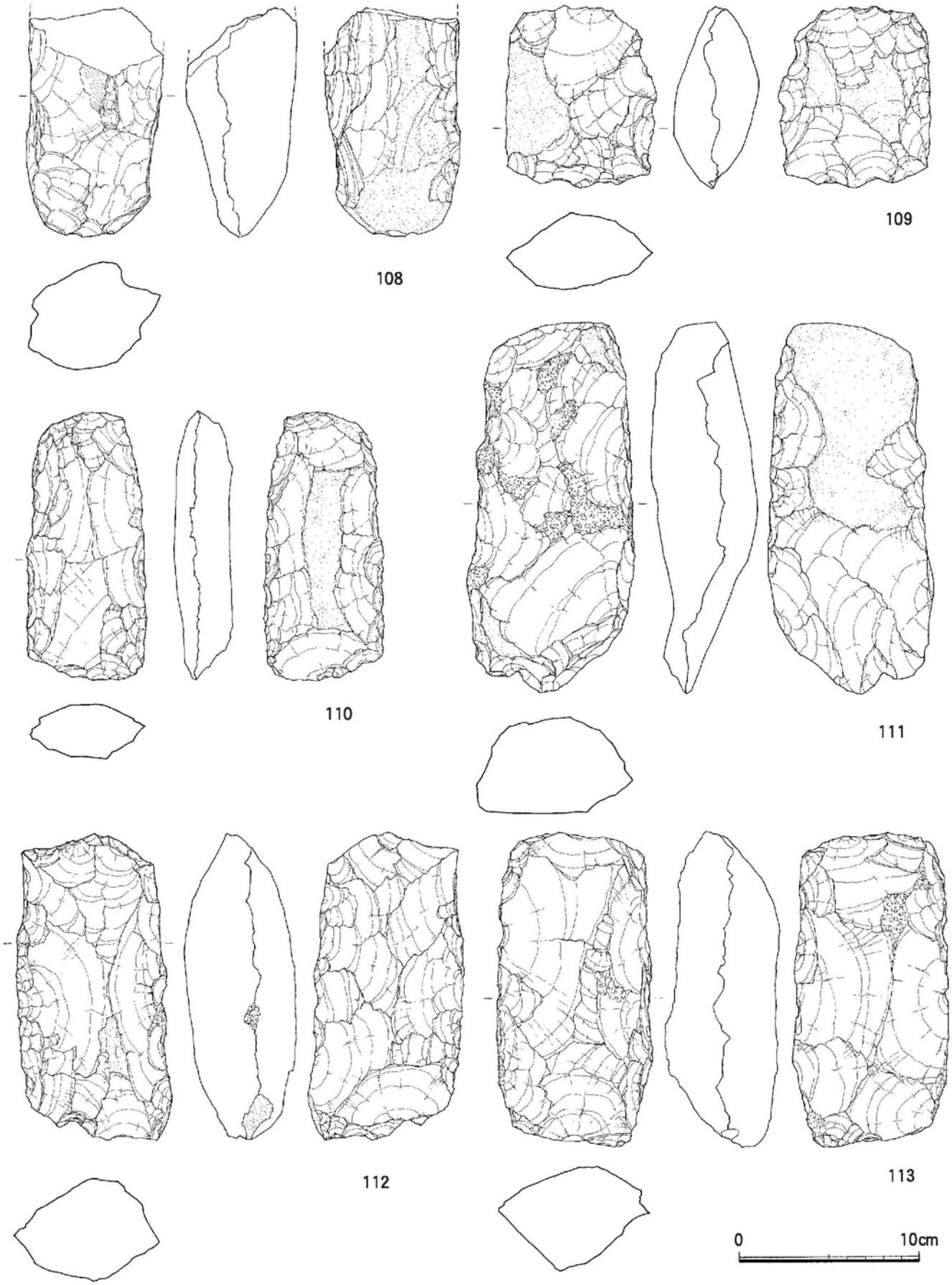


図61　Ⅰ区南区礫層出土石斧未製品実測図７（⅓）

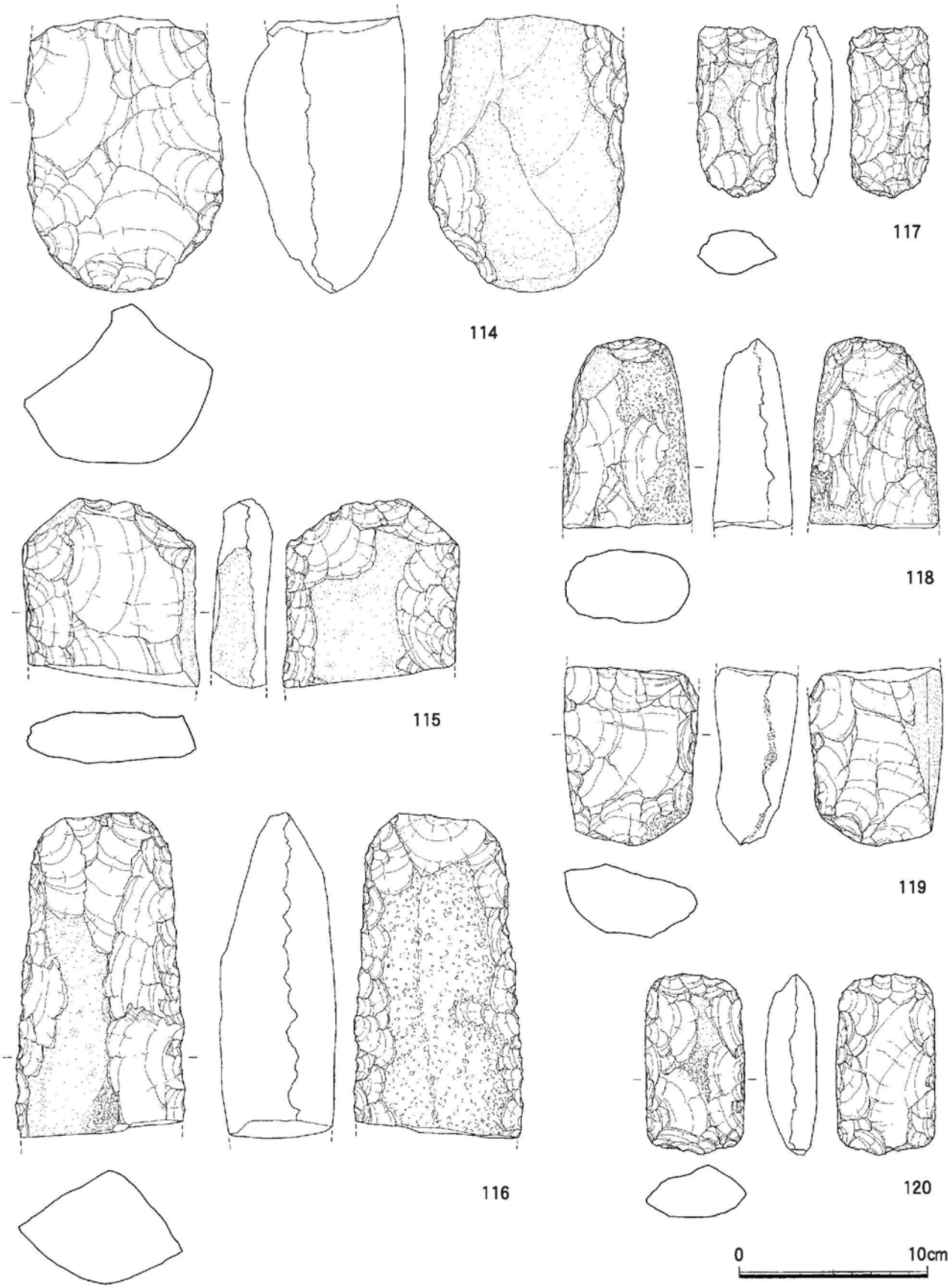


図62　Ⅰ区南区礫層出土石斧未製品実測図８（⅓）

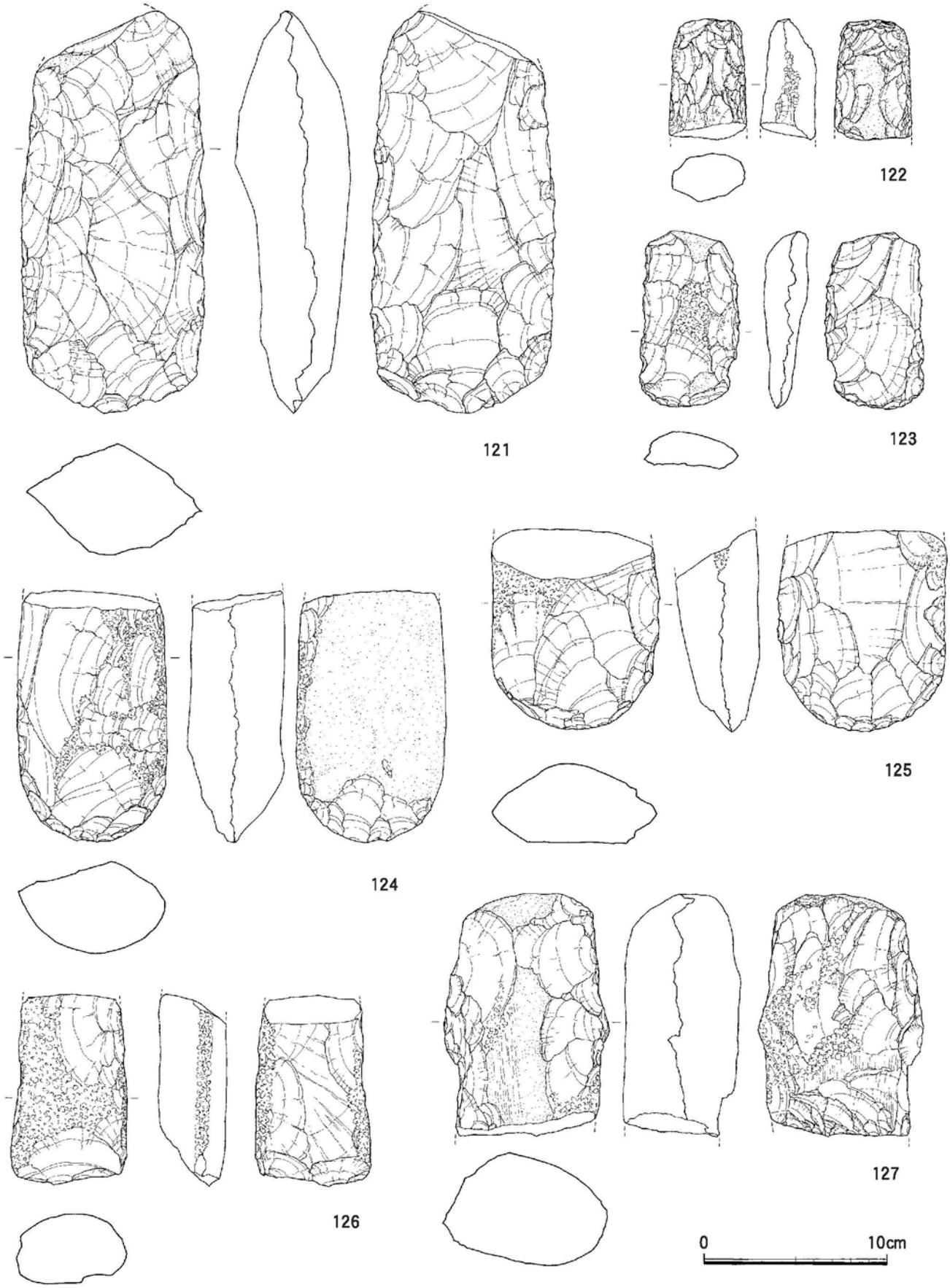


図63　Ⅰ区南区礫層出土石斧未製品実測図９（⅓）

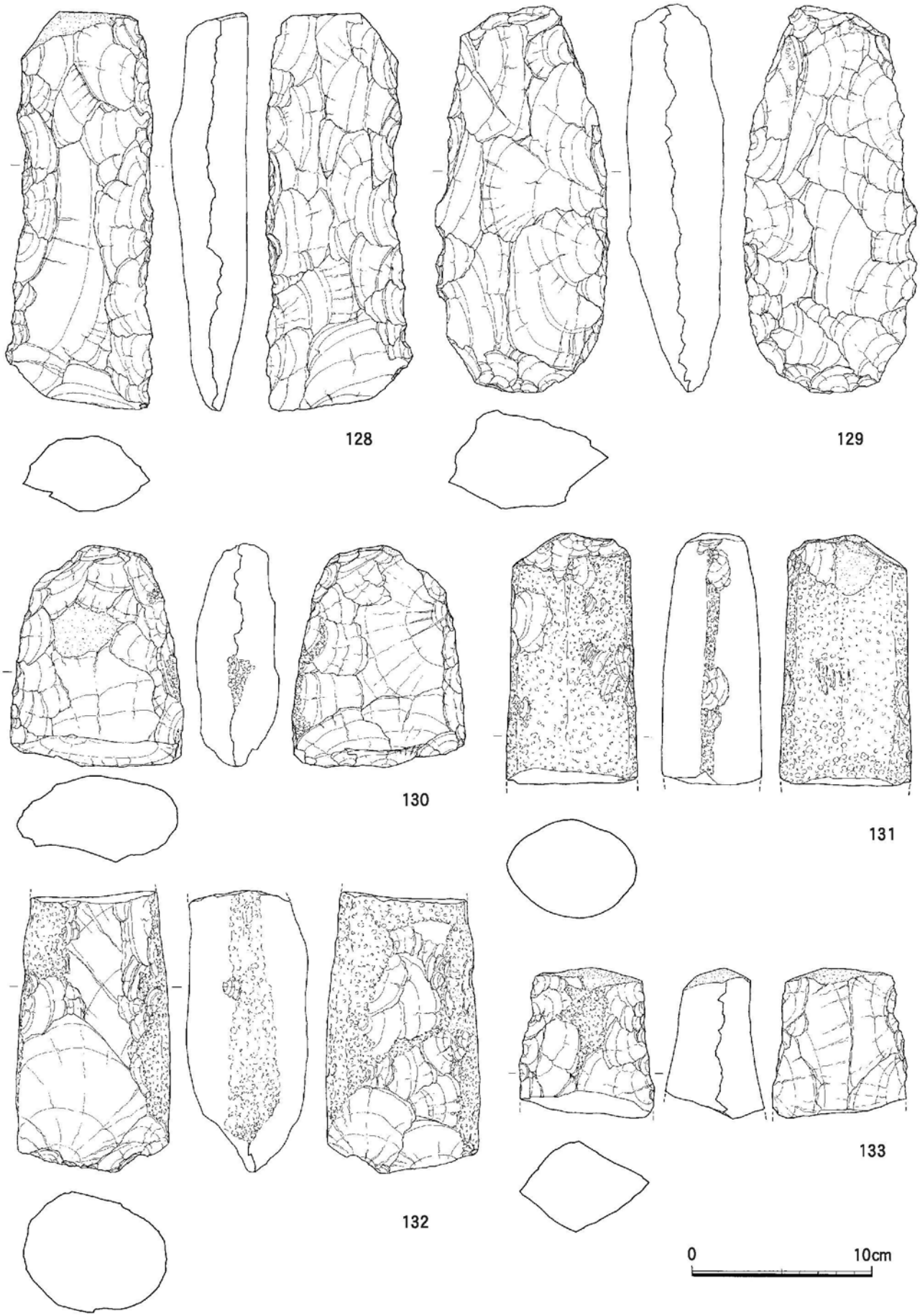


図64　Ⅰ区南区礫層出土石斧未製品実測図10（⅓）

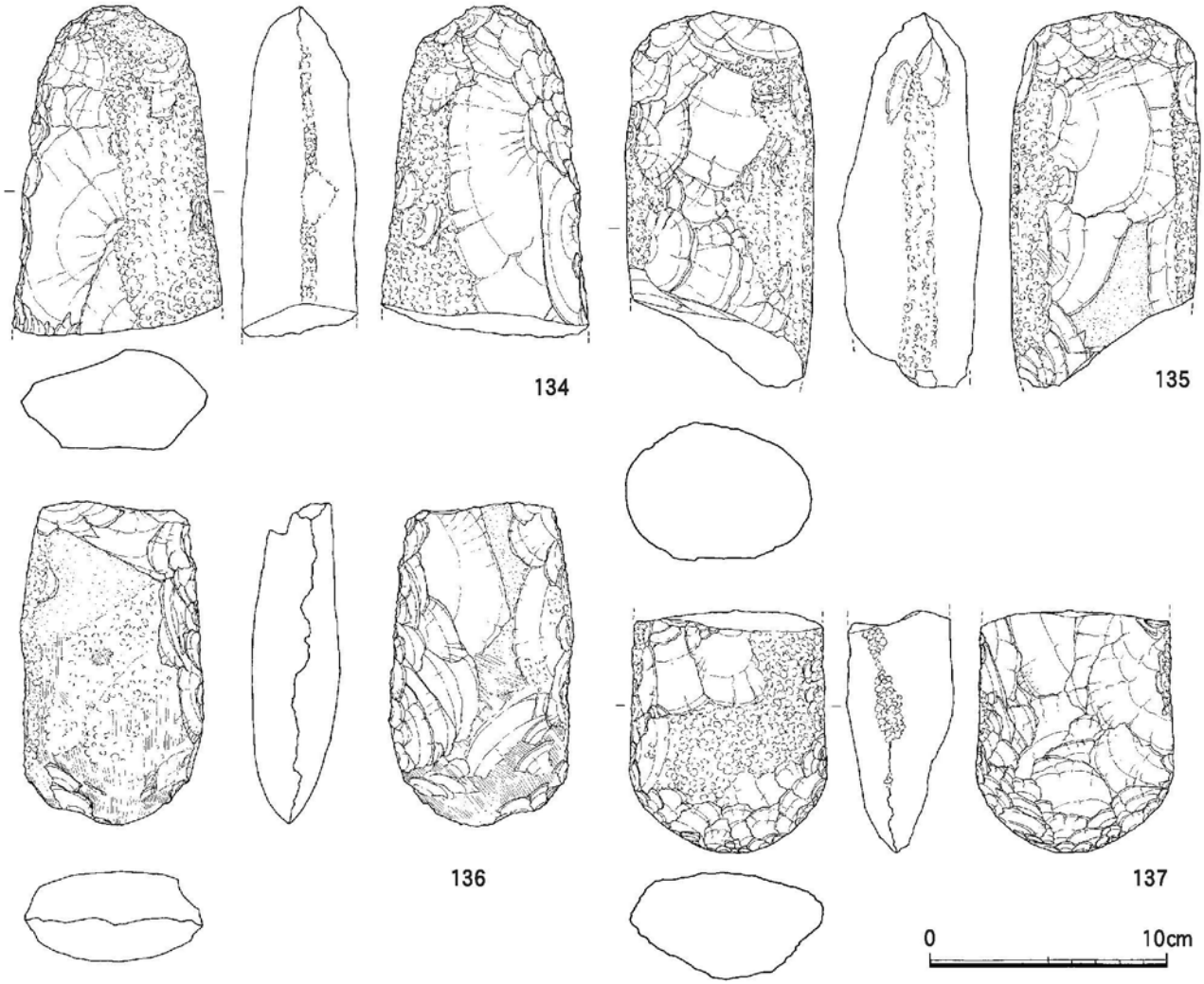


図65　Ⅰ区南区礫層出土石斧未製品実測図11（⅓）

れるべきものか。A面に自然面を残す剥片素材を使っている。片側は交互剥離を作り出しているが、反対側の側縁は素材の剥出時にできた平坦面のままである。100は頭部近くに自然面を残している。101は淡い灰色を呈している。自然面を多く残しているが、すでに石斧の形状に近い。102は残っている自然面の形状から調整は表面の一部を剥いでいるだけである。頭部は自然面で、刃部側はあまり大きな剥離がなく、細かい調整状の剥離が認められ欠損ではないような印象をうけるが、そうするとあまりにも寸詰まりすぎる。あるいは石斧以外の未製品か。103は小型の未製品である。頭部は自然面である。打製石斧未製品か。105の大半は黄色味を帯びた淡い灰色を呈する自然面である。全体黄色味を帯びた灰白色を呈する小型の未製品である。頭部の下と刃部の一部を取りすぎているようである。106は黒に近い濃い灰色を呈する未製品で、頭部は白味を帯びた自然面である。107は片面に自然面を大きく残す。ほぼ石斧の形態を形作っている。108も自然面を大きく残すが、ほぼ石斧の形態に沿っている。109は石斧未製品としてここで取り上げているが、4周とも交互剥離を施しており、目的不明の未製品である。幅・厚さ・全体の作り方は太形蛤刃石斧の未製品に近く、本来石斧を作ろうとして失敗したものを、例えば石錘に作り直そうとして結局あきらめたものではないだろうか。110は薄手の短冊形を成しており、一見縄文時代の石斧に似た形態の未製品である。色調は濃く黒色に近い。全面に調

整が施され、失敗部分が認められない。あるいはもう少し長い石斧を作ろうとして、刃部を取りすぎたものか。111は第Ⅰ工程に入れるべきものか。B面の頭部下に大きく自然面を残す。全体の調整は粗いが、側縁の一部に細かい剥離が施されていることから、第Ⅱ工程にいれた。刃部を大きく取りすぎている。112・113は敲打直前の未製品。114はB面のほとんどが自然面であるが、ほぼ石斧の形状に近い。115は扁平な素材を利用し、B面に自然面を残している。打製石斧の未製品か。117は超小型の未製品である。ごく一部に自然面を残す。小型だが、全体の形状は他の石斧未製品に近い。119は片側側縁が自然面である。反対側の側縁に敲打状の痕跡があるが、自然にできたものと考えられる。120は小型の未製品である。A面中央部に自然面が残り、その周囲と側縁の一部に敲打状の痕跡が残っているが範囲が狭く、自然についたものか判断が難しい。刃部を取りすぎたため遺棄したものと思われるが、もともとそれほど長いものではないであろう。121は濃い灰色を呈する未製品である。頭部は主軸に対し斜めであるが、ここは自然面で本来からのものである。あえて失敗部分をあげると、中央部を取りすぎて薄くなっていることだが、それでも厚さ4㎝あり十分再生可能なような印象を受ける。128は完存している。頭部は平坦な自然面である。全体が短冊形を成し、太形蛤刃を目指したものではない。A面の中央から下半分にある最初の剥離を取りすぎているように思えるが、その後も調整を続けており、失敗部位が見あたらない。129の頭部には一部に自然面が残っているが、調整で平坦面を作り出している。完存しており、側縁の一部がやや取りすぎているが、致命的なミスとは考えられず、失敗部位が見あたらない。十分磨製石斧に成りうる未製品である。

104・116・122～127は敲打を施した第Ⅲ工程の未製品である。104はA面と頭部のほとんどが自然面である。B面も一部に自然面を残している。一方片側側縁は敲打を十分施して剥離面をほぼ消し去っている。最も厚い部分で7.5㎝も厚みが残っているが、敲打と研磨で薄くしていくのだろうか。116はA面の断面形が三角形を成し、やや白味を帯びた自然面を残している。B面は縁辺を除いて敲打が施され、石斧の形状ができあがっている。A面の自然面には2方向の擦痕が無数に確認できる。研磨による擦痕とは状況が異なっており、自然についたものではないかと思われるが、量が多いのが気にかかる。122は小型の未製品で、ほぼ全面に敲打が施されているが、両面は元々の剥離が浅いためか敲打痕は少なく、両側縁は入念に敲打されている。頭部の一部は平坦を成す自然面である。123も小型の未製品である。B面はほぼ全面欠けている。残存した面に敲打痕が確認できる。頭部に自然面が残っている。全体黒っぽい色を呈している。124は灰白色を呈した未製品で、B面はほぼ全面自然面であるが、その形状はすでに石斧の形態を成している。自然面の一部とB面の一部・側縁部に敲打を施している。127は頭部が平坦を成す自然面である。A面に残る自然面は黄色味を帯びた頭部の自然面と異なり、濃い灰色を呈している。自然にできた剥離面であろうが、そこにかすかに縦方向の擦痕が認められる。B面の図下部にも擦痕が認められ、こちら側は明らかに敲打痕を切って研磨を施している。研磨を施していることから第Ⅳ工程に入れるべきかもしれないが、全形の状況からさらに敲打を施すのが自然で、実際の工程は剥離と敲打、敲打と研磨をある程度平行しながらいったものであろう。130は幅広の未製品であるが、両側縁に敲打が施されている。131は頭部調整で平坦面が作り出され、他の部位はほぼ全面敲打が施されている。132もほぼ全面敲打が施されているが、折損している上に刃部が大きく取られている。133は頭部が平坦な自然面である。134・135はともに敲打を多く施した折損品だが、134は黒味を帯びた灰色で、135は灰白色を呈している。137は敲打で全形を作り出しているが、刃部も取りすぎている。

136は研磨を施した第Ⅳ工程の製品である。A面は大部分が黄灰色の自然面で、その上に敲打を施し、刃部近くはさらに研磨を施している。B面は一部に自然面を残し、他は剥離を施しているが、剥

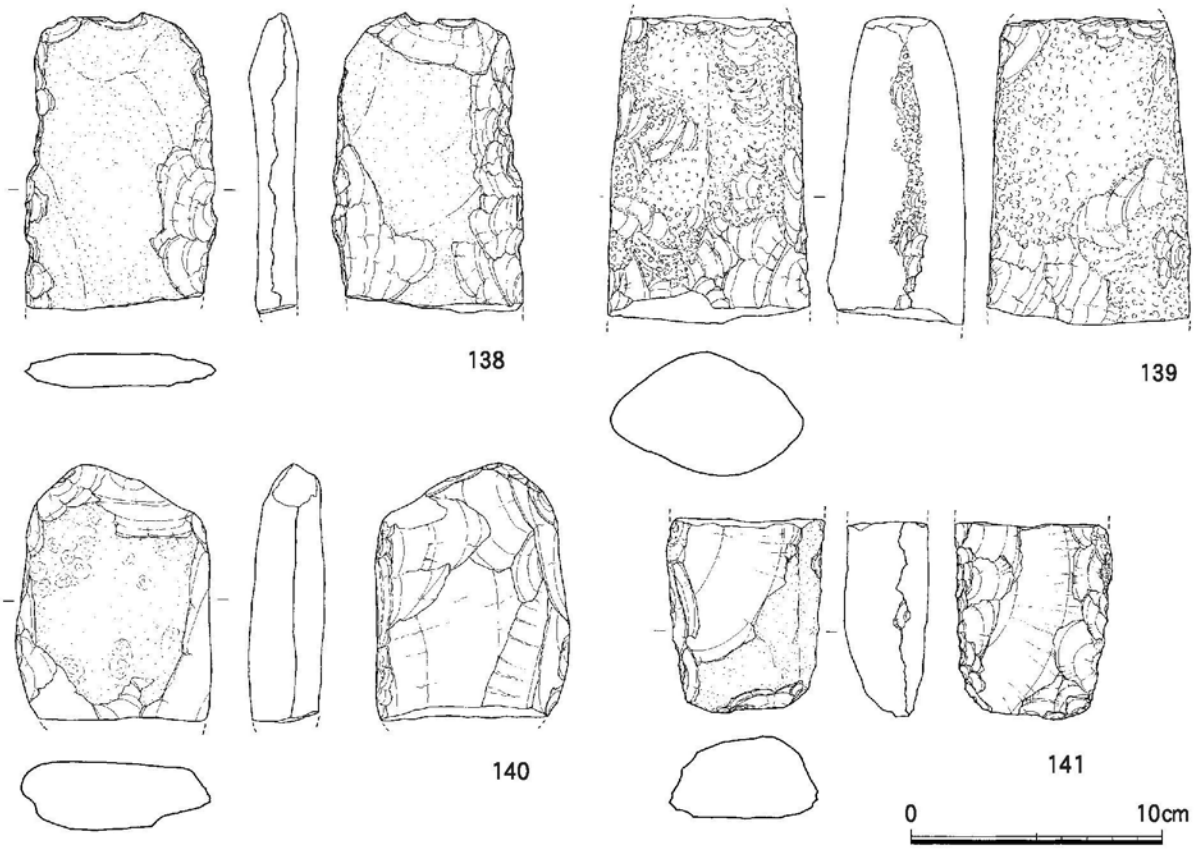


図66　Ⅰ区北区ＳＤ01東岸出土石斧未製品実測図（⅓）

離部分は黒色を呈している。両側縁は敲打が施されているが、一部以外はあまり入念ではない。刃部は研磨が施され、漆黒色を呈している。刃先の一部は欠け、方向の違う擦痕が無数についていることから使用されてものと考えられる。通常の太形蛤刃石斧の場合、全面に入念な敲打と研磨を施しているが、これは敲打は一部に限られ、多くが自然面・剥離面のまま刃部のみ研磨されており、あるいは自己消費用として整形を省略した可能性も考えられる。

Ⅰ区北区ＳＤ01東岸出土石斧未製品（図66）

ＳＤ01の東岸はⅠ区の他地点のような大型の礫を含む弥生時代礫層やその上の弥生時代の包含層が存在せず、小型の礫と土まじりの砂層とその上の土まじり砂層からなり、ともに古墳時代の包含層で、その中から弥生時代遺物が出土する。

138は扁平な素材を利用した打製石斧未製品と思われる。両面とも中央部に自然面を大きく残し、両側縁の縁辺調整のみを行っている。140も扁平な素材を利用したもので打製石斧の未製品か。139はほぼ全面に敲打を施した未製品である。頭部も調整によって平坦面を作り、一部に敲打を施している。141はＡ面の断面形が蒲鉾形、Ｂ面が平坦面を成しており、このままでは片刃になりそうである。側縁の一部に敲打が見られる。

北側拡張区出土石斧未製品（図67）

北側拡張区も弥生時代包含層が存在せず、古墳時代包含層から出土したものである。

142はＡ面左側は自然面のままで、Ｂ面と刃部は調整をほぼ終えている。143は灰白色の色調の第Ⅱ工程をほぼ終えた未製品である。刃先をやや取りすぎているが、その他に失敗部位が見あたらない。

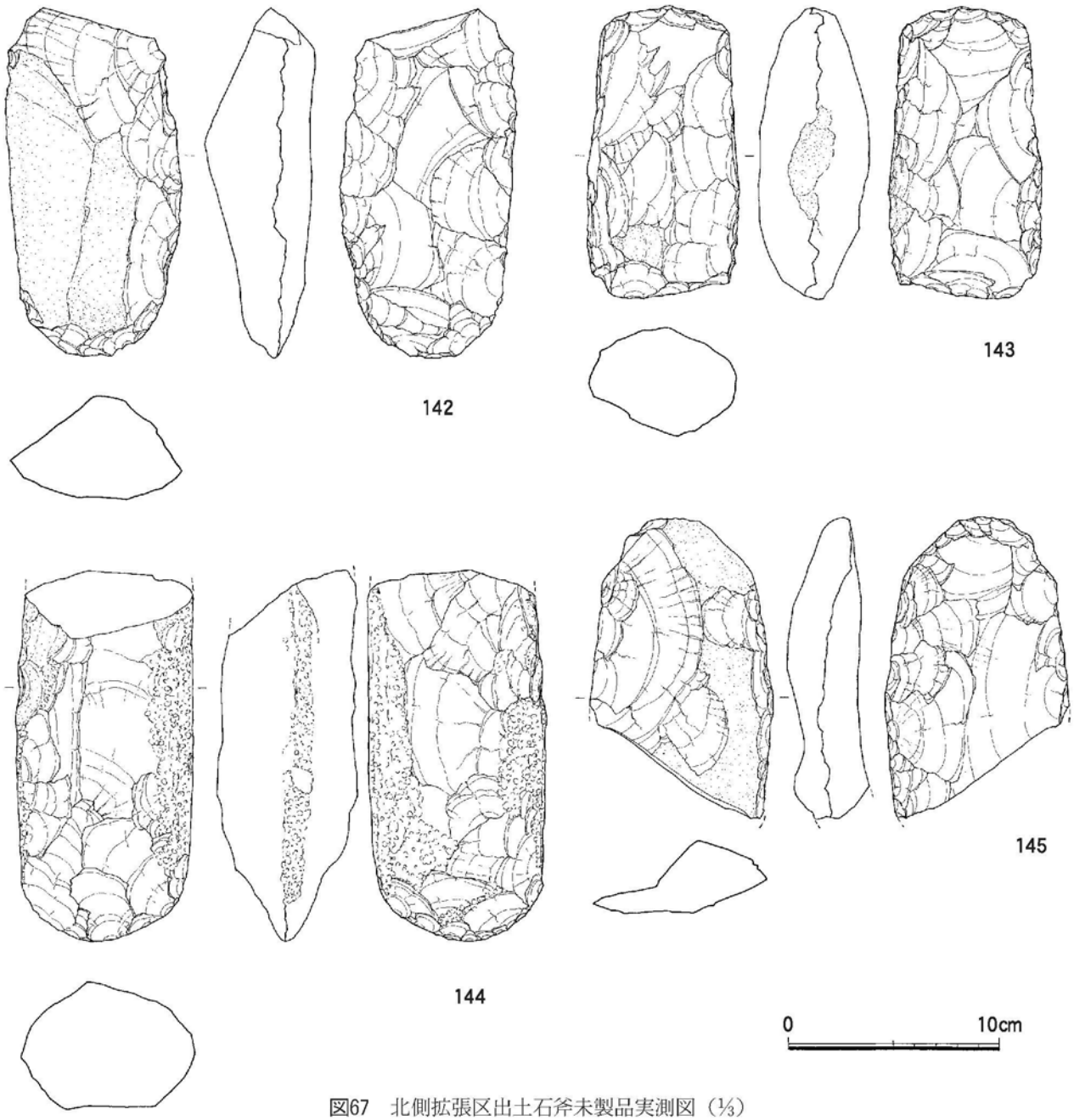


図67　北側拡張区出土石斧未製品実測図（⅓）

やや寸詰まりだが、磨製石斧として使えそうである。144は第Ⅲ工程の未製品で、灰白色を呈しているが敲打部分は白色に近い。145はA面の一部とB面のかなりの部分を取りすぎており、本来の素材の形や天地もよくわからない。天地逆の可能性もある。

Ⅱ区出土石斧未製品（図68・69）

Ⅱ区も同様に弥生時代包含層が存在しない。弥生土器やチップはⅡ区北半からも出土するが、その量は激減する。石斧の未製品の大半も南半からの出土である。

146は第Ⅱ工程の未製品で、頭部下に自然面をわずかに残す。灰白色を呈する。147は第Ⅲ工程の未製品である。刃部側・頭部側の両方を大きく折損しているが、折損後に再調整を行っており、敲打段階で折損したものの、別のものに転用したのではないかと思われる。ただし、その何かはわからない。148は小型の未製品である。折損品だが、側縁の一部も大きく取りすぎている。天地逆の可能性もあ

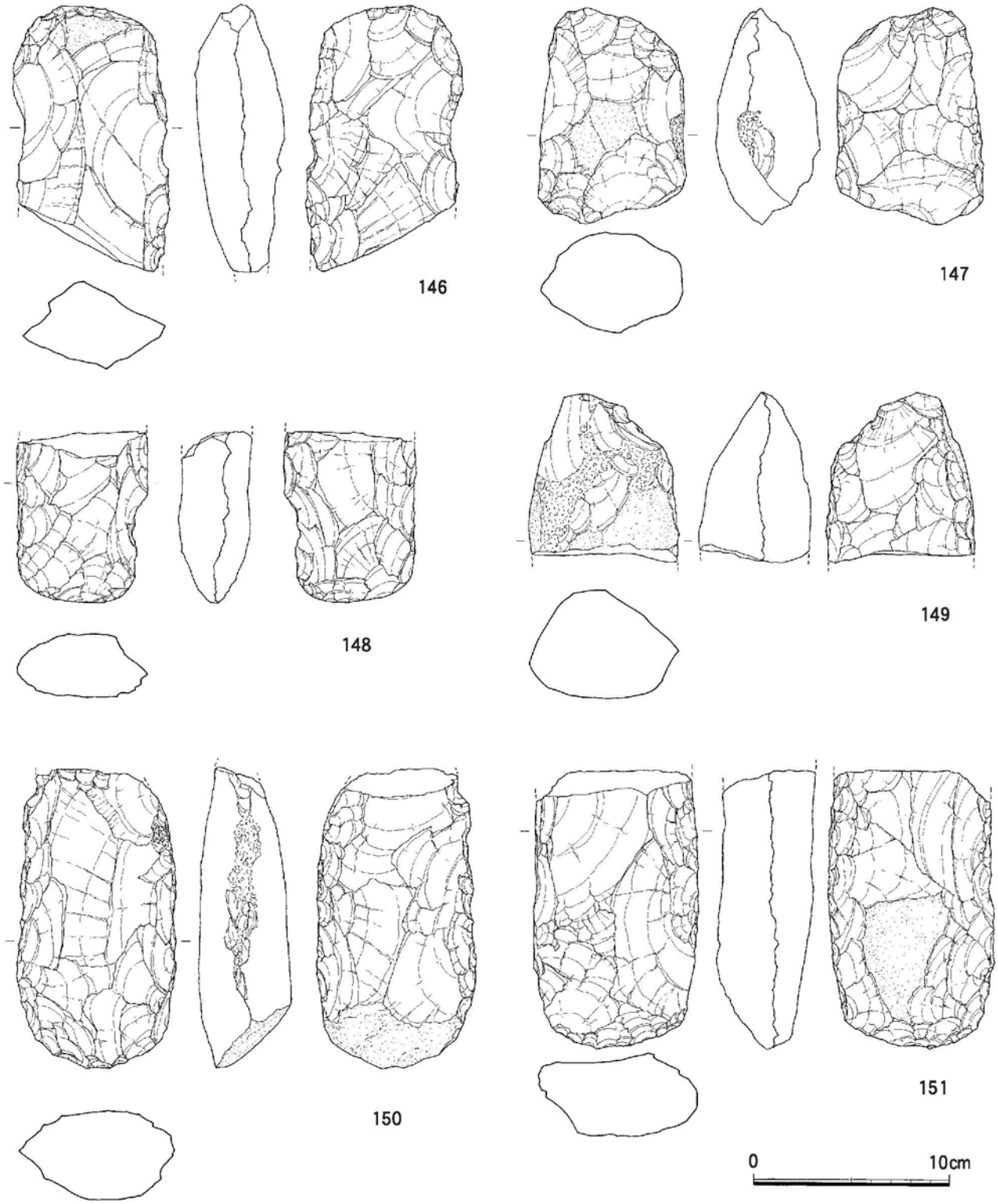


図68　Ⅱ区出土石斧未製品実測図１（⅓）

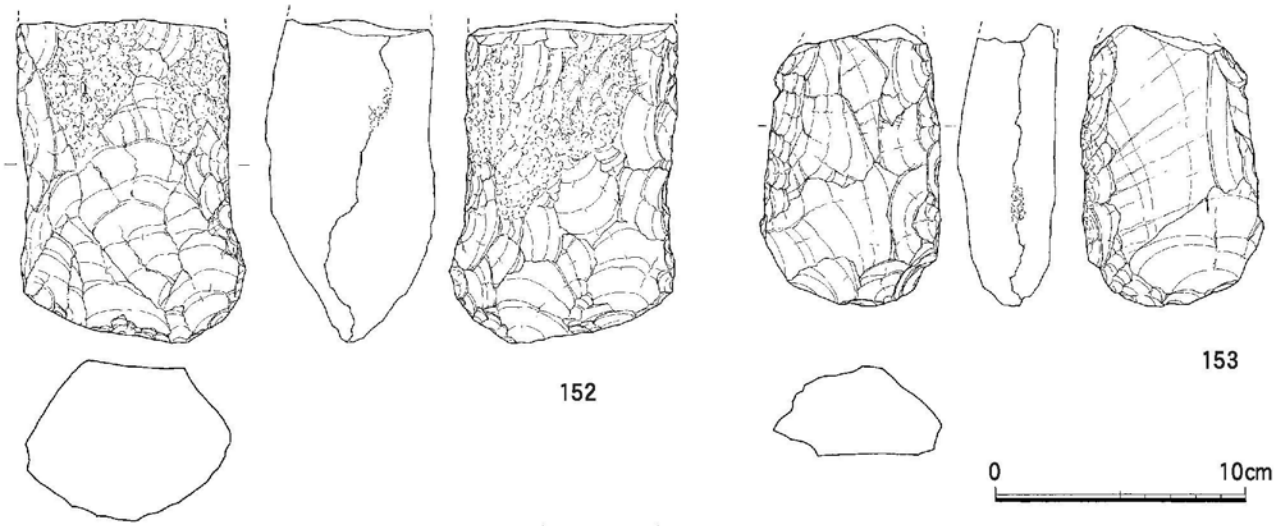


図69　Ⅱ区出土石斧未製品実測図２（⅓）

る。149は第Ⅲ工程の未製品。150は第Ⅱ工程途中の未製品で、天地不明。A面下は自然面を残している。黄色味を帯びた色調を呈している。151は第Ⅲ工程の未製品で、B面にやや窪んだ自然面を残している。152は第Ⅲ工程の未製品である。153も側縁の一部に敲打を施している。最も厚い部分で3.5㎝しかなく、太形蛤刃にするにはやや小さいか。

ＳＤ01出土石斧未製品（図70～73）

154・155は第Ⅰ工程の未製品である。ともに幅広の未製品である。154はA面はほぼ全面細かい凹凸のある自然面である。155はあるいは石斧の未製品ではなく、石核の可能性もあるが、片側側縁はやや細かい調整で交互剥離を施している。例えば弥生時代に散見できる環状石斧の未製品という可能性はないだろうか。

156・158・159・162・163・172は第Ⅱ工程の未製品である。156はA面の中央に白色に近い自然面を残している。頭部のすぐ下は幅が狭い。158は幅広の未製品。159は頭部・A面に自然面を多く残している。B面上部をやや取りすぎているが、石斧には支障がないように見える。162・163は打製石斧の未製品であろう。162の自然面は白色を呈し、剥離面も白味を帯びる。有肩の打製石斧かもしれない。163は天地不明。172は小型の未製品で、天地不明。

157・160・161・164～171・173・174は敲打を施した第Ⅲ工程の未製品である。157はA面のほとんどが自然面であるが、石斧の形状を成している。両側縁に敲打痕が認められるが、自然についたものである可能性もある。160はA面に敲打を密に施している。B面は平坦な古い剥離面で、白色に近い色を呈している。161は小型の未製品で、A面に自然面を残し、両側縁に敲打を施している。164は両面とも自然面が大きく残り、調整部分は両側縁と頭部のごく一部のみで、石斧に近い素材を選んでいる。165は随所に自然面が残っている。両側縁に敲打痕が残る。166はA面と両側縁に敲打を施している。167はかなり自然面が残っている。自然面に敲打もしくは自然による細かい凹凸の潰れかの判断が付きにくい部分が多いが、一部がその後の調整にも及んでいるため、敲打を行っているのは間違いない。168は完存している。頭部は平坦な自然面である。A面の大半とB面の一部に敲打を施している。A面上部の剥離がわずかに深すぎるが、他に失敗部分が見あたらない。169・170ともにほぼ全面に敲打を施した折損品である。171はA面のみ敲打を施している。173は厚さ2.7㎝の薄い未製品である。天地逆の可能性もある。174はA面中央に大きく自然面を残し、他の調整部分は浅い剥離が多く、元々細い円

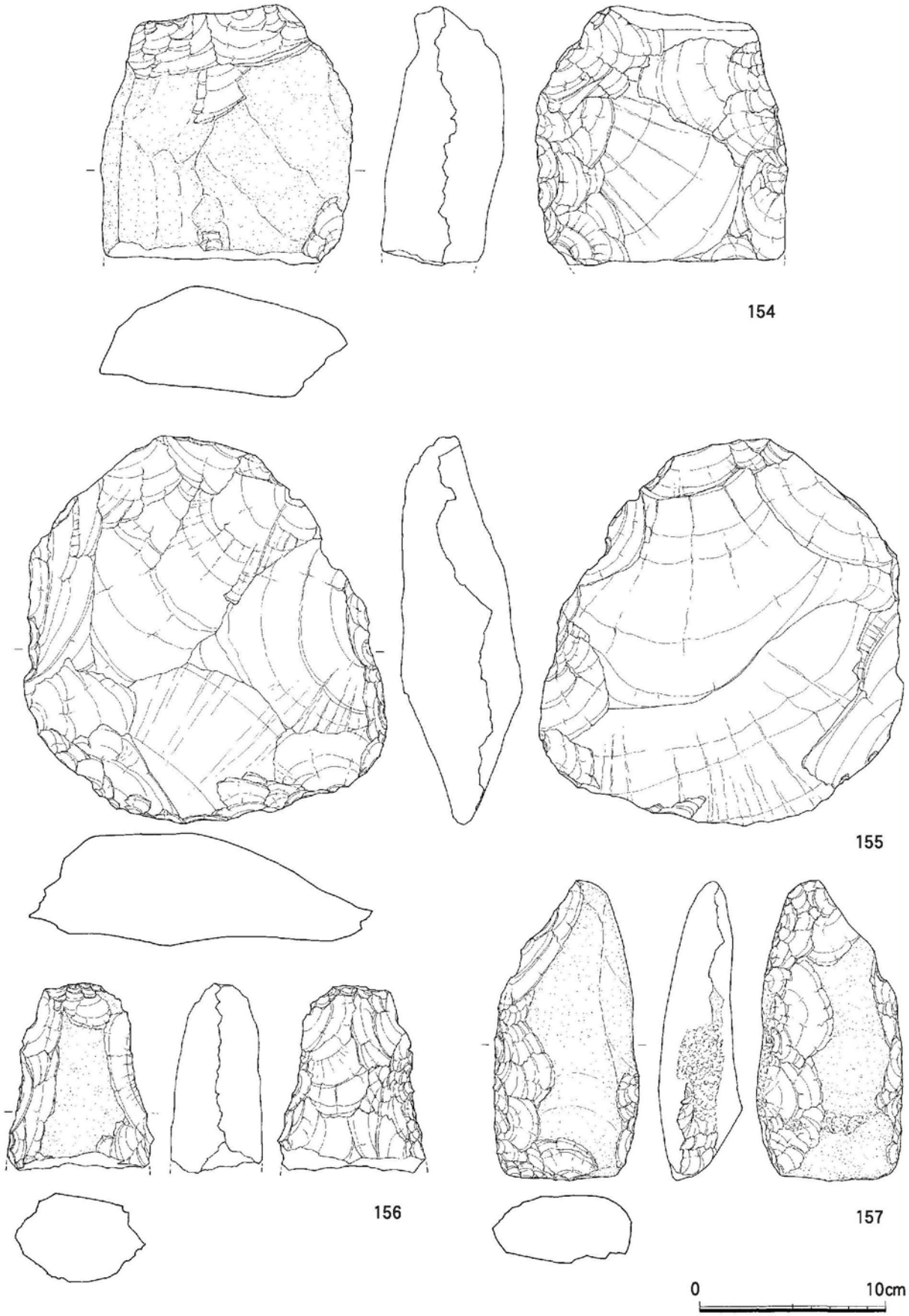


図70　ＳＤ01出土石斧未製品実測図１（⅓）

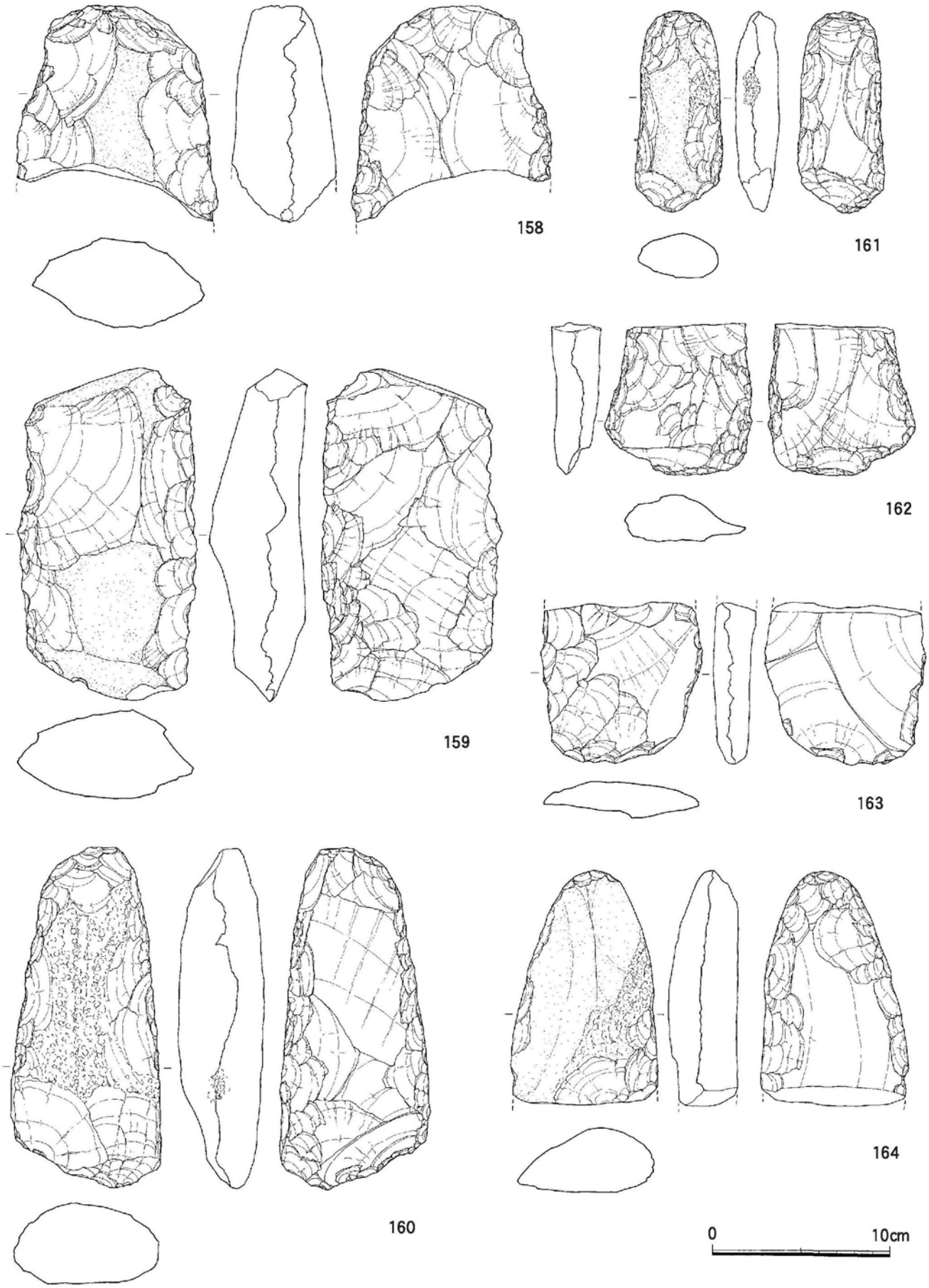


図71　ＳＤ01出土石斧未製品実測図２（⅓）

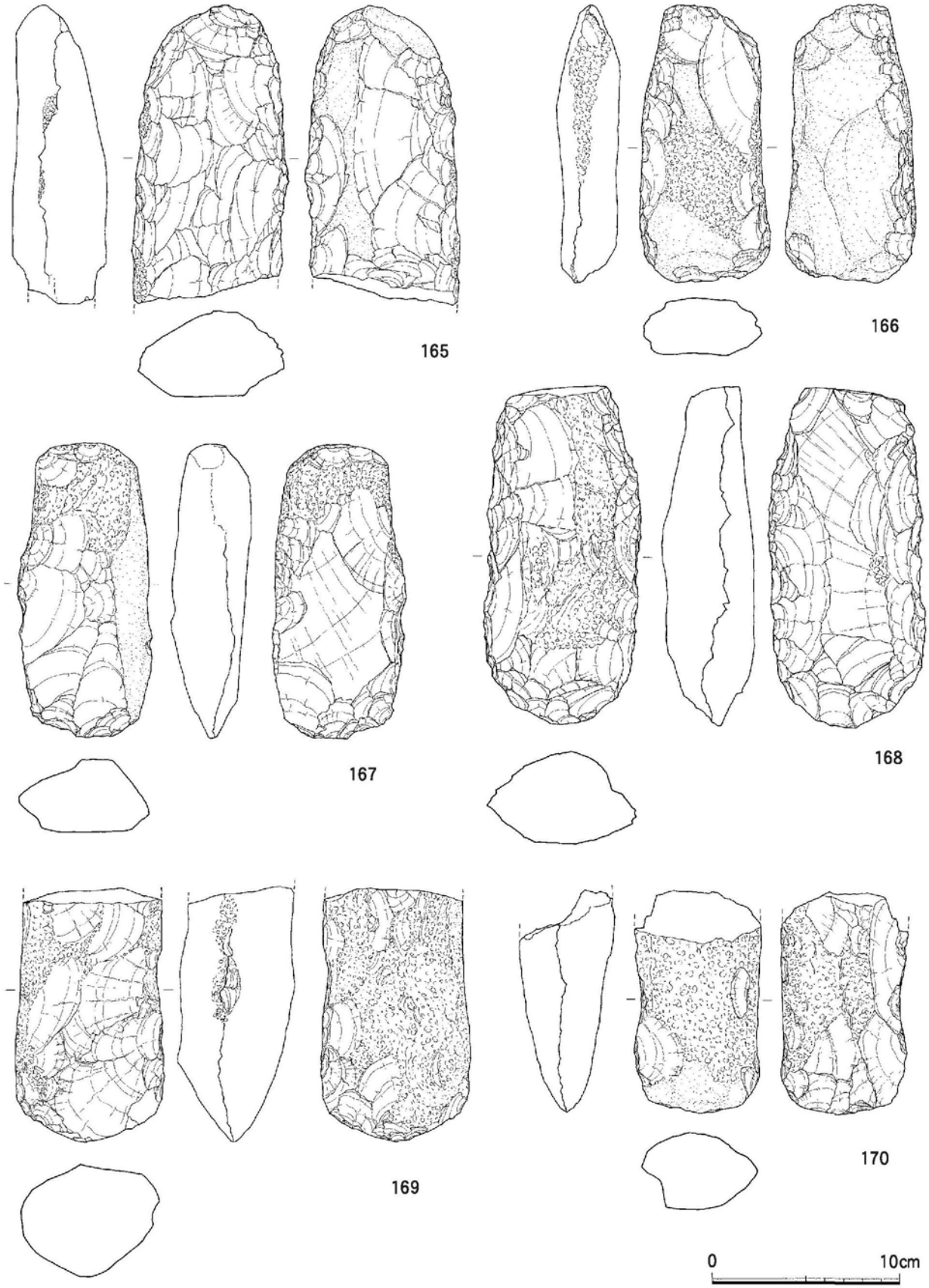


図72　ＳＤ01出土石斧未製品実測図３（1/3）

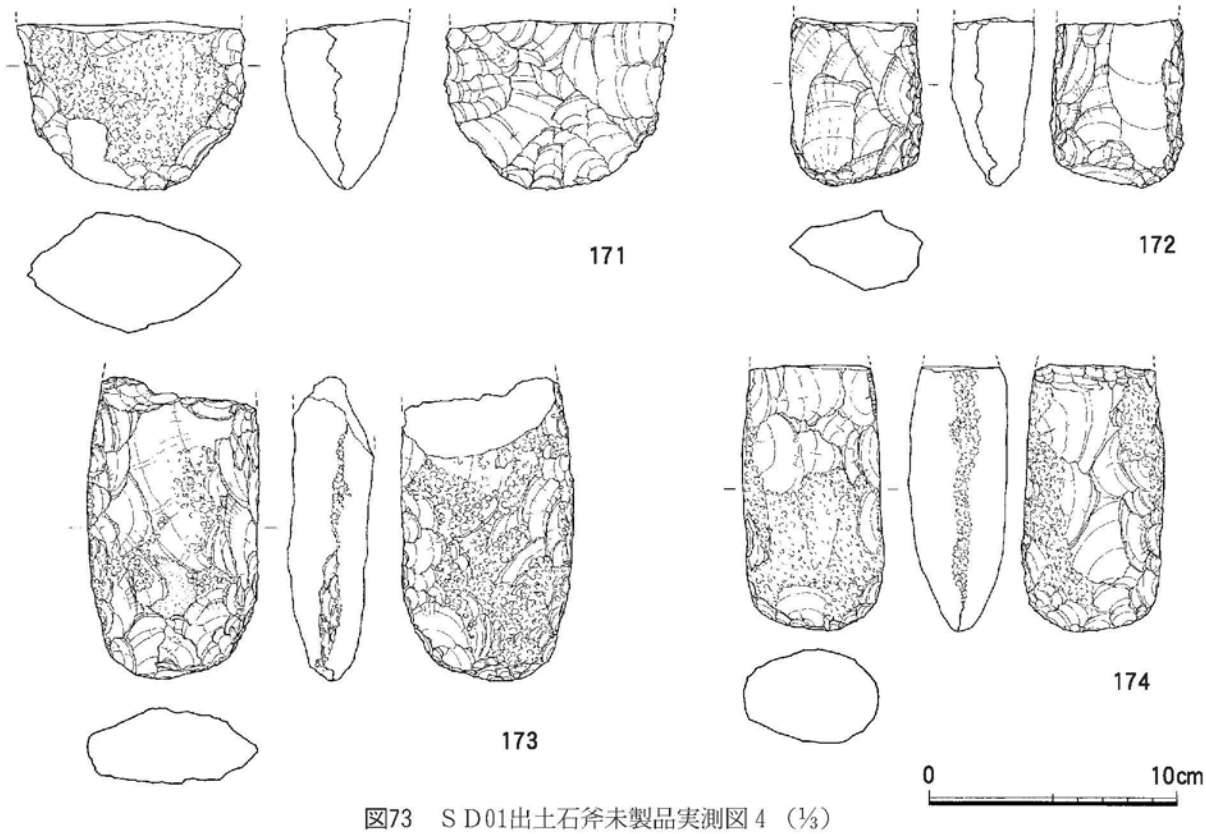


図73　ＳＤ01出土石斧未製品実測図４（⅓）

柱状の素材であったと思われる。ほぼ全面に敲打痕が見られるが、剥離が浅いためか、敲打も一部を除いて密ではない。

その他の遺構・トレンチ・表土・撹乱・出土石斧未製品（図74～77）

175は出土地不明。中央部が大きく窪んでおり石斧未製品ではない可能性もあるが、刃部にあたる部分を両面とも調整しており、ここで取り上げた。中央の窪んだ部分は周囲の自然面と色調が異なっている。あるいは当初石斧を目指したものの、途中で石斧製作の台石として転用した可能性も考えられる。176は撹乱出土。小型の未製品であるが長さ９㎝弱しかなく、石斧未製品かどうか不明である。四周とも調整が施され、ほぼ形成は終わっていると思われる。177も撹乱出土。第Ⅱ工程初期の折損品である。178はＳＸ04出土。頭部は平坦な自然面である。頭部の下の１ヶ所を取りすぎたのと、その反対側を逆にとれずに高く残ったため遺棄したものであろう。179はトレンチ出土。第Ⅱ工程の折損品である。180もトレンチ出土。天地不明だが、交互剥離を行っているのは刃部に多いことから刃部とした。181はＳＸ02出土。Ｂ面は薄い剥離以外の調整痕がなく平坦であることから全面剥離したのではないかと考えられる。どちらにしろ薄い素材であったと思われる。182もＳＸ02出土。小型の未製品だが厚さは比較的あり、小型の磨製石斧の未製品か。183はＳＸ04出土。184はトレンチ出土。頭部とした面が平坦な自然面であることから天地を決めたが、あるいは天地逆で刃部を取りきれなかった可能性もある。ただし刃部とした部分の上は幅が６㎝程度しかなく、太形蛤刃をつくるには狭い。185は南側拡張区表土出土。すでに縁辺調整を部分的に施しており、第Ⅱ工程初期の未製品である。Ａ面は自然面が残り断面三角形で高く、Ｂ面は全面調整が施されて平坦面を成している。186も南側拡張区表土出土。折損品だが、図示していない面を大きく欠損している。187はやや白色を呈した長い円礫を素材にし、その一部に調整を加えたものである。188も白っぽい色調で、187と同様に長めのやや平たい礫を

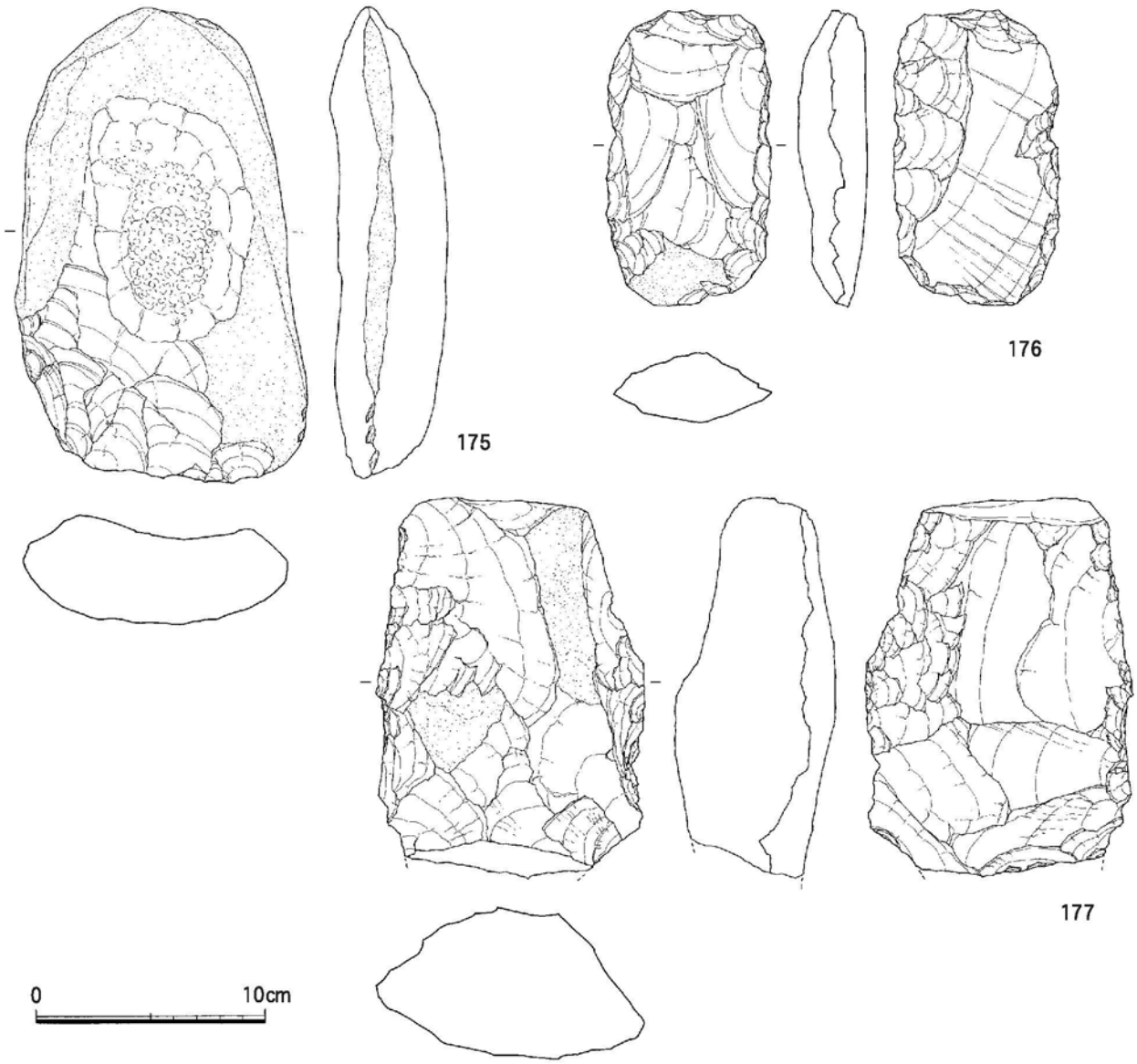


図74　その他の遺構・トレンチ・表土・撹乱出土石斧未製品実測図１（⅓）

素材に薄い剥離を加えたものである。189は南側拡張区表土出土の第Ⅲ工程未製品である。190は表土出土。ほぼ全面敲打が施されている。平面形状から言えば図のような天地になるが、刃部にも敲きが及び断面形は刃部の形態を成していない。天地逆だとすると、刃部を欠損しているが、欠損部の一部にも敲打が及んでいる。折損後敲石に転用した結果、刃部に敲打痕が及び断面形が丸くなったものと理解するのが自然である。191はＡ面の多くの部分とＢ面の一部に敲打が施されている。頭部は主軸に対して斜めの平坦な自然面で、刃部には交互剥離が施されていることから折損品ではない。長さ16cmとやや短めではあるが、重要な欠損部位も認められず、遺棄理由が見あたらない。表土出土。192は南側拡張区表土出土。幅５cm弱、厚さ2.5cmと小振りな未製品だが、敲打はほぼ全面に及び磨製石斧になるのは明らかである。193は防空壕出土。幅7.5cmあるのに対して長さ10cmとアンバランスであるが、頭部は自然面で、刃部も折損しているとは見られない。両側縁は調整が施されている。最も厚い頭部で厚さ３cm弱と薄く、刃部近くでは１cm前後の厚さしかなく、強いて言えば小型の打製石斧であろう

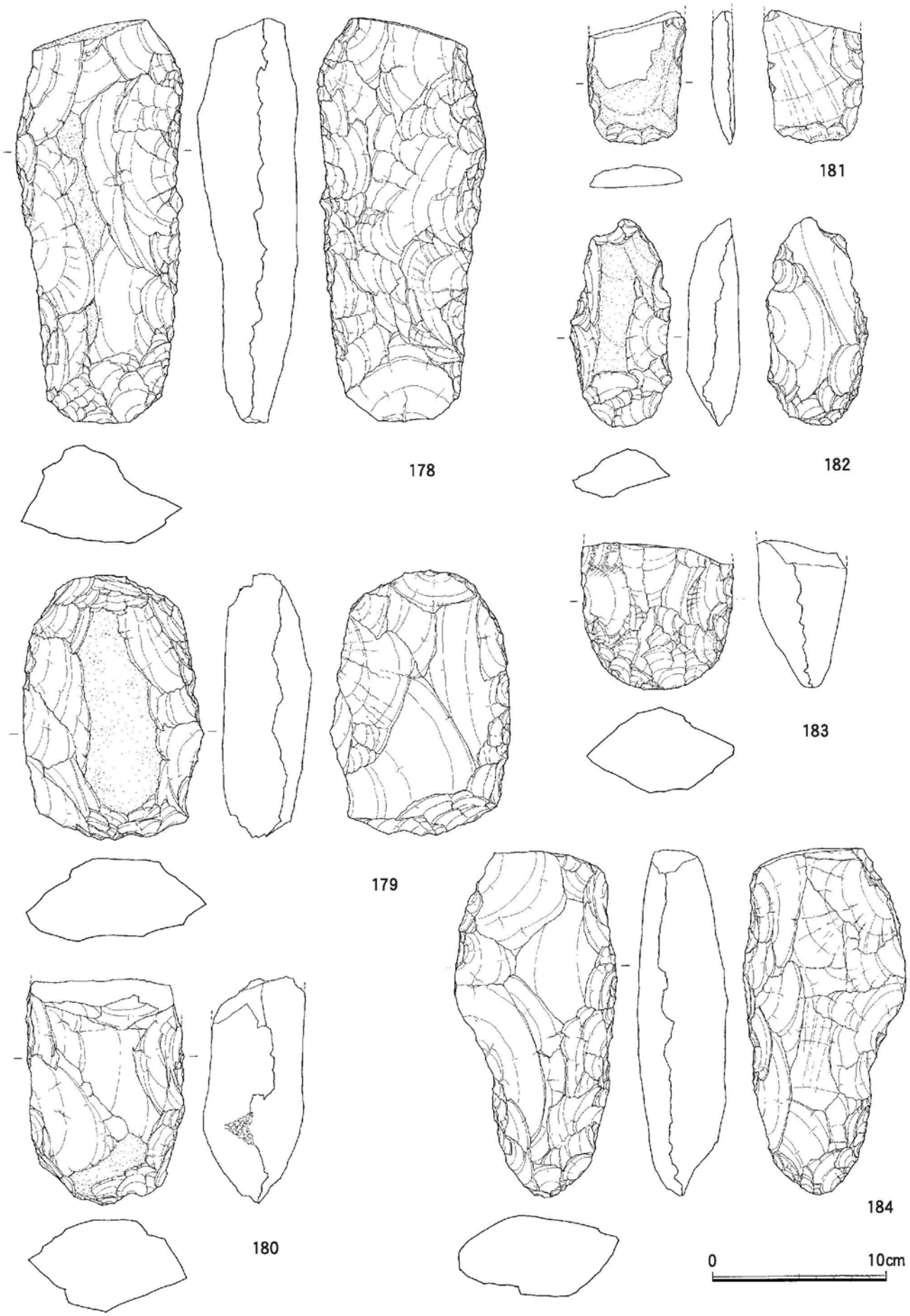


図75　その他の遺構・トレンチ・表土・撹乱出土石斧未製品実測図２（⅓）

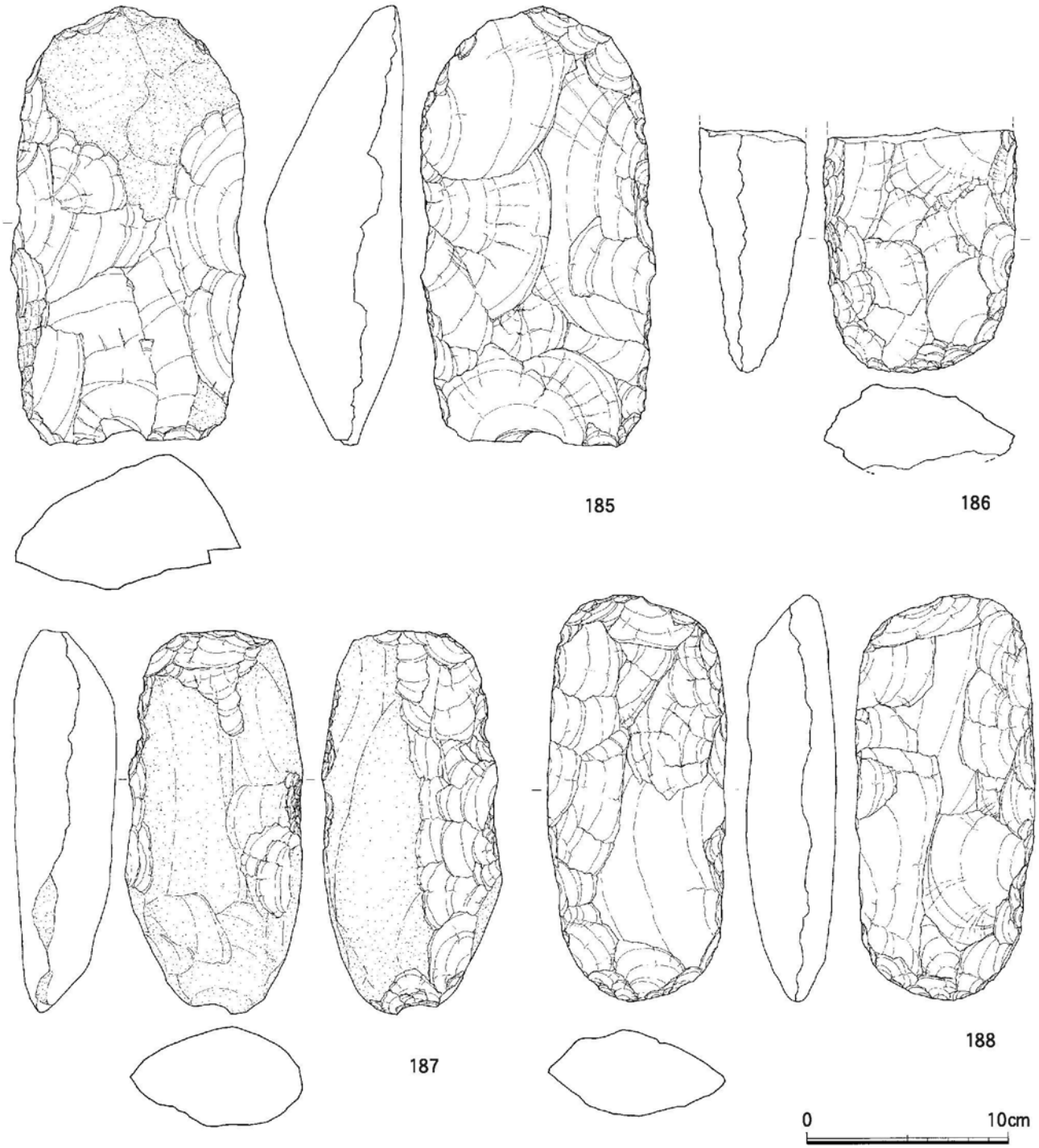


図76　その他の遺構・トレンチ・表土・撹乱出土石斧未製品実測図３（⅓）

が、不明の未製品である。194は南側拡張区表土出土。両側縁に敲打が施されている。195は撹乱出土。Ａ面中央の剥離は、加工以前からある古い剥離である。

以上実測した195点について簡単に説明を加えたが、当初仕分けを十分行わなかったため、後日になってでてきた資料で、時間不足により実測していないもの中にも資料的に良好なものが少なくない。また本書の校正中に遺物番号に欠番ができるなど、報告者の怠慢で報告が不十分になってしまった。

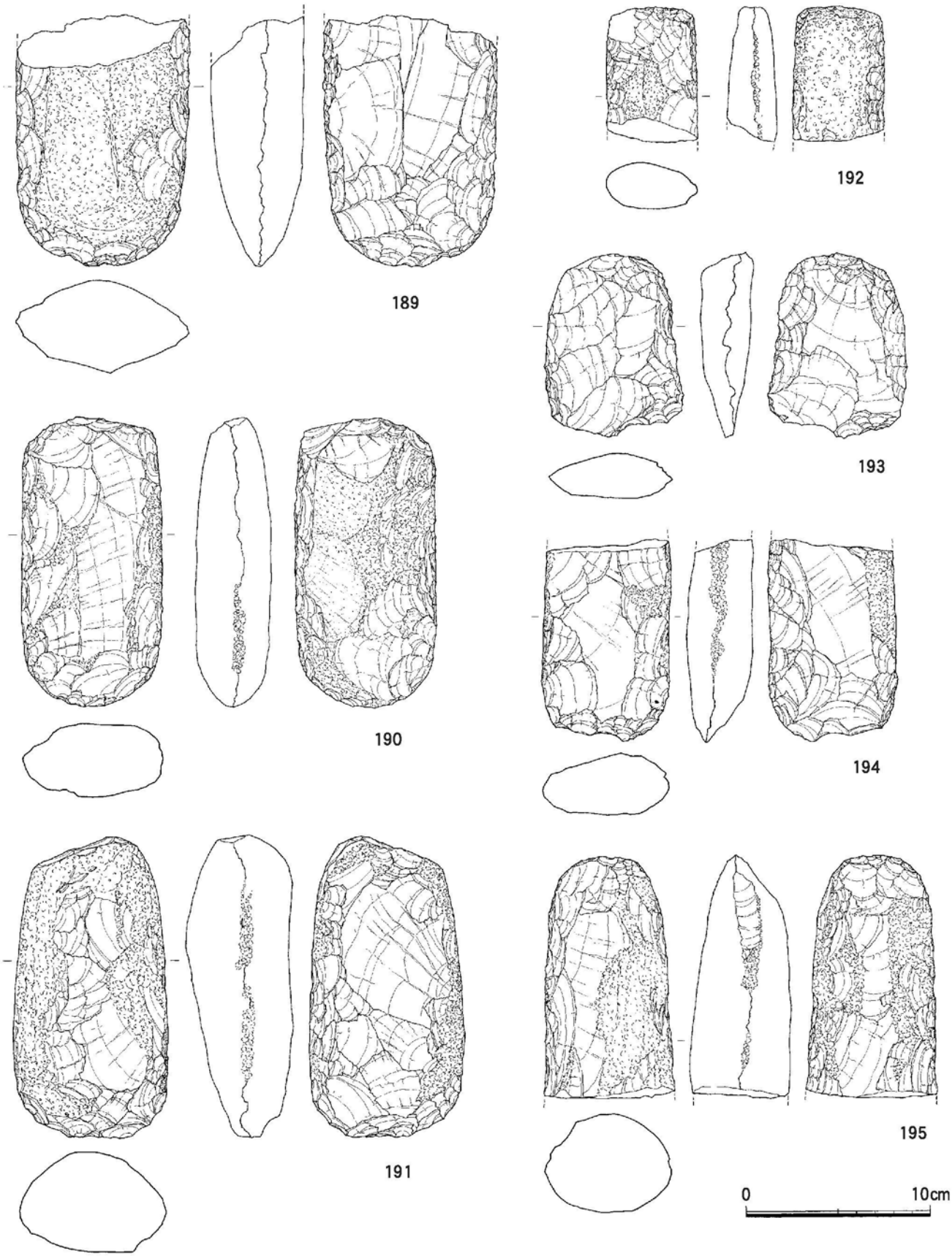
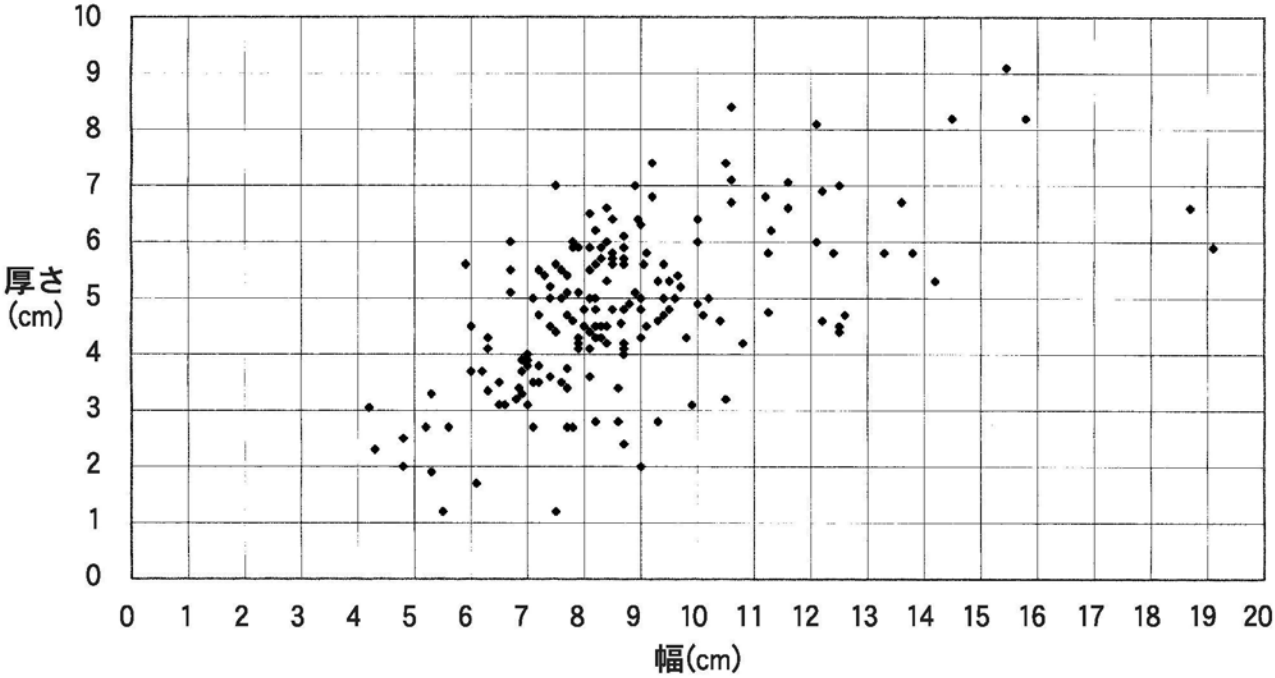
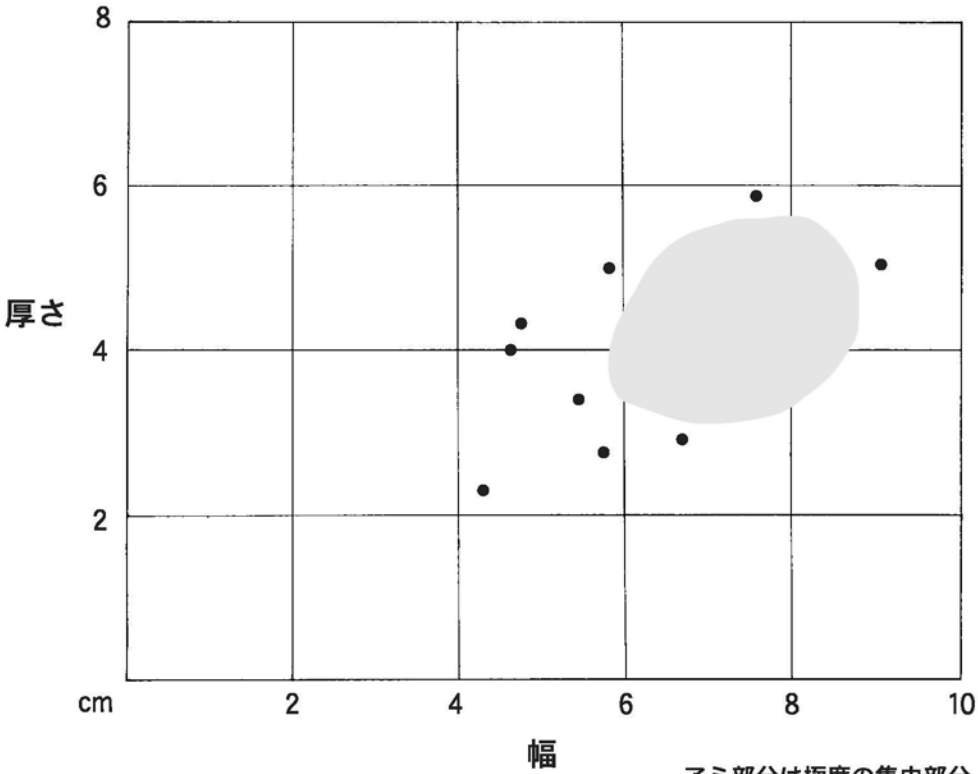


図77　その他の遺構・トレンチ・表土・撹乱出土石斧未製品実測図４（⅓）

弥生時代石斧未製品グラフ





他遺跡出土太形蛤刃石斧
（能登原2004＝P183の注参照）

アミ部分は極度の集中部分

表３　弥生時代石斧未製品計測表

図	No.	出土位置	時期	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	遺存部	段階	自然面	備　　考
41	1	A群21	中期	18.7	8.4	6.0	完存	Ⅰ	片面全面	
41	2	A群18	中期	21.9	11.2	6.8	完存	Ⅰ	両面一部	
41	3	A２群	中期	13.5	7.0	3.1	完存	Ⅱ		剥離取りすぎか
41	4	A群05	中期	17.0	8.4	4.2	完存	Ⅱ	頭部	
41	5	A群11	中期	19.0	8.2	5.6	完存	Ⅱ	一部	
41	6	A群２－01	中期	14.7	7.7	2.7	完存？	Ⅱ		打製石斧？
42	7	A群01	中期	11.2	9.6	5.0	刃部	Ⅲ	一部	
42	8	A群07	中期	12.3	7.7	5.1	刃部	Ⅲ	片面一部	
42	9	A群03	中期	9.1	7.5	4.4	頭部	Ⅲ		
42	10	C群01	中期	9.5	9.1	4.5	刃部	Ⅱ	片面一部	
42	11	D１群下層	中期	14.1	7.7	5.4	刃～中央部	Ⅱ	側縁一部	
42	12	D２群08	中期	11.9	8.7	4.2	刃部	Ⅱ		
42	13	D２群02	中期	22.9	9.4	5.0	完存	Ⅱ		剥離取りすぎか
43	14	D２群　01	中期	13.9	11.3	4.8	刃部	Ⅱ		
43	15	D３群	中期	9.7	5.6	2.7	完存？	Ⅱ	両面大部分	
43	16	D３群	中期	9.9	6.5	3.5	中央	Ⅱ		石斧以外の可能性
43	17	D２群03	中期	13.6	7.8	4.6	頭部～中央	Ⅱ	頭部	
43	18	中区南E群	中期	11.7	7.2	3.5	頭部～中央	Ⅱ	頭部	
43	19	E群下層	中期	16.4	9.6	5.0	頭部～中央	Ⅱ	頭部付近	
43	20	E群	中期	11.9	6.5	3.5	頭部～中央	Ⅱ	片面大部分	
44	21	F群001	中期	12.6	7.9	4.1	頭部～中央	Ⅲ		ほぼ敲打終了
44	22	B４区E群下層	中期	15.8	7.8	6.0	頭部～中央	Ⅲ		ほぼ敲打終了
44	23	F群	中期	12.3	8.1	5.5	刃部～中央	Ⅲ		敲打は一部のみ
44	24	F群03	中期	10.1	8.7	4.8	刃部	Ⅱ	片面一部	
44	25	I群　03	中期	11.7	8.5	5.8	刃部	Ⅲ		敲打終了近い
44	26	K群01	中期	11.5	7.0	3.8	刃部	Ⅲ	片面一部	敲打は一部のみ
45	27	北区１，２	中期	11.0	8.1	4.4	刃部～中央	Ⅱ	両面一部	
45	28	北区包含層	中期	11.5	8.7	5.9	刃部～中央	Ⅱ	片面大部分	
45	29	中区南⑧	前期	16.4	10.5	3.2	完存？	Ⅰ	端部一部	剥片素材
45	30	中区北半③	中期	14.2	10.4	4.6	頭部？	Ⅱ	片面一部	コアか
45	31	南区⑦	中期	13.0	8.7	6.1	中央	Ⅱ	片面大部分	
45	32	南区包含層	中期	9.8	7.4	4.5	刃部～中央	Ⅱ	両面中央	天地逆か
45	33	南区東半⑤	中期	13.0	7.3	5.4	刃部～中央	Ⅲ	両面中央	自然面に敲打？
45	34	南区⑦	中期	8.9	6.3	4.1	刃部～中央	Ⅱ		天地逆か
46	35	礫層	前期	25.2	12.1	8.1	完存	Ⅰ	両面大部分	
46	36	礫層中006	前期	14.2	9.4	4.7	頭部～中央	Ⅰ	片面大部分	
46	37	中区礫層	前期	18.9	12.2	6.9	完存	Ⅰ	両面大部分	
46	38	礫　　005	前期	15.0	9.3	5.3	頭部～中央	Ⅰ	片面一部、頭部	
47	39	礫層中001	前期	20.4	12.4	5.8	完存	Ⅱ	両面一部	第Ⅰ工程？
47	40	礫層	前期	21.4	10.8	4.2	完存	Ⅱ	両面一部	擦痕有、剥離取りすぎ
47	41	中央礫層	前期	14.1	8.5	4.8	完存	Ⅱ	両面一部	自然の敲打状痕跡
47	42	礫層014	前期	15.3	8.5	5.8	頭部～中央	Ⅱ	片面一部	
47	43	礫層020	前期	18.7	8.9	5.1	完存	Ⅱ	両面	剥離取りすぎ
47	44	礫002	前期	15.2	9.8	4.3	刃部～中央	Ⅳ		片面研磨、片面敲打無
48	45	中区礫層	前期	19.7	10.6	6.7	刃部～中央	Ⅱ	両面一部	自然の敲打状痕跡
48	46	礫層001	前期	19.0	10.6	7.1	頭部～中央	Ⅱ	片面一部	
48	47	北区礫層	前期	15.7	8.6	2.8	完存	Ⅱ	両面大部分	打製石斧？
48	48	C９区弥生礫層	前期	21.1	10.0	6.4	頭部～中央	Ⅰ	片面大部分	
48	49	中区礫層	前期	11.9	7.7	3.4	刃部～中央	Ⅱ	両面中央	
48	50	礫06	前期	13.9	8.5	5.6	頭部～中央	Ⅱ	片面半分	
49	51	中区礫層	前期	15.8	9.2	7.4	刃部一部欠	Ⅱ	片面半分	敲打は自然？

表３　弥生時代石斧未製品計測表２

図	No.	出土位置	時期	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	遺存部	段階	自然面	備　　考
49	52	礫層	前期	19.2	6.7	6.0	刃部一部欠	Ⅱ	両面一部	敲打は自然？
49	53	礫層　008	前期	15.4	9.1	5.8	刃部一部欠	Ⅱ	両面一部	敲打は自然？
49	54	Ｃ９区弥生礫層	前期	12.8	8.2	6.2	頭部	Ⅲ		
49	55	礫層　04	前期	13.4	8.1	5.9	刃部～中央	Ⅲ	片面中央	
49	56	北区礫層	前期	14.2	7.9	5.1	頭部～中央	Ⅲ	片面大部分	
50	57	礫層中005	前期	13.5	7.5	7.0	頭部～中央	Ⅲ		
50	58	礫層　　012	前期	13.7	8.1	6.5	頭部～中央	Ⅲ	頭部付近	
50	59	礫層	前期	17.1	5.9	5.6	頭部一部欠	Ⅲ	片面大部分	
50	60	礫017	前期	13.9	8.1	5.0	頭部～中央	Ⅲ		
50	61	中区礫層	前期	13.5	7.4	5.2	頭部～中央	Ⅳ		側縁を研磨、敲打と平行作業
50	62	礫層	前期	19.2	7.0	4.0	完存	Ⅲ		敲打中に破損か
50	63	中区礫層	前期	10.0	6.0	4.5	頭部～中央	Ⅲ	片面大部分	ごく一部に研磨状
51	64	ＳＤ00下礫層	前期？	25.0	12.5	7.0	完存	Ⅰ	両面	
51	65	ＳＤ01下礫層	前期？	22.4	13.8	5.8	完存	Ⅰ	両面	
51	66	欠番								
51	67	ＳＤ01下礫層	前期？	15.9	8.7	4.0	完存	Ⅱ	片面一部	
51	68	ＳＤ01下礫層	前期？	12.0	9.9	3.1	頭部～中央	Ⅱ	片面大部分	
52	69	ＳＤ01下礫層	前期？	21.5	9.7	5.2	完存	Ⅱ	片面一部	自然面を残す剥片素材利用
52	70	ＳＤ01下礫層	前期？	10.1	6.9	3.7	中央～刃部	Ⅱ	両面一部	
52	71	ＳＤ01下礫層	前期？	12.4	6.3	4.3	中央～刃部	Ⅱ	片面一部	
52	72	ＳＤ02下礫層	前期？	16.5	8.3	5.7	完存	Ⅱ	両面大部分	第Ⅰ工程欠如
52	73	ＳＤ01下礫層	前期？	15.3	9.1	5.6	頭部～中央	Ⅲ		
52	74	ＳＤ01下礫層	前期？	11.5	7.9	4.2	中央～刃部	Ⅲ	片面中央	
53	75	ＳＤ01下礫層	前期？	16.5	8.5	6.4	頭部～中央	Ⅲ		
53	76	ＳＤ01下礫層	前期？	12.6	7.1	3.5	中央～刃部	Ⅲ	両面一部	敲打を切る剥離あり
53	77	ＳＤ01下礫層	前期？	13.4	7.4	3.6	完存？	Ⅳ		片面一部と側縁に研磨あり
53	78	ＳＤ01下礫層	前期？	14.9	8.7	5.6	中央～刃部	Ⅲ	片面一部	敲打後に剥離？
53	79	ＳＤ01下礫層	前期？	15.3	8.7	4.6	中央～刃部	Ⅲ		
53	80	ＳＤ01下礫層	前期？	12.6	7.6	5.5	頭部～中央	Ⅲ		
54	81	ＳＤ01下礫層	前期？	10.9	6.7	5.5	中央～刃部	Ⅲ		
54	82	ＳＤ01下礫層	前期？	13.1	7.6	5.0	中央～刃部	Ⅳ		製品・使用済み
54	83	ＳＤ01下礫層	前期？	11.1	6.8	3.2	頭部～中央	Ⅳ		製品・使用済みか
55	84	南区礫層	前期？	29.0	15.8	8.2	完存	Ⅰ	片面一部、頭部	刃部取りすぎ
55	85	南区礫層	前期？	23.0	14.5	8.2	完存？	Ⅰ	片面一部	Ⅱ工程初期か？
56	86	南区礫層	前期？	21.4	13.6	6.7	完存？	Ⅰ	片面大部分	
56	87	南区礫層	前期？	18.0	9.3	4.6	完存？	Ⅰ？		刃部取りすぎ？
56	88	南区礫層	前期？	19.4	18.7	6.6	頭部	Ⅰ	頭部	
57	89	南区礫層	前期？	17.5	14.2	5.3	完存？	Ⅰ	頭部	
57	90	南区礫層	前期？	19.3	12.5	4.4	完存	Ⅰ？	両面中央周辺	剥離大きすぎ？
57	91	南区礫層	前期？	16.2	12.1	6.0	中央	Ⅰ？	片側縁他	
58	92	南区礫層	前期？	24.1	15.5	9.1	完存	Ⅰ	両面	刃部取りすぎ？
58	93	南区礫層	前期？	18.2	12.2	4.6	完存	Ⅰ	頭部	剥片素材
58	94	南区礫層	前期？	24.3	10.2	5.0	完存	Ⅰ	両面大部分	石斧に近い形態の素材
58	95	南区礫層	前期？	18.1	8.7	2.4	刃部欠	ⅠorⅡ	両面大部分	打製石斧未製品？
59	96	南区礫層	前期？	21.7	11.3	6.2	完存	Ⅰ	片面半分	
59	97	南区礫層	前期？	9.5	7.1	2.7	中央～刃部	Ⅱ		薄手磨製石斧？
59	98	南区礫層	前期？	11.5	6.1	1.7	頭部～中央	Ⅱ		薄手磨製石斧？
59	99	南区礫層	前期？	18.5	12.5	4.5	頭部～中央	Ⅱ	片面半分	片面全面主要剥離面
59	100	南区礫層	前期？	10.5	9.8	4.3	頭部	Ⅱ	頭部周辺	
59	101	南区礫層	前期？	12.6	7.2	4.7	頭部～中央	Ⅱ	かなりの部分	素材が石斧の形状に近い
60	102	南区礫層	前期？	14.0	9.2	6.8	頭部～中央？	Ⅱ	両面一部	石斧以外の可能性

表３　弥生時代石斧未製品計測表３

図	No.	出土位置	時期	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	遺存部	段階	自然面	備　　考
60	103	南区礫層	前期？	12.9	7.2	3.8	完存？	Ⅱ	頭部	打製石斧？小型磨製石斧？
60	104	南区礫層	前期？	15.5	10.5	7.4	頭部～中央	Ⅱ	片面大部分他	側縁の敲打は自然？
60	105	南区礫層	前期？	14.0	6.0	3.7	完存	Ⅱ	片面一部	刃部付近剥離とりすぎ
60	106	南区礫層	前期？	12.5	8.8	4.9	頭部～中央	Ⅱ	頭部	
60	107	南区礫層	前期？	13.3	8.3	4.3	中央～刃部	Ⅱ	片面中央	
61	108	南区礫層	前期？	12.6	7.8	6.0	中央～刃部	Ⅱ	片面半分	一部研磨状擦痕
61	109	南区礫層	前期？	10.0	8.2	4.3	－	Ⅱ	両面一部	石斧未製品の転用？コア？
61	110	南区礫層	前期？	14.7	6.5	3.1	完存	Ⅱ	片面中央	薄手で短い。失敗部位不明
61	111	南区礫層	前期？	20.4	8.4	5.3	完存	Ⅱ	片面上部	一部敲打状。自然か？
61	112	南区礫層	前期？	16.9	8.2	5.6	頭部～中央？	Ⅱ	片面ごく一部	一部敲打状。自然か？
61	113	南区礫層	前期？	17.3	8.5	5.7	完存？	Ⅱ		一部敲打状。自然か？
62	114	南区礫層	前期？	14.6	10.6	8.4	中央～刃部	Ⅱ	片面大部分	
62	115	南区礫層	前期？	9.9	9.3	2.8	頭部	Ⅱ	片面と側面	打製石斧？
62	116	南区礫層	前期？	16.1	8.9	7.0	頭部～中央	Ⅲ	片面一部	
62	117	南区礫層	前期？	9.0	4.3	2.3	完存？	Ⅱ	片面一部	小型磨製石斧。
62	118	南区礫層	前期？	10.0	6.9	3.9	頭部～中央	Ⅲ	片面一部	
62	119	南区礫層	前期？	9.4	7.0	3.9	中央～刃部	Ⅱ	片側側面	一部敲打状。自然か？
62	120	南区礫層	前期？	9.5	5.2	2.7	完存？	Ⅱ	片面一部	小型磨製石斧。片面一部敲打状
63	121	南区礫層	前期？	21.8	10.0	6.0	頭部一部欠	Ⅱ		
63	122	南区礫層	前期？	6.6	4.2	3.1	中央～刃部	Ⅲ	片側中央	小型磨製石斧。
63	123	南区礫層	前期？	9.5	5.3	1.9	完存	Ⅲ	頭部	小型磨製石斧。
63	124	南区礫層	前期？	13.6	8.1	5.0	中央～刃部	Ⅲ	片面大部分	
63	125	南区礫層	前期？	10.9	9.0	4.3	刃部	Ⅲ		
63	126	南区礫層	前期？	10.4	6.2	3.7	中央部	Ⅲ		
63	127	南区礫層	前期？	13.2	9.0	6.4	頭部～中央	Ⅲ	片面中央	両面一部に擦痕(軽い研磨か)
64	128	南区礫層	前期？	21.9	8.1	4.1	完存	Ⅱ	頭部	短冊形
64	129	南区礫層	前期？	21.3	9.5	5.3	完存	Ⅱ		
64	130	南区礫層	前期？	12.2	9.5	4.8	頭部	Ⅲ	片面一部	
64	131	南区礫層	前期？	13.8	7.2	5.5	頭部～中央	Ⅲ		
64	132	南区礫層	前期？	15.6	8.4	6.6	中央～刃部	Ⅲ		刃部も欠損か
64	133	南区礫層	前期？	8.3	7.4	5.0	頭部	Ⅲ	頭部	
65	134	南区礫層	前期？	13.7	8.7	4.1	頭部～中央	Ⅲ		
65	135	南区礫層	前期？	15.6	7.9	5.9	頭部～中央	Ⅲ	片面一部	
65	136	南区礫層	前期？	13.5	7.7	3.8	中央～刃部	Ⅳ	両面一部	刃部周辺のみ研磨
65	137	南区礫層	前期？	10.2	8.3	4.5	刃部	Ⅲ		
66	138	北区ＳＤ01東岸		11.8	7.5	1.2	頭部～中央	Ⅱ	両面大部分	扁平打製石斧
66	139	北区ＳＤ01東岸		12.2	8.0	4.8	中央	Ⅲ		
66	140	北区ＳＤ01東岸		10.2	7.8	2.7	頭部	Ⅱ	片面	打製石斧？
66	141	北区ＳＤ01東岸		7.8	6.3	3.4	刃部？	Ⅲ	片面半分	
67	142	北拡Ｃ９礫層		16.2	8.2	5.0	完存？	Ⅱ	片面大部分	
67	143	北拡包含層		13.6	7.1	5.0	完存	Ⅱ	側縁一部など	短い
67	144	北拡２		17.3	8.3	5.9	中央～刃部	Ⅲ		
67	145	北拡包含層		4.0	8.6	3.4	頭部	Ⅱ	片面半分	
68	146	２区140		13.3	7.9	4.3	頭部～中央	Ⅱ	片面一部	
68	147	２区140		10.9	7.4	5.2	頭部	Ⅲ	片面一部	側縁一部敲打状
68	148	２区150		8.6	6.6	3.1	刃部？	Ⅱ		
68	149	２区150		8.5	7.5	5.6	頭部	Ⅲ	片面一部	
68	150	２区包含層横砂層		15.0	8.0	4.5	中央～刃部？	Ⅱ		
68	151	２区製塩層150		13.9	8.3	4.3	中央～刃部？	Ⅱ	片面一部	
69	152	２区製塩層140		12.8	9.0	6.3	中央～刃部	Ⅲ		
69	153	２区150		11.1	7.2	3.5	中央～刃部	Ⅲ		両側縁に敲打

表３　弥生時代石斧未製品計測表４

図	No.	出土位置	時期	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	遺存部	段階	自然面	備　　考
70	154	ＳＤ01		13.6	13.3	5.8	頭部～中央	Ⅰ	片面大部分	
70	155	ＳＤ01		20.5	19.1	5.9	完存	Ⅰ		石斧以外の可能性
70	156	ＳＤ01		10.0	7.7	4.7	頭部～中央	Ⅱ	片面中央	
70	157	ＳＤ01		15.8	7.6	3.5	頭部一部欠	Ⅱ？	両面半分	片側側縁敲打状、自然？
71	158	ＳＤ01		12.1	11.3	5.8	頭部	Ⅱ	片面中央	
71	159	ＳＤ01		18.5	10.0	4.9	完存	Ⅱ	片面刃部周辺	剥離取りすぎ？
71	160	ＳＤ01北拡		17.9	8.4	4.5	完存	Ⅲ		刃部欠損？
71	161	ＳＤ01		10.6	4.8	2.5	刃部欠	Ⅱ	片面中央	片側側縁敲打状自然？小型石斧
71	162	北拡ＳＤ01		8.5	8.2	2.8	刃部	Ⅱ		薄い
71	163	ＳＤ01		9.0	9.0	2.0	刃部	Ⅱ		薄い
71	164	ＳＤ01		13.1	8.1	3.6	頭部～中央	Ⅲ	片面大部分	
72	165	ＳＤ01		15.6	8.2	4.5	頭部～中央	Ⅲ	片面一部	側縁随所に敲打
72	166	北区ＳＤ01		14.6	6.9	3.3	完存	Ⅲ	両面大部分	自然面に敲打
72	167	ＳＤ01下層		15.4	7.0	3.8	完存	Ⅲ	片側側縁	
72	168	ＳＤ01裏込め		17.7	8.2	4.8	完存	Ⅲ		
72	169	ＳＤ01		13.3	7.8	5.9	中央～刃部	Ⅲ		
72	170	北拡ＳＤ01		11.7	6.7	5.1	中央～刃部	Ⅲ	刃部	
73	171	ＳＤ01		6.6	9.0	4.8	刃部	Ⅲ		
73	172	ＳＤ01		6.7	5.3	3.3	刃部	Ⅱ		
73	173	ＳＤ01		12.0	6.9	3.4	中央～刃部	Ⅲ		
73	174	ＳＸ02		10.4	5.6	3.8	中央～刃部	Ⅲ		
74	175	註記無し		20.5	12.6	4.7	完存	Ⅰ	片面大部分片面一部	中央に窪み、台石に転用か
74	176	防空壕横撹乱		8.5	4.8	2.0	完存	Ⅱ	刃部付近	小型
74	177	表土撹乱		16.5	11.6	7.1	頭部～中央	Ⅱ	片面一部	
75	178	ＳＸ04		22.7	9.4	5.6	完存	Ⅱ	片面一部	刃部の幅が狭い
75	179	中央トレンチ		14.8	10.1	4.7	頭部～中央	Ⅱ	片面中央	
75	180	中央トレンチ		12.6	8.7	5.7	中央～刃部	Ⅱ	片面一部	側縁一部敲打状、自然？
75	181	ＳＣ02		7.5	5.5	1.2	中央～刃部？	Ⅱ	片面半分	天地逆か、剥片素材、片刃石斧？
75	182	ＳＣ02		11.6	5.6	2.7	完存？	Ⅱ	片面中央	小型磨製石斧？
75	183	ＳＸ04		8.3	8.5	4.8	刃部	Ⅱ		
75	184	中央トレンチ		18.9	9.0	5.0	完存	Ⅱ		刃部細くしすぎか
76	185	拡張区表土		21.6	11.6	6.6	完存	Ⅱ	頭部	天地逆？
76	186	拡張区表土		12.1	9.7	5.4	中央～刃部	Ⅱ		
76	187	表土撹乱		18.7	8.8	4.9	完存	Ⅱ	両面大部分	
76	188	北区撹乱		19.9	8.7	4.2	完存	Ⅱ		
77	189	拡張区表土		13.6	8.8	5.1	中央～刃部	Ⅲ	片面大部分	
77	190	表土撹乱		15.6	7.5	4.0	中央～刃部	Ⅲ		敲石に転用？
77	191	表土撹乱		16.2	8.3	5.4	完存	Ⅲ	片面一部	
77	192	拡張区表土		7.3	4.9	2.5	頭部～中央	Ⅲ	片面大部分	薄手
77	193	防空壕横撹乱		10.0	7.5	2.9	完存？	Ⅱ	頭部	刃部欠損か？
77	194	拡張区表土		10.9	6.9	3.3	中央～刃部	Ⅲ	片側側縁	
77	195	撹乱		13.1	7.1	5.3	頭部～中央	Ⅲ	片側	

石包丁・石鎌未製品（図78）

石包丁・石鎌の未製品であるが、図示した以外にもやや大きめの玄武岩の剥片に縁辺調整を施したものがあり、それらは未製品もしくはスクレーパーの可能性もあるが、時間不足により図化できなかった。196は石包丁の未製品と考えたが、最大厚が3.9㎝と厚く、石斧未製品・スクレーパーなどの可能性もあるが、剥片素材を利用し、両縁辺がエッジ状になっているため石斧未製品とはやや異質であることから、それ以外の未製品と考えた。湾曲した辺に細かな剥離を加えており、交互剥離を成している。A－2群出土。197は俗に大型石包丁の未製品である。薄い素材を利用し、2カ所の穿孔と縁辺調整を行っている。玄武岩のようであるが材質不明。南区礫層出土。198も南区礫層出土の玄武岩製で、石鎌の未製品であろうか。ただし、基部部分の厚さが2㎝近くあり、厚すぎるか。先端部はかなり薄いため他の製品は考えにくい。199は玄武岩製で、横長の剥片に縁辺調整を加えたものである。図の右側にも調整を加えており、石包丁とは考えにくいが、図の上部が平坦な自然面であることと全体が薄いことから石斧未製品とは考えにくい。スクレーパーの可能性もある。トレンチ出土。200は堆積岩製の石包丁未製品である。薄い堆積岩の周囲に調整を加え、穿孔を施している。堆積岩製の未製品はこの1点のみである。

表3　弥生時代石器未製品計測表

図	No.	種　類	石材	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備　考
78	196	石包丁未製品？	玄武岩	A2群	16.8	7.1	3.9	石包丁以外の可能性高いか
78	197	大型石包丁未製品	玄武岩	南区礫層	10.0	12.0	1.4	
78	198	石鎌未製品	玄武岩	南区礫層	12.9	5.7	1.9	
78	199	石包丁未製品？	玄武岩	中央トレンチ	11.6	7.4	2.2	石包丁以外の可能性高いか
78	200	石包丁未製品	堆積岩	石垣下礫層	8.6	5.2	0.4	

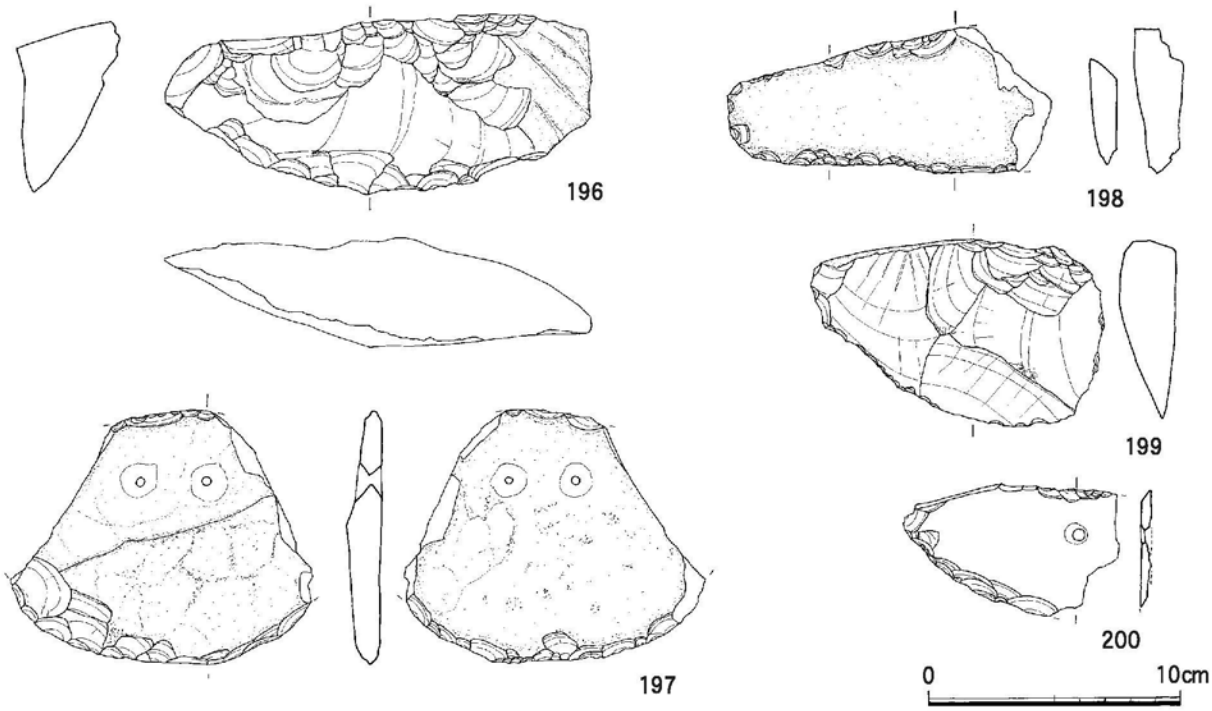


図78　石包丁・石鎌未製品実測図（⅓）

碇石及び同未製品（図79）

通常碇石と呼んでいる大型の有孔石錘である。201は弥生礫層出土。滑石製で重さ4400ｇを測る。1カ所両側から穿孔を施して孔を貫通させているが、それとは別にＢ面の図左下に穿孔を試みて途中で放棄している。Ｂ面の孔の左上側縁と右側縁に縄をしばった際の痕跡と思われる抉りがあり、孔の両側をしばった思われる。202は弥生礫層出土。201とは異なり円形の碇石である。円形に穿った大きな孔と方形の小さな孔がある。縄の痕跡はＡ面左下とＢ面右下にあり、大きな孔の片側をしばったものと思われる。小さな孔の用途は分からない。滑石製である。203は一見凹石のようであるが、滑石製で他の２点と同じ礫層下層出土であることから碇石の未製品と思われる。両側から穿孔を施し、片方は約１㎝、反対側は数㎜穿孔してやめている。以上３点とも礫層出土で、弥生時代前期の所産と考えられる。

石錘及び同未製品（図80・81）

204・205は大型の石錘で、碇石の可能性もあるが、通常碇石としているのは穿孔を伴っていることから、石錘で分類した。204は玄武岩製である。３カ所に抉りを施し、残りの一辺は抉りは施していないが、縄を緊縛したためか、摩滅して抉れた状態になっている。205は玄武岩製である。四辺とも抉りを施している。206以下は中・小型の石錘で、基本的には扁平な円礫の四辺または二辺に抉りを施しているもので、各抉りを結んで線状の窪みがあるものとないものがある。206は表面に小さなあばたが多くあり表面が磨かれていることから、海岸べたの円礫を利用していると思われる。207は玄武岩製である。四辺に小さな抉りを入れている。緊縛痕は摩滅でついたもので、裏面にはない。208は石材

表４　弥生時代石器計測表１

図	No.	種　類	出土位置	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
79	201	碇石	礫層07	滑石	20.0	16.3	9.8	4400	１孔貫通、１孔未貫通
79	202	碇石	C11区礫層	滑石	19.1	16.8	10.1	3500	大孔と小孔あり
79	203	碇石未製品	北区礫層４	滑石	16.2	13.4	5.6	1700	穿孔途中で放棄
80	204	石錘	礫層中	玄武岩	15.2	14.3	4.2	1260	
80	205	石錘	南区礫層	玄武岩	13.4	13.1	3.3	940	
80	206	石錘	南区下層	安山岩？	10.0	9.9	4.3	630	
80	207	石錘	SX02下礫層	玄武岩	11.6	9.5	3.3	480	緊縛溝あり
80	208	石錘	南区礫層	安山岩？	13.9	8.3	3.6	540	
80	209	石錘	中区礫層	滑石	10.4	8.1	3.9	505	緊縛溝あり
80	210	石錘	南区礫層	玄武岩	8.3	7.4	2.2	205	
80	211	石錘	SX02下礫層	玄武岩	12.9	8.4	2.9	475	
80	212	石錘	中区礫層	滑石	7.1	6.3	2.0	121	欠損あり
80	213	石錘	南区礫層	堆積岩	10.6	9.6	5.2	875	緊縛溝あり
80	214	石錘	南区礫層	堆積岩	7.8	5.0	1.9	110	
81	215	石錘	SD01下礫層	滑石	8.3	5.9	1.9	120	緊縛溝あり
81	216	石錘	SD01下礫層	玄武岩	7.4	5.8	2.8	170	緊縛溝あり
81	217	石錘	礫層	玄武岩	6.5	6.4	2.3	150	
81	218	石錘	２区砂層	玄武岩	13.2	8.4	4.3	620	
81	219	石錘	２区	安山岩？	11.4	10.0	4.0	630	
81	220	石錘	SD01	玄武岩	10.5	9.2	1.6	215	擦痕あり
81	221	石錘	SD01	安山岩	6.5	5.3	2.0	121	
81	222	石錘	SD01	玄武岩	10.6	7.2	2.1	250	
81	223	石錘	SD01	玄武岩	6.0	6.2	1.6	90	
81	224	石錘	SX04	砂岩	8.1	4.2	2.6	125	緊縛溝あり

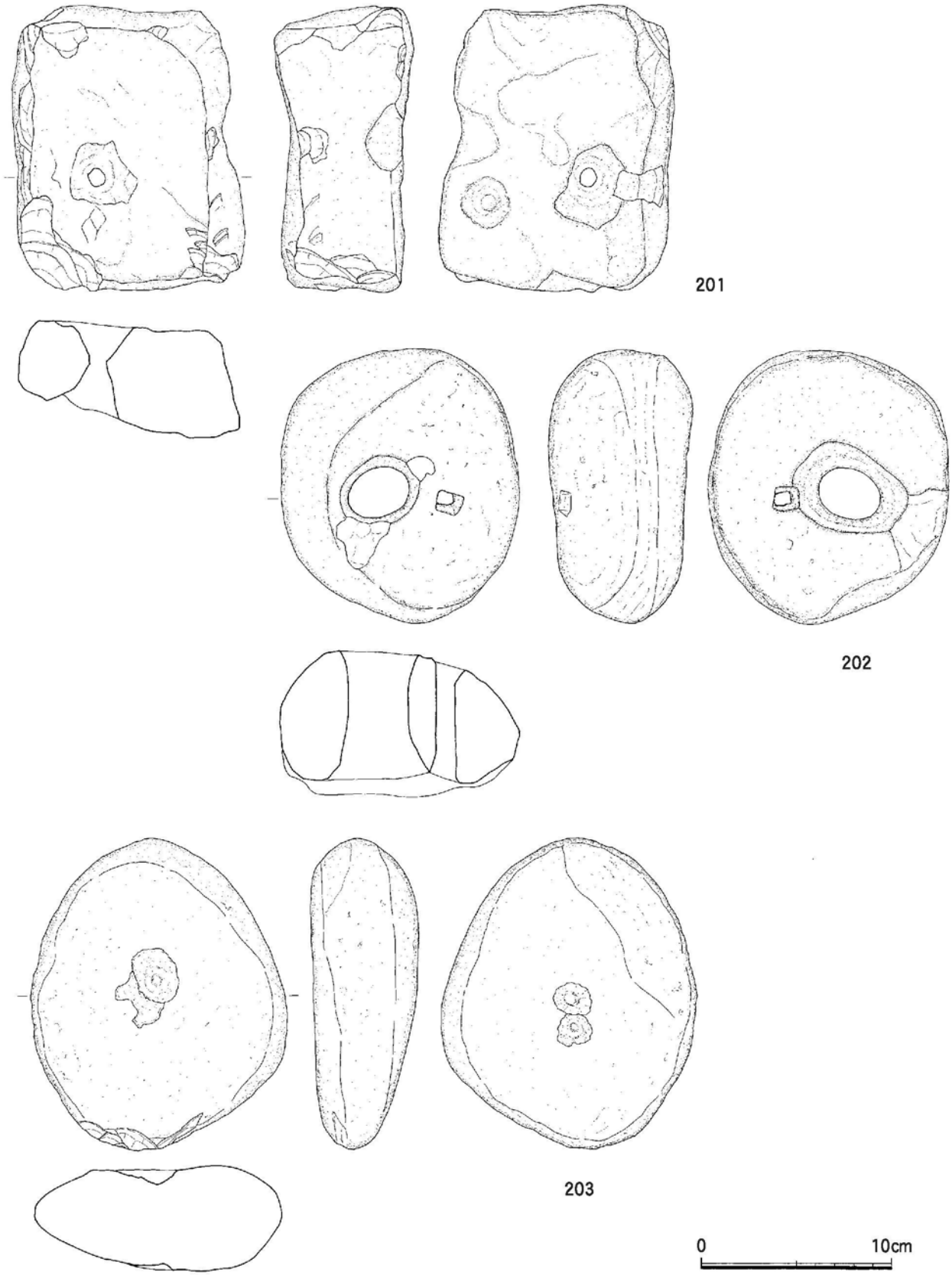


図79　碇石・碇石未製品実測図（⅓）

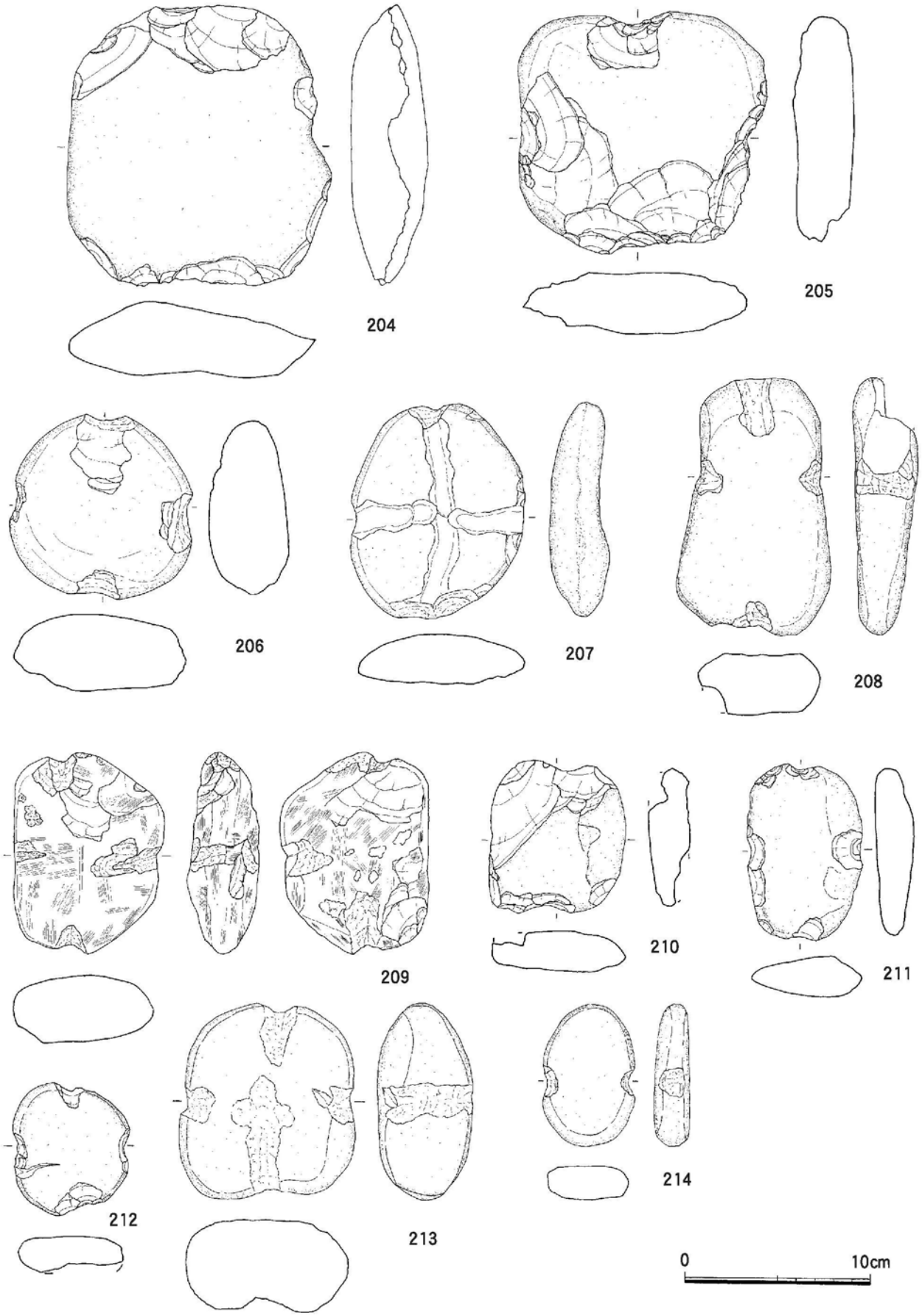


図80　石錘実測図１（⅓）

不明で、206と同様海岸の礫である。図の上部裏面は欠失している。209は滑石製。210は玄武岩製であるが風化が激しく、表面の状況からも海岸で採取した素材であろう。211は玄武岩製で、抉りと無関係の部分に縁辺調整をしており、あるいは当初小型の石斧ないしは別の目的で製作しようとしたものかもしれない。212は質の悪い滑石製。213・214は堆積岩製。摩滅がひどく海岸で拾ったものであろう。215は滑石製で、一部は欠失しているが、全体の形の歪んだものである。溝部分は加工をしているようである。216・217は玄武岩製。216の溝部分は加工をしていないようであるがよくわからない。218は玄武岩製で、図左側縁の抉りは自然面である。表面の状況から波に洗われたものを採取して利用したと考えられる。219は石材不明。220は玄武岩製の極めて薄い素材を利用している。B面に多くの擦痕がついているが、研磨ではない。221は安山岩製で全面磨いてような状況だが、自然による摩耗であろう。222・223の玄武岩製も表面がかなり風化している。224は砂岩質で、A面の溝は加工しているが、B面の溝は縄の緊縛による使用痕である。

石錘の素材の選定は、材質的には各種のものを選び、その多くが海岸で転がっている円礫を使って

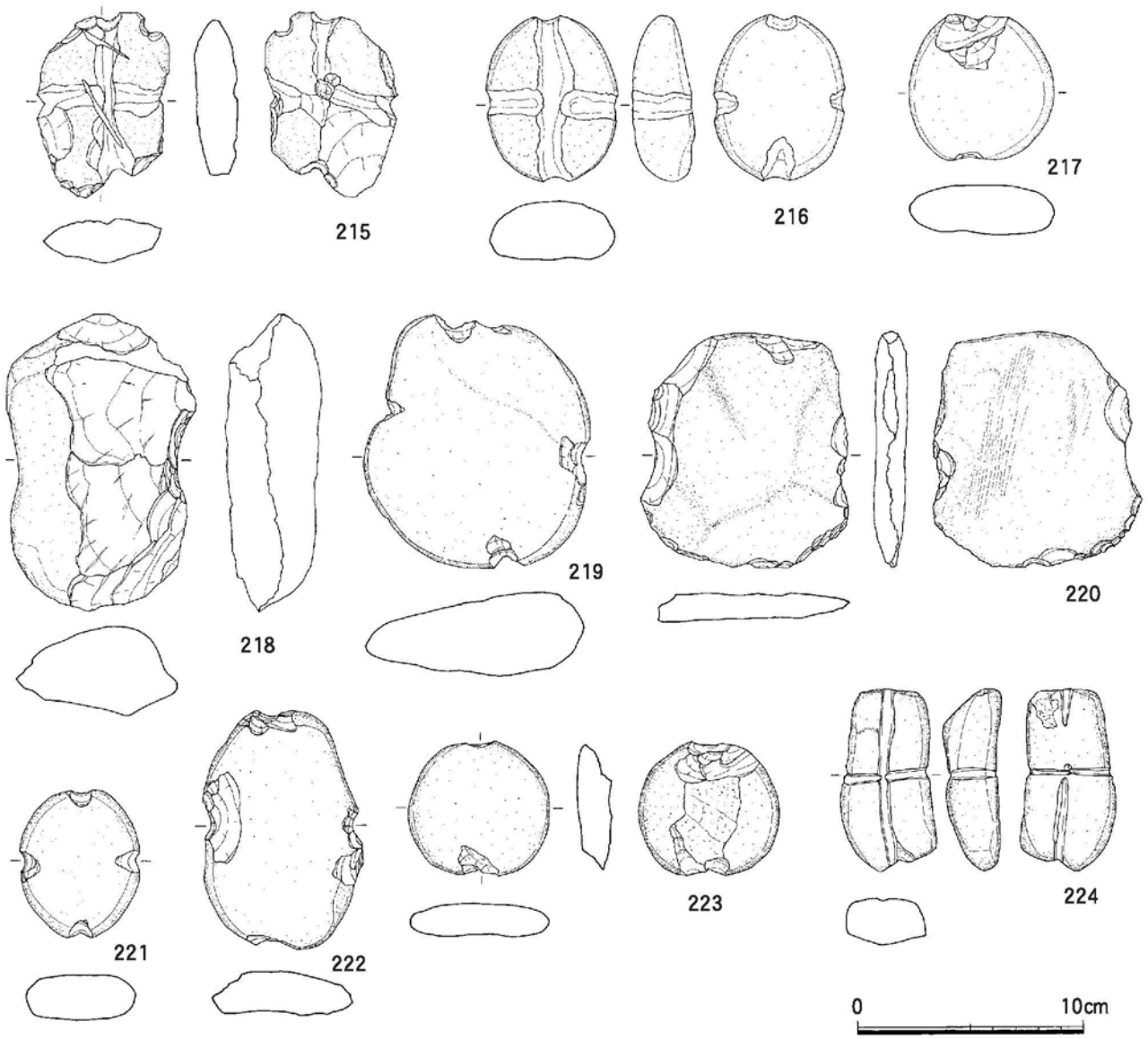


図81　石錘実測図２（⅓）

いる。中・大型品は四辺を緊縛しているが、小型品には二辺利用のものと四辺利用のものがあり、その差はわからない。例えば216と217は玄武岩製で同規模・同厚さであるが、216は四辺利用、217は二辺利用である。

時期的には、弥生時代以外の遺構から出土したものを除いて時期が分かるものは包含層下層が１点で、他は12点が礫層出土で、中期土器が出土する層位からの出土はなく、碇石とともに前期に属すると見て差し支えないであろう。

なお他にも円礫の一側縁、または二側縁にわずかに加工を施しているものが数点あるが、緊縛痕がまったくなく、石錘との確証をもてず図化まで至らなかったものがある。あるいは未製品の可能性もあるが、図示した中に抉りに似合わないような大きな剥離で抉りを作っているものがあることから考えると未製品とは考えにくく、緊縛痕がつかなかったか、自然による剥離と思われる。

石鏃（図82）

石鏃は７点出土した。225は漆黒黒曜石製で、両脚と先端部を欠く。丁寧な押圧剥離を施している。226は漆黒黒曜石製。227は漆黒黒曜石製の剥片鏃である。脚部には自然面が残っている。228は縞の入った漆黒黒曜石製。脚はまったくつかず、丁寧な造りである。229は礫層最下部付近から出土し、あるいは縄文時代産の可能性もある。漆黒黒曜石製で、脚部はわずかに抉りがある。欠損部はない。230は漆黒黒曜石製のやや大型の石鏃で、丁寧な押圧剥離を施している。231もやや大型の石鏃で、漆黒黒曜石製。

磨製石剣（図82）

233は南区礫層中から出土した。安山岩製である。Ａ面は中央部が稜をなしているが、Ｂ面は中央に敲打痕が残り稜を成さない。最大幅4.4cmを測る。

磨製石鑿（図82）

234はＳＸ04で出土した。頁製の小型扁平片刃石斧で、長さ4.8cmを測る。刃部横の一部を欠失以外は完存している。

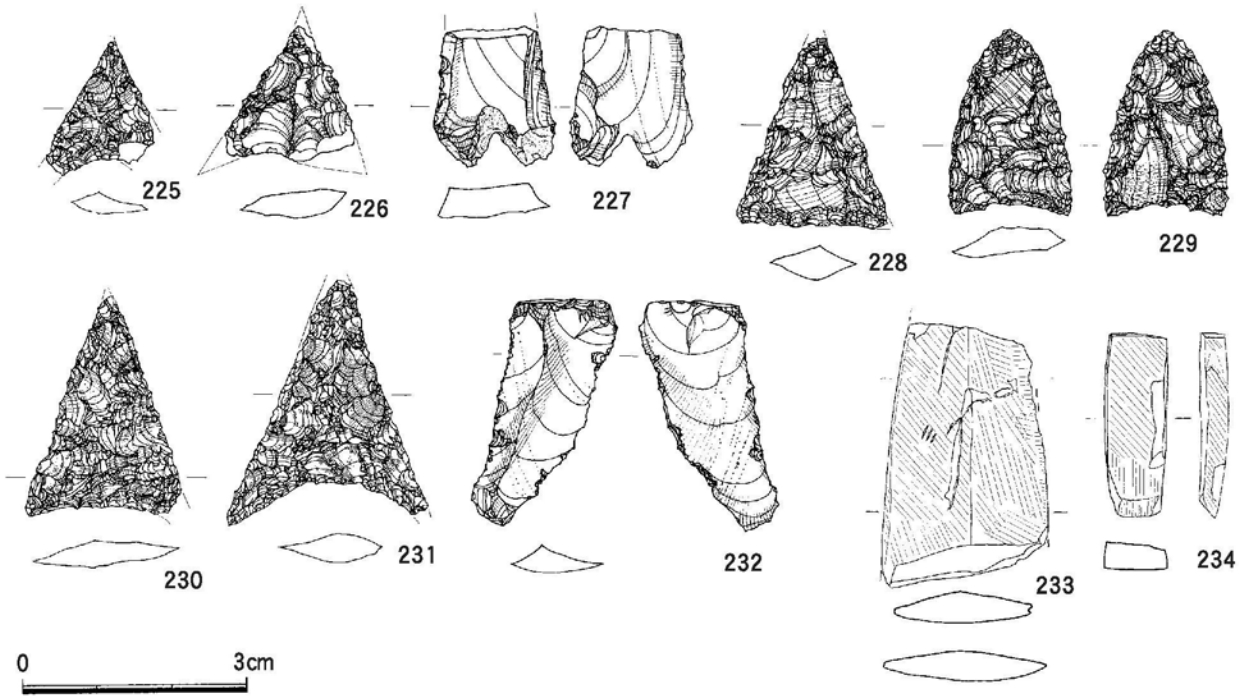


図82　石鏃・石剣・石鑿・剥片石器実測図

表５　弥生時代石器計測表２

図	No.	種　　類	出土位置	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　　考
82	225	打製石鏃	SX02	漆黒黒曜石	1.79	1.42	0.32	0.57	両脚欠損
82	226	打製石鏃	Ⅰ区礫層	漆黒黒曜石	1.8	1.72	0.37	0.90	両脚・頭部欠損
82	227	打製石鏃	Ⅰ区礫層	漆黒黒曜石	1.9	1.63	0.43	1.46	上部欠損
82	228	打製石鏃	Ⅱ区北端	漆黒黒曜石	2.5	2.0	0.5	1.74	先端部欠損
82	229	打製石鏃	礫層	漆黒黒曜石	2.45	1.64	0.38	1.57	完存
82	230	打製石鏃	SD01東岸礫層	漆黒黒曜石	2.84	2.08	0.37	1.54	片脚端部欠損
82	231	打製石鏃	南区礫層	漆黒黒曜石	3.25	2.64	0.4	1.78	片脚端部・先端部欠損
82	232	使用痕ある剥片	Ⅱ区	漆黒黒曜石	3.02	1.9	0.58	1.39	
82	233	磨製石剣	南区礫層	安山岩系	7.0	4.4	0.8	34.5	破片
82	234	磨製扁平片刃石斧	SX04	頁岩	4.8	1.6	0.7	11.6	一部欠

使用痕ある剥片（図82）

弥生時代の包含層からは、サヌカイト・安山岩・黒曜石製の剥片・チップも多く出土したが、時間の都合でほとんど見ることができなかった。１点のみ使用痕ある剥片を図示した。232は漆黒黒曜石製で、両側縁に使用痕が認められる。

敲石・磨石等（図83）

ここではハンマーストーンと呼ばれる棒状敲石、円形の敲石、及び敲痕の有無にかかわらずに磨石をまとめて報告する。円形の敲石については比較的見つけ安いためほぼ抽出できたと思うが、長い礫を使ったハンマーストーンと磨石については、最初の仕分け時以降にも発見したものがあることから、自然石と仕分けしきれなかった可能性が十分ある。

用途について、ハンマーストーンは石斧製作のための整形、円形敲石は敲打具としての用途が考えられる。出土剥片・チップを見ると２㎝以下の細かい剥片が多数あるが、これらは上記の用具では不可能で、よく言われるように鹿角などを考えるのが適当であろう。ハンマーストーンは４点図示した。いずれも玄武岩製。235は上端部に３カ所、下端部に１カ所の敲きによる剥離が認められる。上端部には敲打による潰れも確認できる。やや太めだが十分握れる。236・237は上部が細く、または薄くなり、握りやすい。下端の敲きによる剥離は両面にあり、それ以外は自然面である。238は上部が折損している。下端の状況は前の２点と同じである。239は明確ではないが、両端部に敲打状の痕跡がかすかに認められ、敲打具の可能性がある。玄武岩製。

240～245は片岩系製の敲打具と考えられるものである。片岩系は軟質であると考えられている（注）が、そのためか明確に敲打の痕跡が認められるのはさほど多くない。全体の調子としては一見研磨に近い状態の表面に２～３㎝前後の浅い窪みが数カ所確認される状態である。個体数は30点以上が出土したが、敲打具と断定するのが難しく、正確な数量を出し得ない。特徴的なものを６点掲載した。
240は大きな窪みが１カ所と小さな窪みが数カ所あり、窪みの部分は自然面の状態のようである。窪み以外の部分は一見磨ったように白くなっている。その一部は平面を成し、敲打を繰り返していった結果、柔らかい材質のため剥離せずに潰れて平坦面を成したと理解できるだろう。241・242は小型であるが、240と基本的には同じ状況であるが、240に比べてさらに部分的な研磨に近い状態で、あたかも小石を磨ったように平坦で真っ白の部分がある。243～245も同種のものであるが、245は言葉では説明しづらいが、研磨に近い状態の合間にある窪みが、敲打の際に飛び散ったような状況を示している部分がある。実験的に行ってみないとこれらが本当に敲打具なのか証明できないが、明らかに自然の状態とは異なり、潰れて磨いた状態に近い部分は明白で敲打具として差し支えないであろう。

246は玄武岩製である。円礫を素材にして側面全周に敲打痕が明瞭に残る。図の裏面は自然面であ

（注）福岡市教育委員会　1981『今山・今宿遺跡』

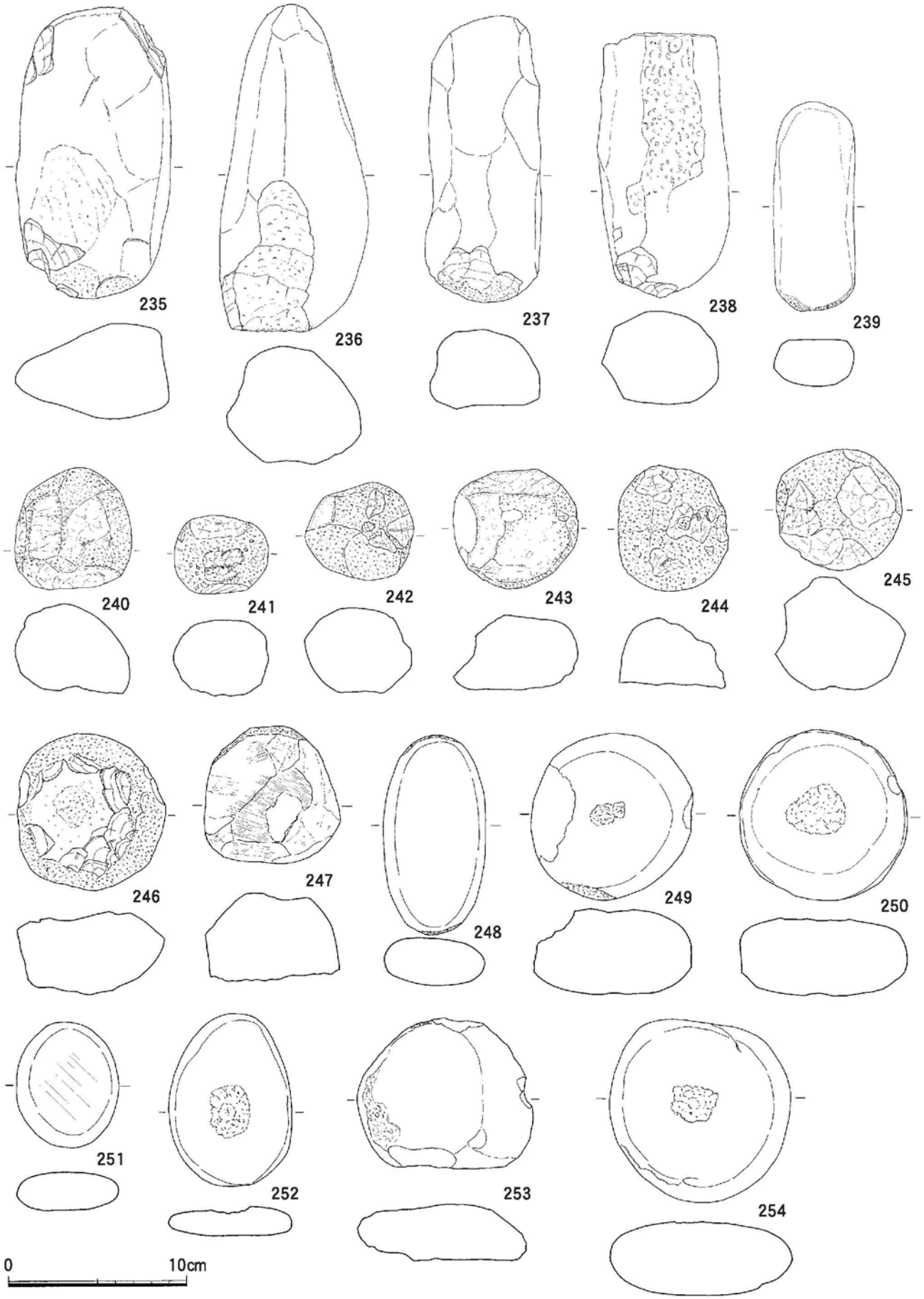


図83　敲石・磨石実測図（⅓）

る。掲載している面は中央窪み、窪みの中央と側面敲打痕の間には小さな剥離が多く認められる。中央の窪みは自然によるものか。小さな剥離は反対面にも数は少ないが認められ、敲打時に付いたものではないかと考えられる。247はほとんど全面が自然面の玄武岩であるが、一部に条線が明瞭な研磨痕と別の一カ所に敲打痕が認められる。どういう状態で使ったものか判断つかない。248も玄武岩である。通常の玄武岩原石は、表面が一見敲打状を呈するか、やや大きな窪み状の表面のものが多いが、これは全面磨いたようにつるつるになっている。その両端がわずかではあるが、敲いてつぶれたようになっている。人工的なものかどうかもわからない。249は黄白色に近い花崗岩製である。両面はほぼ磨いた状態で、その中央部が径2㎝前後の大きさで窪んでいる。また側面は全周が小さな凹凸があり、敲いた状態になっていると思われる。磨石・凹石・敲石兼用のものであろうか。250は黒みを帯びた花崗岩製。249とほぼ同様である。この2点は明らかに人の手を経たものと言える。251は安山岩製か。全面磨いた状態にかすかに研磨状の条線が見えるが、人工的なものかどうか不明。252は花崗岩製。平たい石の中央に窪みがある。磨いた状態のようにはなっていない。253は玄武岩であるが、表面に無数の小さな穴があき、海の水の中にあったものと思われるが、一側面が磨いたようになっている。自然になったものか。254も玄武岩で、ほとんど自然面と思われるが、中央部にわずかに敲きによってできたと思われる窪みが確認できる。

石核（図84）

弥生時代の黒曜石・安山岩等を丹念に見ていないため、全体の点数は把握できていない。2点を確認し、1点を図示した。255は漆黒黒曜石製で、剥片を剥いだ面以外は自然面である。いずれも不定形の縦長剥片を剥出している。打面調整等は確認できない。C2区の古墳時代の層から出土した。

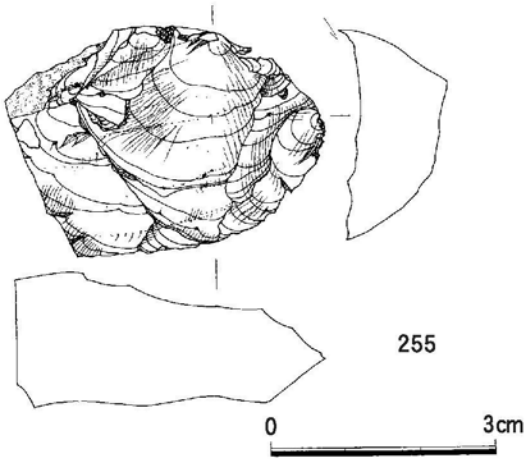


図84　石核実測図（1/1）

表6　弥生時代石器計測表3

図	No.	種類	地点・層	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
83	235	棒状敲石	南区礫層	玄武岩	16.2	8.6	5.3	打撃時の剥離あり
83	236	棒状敲石	北区礫層	玄武岩	18.2	8.2	6.5	打撃時の剥離あり
83	237	棒状敲石	礫層	玄武岩	16.0	6.3	4.4	打撃時の剥離あり
83	238	棒状敲石	礫層	玄武岩	14.6	7.2	5.2	先端部等に敲打痕
83	239	棒状敲石	南区礫層	玄武岩	11.7	4.5	2.6	先端部に敲打痕
83	240	敲石	南区礫層	片岩系	6.8	6.5	5.0	円形敲打具
83	241	敲石	D3群	片岩系	4.4	5.2	4.2	円形敲打具
83	242	敲石	A2群	片岩系	5.4	6.0	4.7	円形敲打具
83	243	敲石	トレンチ	片岩系	6.6	7.0	4.2	円形敲打具
83	244	敲石	C群	片岩系	7.0	6.1	3.8	円形敲打具
83	245	敲石	南区礫層	片岩系	5.4	6.0	4.7	円形敲打具
83	246	敲石	SD01下礫層	玄武岩	8.7	8.2	4.4	側面に敲打痕
83	247	敲石	SD01	玄武岩	7.7	7.5	4.9	一部に研磨状条線と敲打痕
83	248	敲石	中区礫層	玄武岩	11.1	5.6	2.7	先端部に敲打痕
83	249	磨石等	南区礫層	花崗岩	9.3	8.9	4.7	中央に窪み、側縁に敲打痕
83	250	磨石等	表土	花崗岩	9.5	9.3	4.3	中央に窪み、側縁に敲打痕
83	251	磨石等	I群	安山岩	7.0	5.7	1.1	研磨状条線あり
83	252	磨石等	SD01下礫層	花崗岩	9.6	6.8	1.7	中央に窪みあり
83	253	磨石等	E群	玄武岩	8.4	9.8	3.1	側縁が磨き状、自然か
83	254	磨石等	南区礫層	玄武岩	10.1	10.0	4.1	中央に窪みあり

玄武岩製剥片・チップ（図85）

玄武岩製の剥片・チップは浅いコンテナで約200箱出土した。前述したように、17のユニットから出土したもの、それ以外の包含層から出土したもの、弥生礫層から出土したもの、他の時期の遺構や包含層・表土・撹乱から出土したものの大きく４つに分けられるが、時間の関係からユニットの出土物しか計測できかった。計測は整理作業員による計測と、そのうちのごく一部について外形のみの実測を行った。計測したのはバルブを上において、縦と横の長さを計測した。バルブのわからない剥片等については、リングの方向で計測をおこなったが、なれない整理作業員のため一部で縦・横の間違っているものもあるかと思われるが、一部を確認した限りではその点数は極めて少ない。また計測後に、別の時期の遺物にまじったユニット出土品が若干あったが、計測していない。計測した点数は総数で弥生時代が28,173点、縄文時代が485点である。

以下、各ユニット毎に説明するが、比較のために縄文層から出土したフレイク・チップについてもここで報告する。なおＧ群ユニットはＢ２群と同一のものである。

Ａ群ユニット

表土剥ぎ後に検出した最も上層にあるユニットで、ＳＣ03北側で検出した。量は少なく散漫な分布で、大型のフレイク・石などからなる。計測点数は24点で、そのほかにユニットの中ではもっとも多い８点の石斧未製品が出土している。チップは２㎝以下の小型品がなく、大きさにまとまりがない。

Ａ２群ユニット

Ａ群の南側で検出した。Ａ群とは間層を挟んでいる。総点数は54点と少ないが、幅・長さともに２～４㎝のものに比較的まとまりがあり、縦長・横長の剥片が少ない。未製品は２点出土している。

Ｂ群ユニット

Ｂ４区北東側にある。総点数は86点で、長さ・幅とも２～６㎝のものが多い。数点縦長の剥片がある。中期の土器の大きな破片が数点出土している。石斧未製品の出土はない。

Ｂ２群ユニット

Ｂ群の北東側で検出。Ｂ群より下に位置する。993点確認した。そのほとんどが６㎝以下で、時に１㎝以下の超小型、２～３㎝前後の小型のものが多い。チップ・剥片の他に大きな自然礫が数点一緒にあった。未製品の出土はない。

Ｃ群ユニット

Ｂ群の南西で、Ｂ群と同レベルで検出した。132点確認できた。４㎝付近に若干の集中はあるが、分布は散漫である。図36に出土状況を掲載しているが、１点１点が図に描けるほどの大きさのものが散布している状況である。石斧未製品は１点出土した。

Ｄ群ユニット

本調査区内でフレイク・チップがもっとも多量に、かつ最も集中するユニットである。Ｄ群は表土剥ぎ後、その一部が比較的早い時期に検出し、その後Ｄ群の下部に１㎝ほどの土まじり砂層の間層を挟んで別の群を検出し、それをＤ２群と名付けた。さらにＤ２群の中で明らかにひとかたまりのユニットを２つ分離し、それをＤ３群・Ｄ４群と名付けたが、調査者の怠慢で、その位置を記録に落し忘れてしまった。Ｄ２群の中の群ではある。このようにＤ群・Ｄ２群は１回ずつ廃棄したフレイク・チップの集合体であり、あたかも貝塚のような状況を呈している。また取り上げたラベルではＤ群の他にＤ１群のラベルが存在するが、記録には残っていないがＤ２群を検出した時点で、旧Ｄ群をＤ１群に改めたものと思う。念のため、別にグラフを作成する。

Ｄ群は330点。10㎝を超える大型のものがないが、極度に集中する部分もない。Ｄ１群は4337点とＤ

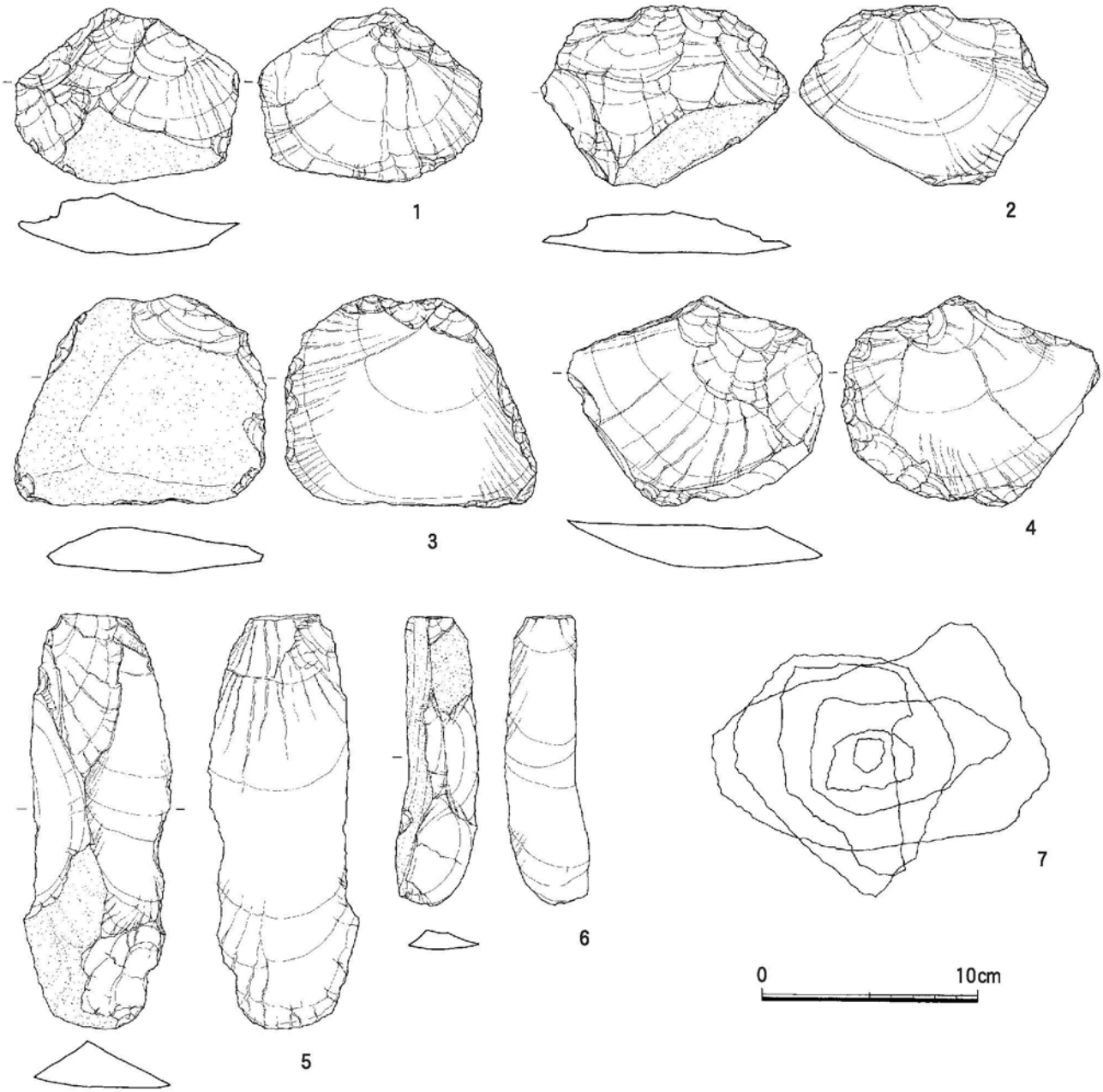
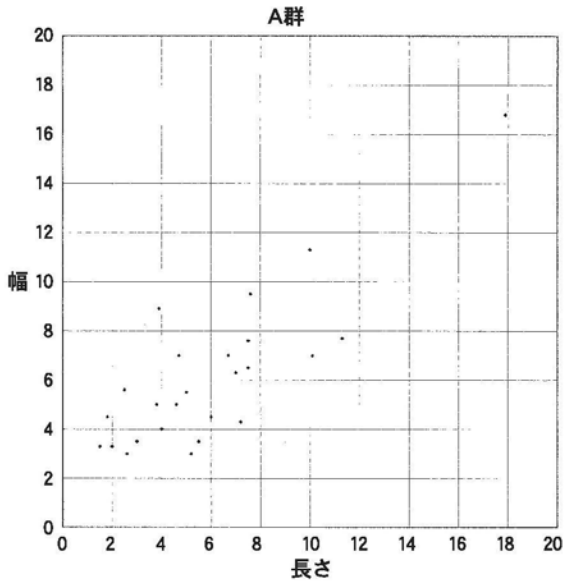
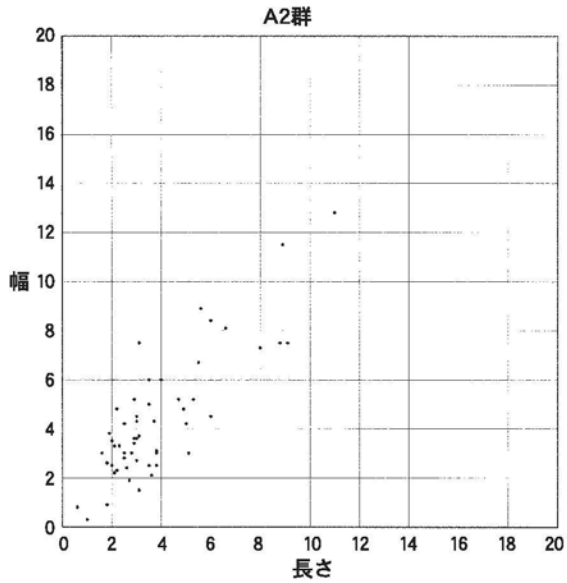
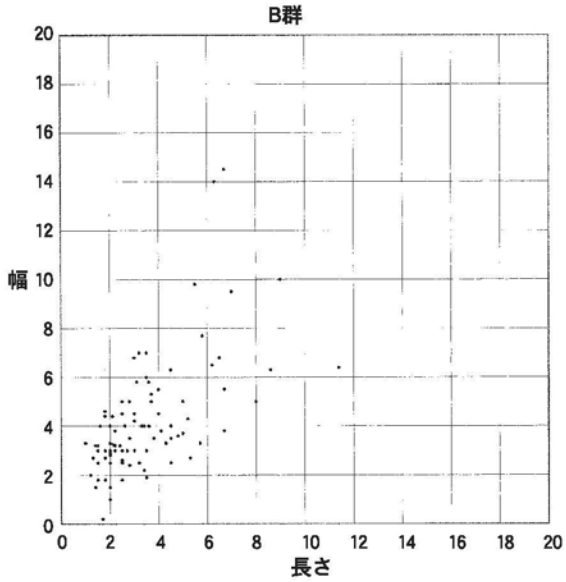


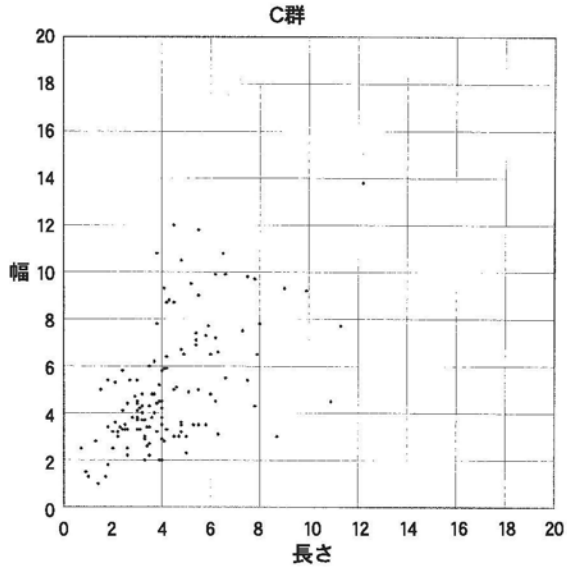
図85　玄武岩剥片実測図及び模式図（⅓）

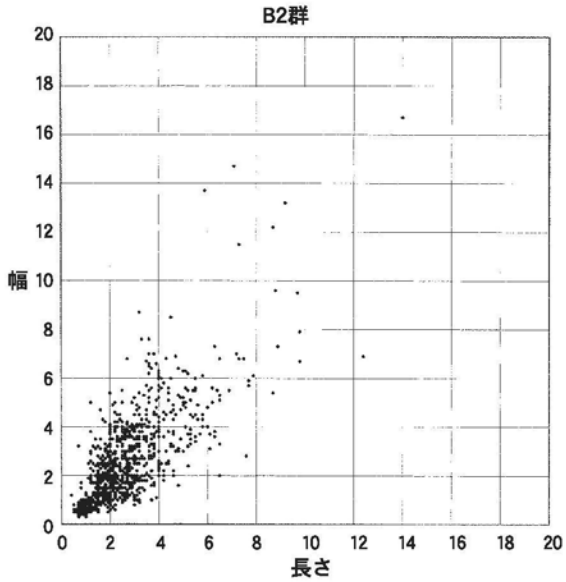
別グラフにあるように玄武岩製剥片は、素材から製品を作る各段階で様々な大きさのものが剥出されている。大きなものは長さ20㎝を超すものから、１㎝未満の小さなものまである。グラフに１㎝未満のものがほとんどないのは、土と一緒に捨ててしまっているからであり、サンプル土壌を水洗した結果は１㎝未満の剥片・チップが多く出てきた。出土した剥片の多くは長さと幅が大きくは変わらないもので、上図の１から４はやや横長の剥片であるが、ごく一般的なものである。３・４には側縁に調整が施され、スクレイパー等に利用しようとしたものかもしれない。剥片のエッジに調整が施されているものは比較的多い。極端に横長の剥片はほとんどないが、５・６のような縦長の剥片は少ない。エッジに使用痕らしきものがついているものもある。７は大小の剥片を外形のみ重ねたものである。

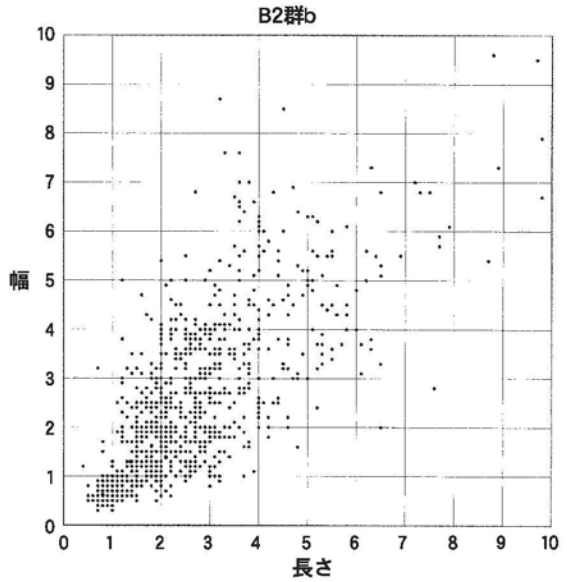

A群
幅
長さ

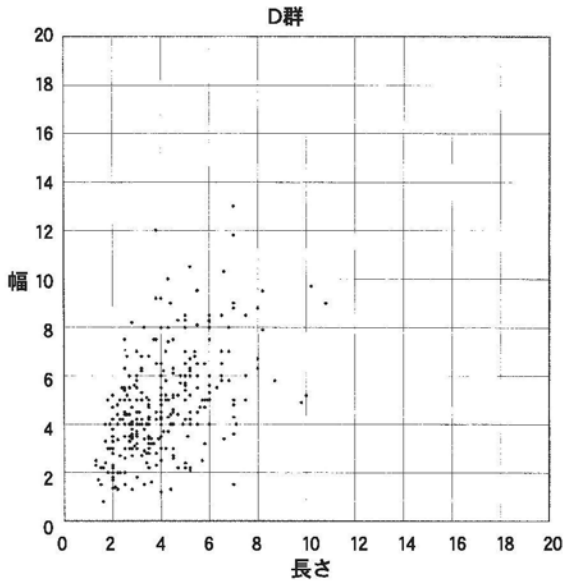

A2群
幅
長さ

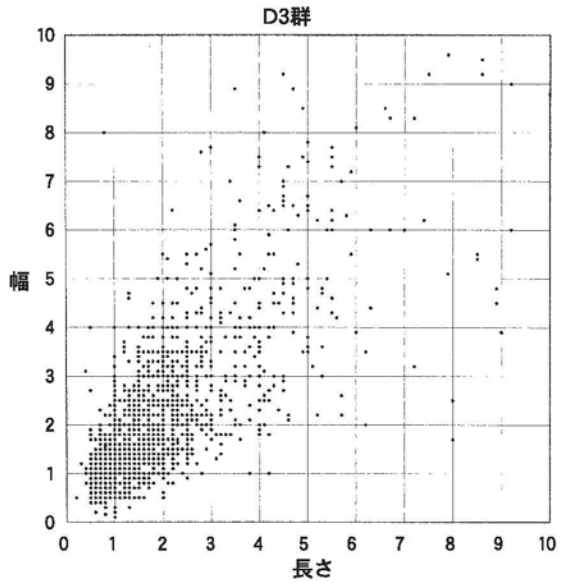

B群
幅
長さ

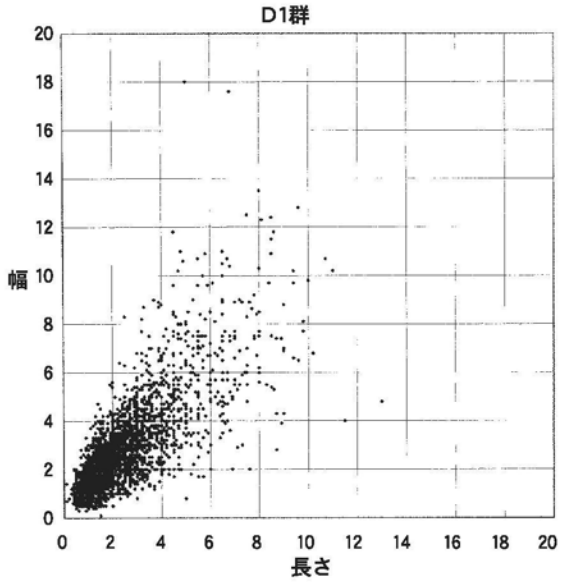

C群
幅
長さ

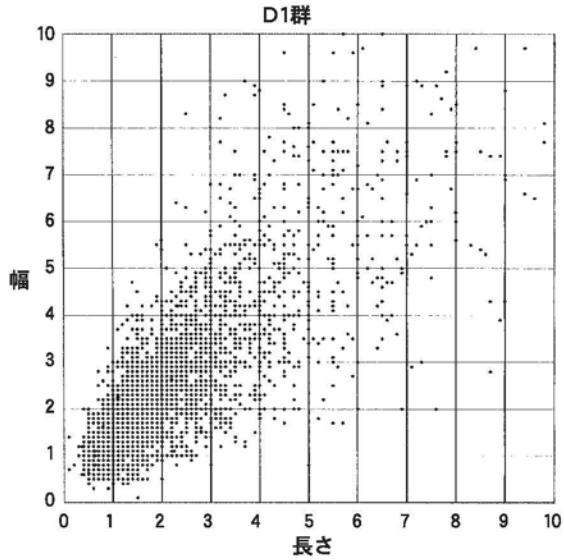

B2群
幅
長さ

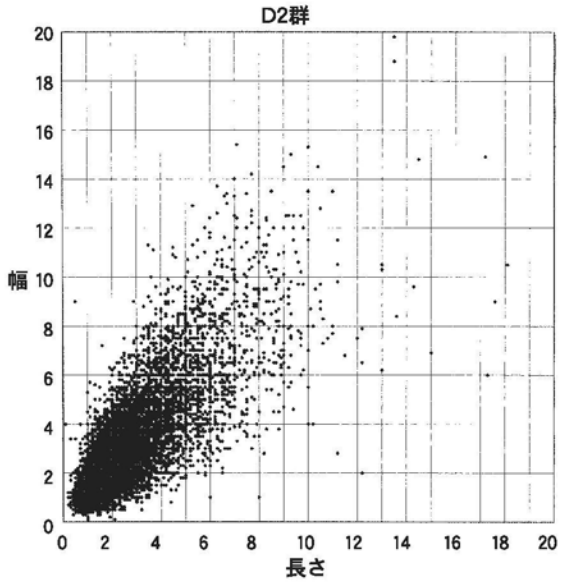

B2群b
幅
長さ

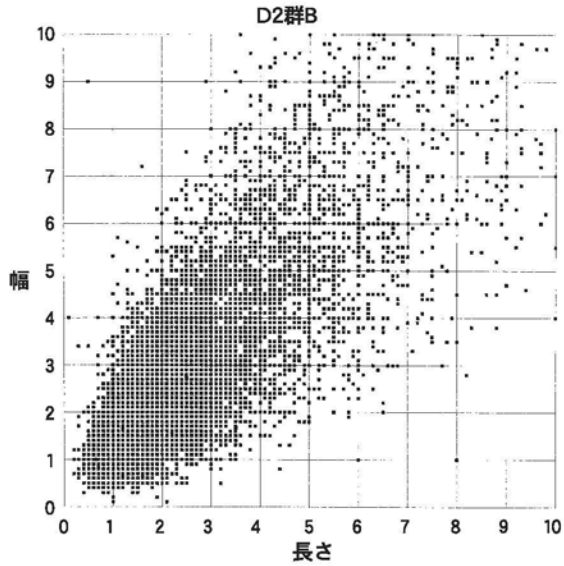

D群
幅
長さ

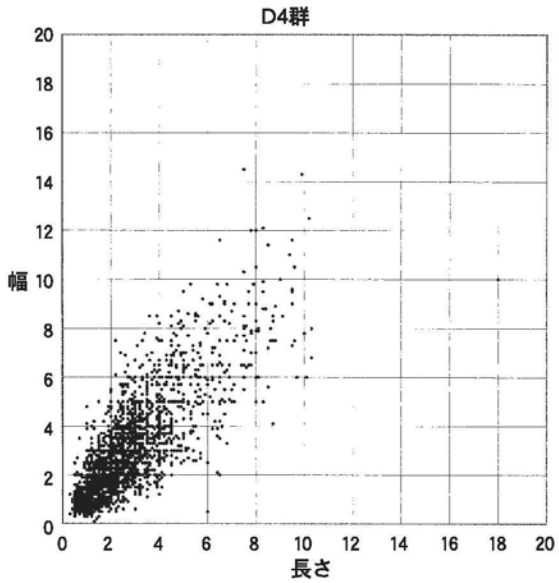

D3群
幅
長さ

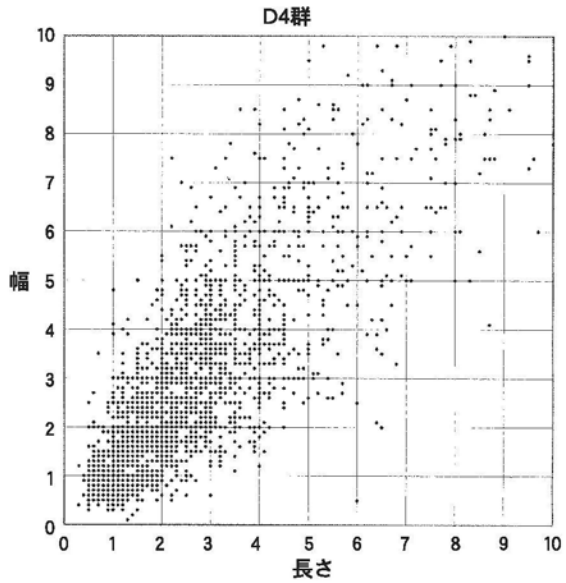

D1群
幅
長さ

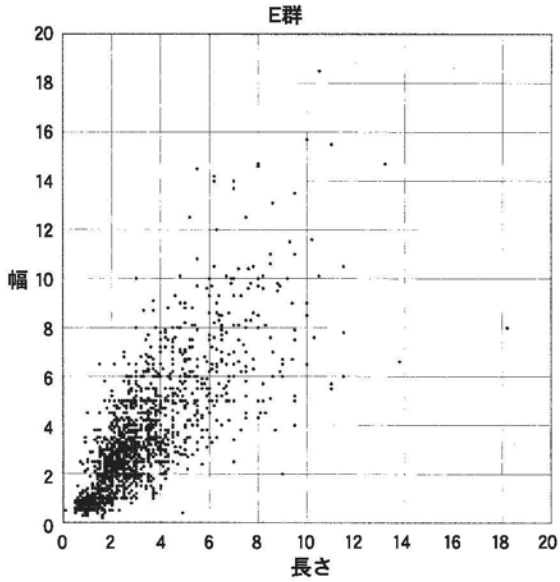

D1群
幅
長さ

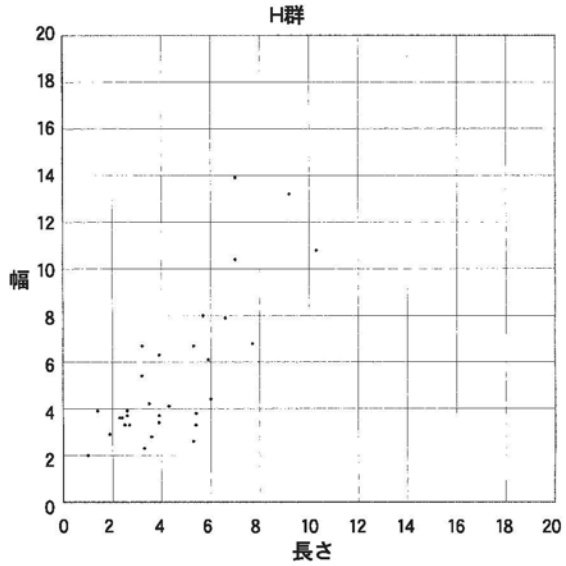

D2群
幅
長さ

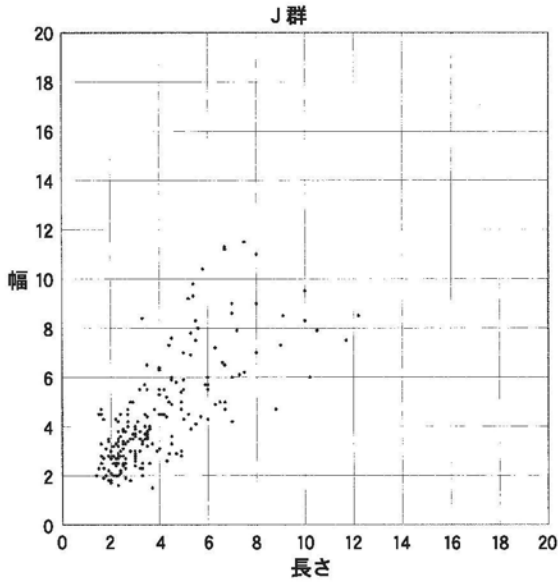

D2群B
幅
長さ

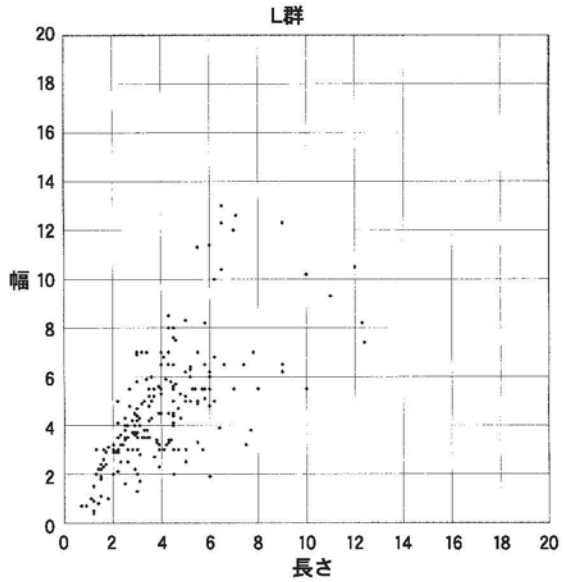

D4群
幅
長さ

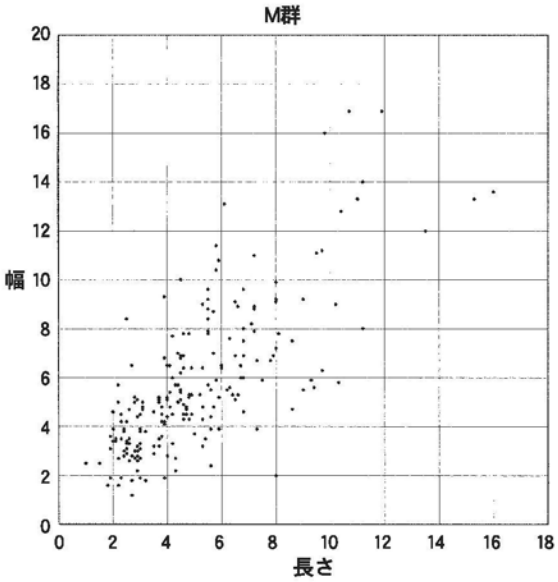

D4群
幅
長さ

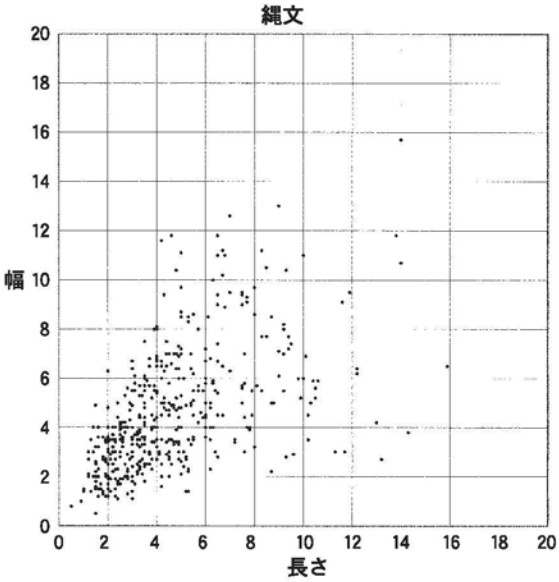

E群
幅
長さ


H群
幅
長さ


J群
幅
長さ


L群
幅
長さ





2群に次いで2番目に多い。その99%が10cm以下にあり、さらにその大部分が4cm以下の小型品である。未製品は1点出土した。

D2群ユニット

前述のようにD1群とは薄い間層を挟んでいる。ラベルではさらに4群に分けているが、ここではまとめて報告する。総数15238点のフレイク・チップを計測した。そのほとんどが6cm以下で、さらに4cm以下のものはドットの隙間がないほど集中している。出土状態も超小型・小型のフレイク・チップがざるで捨てたように密集していた。15cmを超える大型フレイクが10点ほどあるが、横長のものが多く、これらはすでに述べた石包丁の未製品などに使われる可能性があるものである。石斧未製品は4点出土したが、そのうち2点は群のすぐ横で、純粋に群内から出土したのは2点のみで、フレイク・チップのみをまとめて捨てた群と言える。

D3群ユニット

前述のように、正確な位置の記録は残っていないが、D2群内の1群である。1828点確認した。グラフの欄外10cmを超えるものが4点ある。この群も大半が3cm以下の小型品である。未製品は2点出土した。

D4群ユニット

この群もD2群内の1群である。2729点確認した。超大型品は数点のみで、やはり4cm以下に集中する。未製品の出土はない。

写真17　D群ユニット

写真18　E群ユニット

Ｅ群ユニット

Ａ群とトレンチを挟んで南側に位置する。Ａ群に次いで高いレベルにある。1729点を計測した。概ね他の群と同じ傾向を示している。未製品が４点出土している。

Ｅ２群ユニット

Ｅ群のすぐ南西でまとまって出土したやや大型の礫10点ほどに名称を付したが、フレイク・チップや未製品・土器の出土はない。

Ｅ３ユニット

Ｅ群に接して東側のまとまりである。Ｅ群とはレベル差があったため、別の群としたが、結局35のチップと自然石しかなかった。グラフ化していないが２㎝以下の小型品が無く、５～10数㎝の中型・大型品が半数近くを占める。未製品の出土はない。

Ｆユニット

Ａ４区南東端で検出した。自然石と未製品の集まりで、チップはほとんどなかった。未製品は３点出土している。

Ｈ群ユニット

Ａ群の北にあるユニットである。自然石が中心の群で、フレイクは31点出土した。やや大型破片の土器が数点出土している。

Ｉユニット

Ｅ群の南にある。フレイク・チップは少なく、未製品１点と磨石などが出土した。

Ｊ群ユニット

Ｃ群の下横で検出した。総数211点ある。量は少ないながらも２～４㎝の範囲に集中する。未製品は出土していない。

Ｋ群ユニット

Ｂ２群のかなり下で検出した。未製品１点と礫数点が出土したために名称を付した。

Ｌ群ユニット

Ｃ群の東側で検出した。207点出土した。大きさの分布にはあまりまとまりがなく、小型品に縦長のものが目立つ特徴がある。

Ｍ群ユニット

Ｂ２群とだぶるように下で検出した。209点計測したが、大きさの分布にはまとまりがなく、２㎝のものから10㎝のものまで点数変化がほとんどない。

礫層出土フレイク・チップ

礫層で出土したフレイク・チップは計測できなかったが、大きさの傾向はユニット出土品と同じように小型のものが多いが、ユニットに比べて大型品が多そうである。出土状況は、若干の集中はあったものの、上層のようにユニットとして明確に群をなすものは確認できず、無数ある大型礫の中に散在しているような状況であった。

縄文層出土フレイク・チップ

縄文層ではフレイク・チップはまったく群を成さず、土器や石器と同じように各層の中に散らばって包含されている状態であった。全部で485点計測した。ただし、現場の水洗いの段階で分けた２㎝以下の小型品が100点以上計測値に入っていない。計測値のみを見ると。大半が６㎝以下で、これに未計測分の小型品を加えると、やはり４㎝以下の小型のものがもっとも多くなる。点数の割には10㎝以上の大型品も比較的多い。縄文層出土の未製品は弥生時代に比べて小さいにも関わらず大型のフレイク

が比較的多いのは、原石が大きいのでは無く、石匙やスクレイパーなどの剥片素材を利用する石器が多いためではないだろうか。

以上弥生時代中期の剥片・チップ28,173点と縄文時代剥片・チップ485点をユニット別に見たが、全般的に見て圧倒的に数が多いのは4㎝以下の小型のものである。これは中型・大型の剥片剥離で大体の形を整え（第Ⅰ工程)、小さな剥片剥離で石斧の形を仕上げる（第Ⅱ工程）時の作業量とまた素材自体が石斧の形に近いものは第Ⅰ工程が存在しないことなどを考え合わせれば当然の帰結であろう。大型の剥片のみが集中するユニットが存在しないことは、大型の剥片は別の目的に使われる可能性があることと、小型のものが大量に出土するユニットにも中型・大型品が若干含まれることを考えれば、第Ⅰ工程から第Ⅱ工程への流れは一連のものと思われる。

小型のチップがまとまって大量に出土したＤ１～Ｄ４群は、現場では分離ができなかったが、実際にはさらに小さなまとまりがいくつかあり、恐らく籠や土器などに入れて捨てていったものと考えられる。まとめでさらに考えたい。

7　縄文時代の包含層と遺物

⑴　包含層と遺物の出土の状況

縄文時代の包含層は、Ⅰ区南半に堆積した風成砂層（A）とその下に堆積する水性の砂層（B）、及びⅠ区北半に堆積する褐色系の土まじり砂層（C）である。B層は鉄分が少なく粗砂を含まない上層（B１）と黒色の鉄分を多く含み粗砂を交える下層（B２）に分けられ、B２層は北へ行くほど厚さを減じ７区あたりで消滅する。そのあたりで細砂を主体とするB１層がC層に変わってゆく。C層も北側拡張区では姿を消し、縄文時代の包含層は見られなくなる。地山は今山崩落土である褐色系の土で、崩落時に混じったと考えられる多くの大小礫を含んでいる。

以上を簡単にまとめると、北から南へ大きく傾斜している地山の上に淡水を交えた粗砂を主体とする層が形成され、その層の上には細砂がたまっていく。さらに傾斜の高い方には土まじりの砂がたまり、最後に風成砂が形成されている。それぞれの層には異なる時期の土器が含まれている。また、B２層の最下面（地山：今山の崩落土）は調査区内より南側はさらに下がっており、調査区内で確認したレベルは標高約50㎝である。

B２層から出土するのは縄文時代前期の土器が主で、大型の破片が多い。摩滅した土器は少ないが、大変脆い土器が多い。若干だが湧水を伴い、自然木が出土する。C－６区（図86左下）では轟式土器がまとめて出土した。また縄文層調査の最後に調査区南端をぎりぎりまで掘った時に、図88－19の完形に近い土器が最下層から出土した。

B１層から出土するのは主に中期の土器で、小さな破片が多い。C層のものは層自体が堅いためか、摩滅を受けているものが多い。B－６区では底部や胴部の大型破片が、B－７区では条痕文土器がまとめて出土した。

C層からは下部で前期の土器、上部で中期の土器が出土する。土まじりの砂層かなり堅い土壌のためか土器の摩滅が著しい。この層は９区で消滅し、10区以降は包含層が存在しない。

A層からは後期初頭の土器が出土する。風成砂層の中から出土するものは少なく、砂層上面から出土した土器が多い。図87－１・２の土器は砂丘上面から多くが出土したが、砂丘中からも数点出土しており、遺物が沈んだのではないかと考えるのが妥当だろう。

図86は砂丘面上面の土器出土状況と、最下層の土器出土状況図である。前者は弥生礫層を除去した後に、薄い砂層を挟んで大型の土器片が検出された。同じ面で獣骨なども出土した。この上の間層や弥生礫層下部からも縄文土器が若干出土している。また、この面とほぼ同じ面で弥生時代と考えられる太形蛤刃石斧の未製品片が出土したが、弥生土器はまったく出土していない。

後者は縄文礫層のほぼ直上で検出した条痕文土器で、周辺から大型の自然木なども出土した。最下層の土器は地山である今山崩落土の表面に飛び出た礫の間にも入っており、この崩落が起こった時期は縄文時代前期を大きく遡る時期ではないものと思われる。

調査区が狭く深いため、上層から安全角度で壁面を斜めに掘削していったが、縄文時代包含層の掘削に当たっては、安全のため途中で１m近い段をつけた。従って最下層での調査はBC列のそれぞれ半分ほどの幅１～２m、長さ14mの狭隘な調査区となってしまった。これらのため、遺物のドットを取っていくのが困難であったことから、遺物の取り上げはグリッド毎に行い、１回掘下げるたびにグリッド名とレベルを記入した。当初はレベルとの整合性を持たせるために南北方向の土層断面がとれるように、Bグリッドを通すようにベルトを残していたが、砂層が中心で崩壊が激しかったことと、狭くて作業の邪魔になることからすぐに断念した。

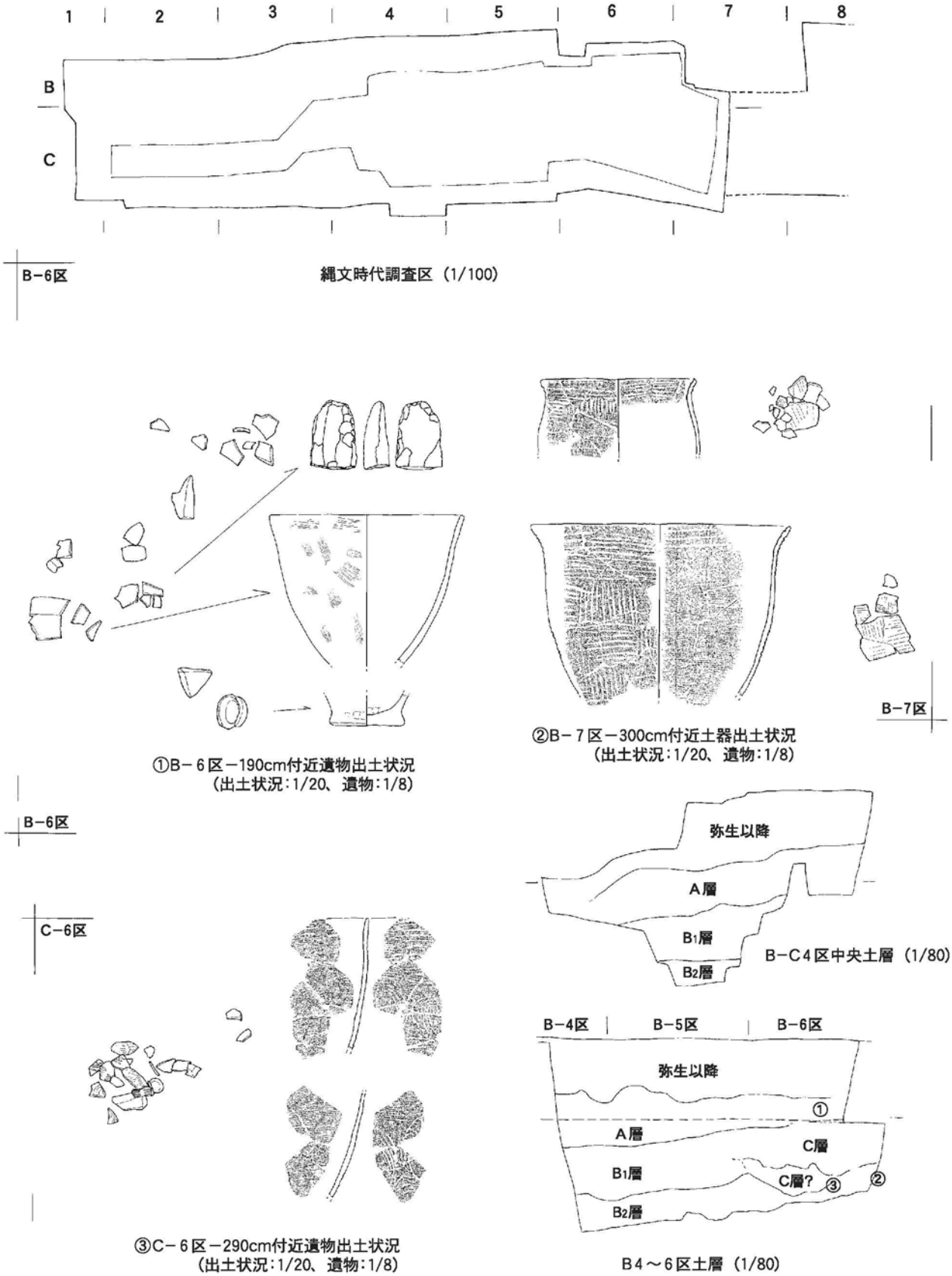


図86　縄文時代調査区配置図及び遺物出土状況実測図

⑵　出土遺物

上層から下層へ掘って行くに従って次第に調査区が狭くなるため、上層ではＢ列とＣ列を掘削できたが、最下層では両列の半分程度しか掘削できなかった。また１区は掘削できず、10区以降は包含層が存在しない。報告に当たっては本来層毎に行うべきであろうが、Ｂ１層とＢ２層、Ｂ１層とＣ層が漸次的に変化していくことと、上述のように調査区縦方向の通しの土層断面をあきらめたため、現場段階では掘下げ中に層との対応が十分できなかった。なお出土遺物のレベルは標高4.8ｍからのマイナス値である。

①　縄文土器

Ｂ・Ｃ２区出土土器（図87・88）

地山が北西から南東に下がっているため、もっとも包含層の厚い部分である。地山はさらに調査区外へ下がっており、調査区内でもっとも低い標高は50㎝を測る。１・２は風成砂層の上部から同内部から出土し、一部の破片は風成砂最下部からも出土した。胎土に滑石を大量に含む深鉢である。２の底部の立上がり部分に焼成後の穿孔が施されている。確認できる穿孔は横一列に３つ、斜めに４つある。さらに１の胴部片にも３孔ある。１と２は接合しないため、全体の孔数はわからない。底部はやや上げ底になると思われる。底中央の破片らしきものはあるが、接合しない。底部近くに孔があることから当然煮炊き以外の用途が考えられる。調整は底部は指押さえ・ナデ、胴部内面も同じで胴部外面は貝殻以外の条痕と思われる。復元底径13.7㎝を測り、全体橙色を呈している。３は弥生時代礫層下部から出土した。口縁部がＭ次形の波状を成している。口縁部直下は突帯状に飛び出し、その部分と口唇部に小さい棒状施文具で刺突を施す。口縁下には同じ施文具で短沈線を施している。またＭの谷部にあたるところには丸い窪みをつけている。調整は不明瞭であるが、内面は条痕で外面は条痕の後にナデを施しているようである。

４～16はＢ１層下部からＢ２層上部で出土した。４はＣ２区310㎝での出土。かなり大きな口径の土器である。外面は条痕を施した後、刺突と鋭い施文具による短沈線で文様を構成し、口縁部以外は文様をナデ消している。内面は条痕施文後一部をナデ消している。口唇部には刻みが施されている。明褐色を呈し胎土・焼成とも良好である。５は波状口縁である。両面とも条痕を施し、口唇部に刻目を施している。良好な焼成である。Ｃ２区310㎝の出土。６はＢ２区320～325㎝出土の条痕文土器深鉢である。条痕は２種類あり、内面は1.1㎝に５本、外面はそれに加え５㎜に５本の目の細かい原体を使用している。７はＢ２区320㎝出土。外面と口唇部に深い連続する刺突文を施している。内面は条痕、外面は条痕施文後ナデている。８はＣ２区310㎝出土。棒状施文具による刺突と短沈線で文様を構成している。口唇部は沈線状を成している。全面ナデ調整である。９は調査区南端323㎝で出土。口縁端内面に粘土を貼付け、その中央部を連続して指で押している。外面口縁端部も指で連続して押圧している。外面文様は条痕の後に鋭い施文具で縦方向の沈線を施している。内面は条痕の後ナデである。10はＢ２区320㎝出土。両面に条痕を施し、口唇部には刺突、外面には棒状施文具による沈線を施している。11は丸底になると考えられる深鉢形土器である。両面とも条痕を施文しているが、内面の条痕は条線が明瞭であるのに対し、外面の文様はやや不明確である。外面は貝殻でないかもしれない。破片最上部には段がついており、口縁部が近いものと思われる。最大径26.2㎝を測る。Ｂ２区320㎝の出土。12は口径のやや小さなもので、外面に縄文を施す。内面は口縁端に粘土を貼付け、そこに縄文を施文する。口唇部は深い刺突を施してる。調査区南端323㎝で出土。13は調査区南端323㎝で出土。外面に条痕文を施した後、ヘラ状の施文具を斜めに押しつけて連続する短沈線を施している。下にもう一段見える。口唇部には刺突を施している。14は口縁部近くの破片で、小さいヘラ状施文具で９カ所

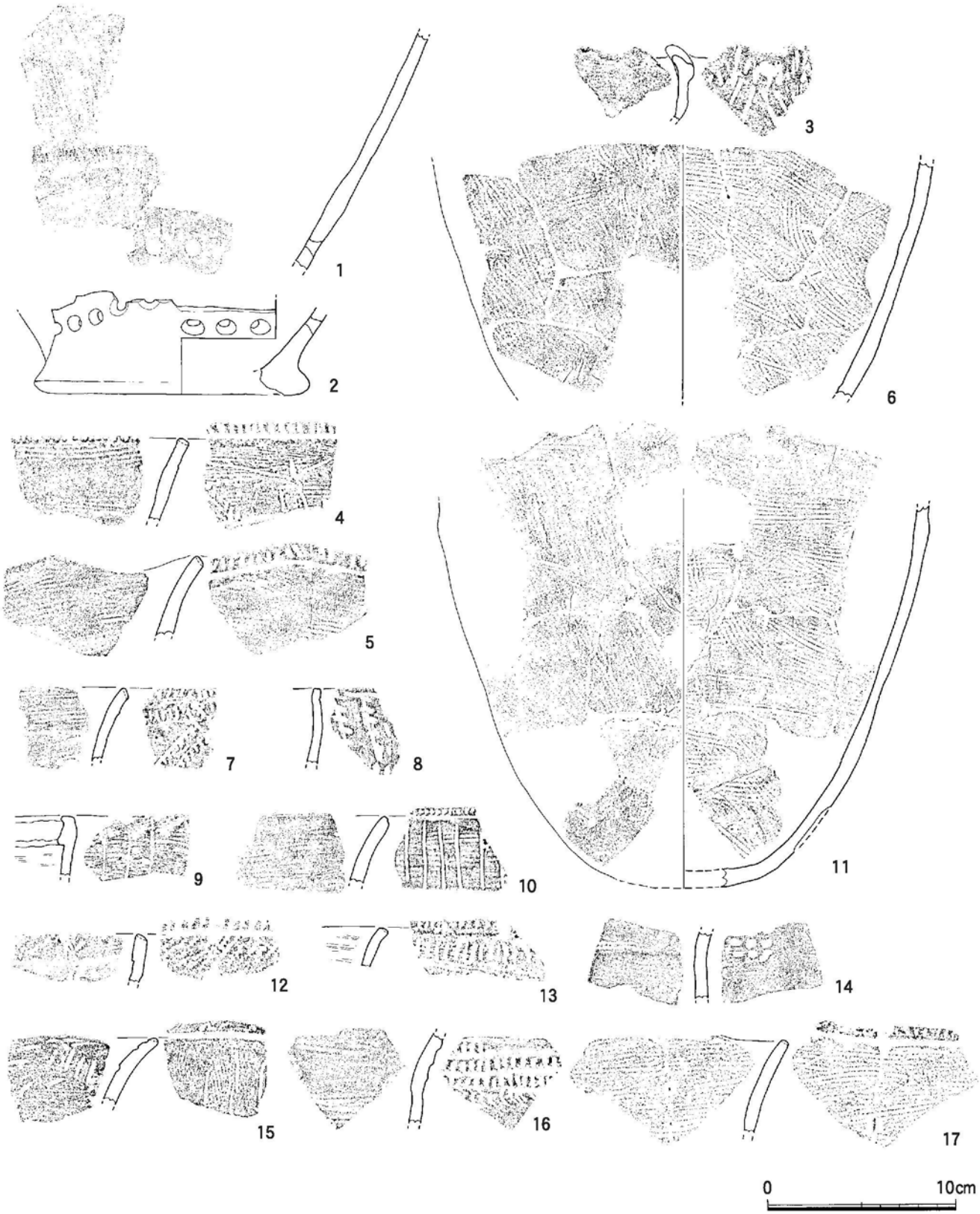


図87　B・C 2区出土縄文土器実測図1（⅓）

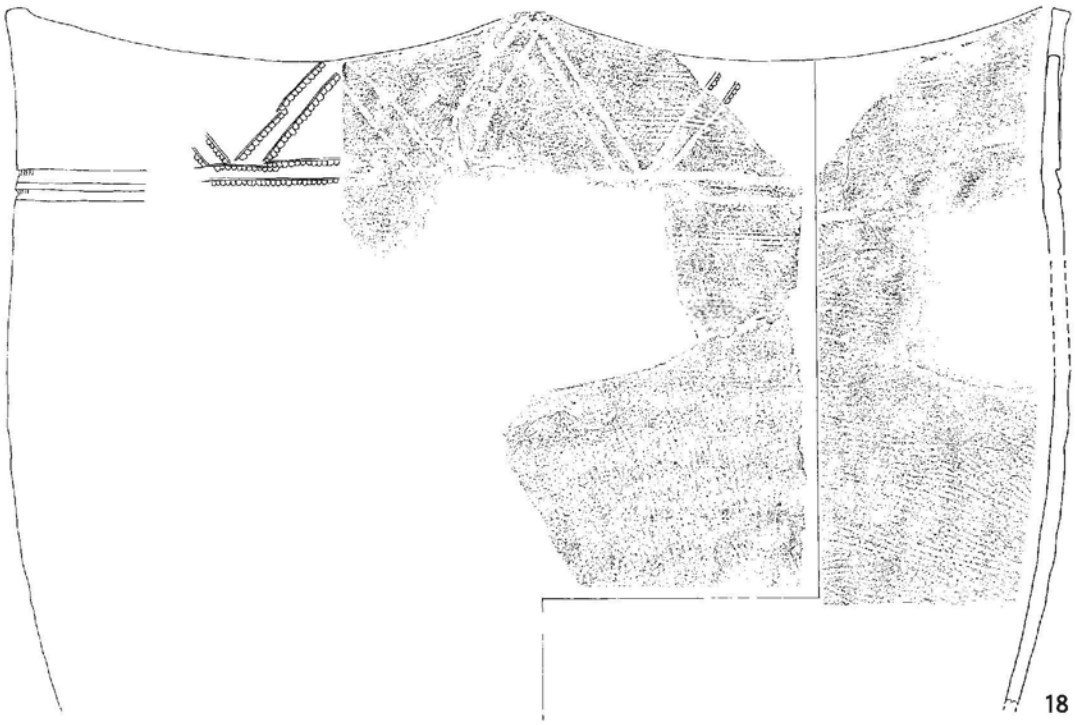


図88　B・C２区出土縄文土器実測図２（⅓）

以上刺突している。外面はナデ、内面は条痕を施している。15はかなり外反する口縁部である。外面は縦方向の条痕を施した後に、棒状施文具による短沈線を、内面は横方向の条痕の後に鋭い施文具による刺突状の短沈線を施している。口唇部には不明確な刺突を施している。Ｂ２区320㎝出土。16も外反する口縁部下の破片で、Ｂ２区320㎝出土。３条の突帯を施し、その上に爪形の刺突を施しているが、最上段の突帯の大部分には刺突が無く、最下段の突帯の下は突帯がないにもかかわらず刺突を施している。両面とも地文として条痕を施している。

17はＢ２層最下層近くの340㎝で出土。ゆるやかに外反する口縁部片で両面に横方向の条痕を施す。口唇部には鋭利な施文具で刺突を施している。破片の左側が上がっており、波状になる可能性がある。両面橙色を呈し、精良な胎土である。18は最下層近くのＣ２区340㎝からＣ３区の320㎝あたりで出土した。波状の山は１カ所のみの破片のため、山の数はわからない。地文として条痕を施している。口縁部外面は横方向、胴上半部は斜めの後に横方向で、胴下半は局部的に横方向がある以外は縦方向である。内面は胴下半は横方向に近い条痕を明瞭に残しているが、上部はなでて消えている部分が多い。口縁部下に貝殻腹縁押圧による大きな二重の鋸歯文と同じく貝殻腹縁押圧による二重の沈線を施している。器面全体が指押さえのための凹凸が激しく残っている。両面黄色みの強い黄橙色を呈し、焼成は良く堅い。胎土も１㎜以下の砂粒で精良である。

19は全形が分かる唯一の完形に近い土器で、縄文調査区の調査の最後に、安全のため斜めに残していた調査区南壁掘削中に出土した。Ｂ２区320～323㎝の破片がほとんどで、Ｃ２区310㎝の破片を１点含んでいる。口縁部は外反し、頸部が作られている。底部は幅の狭い丸底で、むしろ尖底に近い雰囲気を有している。最大径は頸部下の胴上半部にある。外面は、口縁部は横方向、胴部には斜めの条痕を施しているが、口縁部と底部周辺以外は大半がナデもしくはヘラケズリのような調整で消されている。内面は全面条痕が明瞭に施されている。口唇部には刺突が施されている。口径37㎝前後、胴部最大径37.5㎝前後、器高39.8㎝を測る。

Ｂ・Ｃ３区出土土器（図89）

３区はその一部が２区のものと接合したものもあり、ここで取り上げるのは少ない。20は風成砂上部から出土した。滑石を多く含む橙色の底部である。底部中央がやや上げ底で、底径11.5㎝を測る。全面器面の凹凸が激しい。21はレベル380㎝ともっとも低いが、地山の礫の隙間から出土したものであろう。胎土に滑石を含む。棒状施文具による沈線で文様を構成している。23はＢ３区310㎝で出土した。外面は地文として条痕を施した後大部分を消している。山形の山部分の下に棒を突き刺した刺突を６つ施している。さらに貝殻腹縁押圧による短沈線状の文様を施している。内面には条痕を施している。図は直立する図で描いているが、やや外反する可能性もある。

Ｂ・Ｃ４区出土土器（図89）

24・25は風成砂層上層出土。24は内湾する口縁部片で、外面口縁部直下に波状の突帯を作り出しているが、これはまずやや離れた２本の沈線をひき、中央に残った幅の広い突部分に、上下交互に刺突を繰り返すことによって、作り出している。波の上の沈線は破片の右側で上の方向にずれており、あるいは波状口縁を成すかもしれない。Ｂ４区227㎝で出土した。25は条痕文土器で、橙色を呈し、滑石を混入している。阿高系統の土器であろう。条痕の状況から１・２と同一個体かもしれない。Ｂ４区220㎝で出土。

26～28はＢ１層下部からＢ２層上部出土。26はＣ４区295㎝出土。縄文施文の土器である。残りが悪いため不鮮明だが、無節の縄文を外面に施し、内面には条痕を施している。縄文施文土器は胴部の小片が多いため、図化していないものが多いが、深いレベルではＢ２区とＢ４区で320㎝、Ｃ６区295㎝

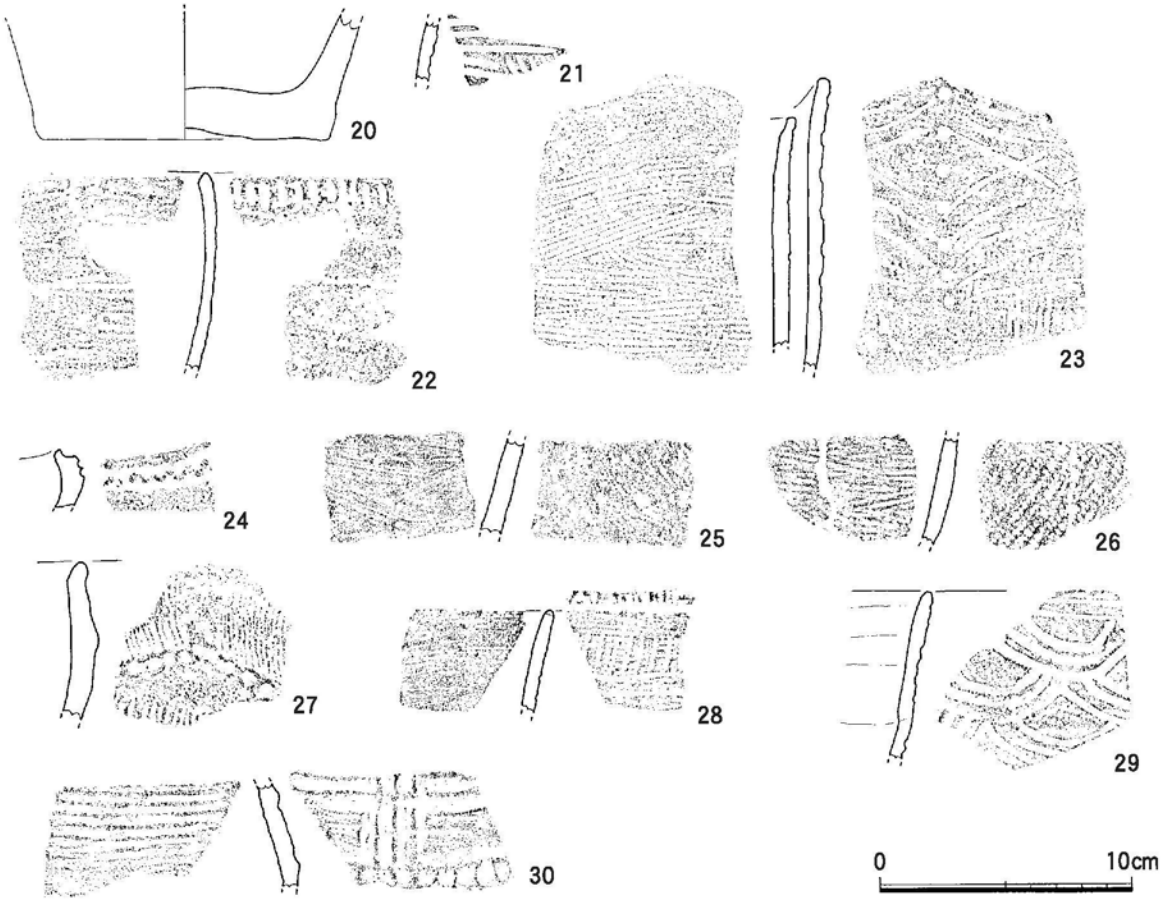


図89　B・C３・４区出土縄文土器実測図（⅓）

など浅いレベルでは弥生礫層から小片が１点出土している。27はＣ４区295㎝出土。全体が内湾する口縁部近くの破片と思われ、図のすぐ上が口縁部端と思われる。先の尖った棒状施文具で山形に連続刺突を行い、その上と、やや離れた下に櫛状施文具によって文様を構成している。28は両面に条痕を施し、外面には貝殻腹縁押圧によって短沈線状の文様を施している。口唇部には刺突を施している。Ｃ３区325㎝で出土した。

29は最下層のＢ４区340㎝で出土した。棒状施文具による浅い沈線を描いている。口縁端直下に２本の直線、その下に３重の弧線を連続して施している。裏面には粘土帯接合痕が明瞭に分かる部分がある。口唇部には不明確だが、刺突を施しているようである。30は縄文層掘削がほぼ終了し、礫を多く含む地山掃除中に４区から６区の間で出土した。恐らく礫の間に入っていたものであろう。外面は細いみみずばれ状の突帯で構成されている。拓本の大きな刺突状に見える部分は両側が突帯になっている。裏面は横方向の太い条痕である。

Ｂ・Ｃ５区出土土器（図90）

31～37は風成砂層の北側端からＣ層の南側端あたりで出土した。31は沈線と刺突で文様を作り、口唇部にも刺突を施している。Ｂ５区220㎝出土。32は器面の保持が悪く文様が不明瞭である。３本の斜めに走る突帯と縦方向の突帯があり、その中に連続する刺突状の文様が見えるが、あるいは太い目の縄文の可能性がある。内面はていねいになでている。Ｃ５区245㎝出土。33はＢ５・Ｂ６区の境の225㎝から出土した。風成砂というよりむしろＣ層になる。内湾する口縁部である。口縁直下にあるドー

ナツ状の文様は、6カ所の刺突を円形に施したもので、菊花状を呈している。破片左側の弧線も連続刺突によって作られている。他の文様は千引きしたものである。内面には条痕が明瞭に残っている。34はC5区235・245cm出土。内湾する口縁部に棒状施文具による沈線で文様を描いている。内面には条痕が施される。35は風成砂最下部あたりで出土した。内湾する口縁部に2段の刺突を施し、その下に短沈線と長めの沈線を組み合わせて文様を構成している。内面は指押さえ・ナデ調整を施している。両面にぽつぽつと赤い部分があるが、ごく少量であり、赤色顔料かどうか分からない。口径19.1cm、最大径20.9cmを測る。36は波状口縁を成す。文様は沈線を施して上から竹管を刺突しているものと思われる。内面はナデ調整である。C5区235cmで出土した。37も波状口縁を成すものと思われる。文様は太い棒状施文具によって施されている。条痕らしき痕跡が外面の一部に見えるが、他は両面ともナデ調整である。C5区245cmで出土した。

38〜50はB1層下部からB2層で出土した。その多くがB2層である。38・41は同一個体で、310cm・320cmで出土。山形口縁を成している。外面には条痕を施し、鋭利な施文具で3重のX字状の沈線を施している。口唇部には刻目を施す。内面はナデ調整で、粘土帯の痕跡が明瞭である。外面は灰白色から黒色を呈している。39は連続する刺突文の下に網目状に沈線を施している。両面ともナデ調整である。C5区最下層近くの335cmで出土した。40は3条の幅の厚い突帯をもつ。内面の一部に条痕が認められるが、両面のほとんどに条痕はない。ナデ消したものであろう。BC5区の305cm以下の壁面下部から出土した。42は外面に横方向の条痕を施し、ミミズ腫れ状の突帯を6条施している。口唇部は尖っている。内面に条痕は認められない。最下層のB・C5区礫層中出土。43は注記には255cmと320cmが記載しているが、縄文層は途中でレベルを1m下げているので、250は350の誤りではないかと思われる。250cmだと風成砂最下部からB1層最上部になる。350cmだとB5区南側では最下層であることから、そちらの方が自然である。両面に条痕を施しているが、器面の保持が悪いため不明瞭である。外面にはヘラ状施文具による連続刺突を3段以上施している。44は320cm出土。上げ底の底部で、底部径9.4cmを測る。外面にはかすかに条痕らしき文様が見える。橙色を呈する。45は330cm・335cmの最下層近くで出土した。色調は赤色に近い。口縁端をやや太めに作っている。外面には横方向の沈線を5条以上、内面には棒状施文具の押し引きによる沈線状の文様を3条施している。口唇部は斜めの刻目を施す。46はゆるやかに内湾する口縁部片で、外面に縦方向の粗い条痕を施している。内面は指で削り取るようになでている。320cm出土。47は復元口径28.9cmを測る。外面には条痕を施した後3条の低い突帯を施す。内面にも粗い条痕を横方向に施している。粘土帯の痕跡が明瞭である。48は最下層の礫の間から出土。両面に条痕を施し、外面には3状の突帯を作り出す。49は底部中央を欠くが、丸底を成すと思われる底部である。外面色調は赤色に近い全面粗い条痕を施している。50は両面白色に近い色を呈する口縁部片である。外面には条痕が認められるが、内面はない。外面に2条の突帯を貼付けるが、かなり波打っている。突帯の上にヘラで押さえたような痕跡が数カ所ある。内面口縁部下は粘土帯の痕跡が明瞭である。

B・C6区出土土器（図91・92）

5区の北端部から風成砂が無くなり、C層と最下層の一部にB層がある。B1層とB2層の区分けはほとんどつかない。縄文層調査最初に大型土器片がまとまって出土した。51・54がその土器である。51は復元口径31.3cmを測る。口縁部以外は2次焼成のため赤化し、口縁部には煤が付着している。胎土に石英などの砂粒を多く含む。外面は一見条痕の痕跡のような擦痕が多くついているが、なでた時に砂粒が動いた結果のようである。内面にはこのような痕跡はなく、ていねいになでている。54は外面が白色に近い。底径10.6cmを測る。両面とも指押さえの跡が残る。外底部は凹凸が激しく、土器成型

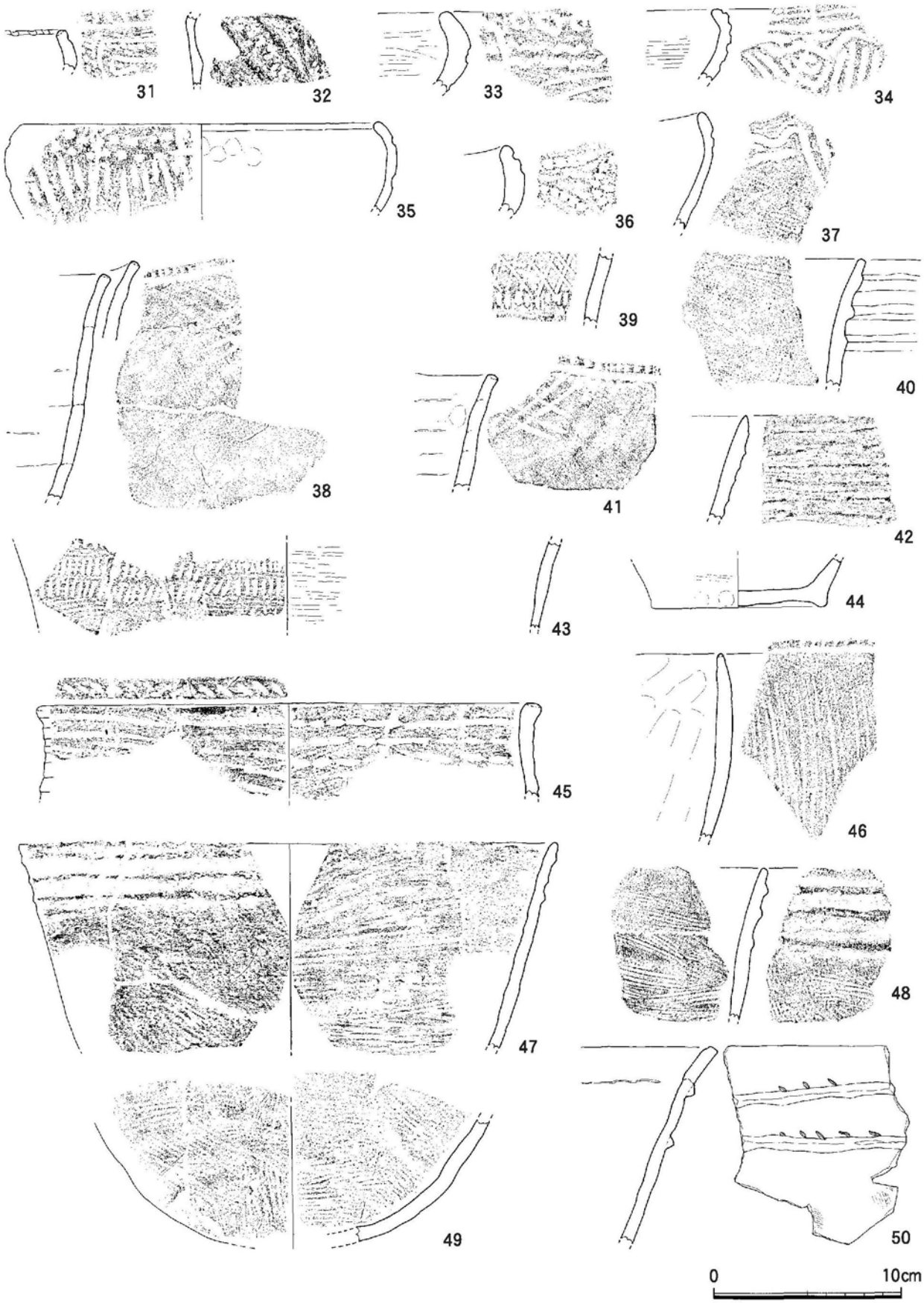


図90　B・C５区出土縄文土器実測図（⅓）

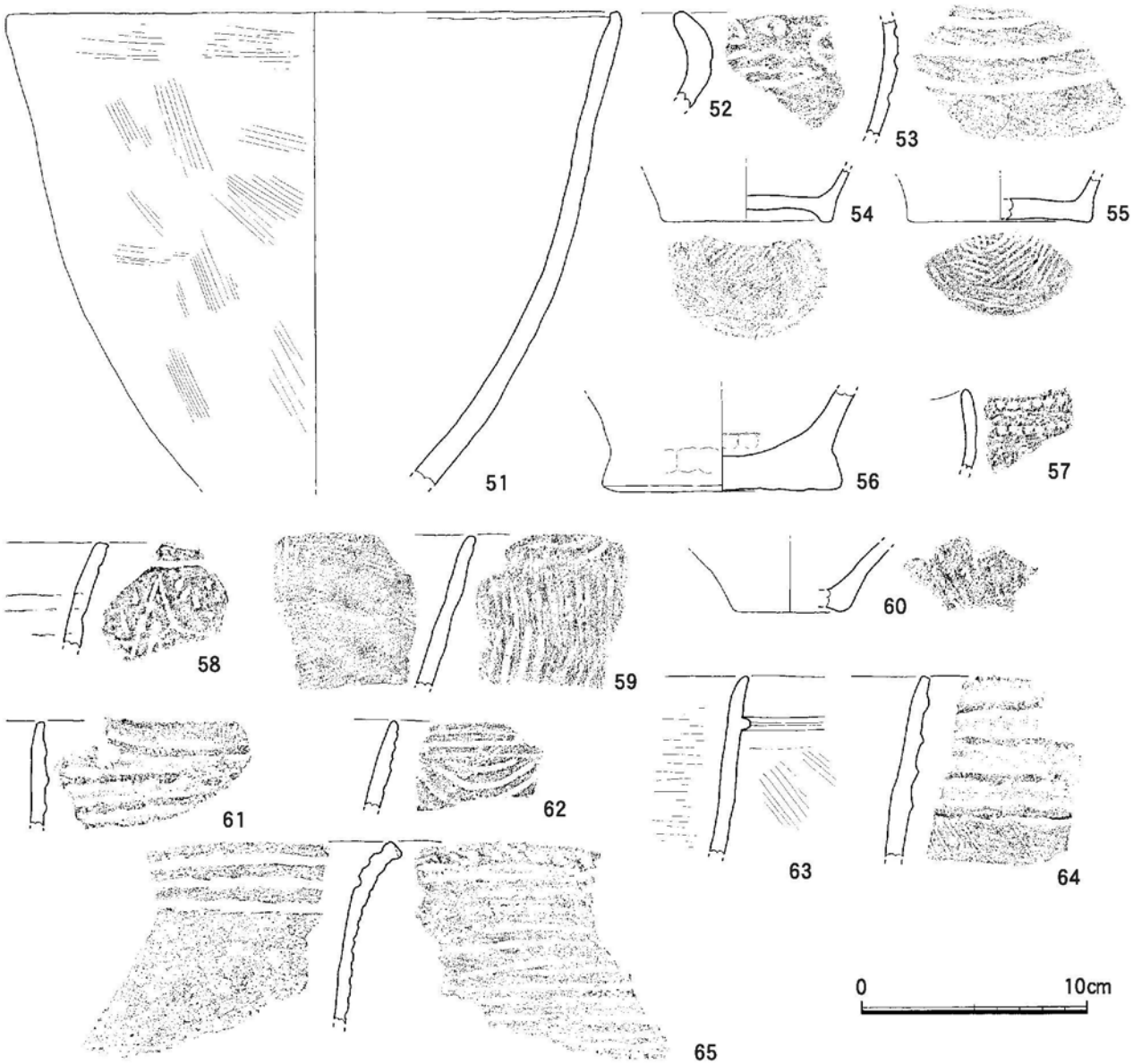


図91　B・C 6区出土縄文土器実測図1（⅓）

時に何かを置いていた痕跡かもしれない。

52・53はB 6区227cm出土。52は内湾する口縁部で、最上段の刺突は竹管状の刺突を反対向きに2カ所行っているようである。右側の弧も刺突の組合せで、波状の沈線は棒状施文具による沈線である。内面はなでている。53は3本の沈線を施しているが、この沈線が直線だとすると、かなり内傾する器形となるため、大きな弧を描いているとして図化したが、破片が小さいため不明である。内面は摩滅してわからないが、外面には何らかの条痕が地文として施されている。大粒の石英などを大量に含み粗い。54・55は外底部に条痕が施された底部片である。54は外面が赤色を呈する。高台状の部分は貼付けている。高台状の部分の裏側まで条痕が施されている。外面にはわずかに条痕状のものが見えるが不明瞭である。底部径7.4cmを測る。55も外面にわずかに条痕状のものが確認できる。内面はなでている。

57～61・63はB層出土。57はわずかに内湾する山形口縁である。口縁端に櫛状施文具による短い線

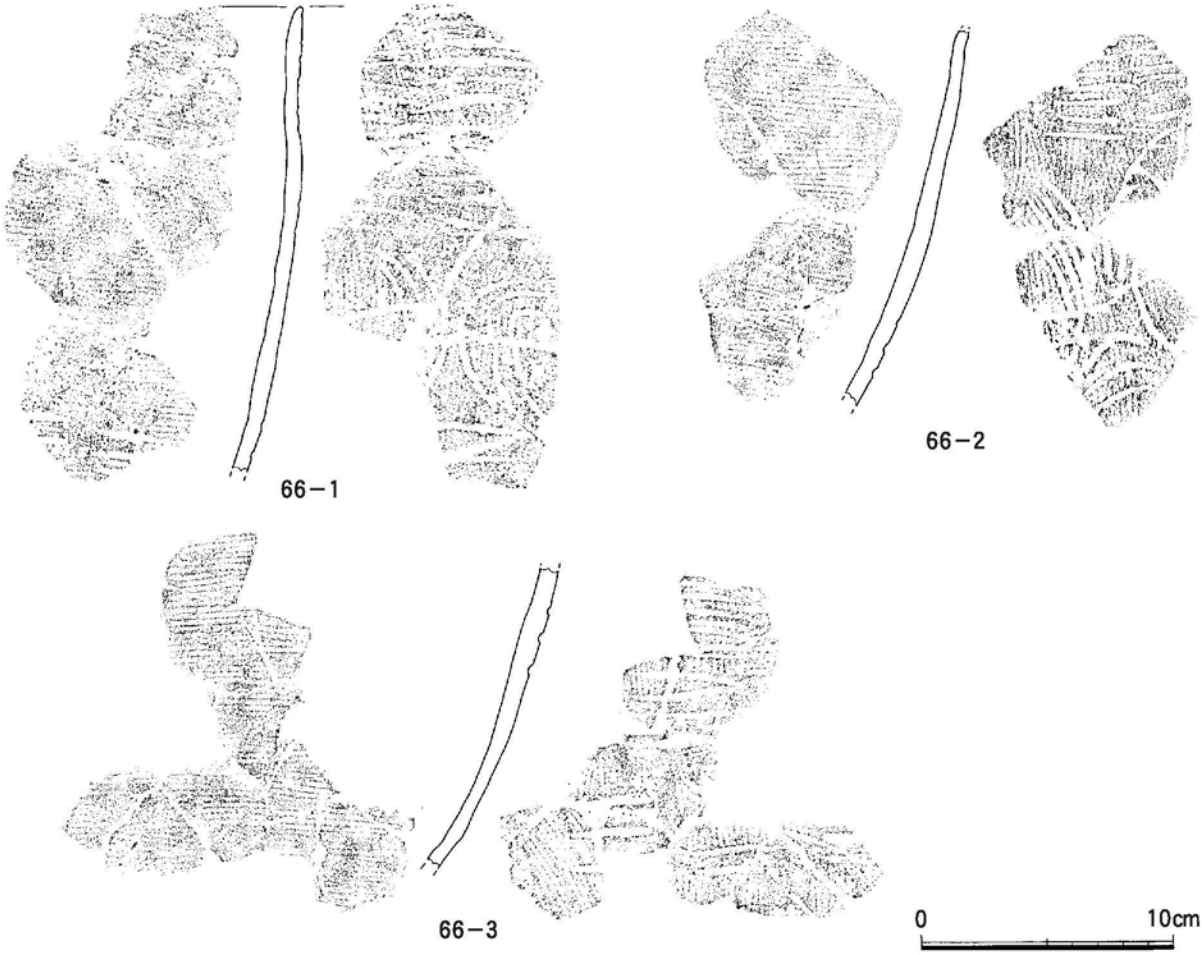


図92　B・C 6区出土縄文土器実測図2（⅓）

を施し、その下に連続刺突、さらに離れて2条の連続刺突を施している。内面はナデのようである。290cmで出土。58はわずかに外反する口縁部で、沈線と刺突で文様が構成されているが、破片が小さいためか規則性が読めない。内面には粘土帯の痕跡が分かる。295cm出土。59は外面に浅い沈線を多く施している。一見文様とはわからないほど浅い。口縁直下に横方向に2条、その下には縦方向に10本前後が施されている。内面は条痕が施されている。60は縄文を施した底部片で、復元底部径5.0cmを測る。300cmで出土。61は3条の突帯を施している。両面とも条痕は確認できない。補修孔があけられている。62は300cmで出土。高い突帯を1条施している。突帯から下は斜めの条痕、突帯から上はナデ調整、内面は横方向の条痕の後になでている。

66は6区から7区にかけてまとまって出土した。レベルは290cm 300cm前後である。破片は多く出土したが、器面の保持が悪く、あまり接合しなかった。口縁部部分と胴部2カ所を図化した。器形はほぼ直立する口縁部からゆるやかに胴部が内湾し、丸底になるのではないかと思われる。66－1を見ると外面には縦方向の条痕を施し、内面には横方向に施している。口縁部外面には横方向の短沈線を7～8段施し、その下は横方向の沈線4条、3重の弧線帯、横方向の沈線2条以上から成っている。66－2も同様の文様構成だが、66－3は弧線体がない。胴下半部の破片かもしれない。

62・64・65は最下層近くから出土した。62は外傾する口縁部片で、外面の文様は3条の横方向の沈線と3重の弧線から成っている。外面は黒色を呈している。地山の礫の間から出土した。64は直線的

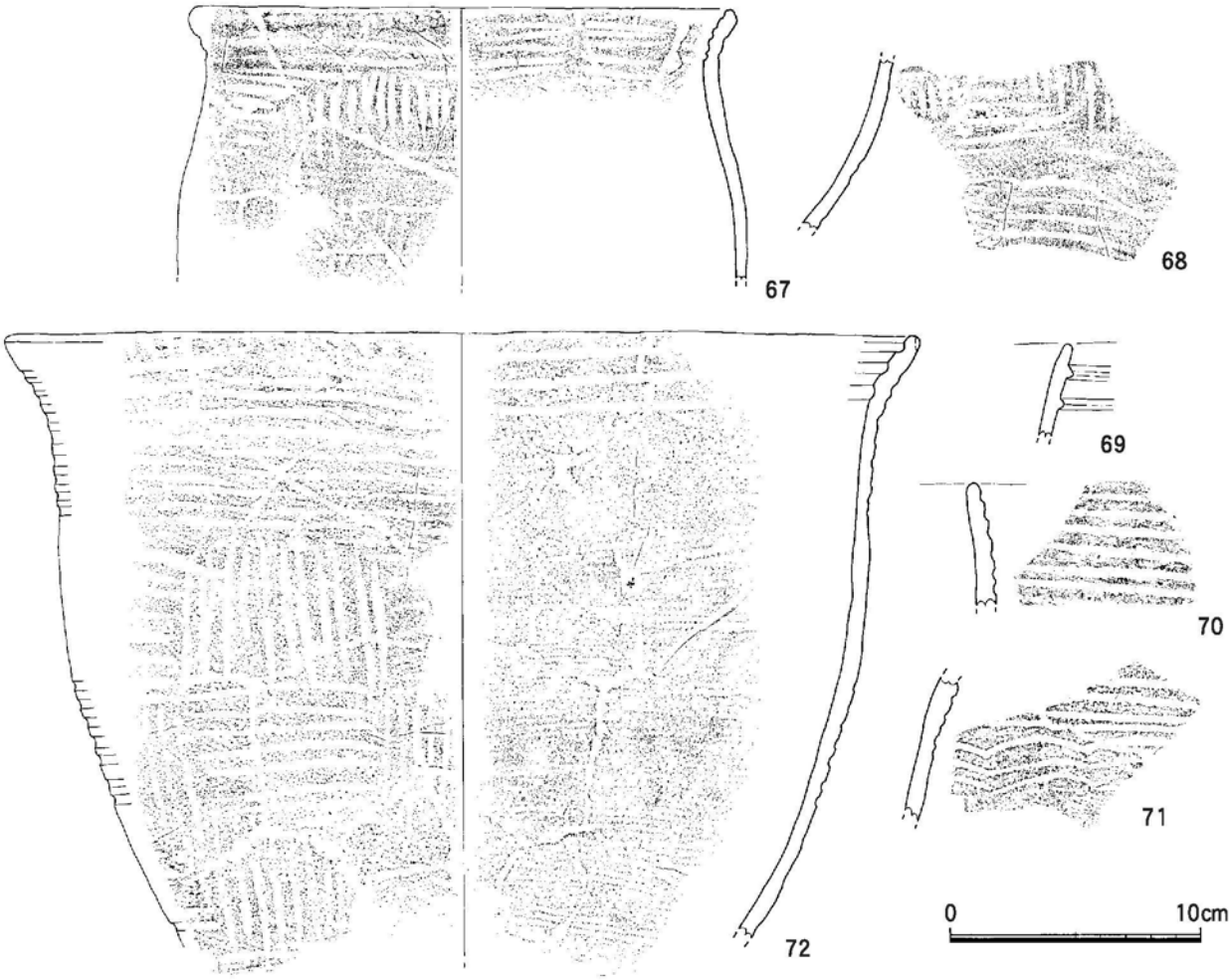


図93　B・C７区出土縄文土器実測図３（⅓）

に外傾する口縁部片で、４条の突帯を持つ。４本目の突帯の下には鋭利な施文具でつけた斜方向の沈線が施されている。条痕は観察できない。335cmで出土した。65は外反する口縁部片で、外面には多くの沈線を、口縁端部に刺突を施している。内面にある３条の沈線は押し引きによって作られたものである。350cmの最下層から出土した。

B・C７区出土土器（図93）

７区から９区にかけては層の区分が不明瞭になり、遺物も激減する。また土が混じった堅い土層のため、器面の保持が悪い。67・68は同一個体と思われ、67はB６区からC７区にかけての305cmで出土し、68は地山の礫の間から出土した。表面の摩滅がひどく、肉眼では文様もやや不鮮明である。外面は橙色、内面は灰色や白色の近い色調である。口縁端には刺突を施し、外面の文様は縦と横の沈線を組み合わせている。内面は５ないし６段の短沈線を連続して施している。調整は両面ともナデである。69は口径の小さい口縁部片で２条の突帯が確認できる。両面とも条痕は認められない。70は滑石を大量に含む。沈線から見ると内傾するが、直立ないしは若干外傾する可能性がある。71は70と同一個体の可能性がある。破片の上端部の器壁が厚くなっている。同一破片だとすると、口縁部は外傾することになる。70は295cmで出土、71は295cmと305cmで出土している。72は地山直上で出土し、同じレベルで丸太に近い長さの短い自然木などが出土した。復元口径36.5cm、推定器高33cm前後を測る。外面口

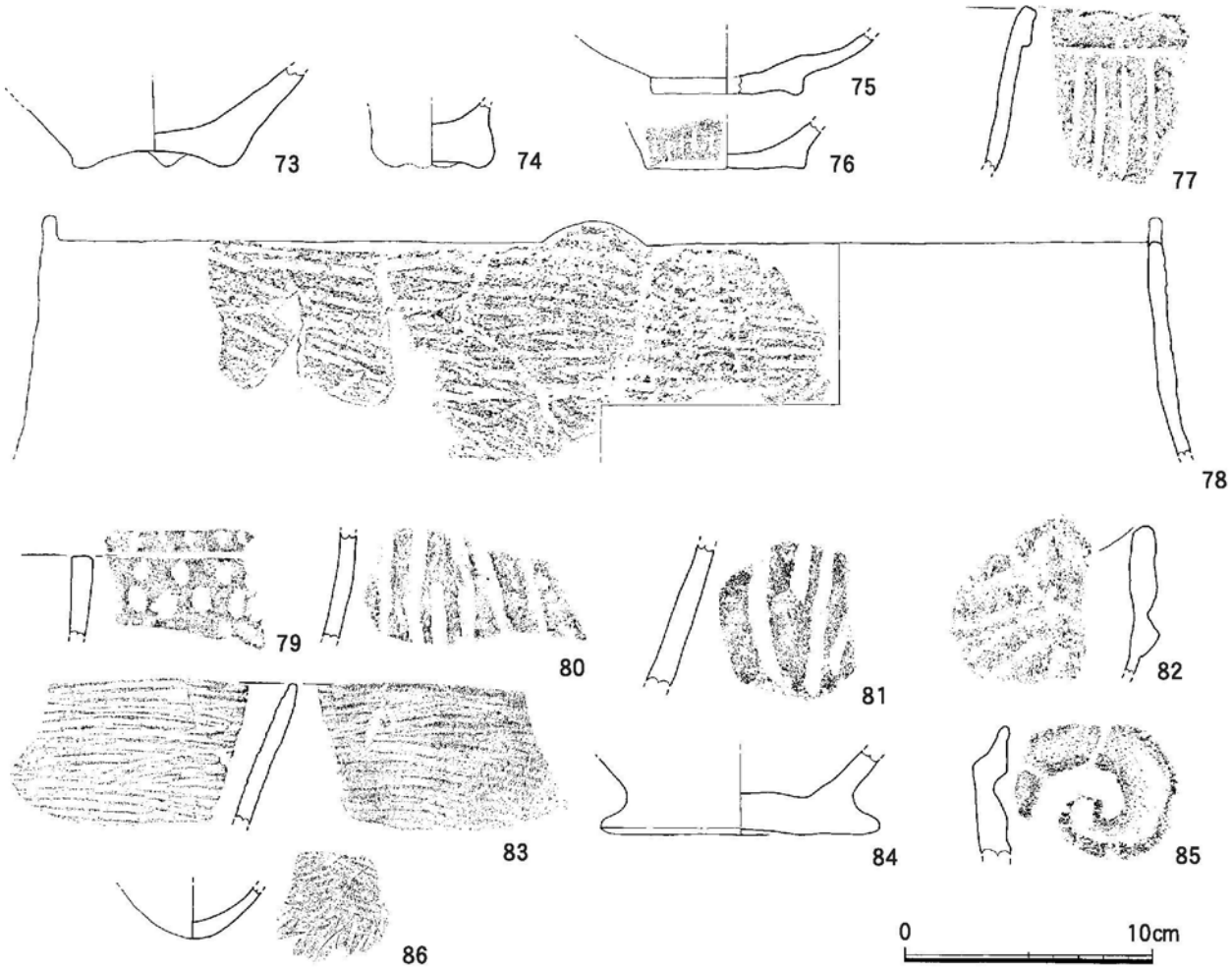


図94　B・C８・９区及びその他の地点出土縄文土器実測図（⅓）

縁端に刺突を施し、口縁部は横方向の沈線を、その下は短沈線を10条前後組み合わせて横方向と縦方向に交互にひいているようである。外面には条痕の痕跡は確認できない。内面は全面に横方向の条痕を施し、口縁部に３条の押し引きによる沈線を施している。外面下部が橙色を呈している他は黒色に近い。

B・C８区出土土器（図94）

地山が上がっていくため、包含層が８・９区と急速に薄くなる。76が238cmで出土し、73～75が255cmで出土した。73・74は５足を有する底部片である。73は復元底径7.5cm前後を測る。３足が残存している。外面は赤色に近い橙色を呈している。摩滅のため調整は不明。74は底部は全存しているが、足が２つ欠けている。径５cm前後の小型の底部である。外面は赤色に近い橙色を呈している。摩滅のため調整は不明。75は外面が黒色を呈する。外面に条痕らしき痕跡がかすかに確認できる。

B・C９区出土土器（図94）

77は口縁端に幅広の突帯を貼り、その下に縦方向の沈線を施している。摩滅のため調整不明。285cmで出土。78は258cm・268cmで出土した大型の破片であるが、摩滅がひどく、肉眼での文様観察は厳しい。小さな山形を有する口縁部で、外面に多くの沈線を施している。口唇部は山形部を除いて沈線状になっている。

その他の地点出土土器（図94）

他時期の遺構出土や明確な出土地点がわからないものを集めた。79はＳＸ01出土。滑石を混入する。外面に鋭利な施文具による刺突を深く施している。80・81はトレンチ出土。ともに滑石が入っている。82もトレンチ出土。摩滅がひどいが、波状口縁部分と思われる。突帯で文様を作っているが、小片のためよくわからない。83はＢ４区のベルト内から出土。両面条痕を施している。84はＳＸ01出土。滑石を混入している。外底部は凹凸が激しい。85は北区弥生時代包含層下層出土。太い凹線で渦巻きを表現している。口縁部として図化しているが、よくわからない。86は注記が不明。220のレベルから出土している。８区か。外面に条痕を施している。

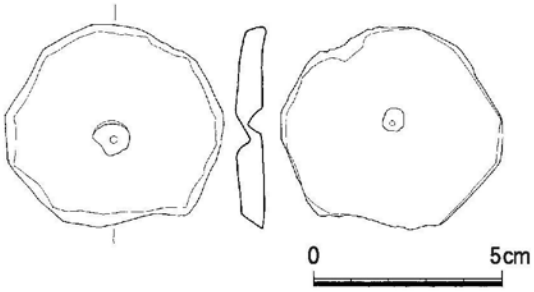


図95　縄文時代土製品実測図（½）

②　土製品（図95）

Ｃ－６区221㎝で出土した。風成砂上面と同レベルで、56・57の土器と同じ面である。全体が湾曲しており、土器片の周囲を打ち欠いたものである。両面の中央付近に窪みがあるが、位置は一致しておらず、貫通していない。穿孔を施そうとしてやめたのか、現状が当初からの目的であったのか不明である。調整は両面ナデである。

③　石器・石器未製品

各縄文時代包含層から出土した石器・石器未製品は石斧及び同未製品・不明未製品・砥石・石皿・磨石・敲石・石錘・石鏃・石匙・スクレイパー・石核・使用痕ある剥片・加工痕ある剥片である。基本的に全点実測を目指したが、磨石・敲石・石皿については石器の認定が極めて難しく、また使用痕・加工痕がある剥片は一部しか実測できなかった。

石斧・石斧未製品（図96～98）

縄文時代の各層から玄武岩製石斧未製品が、弥生時代の可能性がある数点も含めて20点出土した。製品は安山岩系製が１点出土した。縄文時代の剥片・チップの出土状況は、剥片・チップがユニット状に集中した弥生時代中期、あるいは礫の間に多くの剥片・チップが出土した弥生時代前期などど異なり、剥片・チップは数が少なく、かつ散漫とした状況で出土した。出土した剥片・チップの点数は485点である。出土未製品の数に比べると圧倒的に少ない。これらの状況と層の状況から、縄文時代の未製品や剥片・チップはここで捨てたのではなく、すぐ近くに捨てたものがたまったものと理解できる。出土石斧未製品は概ね風成砂上面及び同レベルのものと包含層最下層近くで出土したものがほとんどで、その途中から出土したものがほとんどない。一方剥片・チップは途中のレベルでも比較的出土しており、本来各時期とも石斧を製作していたものと思われる。

１～７・９～14は上層出土で、15～21は下層出土の玄武岩製石斧未製品である。22はＣ層中位出土の製品である８は出土層位不明。１はＢ７区220㎝で出土した。大型の未製品でほぼ全形ができあがっている。形態・太さから太形蛤刃石斧と認定でき、出土層位が縄文時代包含層最上面であることから弥生時代の未製品が沈んだ可能性が高いのではないかと考えられる。２はＣ８区233㎝で出土した。やや平たい素材の周縁を調整している。両面ともほとんどが自然面である。全体風化して黄色味を帯びている。３は折損品で天地不明だが、部分的に刃先状に鋭利になっているため刃部とした。Ａ面の左側面は自然面で平坦である。Ｂ面は玄武岩らしい灰色であるが、Ａ面が風化のため黄色味を帯びている。４も折損品で天地不明。先が鋭利でないため頭部の可能性もある。Ｂ面が風化のため黄色味を帯

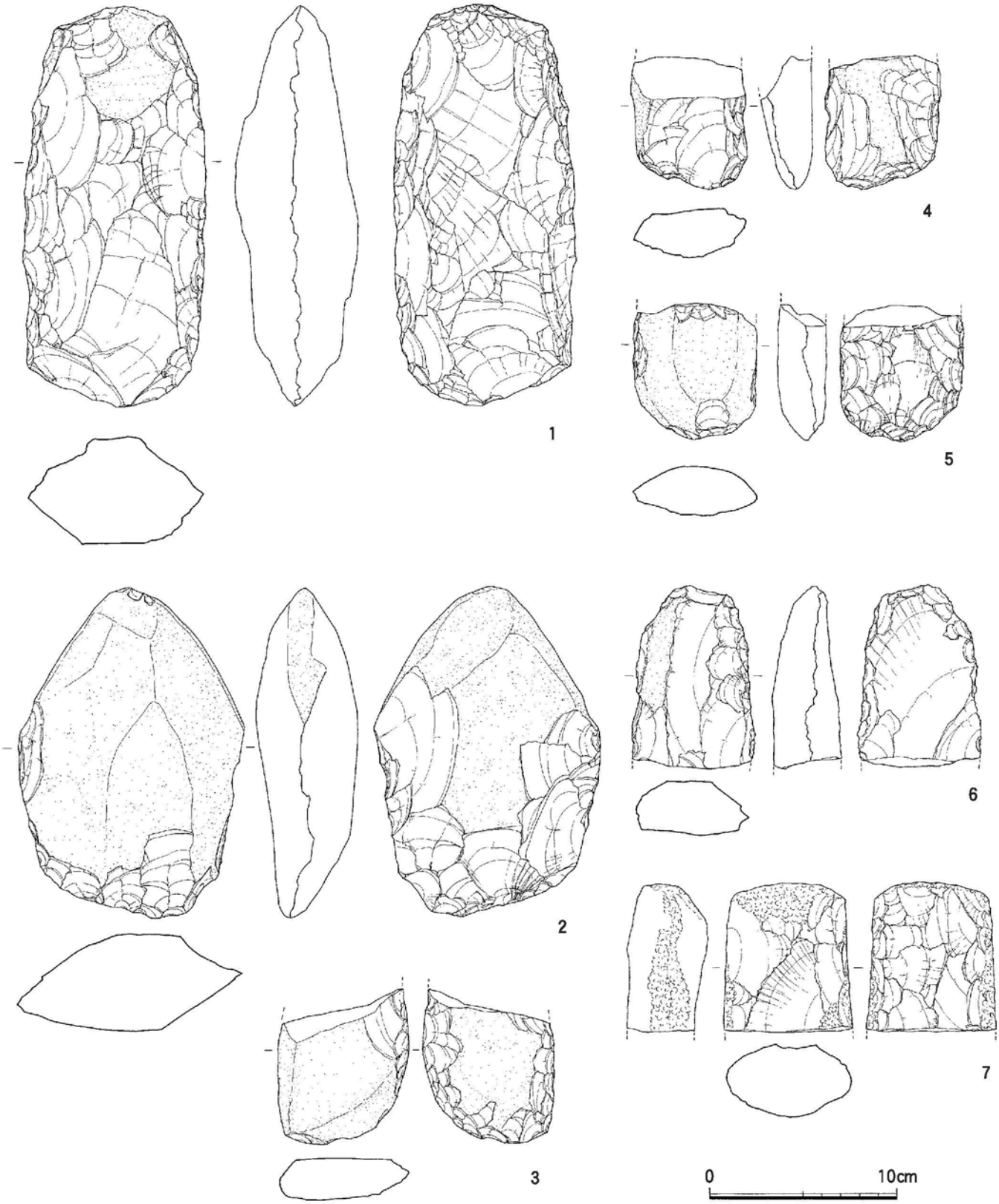


図96　縄文時代石斧未製品実測図１（⅓）

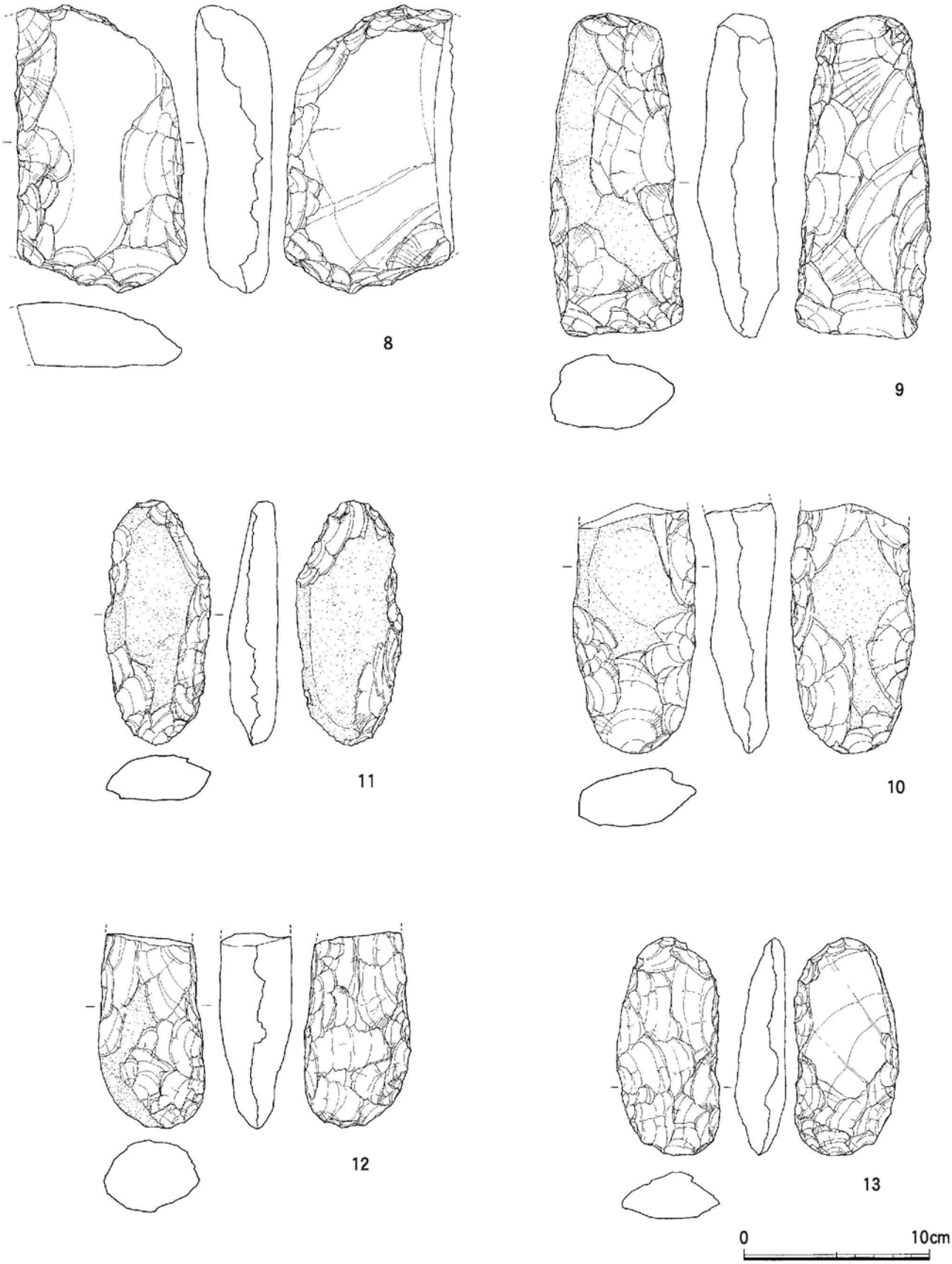


図97　縄文時代石斧未製品実測図２（⅓）

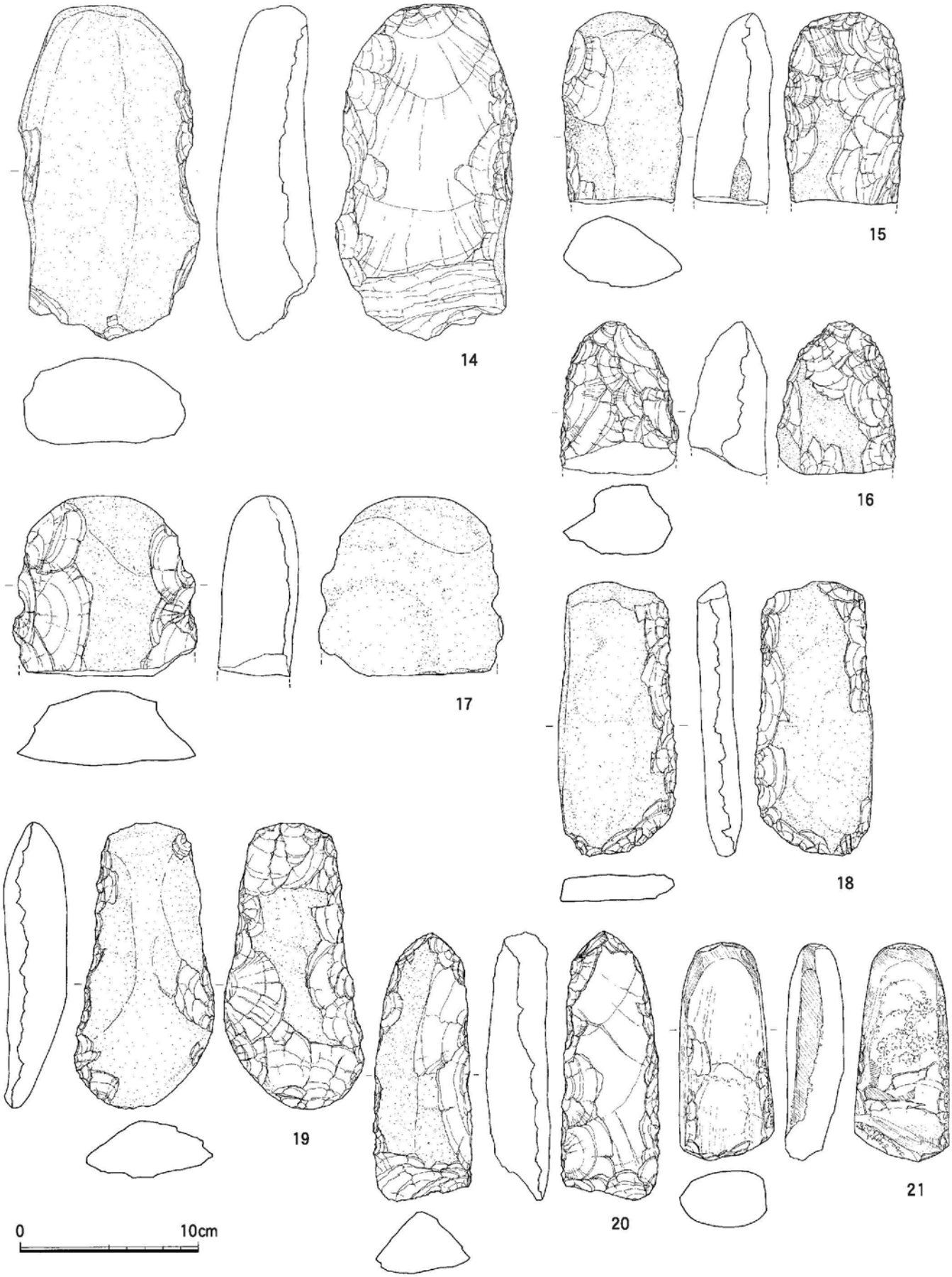


図98　縄文時代石斧未製品実測図３（⅓）

びている。5はA面のほとんどが自然面である。この面の中央に敲かれたような痕跡があるが、自然によるものであろう。B面は逆にほぼ全面剥離が入っている。6は56の土器などとともに包含層上面でまとまって出土した。剥片素材を利用している。A面の一部に自然面を残していることから、大きな原石の表面を割り取った剥片を素材にしているものと思われる。第Ⅱ工程後半まで進んでいる。7も6と同様な出土位置である。頭部・側面に敲打が施されている。6・7ともに表面の風化が進んでなく、縄文土器と同じレベルでまとまって出土したが、あるいは弥生時代の未製品である可能性を否定しきれない。8はB5区227cmで出土した。天地不明。長さ20cmほどの角礫を素材にしており、A面左側面は平坦な自然面のままである。両面のほとんども自然面で、頭部・刃部・片側側面に調整を加えている。全体がやや黄白色味を帯びた灰色を呈している。9は縄文時代包含層最上面で出土した。全形ができあがっており、遺棄理由がわからない。出土位置から弥生時代の可能性もあるが、片面の風化状態が異なり、他の縄文時代未製品と同様の傾向を示している。どちらにしろ太形蛤刃にはならない。10はC9区231cmで出土した。天地不明だが平面形から判断した。風化が激しいため、剥離がぬるーとしている。片面がかなり黄色味を帯びている。11はB2区230cmから出土した。小型の石斧未製品である。小さな長い円礫を素材とし、縁辺調整を行っている。自然面はやや赤味を帯びている。12はC－9区232cm出土。断面が丸くて長い礫を素材とし、縁辺調整を行っている。全体白味を帯びている。

13～21は下層出土である。13はC－8区下層出土。扁平な短めの素材を使っている。厚さ2.5cmと薄い。短めの磨製石斧または打製石斧か。色調は白味を帯びている。14は大きめの石を長軸方向に半裁したものを素材にしている。他の未製品に比べてかなり大きいため石斧未製品でない可能性もある。A面はほとんど自然面で、B面は主要剥離面のままで、周縁調整を僅かに行っているだけである。剥離面はやや白色を帯びている。調査区南端（B・C2区）323cm出土。15・16は14と同レベルで出土した。ともに折損品で天地不明。15はやや白色を帯び、16は灰色を呈している。17はB－5区下層出

表7　縄文時代石斧未製品・製品計測表

図	No.	出土区	レベル(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	遺存部	備　　考
96	1	B－7	220	21.3	9.7	5.7	完存	太形蛤刃？弥生時代の可能性高い
96	2	C－8	233	17.5	12.0	5.1	完存	
96	3	B－9	238	8.2	6.8	2.2	刃部	
96	4	B－7	233	7.0	5.1	2.7	刃部	
96	5	B－4・5	225	7.3	6.5	2.6	中央～頭部	
96	6	J　　02	最上層	9.8	6.6	3.8	中央～頭部	
96	7	南区J　01	最上層	8.0	6.9	4.3	中央～頭部	頭部・側縁部敲打、弥生時代の可能性高い
97	8	B－5	227	15.4	9.1	3.5	完存	
97	9	B－5・6	205	17.4	7.1	4.0	完存	短冊形
97	10	C－9	231	13.4	6.6	3.1	中央～刃部	
97	11	B－2	230	13.2	3.6	2.5	頭部一部欠	
97	12	C－9	232	10.4	5.5	3.8	中央～刃部	
97	13	C－8	下層	11.6	5.5	2.5	完存	剥片素材
98	14	B・C－2	323	18.8	10.2	5.6	完存？	片面全面自然面、剥片素材
98	15	B・C－2	323	10.7	6.8	3.9	中央～頭部	
98	16	B・C－2	323	8.5	6.7	3.9	中央～頭部	
98	17	B－5	下層	10.0	10.3	4.5	頭部	幅大きい
98	18	B－2	320	15.3	6.5	1.5	頭部一部欠	打製石斧未製品
98	19	不明	最下層	16.0	7.9	3.1	完存？	剥片素材
98	20	B・C－2	323	17.0	5.5	3.4	完存？	ほぼ短冊形
98	21	B－7	285	12.2	5.3	3.2	刃部	安山岩系。使用済み製品。

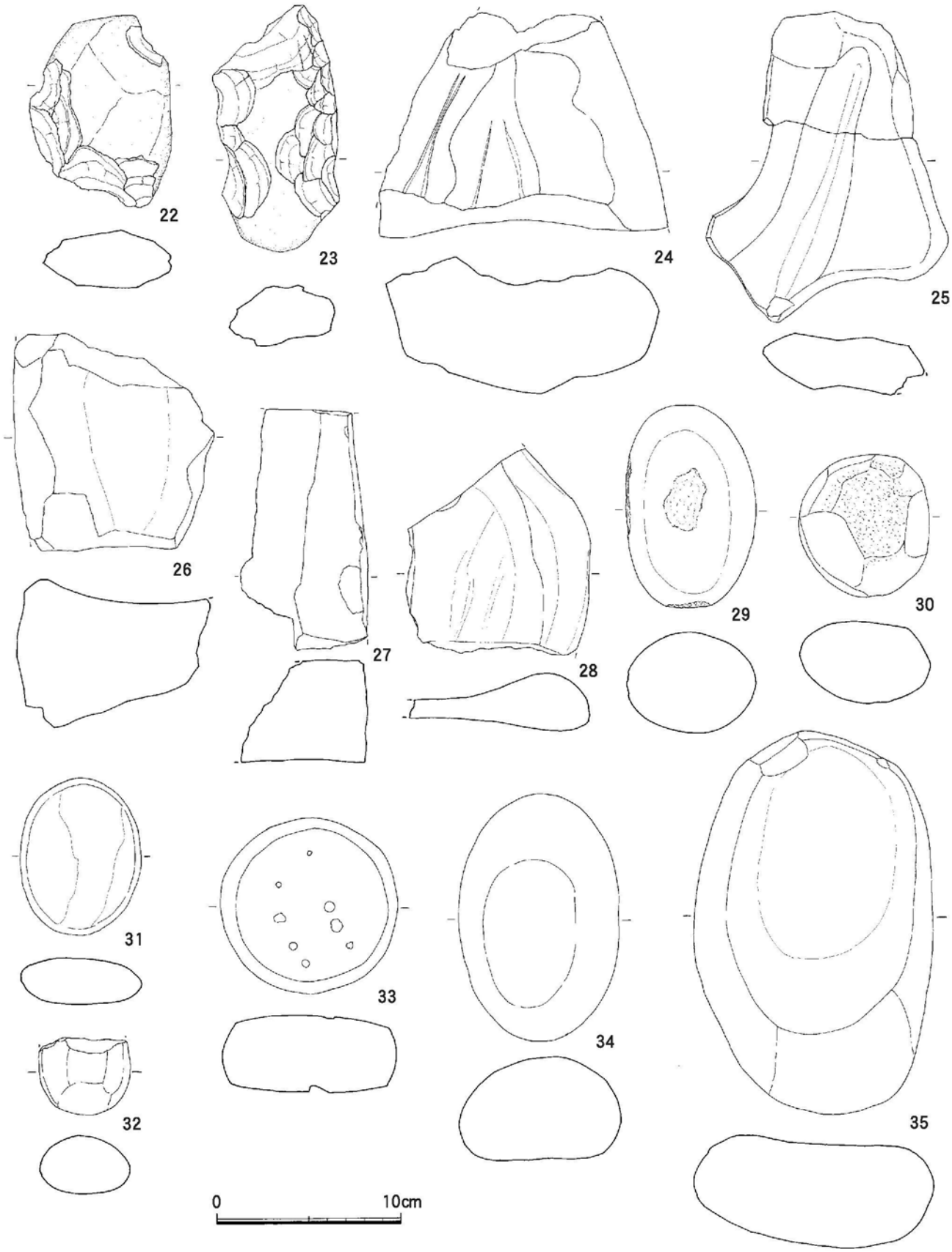


図99　縄文時代礫石器実測図（⅓）

土。大型の素材を使用しているが、折損品のため詳細不明。18は厚さ２㎝の薄い板状の素材を利用している。片側側縁は両面から調整を行い、反対側縁は上部片面から調整を加えている。打製石斧の未製品であろう。色調はやや黒味を帯びている。Ｂ２区320㎝で出土した。19は片側自然面の剥片を素材としている。Ａ面は自然面で凸面を成し、Ｂ面はやや凹面を成している。Ｂ面は大きめの調整を施して形状を作ろうとし、Ａ面に細かな調整を施しており、凸の形をそのまま石斧に生かそうとしている。20は断面三角形の素材を使用している。三角形の頂点をとれれば石斧の形状を成し、失敗部分がわからない。刃部の取りすぎか。やや白味を帯びる。21は安山岩系の製品である。片側側縁は研磨で平坦面を作り出している。反対側縁も研磨で一部平坦面を作っている。やや見にくいが折損後に折損部を敲石に使っているようである。

礫石器・同未製品（図99）

礫を加工して使った石器及びその未製品をまとめて報告する。22は玄武岩製で大きく３カ所から剥離を加え、その内２カ所は抉りを成している。23は玄武岩製で左右２カ所に抉りを作り出し、下部を剥離で取ろうとしている。ともに石錘未製品の可能性があるが明確ではない。24～26は砂岩製砥石である。すべてＢ－７区265㎝で出土した。24は線状痕が数本あり、裏面も同様である。側面・裏面も使用している。25は中央が線状に窪んでいる。26は全体が滑らかな面を成し、裏面も使用している。27は玄武岩製の砥石である。調査区南端（Ｂ・Ｃ２区）323㎝で出土した。表裏２面を使用している。28はＢ－２区320㎝で出土した。砂岩製で、一見石皿のようである。ただし皿の底部分が極めて薄く、砥石と考えた方が良いかもしれない。二次焼成を受けたためか全体黒色になり、新しい割れ口に本来の砂岩の色が覗いている。29は砂岩質の石材で敲打痕がある。図の下端と左側縁に顕著で、両面の中央にもわずかに確認できる。30は玄武岩製である。片面のほぼ全面に敲打状の凹凸があり、側縁の一部が剥離している。ただし一見敲打痕に見える全面の細かな凹凸は、前述したようにあきらかに自然の礫にもついており、判断が難しい。１カ所に剥離があることと、敲打状の凹凸が全面ではないことから敲打具と考えた。31は玄武岩製。全面つるつるで、研磨による条線があること、場所によって研磨の状況が異なることから磨石と判断した。32は砂岩製。先端部に敲きによる凹凸が確認できる。33は玄武岩製のいわゆる石鹸状の磨石である。両面と側面は稜を成し、全面磨かれている。両面に小さな穴が数カ所あるが、自然によるものか。Ｂ－９区225㎝で出土した。34は花崗岩製の磨石。35は玄武岩製で、片面が磨かれて凹面を成していることから小型の石皿と思われる。石皿の可能性のある大

表８　縄文時代石器計測表１

図	No.	種類	石材	出土区	レベル(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　　考
98	22	石錘未製品？	玄武岩	B・C－６	245	10.4	7.6	3.1	316	
98	23	石錘未製品？	玄武岩	B－５	215	13.3	6.8	3.2	464	条線あり
98	24	砥石	砂岩	B－７	265	12.1	15.6	7.4	－	条線あり
98	25	砥石	砂岩	B－７	265	16.7	12.9	3.2	－	
98	26	砥石	砂岩	B－７	265	11.8	10.8	8.0	－	
98	27	砥石	玄武岩	B・C－２	323	13.0	6.8	5.5	－	
98	28	砥石？石皿？	砂岩	B－２	320	11.0	9.9	3.1	－	
98	29	敲石	砂岩質	B－８	227	11.0	6.9	5.5	646	
98	30	敲石	玄武岩	B－３	205	7.8	7.0	4.4	408	敲打具？
98	31	磨石	玄武岩	縄文層	－	8.5	6.5	2.5	202	
98	32	敲石	砂岩質	B－７	285	4.2	4.9	3.2	87	欠損
98	33	磨石	玄武岩	B－９	225	9.5	9.5	4.2	651	石鹸状磨石
98	34	磨石	花崗岩	B－７	325	13.3	8.6	5.6	923	
98	35	石皿？	玄武岩	B－３	205	20.7	12.9	6.0	－	小型石皿？

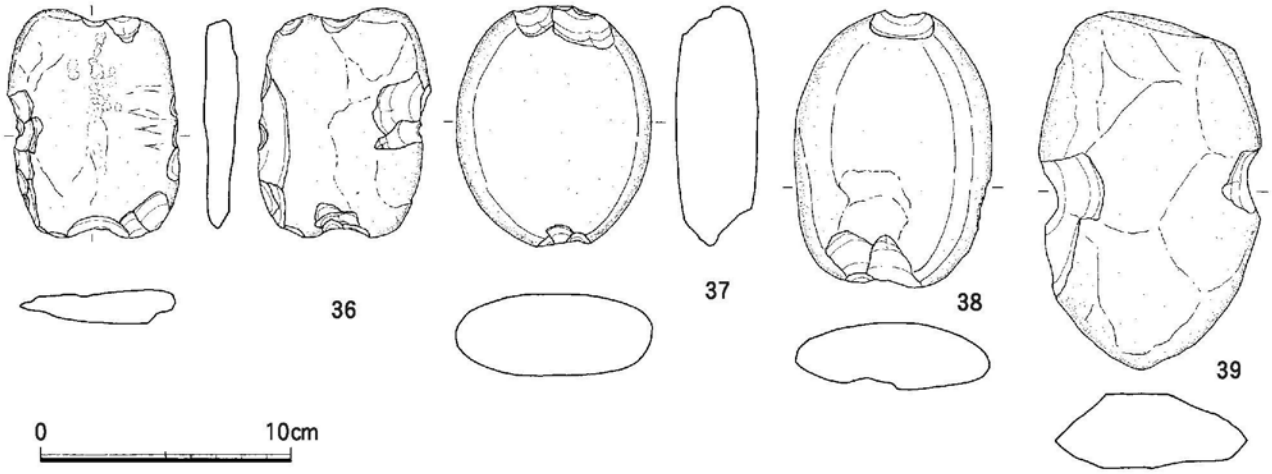


図100　縄文時代石錘実測図（⅓）

型玄武岩が３点あるが、図化に至らなかった。

石錘（図100）

４点出土した。36は堆積岩を使用している。４側縁に抉りを施している。図の右側縁は一側縁で３カ所の抉りがあり、それぞれに紐ずれの跡がついている。Ｃ－９区213㎝で出土した。37は花崗岩製。全面磨かれているが、自然に磨かれたものと思われる。明確な抉りを成していないが、両端部に剥離を加えている。未製品の可能性もある。ただし、両端をハンマーとして使った可能性も捨てきれない。38は玄武岩製。鉄分により全体が赤みを帯び、何か鉱物が飛んだように小さな穴が無数にある。両端部に抉りを施している。Ｂ－７区265㎝で出土。39も玄武岩製。両側縁に抉りを設ける。灰白色を呈する。Ｃ－７区305㎝で出土した。

石鏃（図101）

14点出土し、全点図化した。40は漆黒黒曜石製。Ｂ－４区219㎝出土。丁寧な押圧剥離を施している。

表９　縄文時代石器計測表２

図	No.	種類	石材	出土区	レベル(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
99	36	石錘	堆積岩	Ｃ９	213	9.1	6.9	1.5	134.4	
99	37	石錘	花崗岩	Ｂ４	235	9.5	7.7	3.2	371.1	
99	38	石錘	玄武岩	Ｂ７	265	10.9	7.8	2.7	291.7	
99	39	石錘	玄武岩	Ｃ７	305	14.2	8.7	3.0	464.1	
100	40	石鏃	漆黒黒曜石	Ｂ４	219	2.43	1.52	0.4	0.75	
100	41	石鏃	漆黒黒曜石	Ｂ５	255	1.4	1.05	0.2	0.18	
100	42	石鏃	漆黒黒曜石	Ｂ５	265	2.02	1.79	0.28	0.67	鋸歯鏃
100	43	石鏃	漆黒黒曜石	Ｂ６・７	270	1.62	1.38	0.37	1.0	
100	44	石鏃	漆黒黒曜石	Ｂ・Ｃ６	270	2.01	1.02	0.41	0.6	
100	45	石鏃	灰色黒曜石	Ｂ６・７	275	1.77	1.6	0.45	0.6	
100	46	石鏃	漆黒黒曜石	Ｃ７	245	3.0	2.92	0.48	2.9	大型鏃
100	47	石鏃	漆黒黒曜石	Ｂ７	245	2.75	1.45	0.51	1.3	
100	48	石鏃	漆黒黒曜石	Ｂ７	245	1.54	0.7	0.28	0.3	
100	49	石鏃	灰色黒曜石	Ｂ７	255	1.42	1.14	0.18	0.3	剥片鏃
100	50	石鏃	漆黒黒曜石	Ｃ７	295	1.19	1.08	0.26	0.2	
100	51	石鏃	漆黒黒曜石	Ｂ９	202	1.34	1.53	0.2	0.3	
100	52	石鏃	漆黒黒曜石	Ｂ・Ｃ８	255	2.0	1.2	0.33	0.7	未製品？
100	53	石鏃	漆黒黒曜石	Ｃ９	247	2.03	1.44	0.32	0.6	

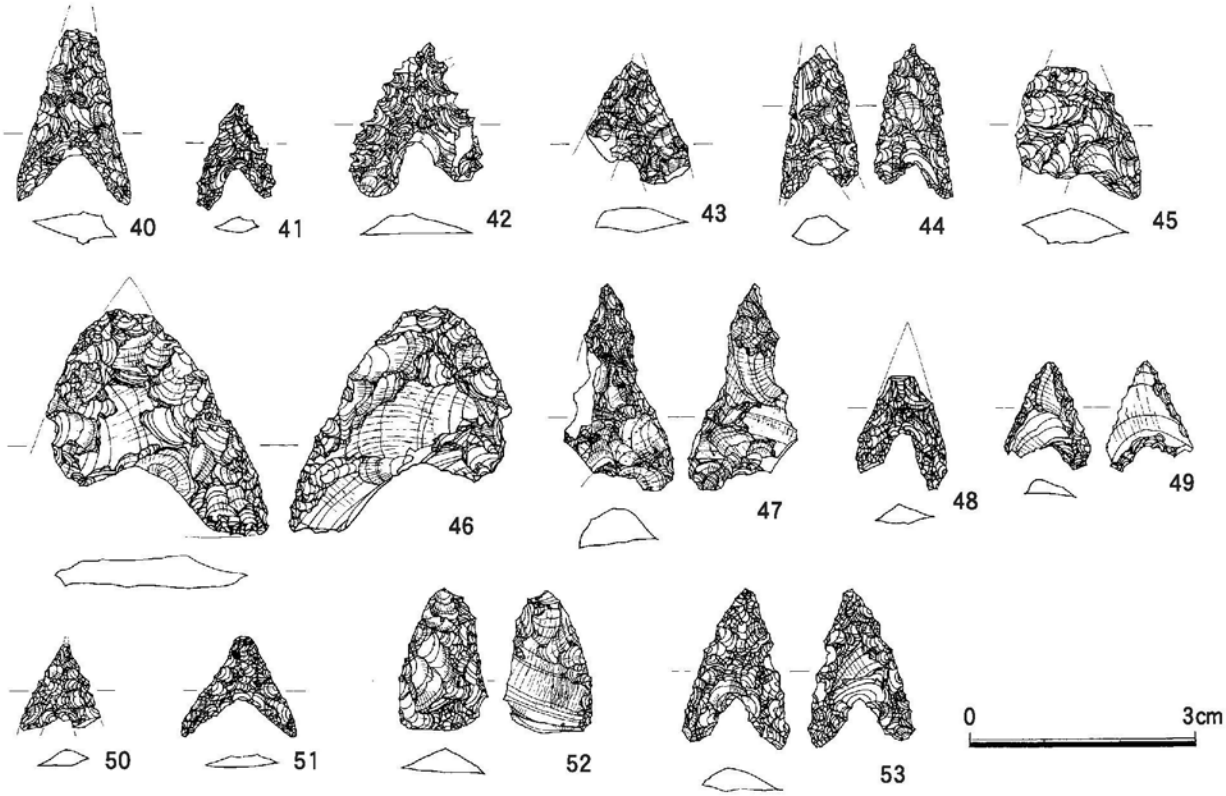


図101　縄文時代石鏃実測図（1/1）

41は小型の石鏃。B－5区255cm出土で、漆黒黒曜石製。42は主軸が歪み、鋸歯鏃の形態を成す。銛先か。B－5区265cm出土。漆黒黒曜石製。43はB－6・7区270cmで出土。漆黒黒曜石製。44はB・C－6区270cmで出土の漆黒黒曜石製。45はB－6区275cmで出土。やや灰色を帯びた黒曜石製。46は大型の石鏃でC－7区245cmで出土した。漆黒黒曜石製。主要剥離面を残している。銛先か。47は細身の石鏃でB－7区245cmで出土した。漆黒黒曜石製。48はB－7区245cm出土の漆黒黒曜石製。49は小型の剥片鏃で、B－7区255cmで出土。やや灰色味を帯びた黒曜石製。50は小型の石鏃でC－7区295cmで出土。漆黒黒曜石製。52は片面がやや凹凸がある主要剥離面のままで、脚や先端部の調整もなく未製品ではないかと考えられる。B・C8区255cmで出土した漆黒黒曜石製。53はC－9区247cmで出土した。漆黒黒曜石製で、一部が透明で反対側まで透ける。

その他の石器・石核（図102・103）

54は安山岩製のスクレイパーであろうか。薄手の剥片を素材とし、三角形の平面形を成し、A面下側縁と左側縁に調整を施している。右測縁は無調整だが、使用痕が認められる。あるいは二辺の調整はブランティングのようなもので、刃器として使用したものかもしれない。B－9区258cmで出土した。55は安山岩製のスクレイパーである。黒色に近い色を呈している。折損品である。両面下部に細かな調整を加えている。B面は自然面である。B・C－6区320cmで出土した。56は安山岩製のスクレイパーであるが、折損品で片側に抉りがあることから石匙の可能性が高い。主要剥離面側は抉り部分と一部を除くと調整を施していない。基部の頂部は自然面である。C－5区下層で出土した。57は漆黒黒曜石製の小型サイドスクレイパーである。縦長剥片の側縁に調整を加えている。B－7区275cmで出土した。58は玄武岩製の石匙で、B－6区236cmで出土した。やや白味を帯びた色調である。大きな欠損部や失敗部もなく、製品になっているものと思われる。59は漆黒黒曜石製のスクレイパーであ

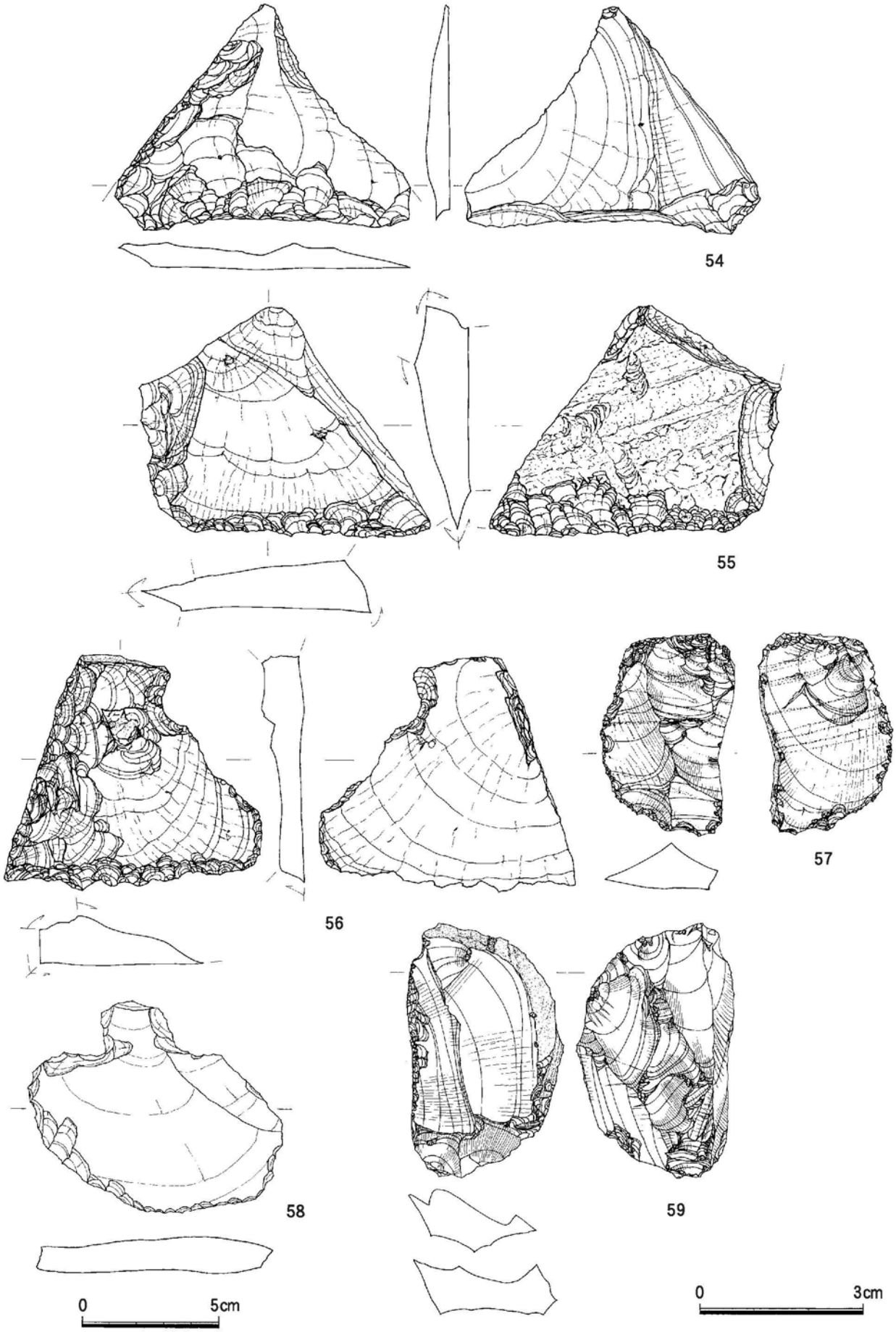


図102　縄文時代剥片石器実測図１（1/1、1/2）

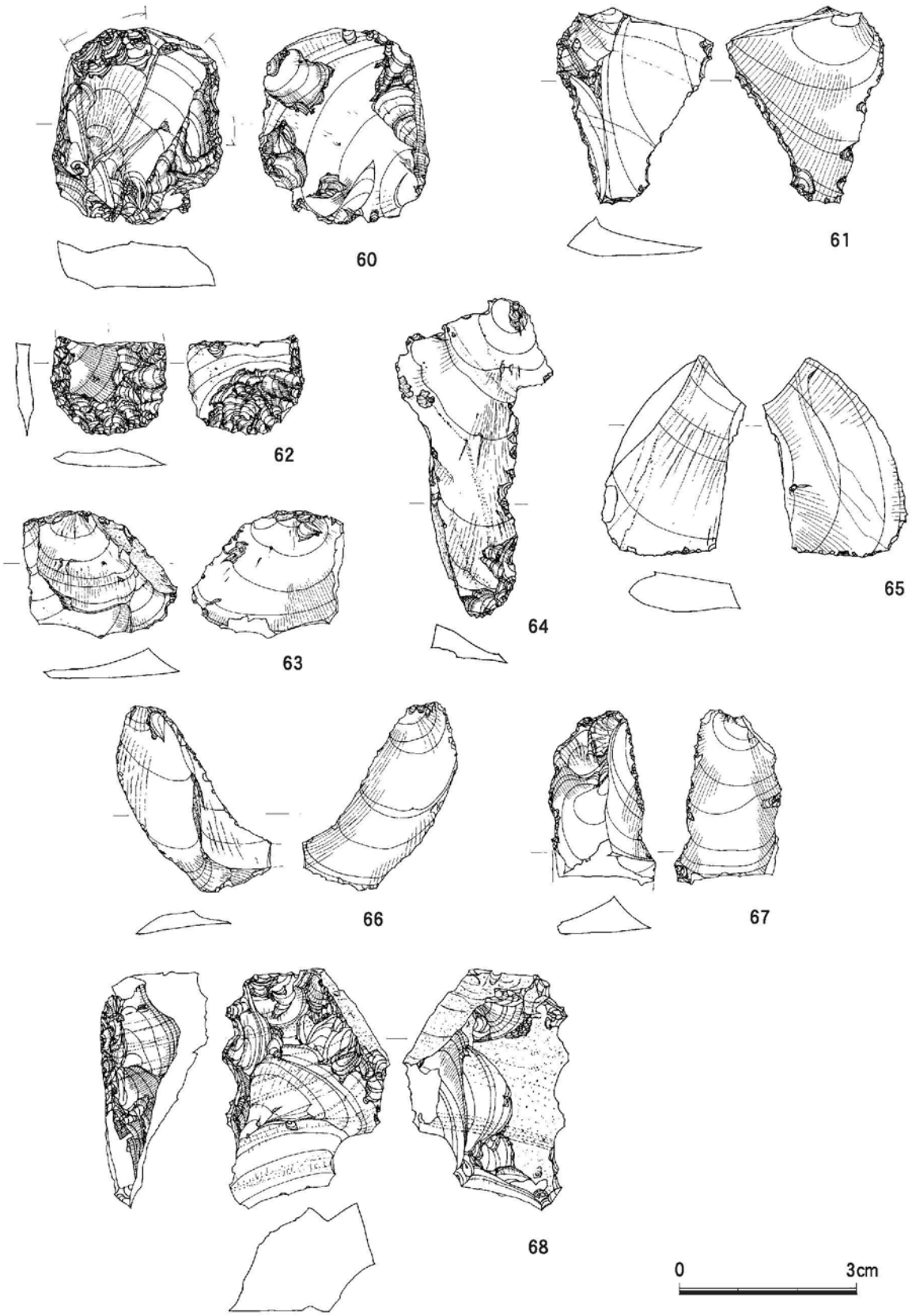


図103　縄文時代剥片石器実測図２（1/1）

る。小さな剥片を剥出し終わった後の残核を利用している。原石は小型の円礫と思われる。剥出した剥片は横長・縦長の両方あり、石鏃などに利用したものであろう。残核の一辺に細かな調整を施し、スクレイパーとして再利用している。C－7区275cmで出土した。60は出土層位不明の漆黒黒曜石。図の上部と右側縁に片側から調整を行っている。小型のスクレイパーか。

61～67は加工痕や使用痕が認められる石器である。61はB－7区265cmで出土した漆黒黒曜石製。縦長剥片の片側側縁に調整を施し、反対側には使用痕がついている。刃器として使ったものか。62はB－7区245cmで出土した漆黒黒曜石製。幅2cm弱の薄い剥片の両側に丁寧な押圧剥離を加えている。何に使ったものかわからない。63はB－7区275cmで出土した漆黒黒曜石製。縦長剥片の片側縁に細かな調整が施されている。下部は折損しており、刃器として用いられたものかもしれない。64はB－5区235cmで出土した漆黒黒曜石製。縦長剥片の片側側縁に使用痕と思われる細かい不規則な剥離が認められる。65はB・C－2区323cmで出土した。剥片を無調整のまま、端部を刃として使用している。漆黒黒曜石製。66はC－4区265cmで出土した。透明に透ける黒曜石を素材にしている。縦長剥片の両側縁に使用痕が残されている。67はB・C－2区323cmで出土した。剥片を無調整のまま、両側縁に使用痕が残されている。漆黒黒曜石製。

68は石核である。68はB－7区245cmで出土した。漆黒黒曜石製。打面調整と思われる部分が若干認められるが、かなり不定形に剥片を取っているようである。

剥片・チップ

玄武岩の剥片については、弥生時代の剥片の項で報告した。発掘現場では玄武岩とすぐに分かるものについては分けて取り上げたが、土がついた状態で不明なものについては、黒曜石や安山岩・サヌカイトなどに混じって取り上げた。整理後の仕分けでは3cm前後より小さな玄武岩剥片・チップが多数確認でき、グラフに取り上げたものより小さなものが多く存在する。一方量的には示し得ないが、黒曜石や安山岩・サヌカイトの剥片・チップも数多く出土した。玄武岩製品だけではなく、各種の石材を持ち込んで石器製作を行っていたことが明らかである。概ね各石材とも浅いコンテナで半分近い量が出土している。

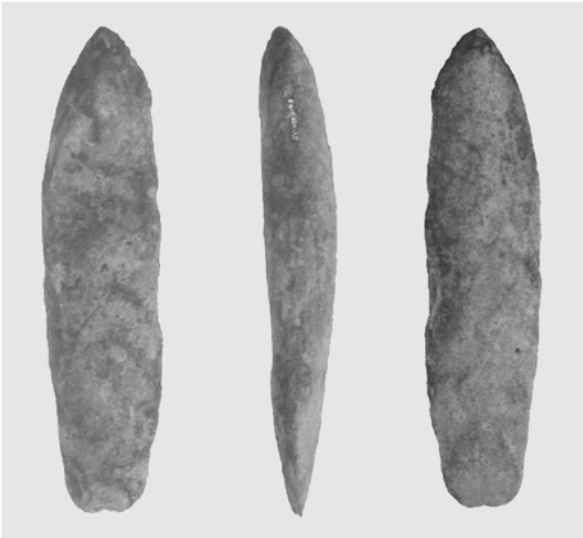
滑石の原石も上層・下層から出土した。さほど質は良くなく、今山と今津湾を挟んで北側にある毘沙門山に滑石があると聞くが、あるいはそこの滑石かもしれない。当調査区では曽畑系・阿高系の多

表10　縄文時代剥片石器・石核計測表

図	No.	種類	区	レベル(cm)	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
101	54	スクレイパー	B 9	258	安山岩	4.1	5.4	0.5	9.1	石匙に分類か
101	55	スクレイパー	BC 6	320	安山岩	4.2	5.3	1.1	21.4	
101	56	スクレイパー	C 5	下層	安山岩	4.3	4.7	0.9	14.6	石匙に分類か
101	57	スクレイパー	B 7	275	漆黒黒曜石	3.7	2.5	0.9	7.6	
101	58	石匙	B 6	235	玄武岩	9.3	7.5	0.7	108.2	
101	59	スクレイパー	C 7	275	漆黒黒曜石	4.7	2.9	0.9	13.6	
102	60	スクレイパー	縄文層	－	漆黒黒曜石	3.3	3.3	0.7	8.4	
102	61	スクレイパー？	B 7	265	漆黒黒曜石	3.3	2.6	0.7	3.3	刃器か
102	62	スクレイパー？	B 7	245	漆黒黒曜石	1.7	2.0	0.3	1.1	
102	63	使用痕ある剥片	B 7	275	漆黒黒曜石	2.1	2.6	0.5	2.1	
102	64	使用痕ある剥片	B 5	235	漆黒黒曜石	5.4	2.7	0.5	5.8	
102	65	使用痕ある剥片	B・C 2	323	漆黒黒曜石	3.4	2.4	0.7	4.7	
102	66	使用痕ある剥片	C 4	265	透明黒曜石	3.2	2.6	0.3	2.1	
102	67	使用痕ある剥片	B・C 2	323	漆黒黒曜石	3.0	1.7	0.6	2.2	
102	68	石核	B 7	－245	漆黒黒曜石	4.0	2.8	1.7	15.4	

くの滑石入り土器が出土しているが、あるいは土器製作も行っていた可能性もある。

石器・偽石器？

縄文時代Ｂ・Ｃ－５区の最下層礫が多くある間から２点の石斧状のものが出土した。両者とも表面が全面敲打状を呈し、石器ではないかとも考えられるので報告したが、図化すると実測者の石が反映されるので、あえて図化しなかった。写真で報告する。Ａは上半部の断面形が略三角形下端が薄い蒲鉾形を呈する。三角形の山側の面は最下部（刃に当たる部分）以外に敲打状の細かい凹凸が認められるが、全面に鉄分が付着しているため見づらい。刃先にあたる部分は石斧の刃のように縦断面は尖っている。刃先は一部欠損している。肉眼では研磨の痕跡や使用痕は認められない。Ｂは断面形は楕円に近い。Ａと同様敲打状の凹凸が確認できるが、やはり鉄分が多く付着している。刃先に当たる部分もＡと同様縦断面は尖っている。Ｂの特徴は途中に段があり、全体が緩やかにカーブしていることで、一番近いのは石刀であろう。

福岡市に石器に詳しい諸氏にも意見を求めたが、賛否両論である。本文中何度か述べたが、明らかに自然石であるものの中に一見敲打に見えるようなものが存在する。この資料が頑固な鉄分が付着しているため、見えにくいので断定はできないが、人工的な敲打とする明確な理由は認められない。また一見刃部のように見える部分も剥離によって形成されているような状況とは見えず、自然に作られたもののように見える。実体顕微鏡でも使用痕らしきものは確認できなかったが、さらに精査したい。